# THE CENTRAL REVIEW

# 中央公論

12-1919

## 十二月號

第三十四巻第十三號　第三百七十七號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

# 悪性感冒にはアレコレと迷はず

## スグ安全第一のかぜねつ藥

# 蛇印アンチピリン丸を服用あれ

本劑は解熱發汗の力強大なるが故に一日分にて効驗現はれ快癒する事滿天下に定評あり……速に家庭に御準備あれ

滿七歳以下のコドモの發熱には小兒專門解熱藥オインが一番安全で偉効があります
價十錢、二十錢、三十錢

**三大特長**

主成分にキニーネを配伍す
連用して副作用なし
胃に溶け易く効驗偉大

**主効**

かぜ、ねつ・インフルエンザ・肺炎・はしか・オコリ・リウマチス・頭痛等其他熱一切の諸症に偉効あり

**藥價**

十錢、十五錢
廿錢、廿五錢
卅錢、五十錢
一圓(徳用包)

全國各藥店に販賣す

本舗 大阪 東京 丹平商會藥房

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

生田長江・本間久雄兩氏共著

# 最新社會問題十二講

▼總洋布最上製▼
▼大版四百廿頁▼

定價金貳圓
郵送料拾貳錢

第一講 解放運動としての佛蘭西革命
第二講 産業革命と勞働者階級の發生
第三講 資本主義的經濟組織の解剖
第四講 空想的社會主義と科學的社會主義
第五講 マルクスの唯物史觀と剩餘價値說
第六講 デモクラシイとは何ぞや
第七講 勞働組合主義と同盟罷工と
第八講 ギルド社會主義とサンヂカリズム
第九講 選擧權擴張問題の一瞥
第十講 婦人問題と性的道德の革命
十一講 婦人參政權問題の考察
十二講 婦人職業問題の過去及び現在

今や、人類の生活は一大廻轉機にあり、世を擧げて改造の要求に熱中す。社會問題の攻究今日より盛なるは無く、社會運動の勃興今日より盛なるは無し。この時に當り、その問題の眞相とその運動の眞精神とを了得し、よく擧措を誤らざる可きは、苟くも文字を解する者の急務にあらざるか。本書は、現下の社會問題の如何なるものなるかに就き、何人にも解り易きやう極めて平易に說明せるもの、內容は凡そ上欄に示す處の如し。頃日、此の類の書の市に出づるもの甚だ多きも、よく百般を悉して一冊を讀んで凡てを知り得るもの、而して何等豫備知識無きものにも讀んで直に解し得可きものは、本書を措いて斷じて他にある事無し。斯道の權威者たる生田本間の二氏、啓蒙の熱意を以て筆を執らる。

東京牛込矢來町三
新潮社
振替東京壹七四貳


專賣特許 黒中山帽
今年の世界中は
平和(ピース)ダービー
鷹印帽子製造元
大阪 株式會社 高橋製帽所



# 中央公論第卅四年十二月號目次





LANDSCAPE

BY A. GUILLEMET

◎新刊發賣！（十二月上旬）◎

▼有島武郎著作集▲

第十輯

# 三部曲

有島生馬氏裝幀

寫眞版一葉

四六版三百十頁

定價 金壹圓參拾錢

送料八錢

眞に驚異すべき人生文獻の寶庫なる舊新約聖書の中からこの「三部曲」の材料は採られた。私はその絕大な寶庫から小さな寶玉を二つ三つ拾ひ上げて磨きをかけたに過ぎない。それは小さな寶石ではあつたけれども、手に執つて見ると私の力量には不相應であつた事を深く感ずる。私はやがて現はれ來るべき巨匠の小さな一人の先驅者である事に滿足しよう……著者

◆有島武郎著作集◆

第九輯 或女 後編 第廿四版 定價壹圓五拾錢 送料八錢

第八輯 或女 前編 第廿九版 定價壹圓拾五錢 送料八錢

第七輯 小さき者へ 第廿二版 定價六拾五錢 送料六錢

第六輯 生れ出る惱み 第廿八版 定價九拾錢 送料六錢

東京牛込區神樂町二丁目十一番地 叢文閣 振替貯金口座東京四二八八九番

# 社會改造論の二大潮流

最近の論壇は社會改造の論議を以て滿されて居る。而して社會改造論の鋒先は均しく皆資本主義（カピタリズム）の攻擊に集中して居る。今や世間は所謂社會改造主義の如き生温い議論では承知しなくなつた。

社會改造論には賃銀制度の廢止による勞働者の解放とか、資本勞働の產業的共同管理とか、又は資本主義の撲滅乃至私有財產制の撤廢とか、色々の主張がある。共に今日の資本主義（カピタリズム）を痛苦とする點は同一であるが、併し彼等が之等の言說を爲すに當り據て以て立つ所の根柢の原理に至ては、必しも同一ではない。

根柢の原理が如何に異つて居ても、目前に資本主義といふ共同の大敵が儼として我々を脅す者ある以上、自ら之に備ひ進んで之に對するが爲め、呉越舟を同うして提携協力するは怪むに足らない。社會主義者も曾て一度は無政府主義者を賴しい味方だと思つた事もある。けれども水と油とは到底同じ器に盛らるべきでない。若し夫れ社會改造に關する建設的論議の段々興味を以て說かるゝに及んでは、根柢の原理の異同が、遂に紛々たる改造論を整理して截然たる對立の地位に立たしめざるを得ないのは當然である。

社會改造の諸主張を、其の據て以て立つ所の根本原理によつて分てば、之を理想主義幷に現實主義の二大潮流に彙類することが出來る。社會改造論は社會制度の人心に及ぼす絕大の影響を看取し、制度の改造を以て人心の改造よりも急なりとする點に於て、其自身既に著しく現實主義的である。之を實際の歷史に就て觀ても、理想主義が餘りに制度の問題を等閑に附した所より、之が反動として、十九世紀初頭の社會改造論は深く現實主義の哲學と結び、其銳鋒の逬る所遂に理想主義を目して改造論の敵と爲すに至つた。是れ從來の社會改造論者が概ね唯物的であり革命的であり又破壞的であるを免れざりし所以である。併し乍ら理想主義が制度の問題を等閑に附したのは、時の理想主義者の朦昧の結果にして、理想主義其者に固有なる特質ではない。一時は猛烈なる攻擊に狼狽して、益々退嬰逡巡の醜態を演じた事もあるが、併し近來は大に啓發激奮して社會的實際問題にどん〳〵突入しつゝある。否、先入の偏見を去りて理想主義の立場より眞純に現社會を觀んか、彼等は寧ろ誰にも增して大に改造の熱を沸すべき筈ではないか。

斯くして社會の改造は、獨り現實主義者のみの問題ではなくなつた。於是、將來に造らるべき新社會は、現實主義に導かるべきか理想主義に導かるべきかは、吾人に取りて大に考ふべき問題となる。而して吾國昨今の論壇が漸く此二大潮流の對立を鮮明ならしめんとしつゝあるは、予輩の讀者と共に大に刮目して研究せんと欲する所である。

中央公論



第卅四年第十三號
十二月號
第三百七拾七號

# 東西文明の根本精神と日本將來の哲學

野村隈畔

## 一　序論

戰後における世界各國の生存競爭が、たとへいかなる方面にいかなる形式をもつて現はるゝにしても、苟も吾々が精神的な文明國民として世界的優越に對する希望と自信とを放擲しない限りは、日本文化の世界における中心的立場の上において、東西文明の調和といふことは決して忽諸に附すべからざる、又吾々が民族として早晩解決せねばならぬ根本問題でないかと思ふ。勿論差し當り解決すべき問題は、吾々の足元に澤山横つてゐる。社會問題であるとか、經濟問題であるとか、婦人問題であるとか、特に勞働問題であるとか、今切端詰まつた問題が何よりも先に解決されむことを待

つてゐる。從つてそれらの生存問題に對する論究なり批判なり解決策なりが、凡らゆる方面の識者論客によつて盛んに論じられてゐることは事實でもあり、又喜ばしいことでもある。

けれども吾々の考へねばならぬことは、それらの生存問題は單に吾々のみの問題、詳しくいへば日本民族として若しくは日本國民としてのみの問題ではないといふことである。即ち世界的な人類的な意味をもつた問題であるから、單に吾々が過去における文化の標準をもつて、或る從來の傳說的習慣をもつて、たゞ部分的に若しくは妥協的に取扱ふといふことは、決して以上の問題を正當に又根本的に解決する所以ではない。いかに吾々が日本の國民性が何うであるとか或は過去における吾々の習慣が何うであるとかいふことを楯として、吾々自身で勝手に解決しようとしても、それは世界一般の最早や許容しないところである。勿論國民性といふことは、文化の必然的な特異性を形造るものではあるけれども、而かしその特異性にいかに重要な意義があるにしても、それによつて文化の普遍的な人類的意義を無視するといふことは、文化人として何うしても出來ないことであり、亦世界の均しく許さないところである。例へば日本の女子が家庭生活において何うであらうが、工場生活において何うであらうが、或は又日本の勞働者が毎日何時間働かうと、賃銀を何程貰つてゐやうと、そんなことはお隣りの三毛猫が死んだとか生きたとかいふ位な問題にしか思はれないが、處がこれが却々吾々同志で解決が付かないばかりでなく、世界の人類が總がゝりで猶解決の付かない問題である。

斯うなると、いかに頑固なそして勝手な國民でも少しは考へて來る。他人の世話は要らぬと言つやうな態度で、婦人問題でも勞働問題でも勝手に決めるわけに行かない。例へば今までの資本家や企業家が、自分の會社もしくは工場に使つてゐる男女勞働者を恰も自分の家來か奴隷のやうに考へ、そして丁度親が馬鹿な息子を威し付けるやうに、勞働者などは彼等の顏色一つで何うにもなるものと考へてゐたのである。そして自分と勞働者との間柄は極めて密接な私人的な

ものであるから、何も態々阿米利加まで出かけて行つて世界の人々に審査して貰ふ筈のものでないと決め込んでゐたのである。然るに今や却つて勞働者の方が資本家や企業家を出し拔いて、世界の舞臺に飛び出すといふ有樣であるから、彼等は知らぬ顏をしてゐることも出來ず、又勝手にしろと放抛して了ふわけにも行かない立場に、自然と引き込まれて來てゐるのである。時間問題や勞銀問題においてすら猶且つ然りであゝ、況んやその他の重要問題が世界的國際的な意義を帶びて來るのは必然である。

しかし勞働問題やその他の問題が單に世界的國際的になつたといふことの外に、もつとその根柢をなすところの重要なそして普遍的な意義がなければならぬと思ふ。といふのは以上の諸問題が單に吾々日本民族の範圍を脱して世界的になつたのみでなく、同時に世界における各民族の文化的範圍を脱したものであり、從つて世界の各民族は從來における各國の文化ゝ絶對的のもの、完全なものとして支持することが出來なくなつた結果、普遍的な新しい文化、各自の要求を赤裸々に自由に表現すべき獨自の文化を創造しなければならぬ立場において、以上の問題が人類一般の勞働問題として現れて來たからである。從つてこの見地から見ると、勞働問題にしても婦人問題にしても又はその他の政治問題にしても、單にそれ丈けの或は單に國際的に擴められた丈けの問題として見ることは、決してそれを正當に理解し又根本的に解決する所以ではない。それらの問題は事實文化競爭の問題である、詳しく云へば、各民族がこの人類共通の普遍的問題をいかに解決し實現するかによつて、各民族の文化的創造力乃至その價値を決定すると同時に、世界における人類文化の永遠の運命を決定する所以である。こゝにおいて時間や勞銀や組合を骨子とするやうに見ゆる一個の勞働問題も實に深い偉大なる意義を有つて來ると思ふ。從つてかゝる見地から種々の時代問題を徹底的に觀察することが極めて必要であるが、惜しいかな現代においては全くその用意が缺乏してゐるやうに見ゆる。

若し將來における世界民族の競爭が、果して激甚なる文化競爭であるとするならば、吾々は先づ自己の文化の根本的改造といふことに取りかゝらねばならぬのであるが、それには吾々に必然的に歴史的に與へられてゐる東西文明の調和といふ大問題を提げて當るより外に、別に良案はあるまいと思ふ。勿論これは吾々にとつて餘りに大なる重荷である。世界の民族は各々自己の優越なる文化と優秀なる創造力とをもつて、自由に且つ活潑に努力し運動し得るのに、吾々は貧弱な精力の上に而かもこの大なる重荷を負ふて、彼等の自由競爭に參加せねばならない。若し不幸にして吾々がこの重荷を負ふに堪えざらむか、吾々は甘んじて劣敗者の地位に立たねばならぬのは當然である。而かも他の民族からは非文化的な非創造的な劣等民族として排斥せられ、そして世界文化の競爭場裡から永遠に埋沒せらるゝに至るであらう。しかして之れは到底吾々の堪え得るところではない。吾々は飽くまで世界の激烈なる競爭場裡に奮闘して、文化的優越の地位を獲得しなければならない。これが爲めには何うしても、東西文明の調和といふ大たる重荷を背負ひながら立たなければならぬ、これは實に止むを得ないことである。何故なれば貧弱なる吾々の日本文化においては、東西文明の調和といふ大なる問題を措いて、世界の文化競爭に優越を獲得すべき成算がないからである。露骨にいへば、吾々は遺憾ながら文化競爭の場裡において、堂々と標榜すべき獨創的な自己の文化なるものを有つてゐないからである。

けれども東西文明の調和といふことは、決して漫然と解決のつくやうな簡單な問題ではない。若し吾々に眞の調和力もしくは創造力がないとするならば、若しくは吾々が東西文明のうちに唯一の調和點を見出し得ないとするたらば、それは畢竟一種の空想と化し去るであらう。或は空想でないまでも、漫然たる努力によつて成された調和は眞の調和ではなくて、むしろ從來の混淆狀態と少しも擇ぶところがないであらう。かくては折角の國民的努力も希望も水泡に歸せさるを得ない。余は日本の識者及び思想家達が、從來取り入れて來た多くの特色ある世界文明をいかにして調和し得るか、い

かなる所にその調和點を把握すべきものであるか、又調和といふことにいかなる文化史的意義があるかといふことを深く吟味することなしに、たゞ漫然と是れまで主張された所謂東西文明の調和には、果していかほどの根據と確信と又成算とを有するものであるかを疑はずにゐられないものである。

余は眞の調和は單なる模倣若くは同化ではなくて一つの新しい生命の創造であり、而して調和點の把握には尠くとも二つの條件、即ち一つは各文化の根本精神を把握すること、他はその根本精神は同時に吾々の必然的な生活要求と符合することとの條件を具備すべきものであると思ふ。繰り返していふならば、東西文明の調和は單なる技巧の問題ではなくて純然たる藝術的創造の問題であり、從つてその調和點の把握は吾々自身の根本的な生活要求の體驗と、密接な自發的創造關係にある事を忘れてはならぬと思ふのである。これが即ち文明調和の先決問題であり、同時に吾々の新文化建設の根本問題でなければならぬ。余はこの點について充分徹底的に論じて見たいのであるが、今はその餘裕がないから他日に讓り爰には東西文明の根本精神なるものが那邊に存するかを分割的に探究し、それによつて將來における吾々の文化を建設すべき、言ひ換へれば文化の創造的根據たるべき吾々獨自の哲學乃至宗教の、いかなるものであるべきかを暗示するに止める。そして余は儒教及び佛教を以て東洋文明を代表するものと看做し、基督教及び泰西の哲學を以て西洋文明を代表するものと看做しそれらの根本精神を明かにすることによつて、東西文明の調和點を見出さうと思ふのである。

## 二　儒教の根本精神

儒教及び佛教が東洋の文明における二大柱石であることは、猶基督教及び泰西の哲學の西洋文化におけると同じである。若し吾々人類の文化的歷史から、是等の偉大なる哲學乃至宗教を取り去るならば、殘るところ何者もないであら

う。從つてこれらの哲學乃至宗教の根本精神を明かにすることによつて、人類文化の永遠なる創造的根據を摑むことが出來る。言ひ換へれば、永遠なる人類の文化(即ち歷史)は各民族によつて創造された哲學乃至宗教の根柢たる永恒的精神の自己實現であるから、その永恒的精神の何たるかを明かにすることによつて、吾々及び吾々の文化の根本精神即ち普遍的な生活要求を摑むことが出來ると思ふ。然らばその永恒的精神はいかなるものであらうか、余は今これらの各文化について、簡單にその根本精神を研究して見よう。

儒教は言ふまでもなく孔子によつて創建されたものであるから、孔子の思想を吟味することによつて、儒教の根本精神を知ることが出來る。尤も孔子は自ら「述べて作らず、信じて古を好む」と言つて居るやうに、單に「堯舜を祖述し文武を憲章し」て先王の道を發揮闡明したに過ぎないと言ふことも出來るが、しかし儒教を信奉し祖述するものは、悉く孔子を中心として居ることは明かで、儒教即ち孔子教(Confucianism)であるから、孔子の思想は即ち儒教の根本精神であると見て差閊へはない。況して彼れは「述べて作」らざるのみではなく、その「往聖に繼いで來學を開く所以」の功において、却つて「堯舜より賢なるものがある」のであるから、未發の眞理を開拓したこと決して尠くない。從つて又廣汎なる彼れの教學において、その根本思想を摑むこ の容易でないことは勿論であるが、余は孟子の仁義說や荀子の禮樂說よりも、むしろ曾子の忠恕說の方が孔子の眞意を理解したものと思ふ。即ち孔子が曾子に向つて「參よ吾が道一以て之れを貫けり」と諭したとき、曾子は「夫子の道は忠恕のみ」(論語里仁)と喝破したことは、よく儒教の根本精神を捉へたものと思ふ。

これは又「一言にして以て終身これを行ふべきものありや」といふ子貢の問ひに對して、孔子は「其れ恕ならむ、己れの欲せざるところは人に施すこと勿れ」(同衞靈公)と答へた言によつて知ることが出來る。『中庸』にも「忠恕は道を

遠ること遠からず、これを己れに施して願はざれば亦人に施すこと勿れ」と言つて居る。これをもつて孔子の謂はゆる道、即ち彼れが「誰かよく出づるに戸に由らさらむ、何ぞ斯の道に由ることなからむや!」と憤慨したところの道は、先王の道でも何でもなく、人としての道即ち忠恕であることは疑ふ餘地がない。忠恕であるが故にその道は極めて卑近であり、そして極めて容易である。『詩經』に「柯を伐り柯を伐る、その則遠からず、柯を執りて柯を伐り睨にして之れを視る、猶もつて遠しとなす」と言つて居るやうに、「道は人に遠からず、人の道を爲して人に遠きは以て道となすべからず」(中庸)であります、これは「仁遠からむや、我れ仁を欲して斯に仁至る」(論語述而)といふことと同義である。たゞ吾々は「睨にして之れを視る」が故に、若しくはそれを欲せざるか或は「未だ之を思はざる」か、或は却つてこれを「遠きに求む」るが故に、道といふものが困難になつて來る。何故に道は近きにあり且つ容易であるか、それは「仁は人なり」(中庸)「仁は人の心なり」(孟子告子章)で吾々の本性そのものであるからである、言ひ換へれば、たゞ吾々の本性を如實に表現すること、即ち「忠恕のみ」であるからである。詳しく言へば、道は單に自己の欲するところを爲し、欲せざるところを爲さゞるにある。即ち忠といふのは「己れの心を盡す」ことで、恕といふのは「己れを推して人に及ぼす」ことである、これほど容易な自然的なそして自分といふものに即入したことはない。自己に即して居るがために道は確實であり、「須臾くも離るべからず」である。要するに、忠恕といふことは道德の根柢であり、生活の規範であり、從つて儒教の根本精神である。

こゝで吾々の最も注意すべきことは、忠恕といふことは即ち自己を中心にすること、言ひ換へれば自己の本性即ち純粹の自己意欲を根本にするといふことである。自己の要求を空虚にすること若しくは自己の要求を欺くといふことは、人間としてもつとも厭ふべきで即ち道德の破壞である。これをもつて「己れの欲するところを爲し、己れの願はざると

ころを施さず」といふことが、道德の根柢であり、凡らゆる價値の生ずる源泉である。從つて自己を誠にすることと自己を欺かないこととは、道德的努力の焦點となつてゐる、こゝに最も根强いそして純粹なる個人主義の色彩があると思ふ。個人主義の道德的根據は自己を誠にすること、言ひ換へれば、自己の純粹なる要求に遵ふことである、これを哲學的にいへば、即ち自我の當爲性の强烈な自覺である。吾々が通常當爲とか價値とか規範とか言つて居ることは、何もそのむづかしい論理的普遍妥當性によつて理解せらるゝものでなく、たゞ自己中心即ち忠恕といふことによつてのみ理解せられる、從つてその論理的普遍妥當性は却つて忠恕によつて基礎付けられねばならぬといふことが出來る。何故なれば、當爲も價値もたゞ吾々の本性たる純粹の自己意欲によつてのみ生ずるものであるからである。即ち「己れが心を盡す」若しくは自己の意欲に徹底するところの忠は、これ當爲の生ずるところであつて、當爲は自我の自己承認であり、「己れを推して人に及ぼす」ところの恕は即ち價値の生ずるところであつて、價値は自我の自己實現である。當爲は求心的であるとすれば、價値は遠心的であると言つてよかろう。而かも自己なるものはこの當爲と價値とをその本性として內有するが故に、自己中心が道德の根柢となつて來る。規範といふのは即ち自己の本性を反省して生活對象となした結果に過ぎない。かくの如く忠恕といふことは極めて深い哲學的意義を有つてゐる、現代の哲學者が當爲とか價値とかいふ概念によつて模索して居るところを、孔子は忠恕によつて具體的に體驗的に把握したのである、こゝに永遠に亘る儒教の意義と價値とがある。孟子は孔子の意を更に强めて、「欲すべき之れを善といふ」(同上盡心章)と論じてゐる、これを言ひ換へれば自己意欲即ち當爲であるといふことである。

孔子がいかに自己の純粹なる意欲を重んじたかといふことは、宰我に對する答において示した個人主義的態度によつて知ることが出來る。宰我あるとき問ふて「三年の喪は期已に久し、君子三年禮をなさざれば禮必ず壞れむ、三年樂を

なさゞれば樂必ず崩れむ、舊穀既につきて新穀既にのぼる、燧を鑽りて火を改む、期(年)にして已むべきなり」といふと、孔子はかの稻を食ひ「かの錦を衣る、汝において安きか、汝(心)安くばこれを爲せ。夫れ君子の喪に居るや、旨を食ふとも甘からず、樂を聞くとも樂しからず、居處も安からず、故に爲さゞるなり、今汝(心において)安くばこれを爲せ」(論語陽貨)と答へて居る、この態度は卽ち宰我の意欲に訴へたものであつて、そこに孔子の眞意があると思ふ。自己を欺くこと卽ち自己意欲を否定することであつて、これ最大の罪惡である。自己が誠なるときはこれ自己が赤裸々に自由に發展するときであつて、無限の歡喜と勇氣とが勃然として湧きいづる源である。孔子が曾子に大勇を語つて、「自ら反へりみて縮からずんば、褐寛博といへども吾れ惴れざらむや、自ら反へりみて縮くんば、千萬人といへども吾れ往かむ」(孟子公孫丑章)といひ、孟子が「萬物皆我れに備はれり、身に反へりみて誠なれば樂みこれより大なるはなし」(同上盡心章)と言つて居るのは、皆自己を誠にした結果である、從つて自己に忠實なること、言ひ換へれば「意を誠にする」といふことは、小にしても身を修め家を齊ひ、大にしては國を治め人を治むることとの根本となるは當然である。『大學』に「その意を誠にするとは自ら欺くことなきなり」といひ、「意誠にして後に心正しく、心正しうして後に身修まり、身修まつて後に家齊ひ、家齊つて後に國治まる云々」と言つて居るのは、全く自己中心の道德である、卽ち自我の純粹自己意欲を赤裸々に如實に表現する個人主義の道德である。自己とは何であるかといふことは、哲學上むづかしい問題であるが、忠恕卽ち自己の具體的動向によつて當爲と價値とを有することが解かる。要するに、儒敎の根本精神は自己を肯定し開發して、それを如實に實現するに在ることは明白である。

## 三　佛敎の根本精神

儒教が現實的で世間的であるに反して、佛教は厭世的で出世間的であり、儒教が自我を肯定し實現せんとするに反して、佛教は自我を否定し滅息せんとするものであるといふことは、從來一般に考へられたところである。即ち僧侶といふものは所謂「世棄て人」であつて、俗人のやうに肉食したり妻帶したり、或は生産事業にたづさはるべきものでなく、その教ふるところは飽くまで禁慾主義であつて、自我の要求を斷じて認容しない、否それを最大の罪惡と看做す、即ち『大乘起信論』に「忽然として念起る、これを無明となす」と云つてゐるやうに、吾々の一心一念の發動悉くこれ無明煩惱である、從つてこれを根本的に否定せねばならぬ、否念々發動の根據たる「我」を絕對に斷絕しなければならぬと說く無我の教へであるといふことは、是れまで佛教者自身もかく主張し、又一般の信者もかく信じて來たことは事實である。けれどもこれ佛教の精神即ち釋尊の眞意を誤ること實に甚だしいものであると思ふ。

勿論佛教なるものは、釋尊が四十有餘年の間における教訓を悉く網羅する頗る廣汎なるものであるから、その眞利を摑むこと容易でない。即ち彼れが「我れ先きに道場菩提樹下に端座すること六年にして、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり、佛眼をもつて一切の諸法を觀ずるに宜說すべからず、所以如何となれば、諸の衆生性欲同じからざるをもつてなり。性欲不同なれば種々に法を說き、種々に法を說くに方便力を以てす、四十餘年未だ曾て眞實を顯さず、是の故に衆生の得道差別して、疾く無上菩提を成ずることを得ず」(無量義經)と言つて居るやうに、時期により衆生により得道の段階によつて、種々方便をもつて說くが故に、その眞意を摑むこと却々容易でない。これその教理に小乘(中乘)大乘の區別の生ずる所以であるが、或るときは「諸惡は作ることなく、衆善奉行して自ら其の意を淨ふす、これ諸佛の教へなり」(法句經)と說いて、純然たる道德教のやうに見え、或るときは「天地を觀て非常を念じ、山川を觀て非常を念じ、萬物の形體の豐熾なるを觀て非常を念ず、心を執ることかくの如くなれば道を得ること疾し」(四十二章經)とい

ひ、「諸行無常なるは是れ生滅の法なり、生滅滅し已はりて寂滅を樂と爲す」（涅槃經）と說いて厭世教のやうにも思はれる。或るときは「諸法無我」を說いて無我論のやうに見え、又或るときは「淨樂我常」を說いて、頗る樂天的な有我論のやうにも見える。

佛教卽ち釋尊の教へが果して無我論なりや、或は有我論なりやについては、後世の信者間においてのみならず、釋尊の當時既に盛んなる論議のあつたことは事實である、否釋尊自身がその深遠にして該博なる知見をもつて、當時一般に論難の中心となつてゐた有我無我の眞理を闡明せんとせられたものであることは、疑ふべからざることとである。從つて彼れは破邪に顯正に辯論大に勗めたのであるが、而かもその高遠なる彼れの眞理は、迦葉の如き知慧第一と言はれし高弟すら猶理解し得なかつたやうに思ふ。そして當時外道と言はれし所謂順世學派や尼乾子學派などは、概して有我論を主張して居たのであるから、これを折伏する必要上釋尊は大に無我論を主張した爲めに、佛教は無我說であると信ぜられたのは是非もないことである。けれども釋尊の眞意は決して無我論ではなくて、むしろ有我論を主張したものであること、言ひ換へれば無我論は有我論の前提である、方便であつたことは到底否定出來ない。そしてこれは彼れ自身その末期の說法において、明かに自白して居ることとである。彼れは斯う言つてゐる、「世間もろ／＼の妄見を除くが爲めの故に世間に出過するの法を示提するが故に、又世間の計我虛妄にして眞實に非ざるを示すが故に、無我法を修して身を淸淨にするが故なり。たとへば女人その子の爲めに苦味をもつて乳に塗るが如し、如來も亦爾なり、空を修するが爲めに說きて、諸法悉く我あることなしといふ」（涅槃經如來性品）と。

然らば何故に「世間の計我虛妄にして眞實に非ざる」か、これ釋尊の最も苦心されたところであるが、要するに我なき處に我ありとなし、眞我の存するところに我なしとして顧みないから、そこに種々の虛妄顚倒を生じて來る。眞我は

素より存する、而かも「常住にして變易あることなし」である、然るに愚盲なる世人は深き知見を有つてゐないから、眞我の存せざるところ卽ち無常變易のところに眞の我を捉へんとするが故に、我を見ること出來ない。見るところのものは悉く僞我、假我、無常我のみである。言ひ換へれば、世間の人の説く有我は經驗的心理學的な我であつて、常住性卽ち「佛性」のない我である、釋尊はこのやうな經驗我無常我を眞我ではないとして極端に否定し去つたから、「佛法無我」であると誤解されたのである。而かも彼れの謂はゆる眞我卽ち佛性なるものは、これ先驗的な超心理的なそして形而上的な常住我である、かゝる眞我は到底知見の幼稚な當時の世間一般から理解されなかつたのは當然である。高弟迦葉の如きすら「若し我性常ならば、何が故に酒を飮んで荒醉迷亂する」と言つて居るやうに、經驗的と先驗的、無常と常住との知的區別が頗る不明瞭であつて、先驗的に常住なものは經驗的にも常住であり、經驗的に無常なるものは先驗的にも亦無常でなければならぬといふ議論をして居ることは明かである。尤もこれは古へに限つたことではなく、現代でも隨分自然科學者にして哲學者の眞理論を理解し得ないものが尠くない。たとへば經驗的分析的な方法を採つてゐる科學者は、體驗的持續的なベルグソン哲學を批難するやうに、又心理學的な功利的な倫理學者は批判的な價値の倫理論を理解し得ないと同じことである。若しこゝに一人の自然科學者があつて、「批判哲學者に向つて自然界はこれ唯一の眞實なる世界である、もし價値とか自我とかいふものがあるとすれば、それはたゞ自然界にのみ存在すべきものであつて、自然界を離れて價値や自我を云々するは畢竟空想に過ぎない」と主張したとする。そして哲學者は極端に科學者の價値論及び自我論を反駁したとする。吾々は今自然科學者をもつて眞の價値論者又は自我論者であつて、批判哲學者はこれに反して、價値否定論者であり無我論者であると判斷するであらうか。

佛教に對する無我説の誤解はこれに類するものであると思ふ。卽ち釋尊の我論の立場は批判的で認識論的であつて、

科學的な方面からいへば無我論であるが、哲學的な方面からいへば即ち有我論である。詳しく云へば、經驗的な心理學的な無常界(自然界)には我なるものなく、先驗的直觀的な常住界(價値界)にのみ眞我がある、從つて眞我は常住なもの、無限價値なものである、全宇宙滅すと雖も永遠に滅びざるものである、これ『涅槃經鳥喩品』に「我性は常住にして變易あることなし、須彌山は崩倒すといへども如來豈同じく壞せんや」と言つて居る所以である。『四倒品』には佛教有我論に對する徹底的斷定を下して頗る明快である、曰く「無我に我想、我に無我想これを顚倒と名づく、世間の人も亦我ありと說き、佛法の中にも亦我ありと說く、世間の人有我を說くといへども佛性あることなし、これ即ち名づけて無我の中において我想を生ずとなす、これを顚倒と名く、佛法の有我は則ちこれ佛性なり、世間の人は佛法無我なりと說く、これを我の中に無我想を生ずと名く。若し佛法必定して無我なり、是の故に如來は諸の弟子に敎して無我を修習せしむと言はゞ、名けて顚倒となす」と。これに由つて之れを觀れは、釋尊は常住なる眞我を闡明し主張したことは、實に照々たる事實である。「無我法の中に眞我あり」(迦葉品)であるから、佛敎の無我論、無常論、苦痛觀のみを宣傳する佛者は、啻に現代文化の要求を裏切るものであるのみならず、佛敎自身の根本精神を誤るものと言はねばならぬ。若し佛敎が現代の要求に對して眞の充實と滿足とを與へ、そして文化と共に永遠に發展せんと欲せば、その眞我論を發揮して自我の實現を促進することに勉めなければならぬ。即ち佛敎の眞意は有我論、常住論、淨樂觀にあることを闡明すると同時に、その眞理を現代文化の上に具體化することを努めねばならぬと思ふ。

佛敎の自我即ち眞我は、「如來」であり「佛性」であることは言ふまでもない、即ち釋尊は自己若しくは我れは如來であり佛性であると見たのである。佛性といふのは眞我の常住性又は持續性、方面を云つたものであり、如來といふのはその流動性又は創造性の方面を現はしたものであると思ふ。即ち如來といふのは無限の創造力と自由とを有するが故

に、又「如來藏」(Tathagata-garbha)ともいふのである。從つて佛教の眞我は現代の言葉でいへば、それ自身の中に當爲と價値とを內有する、言ひ換へれば當爲と價値とを自發自展的に展開するところの實在であるといふことが出來る。何故なれば自我はそれ自身永遠の創造力そのものであるから、かゝる自我は到底自然界や現實界において摑み得ないことは言ふまでもない。即ち砂漠の中に生々發展の生命が存在しないからである。迦葉が「世尊！二十五有（諸法萬有を指す、謂はゞ自然界）に我ありや否や」と問ふたとき、釋尊はこれに答へて、

「善男子よ！我とは即ちこれ如來藏の義なり、一切の衆生は悉く佛性を有す、即ちこれ我の義なり。是くの如き我の義は本より已來、常に無量の煩惱に覆はる。この故に衆生は見ることを得る能はず。（中略）善男子、佛性は雄猛にして毀壞することがたし、故によく殺害するものあることなし。若し殺すものあらば即ち佛性を斷ぜん、是の如きの佛性は終に斷ずべからず、性もし斷ずべくばこの處りあることとなし。我性の如きは即ちこれ如來秘密の藏なり、是の如きの秘藏は一切のよく毀壞燒滅することとなし。壞すべからずといへども然かも見るべからず、若し阿耨多羅三藐三菩提（さとりの義 Anuttara 無上 samyak 正 sambadhi 遍智と譯す）を成就することを得ば、乃ち證知せん」（涅槃經如來性品）

と言つたことは、實に我の眞相を穿つたものであると思ふ。「二十五有」の中に我の存在しないことは解かり切つてゐる、然るに凡夫は强ひてそこに我を求めむとするから、遂に眞我を見ることが出來ない、そして又我は生滅し變易し毀壞するものであると信じてゐる、或は我は「酒を飮んで荒醉迷亂する」ものであると考へてゐる。釋迦はかくの如き邪見を破せんが爲めに、右の如き教訓を爲したものと思ふ。要するに、彼れの眞意は經驗我又は寄生我を根本的に破壞して、常住にして創造的な體驗我、又は根本自我を把握し闡明せんとしたものであることは明かである。この意味において余

は、佛教における所謂八萬四千の法門なるものは、畢竟じて眞我の註釋に過ぎないと信ずるものである。若し儒教が現實的であるといひ得るならば、佛教はこれ以上の意味において現實的であり、儒教が眞の自己を中心とした個人主義的色彩があるといひ得るならば、佛教は尚一層深刻な意味において、眞の個人主義的乃至民本主義的色彩が濃厚であると思ふ。孰れにしても儒教も佛教も共に、自我を肯定し實現せんとするものであることは明かであるから、東洋文明の根本精神は自我の實現にあると言ふことが出來よう。「天」といひ、「至誠」といひ、「眞如」といひ「如來」といふことは、自我の別名に過ぎない。

## 四　基督教の根本精神

然らば西洋文明の根本精神は何であるか、その自我の實現を否定するものであらうか、或は自我を無限に高調せんとするものであらうか、或は神の前に平伏して絶對の歸依と献身とを致さんとするものであらうか、或は又、飽くまでその物質文明の裡に、唯一の價値と平和とを見出さんとするものであらうか。余は尠くとも基督教及び泰西哲學の根本精神によつて、西洋文明の眞相を理解し得ると思ふ。

基督教の根本精神を判斷する前に、吾々は二個の前提を有することを記憶する。二個の前提といふのは基督自身に對する、二種の文明的批判である。一つは「基督は世界第一の個人主義者である」と言つた英國詩人ワイルドの批評で、他は「基督は第一の眞實なる民本主義者である」と言つた、米國の詩人ローエルの批評である。この二種の文明的批評によつて、基督教の根本精神の那邊にあるかを推論することが出來ると思ふが、しかしこの二個の批判が果して基督の眞相を掴んで居るかどうかは、彼れ自身の僞らざる言葉によつて判斷することが出來る。即ち彼れが青春讃ゆるが如き短

時期の間において、熱誠を振つて獅子吼したその偉大なるそして藝術的な言葉は、永遠に人類を支配しチャームする生命を表現して居ると思ふ。こゝに生命といふのは神でも神の愛でもなく、むしろ神や神の愛を自己の本性とし要求とするところの自我であることは、何人も否定し得ないところであると思ふ。即ち彼れは眞の自己を摑むことによつて、神や神の愛や乃至は眞理を摑むことが出來たのである。いかに彼れが「自己」といふものを尊重したかといふことは、彼れの個人主義的な態度によつて知ることが出來るが、而かもその「若し我れに從はんと欲ふものは己れを棄て、その十字架を負ふて我れに從へ。その生命を全ふせんとするものは之れを失ひ、我がためにその生命を失ふもは之を得べければなり。人もし全世界を得るとも、その生命（自己）を失はば何の益あらむや、又人何をもつてその生命に易へんや」（馬太傳第十六章）といふ叫びによつて明かである。

實に偉大なる獅子吼ではないか、全世界滅ぶといへども永遠に滅びないものは、たゞ自己のみである。釋尊が言つたやうに、「須彌山は崩倒すといへども、如來豈同じく壞せんや」で、たゞ眞我のみ「常住にして變易あることなし」である。もしこの自己を失はゞ、神何かあらむ、天國何かあらむである。神といひ天國といひ、たゞ自己の内部にのみ存在する、それはたゞ自己の擴充れたもの、反映されたものに過ぎない。丁度哲學者が自我の體驗的要求を反省し規範化して、當爲といひ價値といふと同じことである、具體的には自己を外にして何者でもない。哲學的にいへば、自我即當爲であり價値である如く、宗教的にいへば自己即神であり、天國である。從つて「心の貧しきものは福ひなり、天國は即ちその人のものなればなり。心の淸きものは福ひなり、その人は神を見ることを得べければなり」（同上第五章）といふことが、自證的な眞理であることがわかる。基督がパリサイの人々に「神の國は何れの時に來るものか」と問はれて「神の國は顯れて來るものにあらず、こゝに視よ、かしこに視よと人の言ふべきものにもあらず、夫れ神の國は爾曹の裏

にあり」(路加傳第十七章）と答へたのは、即ち自己即天國の眞理を宣傳したものである。これをもつて神及び天國は自己に遠からず、又自己に離きにあらずといふことが出來る。孔子の謂はゆる「道は人に遠からず、道の人に遠きは以て道となすべからず」、「仁豈遠からむや、吾れ仁を欲してこゝに仁至る」で、天國も亦「求めよ、さらば與へられ、尋ねよ、さらば遇ひ、門を叩けよ、さらば開かるゝことを得ん」(馬太傳第七章）である。たゞ吾々は求めず尋ねず叩かざるが故に、天國を得ることも神を見ることも出來ないのである。そは決して「遠きが爲めでなく、未だ思はざる」が爲めである。

自己を中心とする儒教が、「忠恕」をもつて道德の原理としたことは、前に述べたところである。忠は當爲の生ずるところで、恕は價値の生ずるところである、從つて忠恕はそれ自身當爲であると同時に價値であるところの自己の必然的な發展動向であるといふことが出來る。自己を極端に主張した基督の教訓においても、亦この忠恕の發現を見ることが出來る、即ち「凡て人に爲られんと思ふことは、爾曹また人にもその如く爲せ」(同上第七章）といひ、又「己れの如く爾の隣りを愛すべし」(同上第十九、廿二章）と言つて居るのがそれである。自我は本來自己意欲のものであり、當爲は本來自己承認のものであるが故に、道德は自己中心によつてのみ初めて意義がある、從つて「己れの如く」、「己れの欲ふところ」、「己れを推して」といふことが、當爲發動の根本原則である、この原則を理解し得ないものは當爲の本性を理解し得ないものである。そしてこの忠恕といふことが愛であり仁であるとするならば、仁や愛は決して無我性のものでなく、むしろ却つて純粹なる主我的のものであることが解かる。言ひ換へれば、仁や愛は自己を否定し若しくは自己の生命を損つることによつて、その眞正な意義を有するものでなく、むしろその正反對に純一に赤裸々にそして強烈に自己を肯定し、自己の生命及び要求を展開するところに在るといふことが出來る。從つてメェテルリンクが「人を愛せんと

欲するものは、先づ自己を愛しなければならぬ」と言つたことは、自我哲學の見地からいへば、未だ徹底しないものであると言はねばならぬ、何故なれば、眞に自己を愛するといふことは、同時に人を愛することであるから。即ち人を愛せんとするに先だつて自己を愛するのでなく、人を愛することが同時に眞に自己を愛する所以であるからである。極言すれば、自己は本來愛そのものであるからである。基督が「神は愛なり」と言つたことは、即ち「自己は愛なり」といふことでなければならぬ、何故なれば神は自己を離れてあり得ないからである。自己は愛であるが故に、その必然的な創造的な發露が即ち理想的な愛となるのである。理想化された愛は規範的意義を有するにしても、それは決して自己の本性を否定するものではなく、却つてそれを如實に表現したものである、そこにこそ愛の眞正なる意義がなければならぬ。即ち愛の普遍的意義も又その創造的根據も、たゞ自己の必然的本性としてのみ理解し得るのである。孔子が「仁は人なり」といひ、孟子が「仁は人の心なり」と言つて居ることは、即ち自己は愛なりといふことを言ひ換へたものであると思ふ。

既に自己は神であり、具體的創造的な當爲と價値とであるとするならば、これを自覺し體驗したものにおいては、無限大の權威と信仰とが油然として湧いて來ることは、實に覩易き道理である。そしてその權威と信仰とは何者も移すこと出來ず、何者も淫すること出來ず、何者を屈することが出來ないのは當然であるが、そこに眞の淨福があると思ふ。そして基督は彼の言行によつて察するに、この淨福の境地を體現して居たやうに思はれる。彼れは「學者の如くならず權威を有てるものゝ如く敎へ」(馬太傳第七章)語り且つ行つたことは、事實であるが、而かもその「我れは生命のパンなり、我れに來るものは餓えず、我れを信ずるものは恒に渴くことなし」(約翰傳第六章)といひ、「我れは世の光りなり、我れに從ふものは暗中を行かずして生の光りを得む」(同上第八章)といひ、「我れは途なり、眞理なり、生命なり、

人もし我れに由らざれば父の所に往くこと能はざるなり」(同上第十四章)と言つてゐる言葉によつて、いかに彼れが自己に徹底し燃燒してゐたかゞ解かる。彼れは「自己は愛なり」とか「自己は當爲であると同時に價値である」とか、學者らしく說明することを欲しないで、直ちに「我れは生命なり、眞理なり、光明なり」と主觀的に叫ぶことが出來たのは、卽ち自己に徹底してその本性の當爲性と價値性とを體驗したからであると思ふ。否らざれば到底かゝる大膽なそして絕對的な叫びは出來ない筈である。

けれどもこれは獨り基督のみが叫び得ることとであらうか。否何人にても自己に徹底し得たものはかくの如く叫び又叫ばねばならぬのである、卽ち釋尊の言ふたやうに「一切の衆生は悉く佛性を有す」であるから、この佛性に徹底しそれを熾烈に體驗したものは、何人にても「天上天下唯我獨尊」を叫び得る如く、自己に徹底し得たものは何人にても「我れは眞理なり光明なり」と叫ぶのが當然であり、從つてこれは凡ての人間の理想であると同時に、又凡らゆる宗敎の目的でなければならぬ。哲學はこれを反省して、自己の要求はそれ自身當爲であると同時に價値であるが爲めであると言ふけれども、勿論前にも言つたやうに、當爲とか價値とかいふものは單なる規範的槪念ではなく、純粹自己意欲なる自我の必然的なそして創造的な發展動向であるから、たとへ哲學はそれを否定したとしても、吾々の體驗的自證はそれを主張して止まない。從つて「唯我獨尊」とか「我れは眞理なり」とかいふことは、啻に釋尊や基督のみが叫び得ることではなく、自覺あるものは何人にてもかく叫び、又叫ばねばならぬ、こゝに宗敎の極致がある、亦こゝに宗敎の個人主義的乃至民本主義的根據がある。以上の研究によつて基督敎の根本精神は、矢張り自己を肯定しそれを徹底的に實現するにあるといふことが出來よう。

## 五　泰西哲學の根本精神

余は最後に泰西哲學の根本精神について、簡單に論究しておかねばならぬ。これは即ち泰西人の最も眞摯なる思想生活を代表するものである。前にも述べたやうに、哲學乃至宗教なるものは生活乃至文化の創造的根據であるから、哲學の根本精神を研究することによつて、西洋文明の眞相を理解し得るは言ふまでもない。そして哲學なるものは凡ゆる思想の根本的な統一的な思索であるから、その根本精神は即ち文化における全體的意義を代表するものと見てよからう。けれども今その根本精神の何たるかを掴むこと容易でない。即ち泰西の哲學は希臘時代以來、中世を經て近世より現代に至るまで、連綿として發展し持續した、尨大にして而かも複雜なる思索系統を有するものであるから、その根本精神は一朝一夕にして掴めるものではない。だから余は所謂西洋哲學史なるものによつて、その根本的な發展動向を暗示するに止めようと思ふ。

余は十年前ロージャースの哲學史によつて刺戟を得、西洋哲學史はつまり自我思想の發達史であることを感じ、個人主義的思想を中心として哲學史上における凡らゆる思想の發達を理解せんと試みたことがあつた。當時余は希臘時代より現代に至るまでの思想變遷を大別して六つとなし、（一）を懷疑的個人主義の時代、（二）を厭世的個人主義の時代、（三）を反抗的個人主義の時代、（四）を自覺的個人主義の主時、（五）を理想的個人主義の時代、（六）を潤飾的個人主義の時代となし、以つて系統的に自我思想の發達史を叙せんと企てたのであつたが、勿論余の研究は幼稚なものであつた。その後數年にして余は朝永博士の『近世に於ける「我」の自覺史』を讀み、余の企てが博士によつて先鞭をつけられたのを遺憾に思ふと同時に、又余の見るところと同じ見地に立つて述べられたのを見て、心竊かに愉快を感ぜずにをら

れなかつた。之れを要するに、余は朝永博士と共に哲學史は畢竟「我れの自覺史」であると見るものである。即ち若し宗教史が自我の實現史であると見るならば、哲學史は自我の自覺史であると見るのが至當である、從つて宗教の目的が自我を肯定して、それを如實に赤裸々に實現するにあるとすれば、哲學の目的は即ち自我の眞相を把握してその根本意義を闡明するにあるは言ふまでもない。だから哲學史上いかなる思想が發生するにしても、又いかなる方法によつて攻究さるゝにしても、そは自我思想の發現であり具體化であると見るべきである。故に眞の自我、必然的な創造的な根本要求たる吾々の自我を外にして、哲學乃至宗教を理解せんとするは、全くその爲すところを誤つたものと言はねばならぬ。

吾々はよく「個人主義や民本主義は皆西洋からはやつて來た」といふことを聞くのであるが、勿論これは否定の出來ない事實である、何故なれば吾々の祖先は、未だ嘗つて自我なるものを自覺したことはなかつたから。これによつて見ても西洋の文化は、自我の要求によつて基礎づけられて來たことが解かる。而かもそれは近代文明における特殊の一現象と看るべきでなく、希臘哲學の時代から三千年のあひだ、ます〱深化され精練され生活化されて來た根本潮流であることは、歴史を按ずれば明瞭な事實である。尤も自我の眞の自覺は中世期における名目論 Nominalism と實在論 Realismとの論爭にその組織的根據を發し、具體的には教會對會員及び國家對個人の軋轢を惹起し、そしてこの思想上乃至生活上の葛藤は、非常なる燃燒と渦卷きとをもつて近代文明を展開したことは歴史の證明するところである。從つて自我思想もしくは個人思想は澎湃たる勢力をもつて近代の思想乃至生活を根柢より支配し、遂には個人主義の自覺となつて自我が思想乃至生活の具體的原理と考へらるゝやうになつた。勿論自我の觀念は近世の哲學によつて一層純化され、深化され、更に普遍化されたことは明かであるが、しかしいかなる哲學といへども自我を否定し、若しくは自我を離るゝ

ものでないことは確かである。たとへば獨逸流の哲學と佛國流の哲學とは大にその色彩を異にし、前者は概して理智的であり論理的であるに反して、後者は概して情意的であり直觀的である。從つてその到達點においても無論異つてゐるのであるが、しかしこれは寧ろ民族性の差異に基くものと見るべきであつて決して自我を否定して居るものではない。たゞ自我に對する見方若しくは把へ方が違つて居るので、獨逸の哲學は「價値」に到達し、佛國の哲學は「生命」を捉へたにしても、孰れも自我を違つた方面から見たものであるに過ぎない。言ひ換へれば價値といひ、生命といひ自我の一面を理解したものである。要するに泰西の哲學は詮ずるところ、自我の眞相を闡明しその根本要求を主張するにあるので、價値の哲學といひ、批判哲學といひ、或は直觀哲學もしくは自由の哲學といひ、名稱はそれ〴〵異つてゐるとはいへ悉く自我の哲學であることは言ふまでもない、從て哲學史をもつて「我の自覺史」と見、又は「自我思想の發達史」と見ることは、決して不合理でも無理解でもないのである。

今近世哲學における自我思想の發達は、朝永博士の『近世に於ける我の自覺史』にゆづり、自我思想の比較的幼稚でそして不明瞭であつた希臘の哲學史を覗いて見た丈けでも、いかに個人の要求が尊重せられ、從つていろ〳〵な自我思想が勃興したかゞわかる。ターレス以來ヘラクライトスやエムペトクレースやデーモクリトスに至つて全盛を極めた自然哲學は、ソクラテースによつて人生哲學の方面に轉換せられ、吾々の研究對象が自然から吾々自身卽ち人間問題に向けられ、從つて吾々自身を知るといふことが哲學者のモツトーとされたことは、最も顯著なる自我の自覺と見るべきである。謂はゆる『汝自身を知れ』といふ有名な金言は、ソクラテースの標語であつた。しかしソクラテースの批判的な人生哲學は、ソフィスト派の懷疑論によつて刺戟されたことは言ふまでもない。ソフィスト派の哲學は實に個人主義乃至民本主義思想の淵叢と見るべきであつて、啻に哲學上の問題のみならず、凡らゆる文化現象の上にその思想を宣傳したこと

は注意すべき事實である。即ち彼等は當時の社會組織の不完全と不自然とを極端に攻擊し、從來の傳說、法律、習慣等の權威を破壞し、遂にはリコフロンの貴族撲滅論となり、アルキダマスの奴隸廢止論となり、ファレアスの敎育と財產の共有論となり、或は又政治上の男女同權說となる等、人間の自覺は實に目醒ましきものがあつた。ソフィスト派の牛耳を執つたものはプロタゴラスであるが、彼れは極端なる個人主義者であつた。彼れは萬人に通じて不變的な自然法の存することを見、それが即ち凡ての人間の自由平等を要求するものと考へたのであるが、その自然法なるものは吾々を超越した外部の存在ではなく、むしろ吾々本來の性情の要求に過ぎないから、個人の赤裸々な性情こそ吾々自身の生活行爲を指導し、凡らゆる文化の價値を規定すべきものであると主張した。「有ることにせよ、無きことにせよ、人こそ萬物の尺度なれ」とはプロタゴラスの有名な言葉であるが、これは自然主義と個人主義との結合と見ることが出來る。勿論自然主義と云つても現代の哲學者が强ひて批難するやうに、自然必然的な自然法則を遵奉することではなく、吾々本來の性情(要求)の裡に價値を認めたものであつて、即ち自我の裏に言ひ換へればその必然的創造的な發展動向のうちに、具體的な當爲と價値とを認容したものと言ふべきである。從つて人間の性情と何等の交涉もない、否それを拘束するやうな當時の法律制度は、治者や强者が自分等の利益上から勝手に造り出したものであるから、非常な反抗を受けたことは當然であると思ふ。

ソフィスト派の熾烈なる個人的自覺は、ソクラテースやプラトーンによつて整理され完成されて、健實なる社會的國家的傾向を帶びて來たのであるが、外界の變化と現實の壓迫とは再び强烈なる個人的傾向を誘致した。從つて人格の觀念も强調され、個人の理想なる考へも內面的に深化すると同時に明瞭に確立さるゝに至つた。所謂「哲人の理想」なるものは當時一般に救世主の如く翹望されたもので、現實社會の無常轉變に失望し、春夜の夢のやうな名利榮華の覊絆を

脫却して、自己本來の精神を靜平に保たむと欲するものは、何人も考へずにゐられないものであつた。從つて當時の學派(即ちストア派)は全力を盡して人間理想の何たるかを攻究した。ストア派はアパタイア(ἀπάθεια)にあるといひ、エピクーロスはアタラキシア(ἀταραξία)にあるといひ、更にピルローンはエポッキー(ἐποχή)にあるといひ、遂にはフヒローンの宗教的沒我的なエクスタシス(ἔκστασις)に達した。これら種々の變化は細かに研究すると面白いのであるが、しかし理想がいかに變化するにしても、いかにして自我の眞相を發揮し、その要求を如實に表現すべきかにあつたことは明かである。言ひ換へれば、これらの理想によつて自我を徹底的に實現せんとしたものである、即ち「哲人の理想」なるものは、何人もこれによつて自己本來の要求を圓滿に實現すべき手段であつたのである。

かくの如く希臘の哲學は既に自我實現の哲學であつた、希臘思想の系統を汲みその理想を具體化して來た泰西の哲學が、最も深遠なる自我の自覺史であることは見易き事實である。

## 六　日本將來の哲學

以上余は東西文明の根本精神を繹ねて儒教、佛教、基督教及び泰西哲學を逐次に而かも極めて大まかに研究し、そして孰れも自我を肯定し、その徹底的な闡明と自由赤裸々な實現とを目的として居ることを確認した。即ち儒教は純粹意欲の必然的發動たる忠恕をもつて人間生活の根本原理となし、佛教は「眞我」の持續性と創造性とを闡明して淨樂我常の涅槃境を示し、基督教は直ちに自己の本性に肉薄して「我れは眞理なり、光明なり」と呼び、そして泰西の哲學は嚴密な意味において自我の自覺史であること、言ひ換へれば、自我の闡明と實現とを外にしては、畢竟孰れも理解し得ないといふことを認職した。從つて東西の各文明は各々その性格と生活狀態とを異にした、特殊の民族によつて創造された

ものであるに拘らず、その根本精神はいづれも自我を中心とし、自我を主張するものであることにおいて、一致して居るといふことが出來る。

勿論余の以上の如き結論に對して反對するものがあるであらう。儒教も佛教も乃至西洋哲學も皆恐く自我を根本とし、自我の闡明と實現とを外にして何者でもないといふことは、これ玉石混淆の我田引水論であるといふものがあるであらう。言ふまでもなく東西の各文明は各々その特色を有つてゐる、或は殆んど調和し得ないと思ふほど違つた民族的特性を有つてゐる。けれども前にも言つたやうに、各民族は眞摯に熱烈に自己の根本要求に徹底することによつて、永恒的價値を有する偉大なる世界的文化を創造したとすれば、その自己實現の要求において根本的に一致するものがないとは言ひ得るだらうか、若しあり得るとするならば、それは普遍的意味を有つた自我であると言ふことに何の不合理があるであらう。尤も自我の見方もしくは捉へ方は各民族によつて異り、從つてその名稱も種々異ることは前述の如くであるが、しかしその民族性に基因した特色のみに沒頭して、その根柢に横はる創造的な普遍的要求を理解しないのは、決して文化の永恒的價値を解する所以ではないと思ふ。從來の頽廢した、現代生活と沒交渉な舊信仰に囚へられて、宗教といへば神佛に絶對歸依を捧げて無我の愛を説くものと考へ、哲學は抽象的形式的な迂遠な論理を弄するものと考ふるもの、即ち儒教は忠君愛國の道德教であり、佛教は厭世的な無我の慈悲を説くものであり、そして基督教はたゞ神の愛を高調するものであると考ふるものにおいては、到底余の結論を理解し得ないであらう。彼等は自我の主張もしくは實現といふことは、哲學乃至宗教の禁物であると思惟するであらう。勿論吾々は彼等の理解を强ひて求むる必要はないと思ふ。何故なれば彼等は到底現代の生活要求を理解し且つ指導すること出來ないのみならず、東西文明を調和し以て獨自の文化を建設すべき新しい哲學を創造する方法を知らないものであるから。

東洋文明を代表する儒教及び佛教の根本精神と、西洋文明を代表する基督教及び泰西哲學の根本精神とは、自我の思想において一致するとするならば、こゝに東西文明調和の可能性があるといふことが出來る。若し兩文明の根本精神が全然異るものであるならば、そは到底調和の可能がないであらう。即ち一方が自我を徹底的に主張するに反して一方は全然自我を否定するものであるならば、迚も調和することは出來ない。たとへ強ひて調和するにしても、かゝる技巧的調和は何等の創造的效果をも齎らさないのみでなく、忽ちにして再び分裂を來たすは火を覩るよりも明かであらう。そしてその分裂は啻に兩文明の分裂のみに止まらず、吾々自己の文化の內面的分裂を誘起するものであることは充分注意せねばならぬことだと思ふ。こゝに吾々は、漫然と東西文明の調和を主張する日本の識者及び學者に對して、猛省を促したいのである。

次に反對論者は、東西文明の調和點は自我の思想に求めなくとも、もつと違つた方面もしくは自我よりも一層高遠なる立場において、求めることが出來るといふであらう。勿論東西文明の一致點は必ずしも自我思想のみではない、その外いろ／＼な方面において一致點を見出すことが出來るであらう。しかしその一致點は恐く吾々の調和點となるものでないことは既に述べた如くである。吾々の調和點となるべきものは、東西文明の根本精神であること、その根本精神が吾々の生活要求と符合するものであることの二條件を具備してゐなければならぬ。從つて余の摑み出した東西文明の根本精神が、吾々の根本的な生活要求と符合するや否やによつて、文明の眞の調和點となり得るや否やを驗することが出來る。然るに東西文明の根本精神たる自我思想が、詳しく云へば、自我の徹底的實現とその熾烈なる主張とは、現代文化における吾々の根本的な生活要求であることは、何人も否定し得ないところであらう。言ひ換へれば、現代文化の意識及び價値は、吾々の普遍的必然的な根本要求に徹底して、それを自由に赤裸々に展開することを外にして何者でもない

から、自我思想が吾々の生活要求と符合することは言ふまでもない、否符合するどころでない、吾々の生活乃至文化の創造的根據といつてもよい位である。從つて他にいかなる一致點があるにしても、自我思想を措いて調和點を求め得ないことは實に明々白々である。たとへ自我思想よりも一層深遠なる、そして一層宏汎なる思想があるにしても、吾々の眞摯なる生活要求と符合しないものは、到底調和點たることが出來ない。

自我思想が吾々の生活要求と根本的に符合するとすれば、これによつて吾々は過去における東西文明の根本精神を現代化することが出來ると同時に、吾々の調和をして單なる技巧でなく眞に創造的たらしむることが出來る。自我思想がいかに吾々の生活要求と符合するとしても、吾々は決して過去における他民族の考へそのまゝを襲用せんとするものでなく、生活乃至文化は生々發展の創造的過程であるから、吾々の新しいそして豐富な生活要求によつて現代化しなければならぬのであるが、更に他方面において吾々の文明調和は調和であると同時に吾々の自己の文化の創造であるとするならば、その創造的根據となるものは、吾々の普遍的必然的な根本要求に徹底することより外にないのであるから、自我思想を外にして徹底的創造的な調和點がないと言はねばならぬ。更に詳しくいへば、吾々の普遍的な根本要求に徹底して、その必然的創造を自由に展開することが、自我即ち純粹自己意欲を實現する所以であり、同時にそは東西兩文明の根本精神を內面的本質的に融合する所以であるから、吾々の文明調和はこゝに單なる外部的な技巧でなくて眞の創造となり、從つて吾々は永遠的價値を有つた獨自の自由文化を建設することが出來ることになる。是において余は、自我思想が眞の調和點であるといふことは、單なる理論でなくて吾々の生活乃至文化の具體的要求であると思ふ。これを否定するは即ち吾々自己の生活要求を眞摯に體驗し理解し得ないものと言はねばならぬ。

以上の所論によつて余は容易に、余の結論を引き出すことが出來る。既に自我思想が東西兩文明の根本精神であり、

吾々の普遍的な生活要求と本質的に符合する創造的な調和點であるとするならば、世界の文化競爭において優越と永恒的價値とを獲得する吾々獨自の文化はいかなるものであるべきか、吾々の生活乃至文化の創造的根據たるべき日本將來の哲學乃至宗教はいかなるものであるべきか、等の重要問題は容易に理解さるゝであらう。即ち吾々の生活要求を永遠に滿足せしめ、その必然的自律的な自由展開を刻々促進するところの文化は言ふまでもなく徹底的な自我思想の上に建設されたものであり、從つて吾々の生活乃至文化を內面的に指導し開發し、その永遠なる創造的價値を規定するところの哲學乃至宗教は、即ち自我の論理的闡明と自由實現とを目的とする哲學、詳しくいへば、自我批判の哲學でなければならぬことは、蓋し火を覩るよりも明かな事實である。自我批判の哲學を創造的根據として初めて、吾々の文化は吾々獨自の新しいそして綜合的な文化となり、從つて吾々の生活要求と文化と哲學とは渾一的に融合して離るべからざるものとなるであらう。かゝる文化を有し、かゝる哲學乃至宗教を有して初めて吾々は、激甚なる文化競爭の場裡において世界的優越と永恒的價値とを獲得することが出來る。そして繰り返へして言つておくが、吾々獨自の文化を建設し、吾々獨自の自我批判の哲學を創造することは、たゞ眞摯に熾烈に吾々自己の生活要求に徹底し、それを自由に實現することによつてのみ可能であることを忘れてはならぬと思ふ。(完)

# 友愛會其他の勞働團體に與ふ

法學博士 堀江歸一

## 友愛會に對する世評

余は數年來友愛會評議員の一人に推され、同會の當事者より求めらるゝときは、隨時會員たる職工の集會に出席し、勞働問題其他に就て、所見を開陳し、彼等の知識を開發するに多少の力を盡しつゝあり。而して同會理事長鈴木文治君は年來の友人にして、又理事麻生棚橋兩氏をも識ると雖も、同會が現に如何なる行動を爲しつゝありや又將來に爲さんとするやと云ふが如き、現實的問題には何等の關係を有せず、又近時友愛會と共に世間に認めらるゝに至れる市內活版職工の組合たる信友會に就ては、每號機關雜誌の寄贈を受くるを以て、之を通じて組合の狀況や、組合員諸氏の意嚮や感情を窺ひ、我國に於ては比較的文字の知識に豐なる印刷職工が勞働問題に就て、理解を有することを認めて、心中滿足しつゝありと雖も、此以上に同會に何等の關係を結ぶに至らず、他の勞働者團體に對しては、前記兩會に對する程の關係すら有せざるを以て、余は最も自由の地位に立ちて、我國の勞働團體に批評を試みるを得ることゝ信ず。固より實際運動に經驗を有せざる余の立言が盡く當事者の參考と爲るを望むものに非ずと雖も、時に熱沸する實際運動家の頭腦に一味の凉風を送るものなしとせざる可し。友愛會は今や世間に於て毀譽相半ばするの地位に立つものゝ如し。友愛會を難ずる者の所說は要するに左の數點に外ならず。

一、勞働大會に於ける我國勞働代表の選擧に妨害を加へ、高野岩三郞氏の當選承諾を不可能ならしめ、次いで桝本卯平氏の當選承諾を妨害し、餘りに執拗なる態度に出でたること。

二、桝本氏出發の際に、示威的行列を爲して、氏を脅迫せんとしたるは不穩當なること。

三、勞働代表の資格に就て、ゴム、パース氏に訴狀を送り、桝本氏をして失格せしめんとしたるは、頗る非愛國的行動なること。

四、友愛會は平生勞働者に援助を與ふると稱し、實は傭者に對して、爭議を惹起さしむること。

以上の四點中、第一より第三に至るまでは、今回の勞働代表選擧事件に關聯して、世間に起りたるものにして、友愛會と行

動を一にしたる信友會や、大日本鑛山勞働同盟會も亦同樣の非難を蒙りつゝあるものと見る可く、又第四の非難は友愛會創立以來常に資本家や官僚が同會に向つて、放つ惡聲にして、將來に於ても勞働者の團結に對して、必ず加へらるゝ所なる可し。卽ち第一より第三に至る非難は突發的にして、第四の非難は永久的のものなるを以て、余は便宜上是等の非難に對する當否を論ずる場合にも、議論を區別せざる可からず。

## 勞働運動と愛國心

余は友愛會其他の勞働團體が、勞働代表委員選出協議會に對して、反對の態度に出でたることを承認す。蓋し代表委員を選定す可き協議員の選擧が公正に行はれず。工場主自ら選擧に干涉して、自己意中の人物を選擧せしめ、又自ら協議員を任命する等自由勝手の行動に出て、斯くて資本家臭味の勞働者や資本家と一身同體なる技師長技師の如き者や、會社の重役が協議員として列席するに至りたる次第なれば、斯る協議會に一任して、眞正の勞働代表委員を選出するが如き、當初より望む可からざる所なりしや、論を俟たず。友愛會や、信友會が斯る協議會に信用を置かず、寧ろ其不信用なる事實を暴露する爲めに、協議會の性質組織に非難を加へ、又斯る協議會を曲屁し、之を通じて勞働代表委員を求めんとする政府の態度を攻擊したるは、天下の正道を歩みたるもの[illegible]友愛會を責むるは、友愛會の行動に依て意外の迷惑を蒙れる一部の官僚に外ならざる可し。

既に友愛會にして協議會を不合理なりと認むる以上は、此不合理なる協議會の選出したる勞働代表に對して、其受任を拒否せしむるに努力するは、當然なりとす可し。爲めに高野氏の如き、平生友愛會の運動を援助したる人に迷惑を及ぼしたるは、友愛會の私情に於ては、忍ぶに難かりし所なる可しと雖も、大義親を滅するの覺悟あるに非ざれば、勞働運動の如き、公共的事業に從ふを得べきに非ず。友愛會の當事者が或る者の斡旋ありたるに拘はらず、飽くまでも妥協交讓を欲せず、協議會を不合理なりとする確信の下に、一貫したる態度に出でたるは、吾人局外者に頗る賴母しき感を與へたり。平生多少の關係ある高野氏に對してすら、尙ほ然り。然らば何等の關係なく、加ふるに資本家の代表者とも見る可き桝本氏に對して、彼の如き反對を試みたるは怪むに足らず。

桝本氏出發當時の示威運動に就ても不穩とか、又は大人氣なしとか云ふ批評なきに非ずと雖も、運動には多少の誇張、浮華、衒氣の伴うを免かれず。是等の要素ありてこそ、衆團が刺戟を受けて、活動を續くるを得るものにして、如何なる國と雖も、示

威運動に小笠原流の作法を用ゆるものあるが如きは、吾輩の耳にせざる所なり。或は友愛會は桝本氏の選出までには全力を擧げて反對し、一旦當選任命と決したる曉には、其勞働代表委員たる地位を尊重し、曩の反對を翻して、虚心坦懐氏と握手し、以て共に勞働運動に盡すを至當とするの說なきに非ず。古來講談物語等には昨日まで敵として相爭ひたる者が今日は或る動機に依て、飜然態度を改め、事を共にするの事例多々あり、日本人の感情は一概に之を一場の美談とするものゝ如く、如上の論者は即ち此美談を以て友愛會を律せんとするものなれども、友愛會にして其所信に忠實の限りを致さんとする以上は、斯る曖昧なる態度を敢てす可きに非ず、最後の瞬間まで桝本氏の不合理なる協議會に依て、選出せられたる事實を明にし、又氏に對する不信任を表明する爲めに、彼の如き運動を試みるを以て、至當なりとす。

最後の問題は友愛會が代表選出の事情を外國に訴へ外國の力に依て、桝本代表の失格を企て以て自家の意見を貫徹せんとしたることの可否如何に在り。夷を以て夷を制するは、支那人特有の外交政策なり。時に外力を利用して、內國に於ける政敵を壓倒せんとし、結局國家の存立を危うする場合なきに非ず。友愛會の所業之に類するものありとし、一部の論者は同會を以て非愛國民の集團なるが如くに、罵倒するが如しと雖も、余は斯る議論に與する能はず。友愛會がゴムパース氏に勞働代表選擧の不合理なる事情を具陳したるは、外力を以て桝本代表失格の目的を逹せんとしたるものに外ならずと雖も、之が爲めに我國の存立を危うするに非ず、又我國の繁榮を傷くるにも非ず、唯政府の勞働問題に無理解なる事實を發露するの嫌こそあれ、又桝本氏や氏と行を共にしつゝある政府並に資本家代表に多少の恥辱を感ぜしむるの恐こそあれ、此以外に國利民福を害する掛念なき以上は、友愛會の對外的行爲は何等議す可きの點なく、寧ろ政府に反省を加へたるの效果あることを稱せざる可からず。今日の如き國際間の關係頗る近接し、比隣亦啻ならざる時代に於て、一國が其內部に起れる事實を外國に隱蔽し、又外國人に虛報を傳播せんとするも、到底其目的を逹す可からず。常に國民に對して、不實の言動を爲しつゝある政府が外國に向つて、之を隱蔽せんとするは、人情の然らしむる所なる可しと雖も、吾人が事の正しきを正しとし、其正しからざるを正しからずとするに就ては、對者の內外人孰れたるとに依て、何等の區別を爲すを要せず、現實を暴露して、以て他日を戒むるを可なりとす。今回の事件が政府に教訓を與へて、將來行はる可き勞働代表の選擧に政府をして公正なる態度に出でしめたらんには、友

愛會其他、勞働團體の貢獻は遂に之を沒す可からざるなりとす。

## 勞働組合改善の方針

余は友愛會が現下群議の焦點と爲りつゝある問題に就て、論述したり。然らば友愛會あるが故に、從來勞働爭議の頻出を促したりとするの非難に對しては、如何に之を見るや、此種の非難は何れの國に於ても、勞働組合の起れる當初に於ては、組合に對して必ず下さるゝ批評なり。然れども組合の全然存在せざりし場合には、勞働爭議の起るものなかりしやと云へば決して然らず。組合なく、勞働者の組織なき場合に於て、不規則に勞働爭議の發生を促し、又其勞働運動に狂暴性を有するは已むを得ざる所にして、組合に對する如上の非難は要するに組合の存せざる場合に於ける勞働運動に就ての豫察を缺くるの致す所とせざる可からず。

友愛會の現狀に對する所感は之を盡したり。同會を始め他の勞働團體に對して吾人は何ものを望まんとするや。勞働組合の組織に就ては、此種組合に多年の經歷を有する英米兩國に於ても、今や重大なる問題に上りつゝあり。而して問題の要領とする所は同種職業に從事する職工のみの團體とす可きや、將た又職業の種類を問はず、總て勞働に從事する者を擧げて、一の團體を設く可きやの點にして、或はインダストリヤル、ユニオニズムと稱し、或はワン、ビツグ、ユニオンと呼び、是等の組織を可なりとするの說なしとせず。友愛會の如き、其成立の當初より今日に至る來歷に徵するときは、總ての勞働者を網內に網羅し勞働者の住居する場所を單位とし、又彼等の勞働する工場を單位として、支部を設立し、各支部員間に於ける吉凶を慶弔し又勞働爭議に對しては、本部自ら進んで解決を試み、機關雜誌を發行して、會員間に於ける思想上の聯絡を通ずるを以て、重なる職分とするが如しと雖も、猶も一個のトレード、ユニオンとして立つ以上は、斯る職分を以て、足れりとする能はず。蓋しトレード、ユニオンとして、重大なる職分を以て目せらるゝは、組合員の爲めに、標準賃銀を決定し、組合の實力を以て、之を傭者に強要し、斯くて組合員の經濟上に於ける地步を進むるに在り、傭者にして頑強にも標準賃銀の支拂を諾せざるか、又は標準賃銀を打破するの擧に出でたるときには、組合の全力を以て、之に對抗し、時に同盟罷業を武器とするを憚らず。斯の如くして勞働組合の本色は始めて世間に發揮せらるゝに至る可きなり。既に組合をして此職分を盡さしめんとするには、其組織に於て左の條件を必要とす。

第一、一行政區域又は隣接する行政區域に於て、同一種類の仕

事に從事し、且つ一定標準の勞働能率を有する勞働者の間に、勞働組合を組織すること。

第二、勞働組合は組合員の爲めに、標準賃銀を決定し、傭者に對して、之を要求すると共に、其維持を期すること。

第三、右の勞働能率を有し、標準賃銀を要求するに値する勞働者は勉めて一組合に網羅すること。

第四、組合所屬の勞働者は組合に屬せざる勞働者と共に、同一の工場に於て就業せざること。

第五、各地方に於ける同種職業に關して成立したる組合の間に聯合會を組織すること。

勞働組合が右の如き方針を取つて、傭者に臨み、又勞働市場を律せんか、玆に組合員の爲めの標準賃銀を決定し、時勢の進步と共に、之を引上げ、傭者に强要するを得るなり、組合が同盟罷業を賭し、又之を行ひて、勞働條件改善の目的を達するが如き策の上乘を得たるものに非ず、同盟罷業を行ふに先だち、組合の有する實力に依て、能く傭者を威壓し、以て目的を達成するを得るものならざる可からず。而して之を期するには、勞働組合たるもの、以上の諸條件を具備するを必要とするや、論を俟たざるなり。

友愛會其他既成の勞働組合に向つて、直に組織を改善することを求むるは心なき業なる可しと雖も、將來の方針としては、組織の改善を望まざるを得ず。各地方に於て同一の職業に從事する者の間に個々の勞働組合組織せられ、更に是等個々の組合の間に聯絡を通じ、實力を强うする爲に、聯合本部の生ずるは、勞働組合組織に於ける自然の勢とす可く、更に是等聯合本部の間に、例へば同情的同盟罷業を行う可き盟約を生じ、恰も英國に於ける三角同盟の如き、組織を生ずるや否やは、姑く他日の問題とせざる可からず。信友會は東京市に於ける印刷職工を會員とするの點に於て、同種職工組合たるの形式を備ふると雖も、組合員の爲めに、標準賃銀を決定するまでに、能率の同等なる者のみを網羅し得たるや否や、將た又信友會員以外の者と共に勞働せざるの一條を厲行するを得るや否や、甚だ疑はしとす可く、將來に發展の餘地の存するものとす可し。

## 勞働組合は敎育機關なり

友愛會信友會を始め諸種の勞働團體の當事者に對して、余が熱望する所は組合自ら組合員を敎養する機關を以て、任ずることと是れなり。勞働組合其ものが一個の學校なりといふことは、英國に於て社會改良家の屢々口にする所にして、要するに組合の下に統率せられたる勞働運動に依て、組合員に統一、聯合、持久、忍耐等の如何に貴んず可きものなるやを知らしむる意なる

可しと雖も我國の組合に對しては、今日直に斯る事を期す可からず。我國に於ては、近年國民教育の普及したる結果として、職工勞働者の智育の程度の上進したるや、驚く可きものありと雖も、文明國に於ける國民知識の標準より云ふときは、決して現狀を以て滿足する能はず。玆に於てか、勞働組合自ら組合員の爲めに、教育の機關たるの必要を生せざるを得ず。

勞働組合が組合員の爲めに、教育機關たる場合に、何事を教育す可きや、一個の問題なり。技術教育を欲する者には其教育を授け、職工をして現に從事しつゝあるよりも高き地位に就かしむるの素養を與ふるも可なり。現時世間に發生しつゝある問題を解說し、彼等の常識を涵養するも可たり。人事處世に關する法律、經濟生活の法則等を會得せしむるも亦可なり。今や一方に八時間勞働の制度は國際間に公認せらるゝ他の一方に、普通選擧の實行は目睫の間に迫れり。八時間勞働の下に、今日に比較して餘裕を生じたる時間は勞働者に依て、如何に利用せらる可きや。彼等が此時間を享樂に供して、心身を快適にするは固より可なりと雖も、其一部分を修養研究に費さんか、將來の勞働能率を增進するに資するもの大なる可し。若しそれ普通選擧制度の行はれたる際に、勞働者をして選擧權を行使するに適せしめんとするには、今日より彼等の教養を謀るを以て國家的問題

なりとせざる可からず

我國に於ける從來の事實を以てするときは、所謂筋肉勞働者の間に、勞働運動の指導者を得るは、至難の業に屬したり。是れ即ち教育あり、且つ勞働運動に趣味を有する人士が指導者たるを要したる所以にして、今後に於ても斯る人士の勞働運動に參加するを可なりとする事情ある可しと雖も、同時に勞働に經驗あり、勞働の辛勞に就て充分に知る所あり、又勞働者の思想感情に同化するを得る勞働出身者の指導に待つもの多々あることを想像せざる可からず。而して斯る人士は天成の才能のみに依賴して、之を得べきに非ず、此種の才能に加ふるに、相當の教養を要するは勿論にして、英國に於てジョン、バアーンス氏やラムセイ、マックドナルド氏が勞働者の間に身を起し、又近くはスマイリー氏が炭坑夫出身にして、坑夫組合は勿論三角同盟を指導するの地位に居るが如き、何れも勞働組合の教育機關として活動したる產物なることを思はんか、何人も余の所說に贊同を惜まざることゝ信ず。勞働組合の當事者は深く此點を思うて、次代の勞働運動指導者の教養に怠る勿れ。

近來我國の富豪財產家にして、公共事業に相當の寄附金を爲す者少なしとせず。余の如き平生勞働問題に留意する者の立場より見れば、東京に一の勞働會館を有せざるを以て、首都に於け

る一大缺陷とせさる能はず。東京の中央便利なる場所に一の勞働大會館あり、又工業の旺盛なる四五の區に小會館ありて、勞働者の會合、娛樂、敎育に便せんか、勞働者の爲めに利する所の少なからざるや、論を俟たず。富豪資本家は常に勞働者の團結を敵視し、彼等を無組織の狀態に置かんとするが如しと雖も、斯の如きは到底之を期する能はず、寧ろ大勢に順應して、勞働組合の組織を促進し、組合を對手として、勞働條件を決定し、組合を通じて所望の勞働者を雇入れ、組合に依賴して、勞働者の能率の上進を謀るを有利なりとす可し。富豪財產家にして一人の此道理を解して勞働者の爲めに、會館を建築するの美擧に出づるものなきか、政府の勸誘に應じて、愚にも付かぬ勞資協調會の如きものに寄附金を爲す者ありて、更に一般的に勞働者の利益を謀るの計畫には一文半錢すら惜むの風あるは我國社會の爲めに嘆ず可しとす。

## 勞働組合と政治との關係

政治と勞働組合とは如何なる關係を有す可きものなるか。友愛會は近く普通選擧制度の爲めに、實際運動に從ふ可しと傳へらる。一方に勞働代表選出問題又は昨今の生活問題に關聯して我國の勞働者が政治問題に興味を有するに至れることの頗る強烈なるものあり。普通選擧は政界に於ける當面の問題に上り、

共制度が實際に認められたる曉に、「勞働者自ら參政權を獲得するを得るものとすれば、彼等が此事に大なる刺戟を受くるは、自然の勢力なりとす可し。蓋し從來勞働者を虐遇したる者は一の資本家あるに止まらず、政治家の如きも亦金權政治を政治上に於ける唯一の信條とし、資本家と結託して、勞働者を壓迫したる跡の著しきことを掩ふ能はず。然らば今日我國の勞働者にして共奪はれたる所を回復するには、啻に勞働組合の組織に依て資本家に對立するのみを以て、足れりとせず、普通選擧の下に政治界に地步を占め、既成政黨に或る支配を加へ、更に進んで勞働者を代表する勞働黨を組織するの必要を生ずることとなしとせさる可し。

將來に於て我國の立法をして勞働者の利益に適應せしむるには、現行法中に改廢を要するものあるは勿論、新に制定せざる可からさるもの多々あり。治安警察法第十七條の廢止、工場法の改正は、前者に屬し、職工賠償法、養老年金法、勞働保險法、最低賃銀法の制定等は後者に屬す。是等重要問題の實際の議論に上るの日に、最も利害の關係緊切なる勞働者が路傍の人として、相關せさるが如き、立法をして實際の必要に疎隔せしむる所以なるのみならず、其實行期を遷延せしむるの原因とせさる可からず。勞働者組織の如きは暫く之を他日の問題とするも妨げず。

野心ある政治家や、政界に地歩を失ひつゝある政治家が自家の爲めに、有利なる局面を打開する目的を以て、勞働黨を組織するが如きは、勞働者の爲めに謀りて、事の可なるを知らず、唯勞働者が普通選擧を要求し、其實行せられたる時を以て、勞働者自ら、代表者を議會に送り、勞働者に有利なる立法の制定に力を致すは、最も必要にして、勞働團體の如き、此點に意を注いで、行動せざる可からず。全國に散在する大小の都會にして工業を以て維持せられ、多數職工勞働者の寄住するもの少なしとせず、斯る都會に於て勞働者が能く團結して、志を一にせんか、全國を通じて、二十三十の勞働代表議員を衆議院に送るは必ずしも難事とす可からず。而して此數の議員が眞實勞働者の利害を代表して、既成政黨の間に介在するときは、自ら一個有力なる地歩を占むるを難しとせず。勞働者たるもの、此點に就て自重す可く、勞働團體たるもの亦勞働者を善導して、政治上の果實を成育せしめざる可からざるなり。

### 妥協的運動を排す

我國には妥協を以て、勞働問題を解決せんとする者あり。斯の如きは勞働運動の大勢に逆行する者なり。狼と羊と途を共にして、能く親和するを得るか、鷲と雀と巢を一にして、戯るゝを得るか、現時の經濟組織に於て、資本家と勞働者との協調を望む者の如き、此出來難き事を成就せしめんとするの類なるのみ。我國既成の勞働團體は從來多き資本家と妥協互讓の態度に出で、此間に其地歩の堅實を期したるの趣なきを得ざりき。

或は我國には治安警察法第十七條の如き酷法あり、正面より勞働運動を試み、最後まで傭者に對抗するときは、運動者中に刑事被告人の輩出することを免かれざるを以て、心ならずも妥協互讓を事とするものなるやも知る可からずと雖も、斯くて我國の勞働者が能く何ものを得たりやと云へば、其收獲の頗る乏しきを嘆ぜざるを得ざる可し。之を英國の實例に就て見よ。結社禁止法の廢止を議會に容れしむるに就ても、勞働組合を徒黨とするの見解を一變せしむるに就ても、將た又同盟罷業の爲めに生じたる損害賠償の責任を勞働組合に負はしむるの判決を抹消するに就ても、勞働者が如何に大なる犧牲を拂ひたるか、勞働運動の實際家が如何に重き苦辛を味ひたるかは、史上に明瞭なる事實にして、英國の勞働者階級が今日社會に於て相當の地歩を占め、時勢の進歩に伴ふ幸福を收め結局資本家と相對して、産業管理權を掌握せんとするに至れるが如き、一に彼等が將來に確乎たる信念を持して、之に邁往したるの賜なりとせざる可からず。彼等にして事の中途に於て、資本家と妥協し資本家に懐柔せられんか、何ぞ今日の地位に達するを得んや。今や我國の

勞働者は勞働時間の短縮、賃銀の增進を以て、其資本家に對する要求の全班としつゝありと雖も、彼等の要求は結局產業管理權の掌握に進まざれば、止むものに非ず。而して此事たる、妥協や、互讓に依て、資本家と決す可き問題に非ざるなり。

友愛會には從來妥協互讓の風の認む可きものなしとせざりき。然るに近來に至りて聊か趣を異にし、勞資協調會と事を共にせざるの態度を明にして、妥協排斥の第一步とし、次いで勞働代表選出事件に就て、政府に對し、世間に對し、將た又高野事件に於ける某々斡旋者に對し、最も强硬なる態度を示したるは、平生余の屬望したる所に伴ひたりとす可く、斯くありて我國勞働運動の將來に一道の光明を放つものとす可し。友愛會たるもの他の勞働團體と共に、今日の態度を以て終始し、吾人の望を一空に歸せしむることなくんば、幸なりとす。勞働問題は妥協的態度や、遊樂的氣分を以て處理するを得るが如き、閑散なる問題なりとす可からざるなり。

## 勞働團體と國際運動

資本に國境の存せざるは、從來經濟學の教ゆる所にして、又之を事實に徵すれば、資本家は一方に資本を其好む所に運用すると共に、其好む所より吸收して、以て事業の大を成すを難しとせず。故に勞働者をして資本家に對立せしめんとするには、資本の國際的に相融通するが如く、勞働者亦國際的に運動するものならざる可からず。卽ち我國の勞働團體は其運動を國際的に擴充する趣意を以て、第一外國の勞働諸團體と通信を交換し、第二外國勞働市場の狀況、勞働立法に關する現況を調査し、第三外國に行はるゝ勞働團體の會議に代表者を派遣し、第四內外國の間に勞働者の爲めに職業周旋の業務を行ふが如き手段に出づるの必要ある可し。第四項の職務たる、最も重大なる意義を有すれども、今日の如く合衆國濠洲等に移住民入國に對する制限あり、而して日本に於ける勞働者の生活程度低き場合には、如何に日本に多數の失業者あるも、之を外國に送遣する能はざると共に、外國の失業者を日本に迎ふる能はず。此事は今日の狀況に於て已むを得ざる所なれども、事情は永く斯の如くにして、停滯す可きものに非ず。彼我の勞働團體が互に理解し、提携し例へば我國の勞働組合に屬する勞働者たる以上は、其一定標準以上の勞働能率を有するの故を以て、彼の國の勞働組合に於て、迎へて以て組合員とするの方法に出でんか、人種差別や移住民入國制限問題の如き、優に之を解決するを得べし。我國に於て勞働團體の當事者たるもの、國內狹隘たる天地に跼蹐して、其運動の不振を嘆ず可きに非ず、寧ろ他に翺翔す可き[illegible]たる方面の存することに着目せざる可からず。

# 學習院に於ける國定教科書の改竄を笑ひ併せて貴族教育の驕慢を罵る

高島米峰

## 一 華族も亦人間なり

過去は論ぜず、現在及び將來に於て、華族と稱する特權階級の存在必要なりや。

士農工商といふ四民思想は、明治維新と共に破壞せられたりと雖も、これに代はるに、華士族平民新平民といふ、新四民思想勃興し、新平民が、特殊部落の名に依つて賤しめられつゝあるに對し、華族が、特殊階級として、皇室の殊遇、國家及び社會の優待を受けつゝあること、彼此の差異、啻に、夫の封建時代に於ける、武士と町人との比のみにあらざるなり。國家及び社會に對し、異常の勳功ありしものに對し、これを華族に列し、これに爵位を授けらるゝは、姑く意義あることゝせんも、これを世襲とすることに於て、何等論理的根據を見出すこと能はさるなり。勳功ありし親が、華族となり男爵となりたればとて、無爲無能、國家及び社會に迷惑をこそかくることありとも、毫末も寄與することなきものまでが、平然としてその殊遇優待を受くるといふことゝ、誠に無智にあらずんば即ち無耻なり。華族といふ特權階級の存在意義ありとなし、爵位の授與もとより正當なりとして、若しこれを得んと欲するものは、須らく自らの勳功によりて、これを得べきにあらずや。

現下の事情、眞に華族を全廢せんこと、不可能なるべし。止むことを得ずんば、その漸廢に甘ぜざるべからざるなり。華族漸廢は、一代華族制を前提として、更に既往に遡り、公爵の子は侯爵に、侯爵の子は伯爵に、漸次遞下して、男爵の子は無爵となすに在り。公爵の子、侯爵となりたるを不面目となさば自らの力によりて、更に公爵たらんと努むべく、男爵の子無爵に落ちたるを口惜しく思はゞ、男爵にても、子爵にてもこれを得らるゝだけの勳功を樹つべし。かくの如くにして、精神的にも、肉體的にも、弛緩狀態に在る華族階級が、聊かにても、氣

分の緊張を見んか、蓋し人間としての慶びならずとせず。且つ此の如く、階級の遞下によりて、華族の數、次第に減少すべくば、現在に於てさへ、この特權階級の増加によりて、惱まさるゝところ尠からざる日本の國家及び社會は、その肩の荷物の頗る輕きを覺ゆべきなり。

華族といふ階級の存在、しかも、その華族なるものが、平民に對して、毫も優れる人間味を有することなきのみならず、その體力に於て、その精神力に於て、却つて到底平民の敵にあらざるにも拘らず、華族なりといふだけの理由によりて、差別的待遇を受くるがために、國民思想の上に及ぼし來る惡化、實に尠少ならざるものあるなり。新聞に雜誌に、演説に談話に、『平民的』といふ語の繰り返さるゝこと、甚だ多きにも拘らず、これを用ゐるもの、これを讀みこれを聽くもの、一向以て怪しまざるが如き、正にその一なり。『何某男爵夫人は平民的なり、外出の場合は、電車に乘る。』と言ひ、『何某子爵夫人は平民的なり、女中を連れて、公設市場へ買物に出かけたり。』と言ひ『何某伯爵は平民的なり、毎日自ら庭の掃除を爲す。』と言ふが如き、平民を侮蔑することの、何ぞそれ甚しきや。かゝる場合に於ては、平民的といふ語に代ふるに、『人間的』といふ語を以てし、『何某男爵夫人は人間的なり、外出の場合は、大抵電車に乘る。』と言ひ、『何某伯爵は人間的なり、毎日自ら庭の掃除を爲す。』と言ふべきなり。此くてこそ始めて、華族も亦人間なることと明瞭となり。諸事頗る好都合となるべきなり。然るを、社會の木鐸ともあるべき新聞紙が、寫眞まで挿入して、華族の平民的振りを紹介して、毫もこれを怪しむなきは、自ら輕んずるも、亦甚だしと謂はざるべからず。

華族といふ特權階級存在の無意義なることは、議論として世人の非鳴多大なるのみならず、今や事實として、これを承認せざるを得ざるに至れり。縱令、今後、尚當分その存在を餘儀なしとするも、それは華族的華族にあらずして、人間的華族たらしめざるべからず。未だ人間にだもなり得ざるものが、華族なりといふがために、『皇室の藩屏』を私するが如きは、甚だ僭上の沙汰なり。

## 二　華族の特性と人間の特性

學習院といふものあり、感化院、養育院、孤兒院の類にあらずして、一種の學校なり。その學制第一條に『學習院ハ兩陛下ノ優旨ニ基キ華族ノ子女ニ普通ノ教育ヲ施シ華族タル德性ヲ涵養スルヲ目的トス』とあり。兩陛下の優旨とあるに、恐懼禁じ難きものありと雖も、翻つて思ふに、今日の學習院が、果して能くこの　兩陛下の優旨に、背かざるの成績を擧げつゝありや。

學制第一條に謂はゆる『普通の教育』とは、文字通り、普通の教育たらざるべからず。華族も平民も、共に　陛下の赤子にして、その子女は、共に次代の國民として、國家を双肩に擔ふべき權利と義務とを有するものなり。從つて、華族の子女たると平民の子女たるとによりて、その受くるところの普通教育の、內容の相違を許すべきにあらざるなり。若し、華族の子女のみを教育する學校なるがため、その謂はゆる普通教育なるものが、平民の子女の受けつゝある普通教育と、內容を異にするものなりとなさば、そは普通教育にあらずして、特殊教育なり、此くの如きは、恐らく　兩陛下の優旨にあらざるべしと、拜察し奉らざるを得ざるなり。

又、その謂はゆる『華族の德性』といふもの、人間の德性と同じからざるものありて存すとならば、もとより論なし、たゞ華族も亦人間たらざるべからざるを思ふ時、その德性は、平民の德性と等しく、人間的のものたらざるべからざるは、明白ならずや。然るに、特に『華族たるの德性』を標榜して、平民の德性と差別し、しかも、それを以て　兩陛下の優旨に基くとなせるところ、共に　陛下の赤子たる平民に對する、甚だしき凌辱ならずんばあらざるなり。否　兩陛下の優旨を私せんとする、特權階級の驕慢にあらずんば、即ち橫暴なり。

勿論、學習院が、その學制第一條に於ける『華族ノ子女』のみを收容して、こを教育するところならしめば、彼も好し、又此も好し、されど、現在の學習院の生徒は、その總數の約三分の一は、華族にあらざる士族及び平民の子女なり。華族のみの教育機關たる學習院が、士族及び平民の子女のためにさへこれを開放するに吝ならずと解せば、その宏量の稱すべきなきにあらずと雖も、士族や平民の子女に、『華族たるの德性』を涵養して、何を爲さんとするか。華族に華族たるの德性必要なりとなさば、同一の理由によりて、士族には士族の德性必要なるべく、平民には平民の德性必要なるべし。然るに、これ等特殊の德性を必要とする種々なる階級の子女を、同一德性の涵養を目的とする學習院に收容して、同一教育を施すといふこと、教育の目的よりこれを言ふも、そこに大なる矛盾あるのみならず、特に『華族ノ子女ニ』といふ　兩陛下の優旨に背反するの罪過を、抑々何處に逃れ得るとなすか。

學習院廢すべきか。華族の存在、その意義をなさゞる今日、その華族を教育する機關たる學習院の存在、何の意義かあらんや。華族も人間たらざるべからざる以上、その教育は、人間を教育する學校に於て、これを受けしむべく、華族も國民たらざるべからざる以上、その教育は、國民を教育する學校に於て、こ

れを受けしむるを合理的となす。若し、華族なるものゝ子女は、多く低能にして、これに一般人間、一般國民の子女と同一教育を施すこと、到底不可能なるが故に、特に學習院といふが如き特殊教育機關によりて、これを教育せざるべからずと言はゞ、僕と雖も、誠にその境遇に同情するを惜しむものにあらず。嗚呼、學習院は低能兒の教養所か、モヤシの製造所か。さるにても、一般人間一般國民の士女として、人間的教育を受け得らるべき權利を有する、士族及び平民の士女が、何故に、この種低能兒教養所、モヤシ製造所に入りて、低能兒並、モヤシ並の教育けつゝあるか。華族と同列に教育せらるゝといふ、階級的尊貴に眩惑せる、舊思想の產物たる虛榮のためか、抑も亦、本質的に尊貴なる、人間的教育を受くるに堪へざる底の、精神的不具者か。孰れにもせよ、此の如き浮華輕佻の子にあらずんば、劣等低級の子の多きは、國家の將來を、多幸ならしむる所以にあらざるなり。

小學校六年間の教育は、平民に對しては、これを義務として強制せらるゝなり。これ實に國民教育の基礎をなすものなり。これを以て、その教科書の如きも、國家自らこれを編纂して、全國劃一的にこれを使用せしめつゝあり。教科書の國定及び劃一主義の教育に關して、特別に意見を有すと雖も、未だこの制度の改正せられざる以上、飽くまでその制度に服從せざるべからず。平民の子を教ふる小學校の教科書も、華族の子を教ふる小學校の教科書も、國民教育といふ立場よりこれを言へば、共に同一のものたらざるべからざるや、もとより論なきなり。若し現行制度の下に、國定教科書を用ゐざるか、若くは、國定教科書を、勝手に改竄して用ゐる小學校ありとせば如何。言ふまでもなく、そは正に違法の行爲なり。或は問はん、今の時、內地の小學校にして、國定教科書を改訂して、使用せしめつゝあるものありやと。答へて曰はく、正にこれあり、學習院初等科の如き實に卽ち是なり。但、學習院の如きは、宮內省の所管にして、文部省の所管にあらざるが故に、文部省編纂の教科書を、勝手に改竄して使用せしむるも、毫も差支これあるを見ずとならば、そは恰も、朝鮮に於て、鮮人のために特殊の教科書を編纂し、使用せしめつゝあると同じく、もとより問題とするに足らざるべし。されど、今の學習院は、華族の子女のみを收容教育するところにあらずして、士族及び平民の子が、少からず收容教育せられつゝあるが故に、そは決して、輕々に看過せらるべき問題にあらざるなり。

### 三　學習院に於ける國定教科書の改竄

學習院初等科に於ては、國定教科書を修正改訂し、その改訂の

部分は、一々張り紙してこれを生徒に使用せしめつゝあり。勿論、今日の國定教科書なるもの、決して完備せるものにあらずして、近く大に改訂若くは改造せられざるべからざるものなりと雖も、そは自ら別個の問題たり。たゞ今現に同一平民の子女が、甲は市中の小學校に入學せるため、乙は學習院初等學科に入學せるため、その教へらるゝ言葉と事實とに、幾何かの相違ありとせば、そは甚だ奇怪なる事ならずや。試みに、學習院が、如何に國定教科書を改竄せるかを擧示して、更にこれが批評を進むべし。

『尋常小學讀本』卷一の十頁に『カキノタネトニギリメシ』とあるを『カキノタネトオニギリ』と訂正せり。『握り飯』は正確なる國語なれども、『お握り』にては語をなさず。たゞ、上流社會とやらにては、現に握り飯のことを、お握りと稱しつゝありといふを根據として、訂正したるものなるべけんが、此の如く、正確なる國語を輕蔑して、如何にして剛健なる國民性を養ひ得べしとするか。此くの如き標準によりて、訂正を要すとせば、平民の用ゐる教科書に於て、梨をありの實、硯箱をあたり箱、鰑を當りめと訂正するが如き、必要も起り來るべく、遂にたゞこれ、一個噴飯の料たり。

同卷二十七頁に、『ネエサンガエヲミテヰマス。ニイサンガジ

へて、將に二字目に筆を染めんとし、姉は、畫帖を開いて、富士山の景に見とれて居るのを、弟が仲に介在して眺めて居るところの挿畫あり。その繪の説明としては、どうしても、『姉さんが繪を見て居ります、兄さんが字を書いて居ります』ならざるべからず。然るに、學習院は、これを『オネエサマガエヲゴランニナリマス。オニイサマガジヲオカキニナリマス。』と訂正せり。ネエサンをオネエサマとなし、ニイサンをオニイサマとなせるは、例の貴族病の發作と見逃しやらんも、『見て居ます』『書いて居ます』といふ現在の事實は、『御覽になります』『お書きになります』では、一向説明にならざるなり。凝つては思案に能はずとかや、貴族病も、漸く膏肓に入れりと謂ふべきか。

同卷五十頁に『ハヤクカヘラナイト、オカアサンガ、シンパイシマス』とあるを、『ハヤクカヘラナイト、オカアサマガ、ゴシンパイナサイマス』と訂正せり。オカアサンをオカアサマとなせるも、シンパイにゴの字を添へたるも、シマスをナサイマスとしたるも、皆例の貴族病の發作なるが、たゞ怪しむべきは、それほど貴族ぶらでは氣がすまぬならば、何故に、カヘラナイトを、カヘリマセヌトなさゞりしか。否、小川を隔てゝ炊烟立ち昇る田舍家兩三戸、遙に晩鴉の塒に急ぐ夕まぐれ、そこには

二人の厳丈なる里の子が、一人は立ちて己が家路を指し、一人は踞りて草を摘めり、かゝる挿繪の說明として、オカアサマがゴシンパイナサイマスなどゝやられては、百姓家のお神さんが、定めてお臍をおつぶし遊ばして、お驚き率らるゝことなるべし。

同書卷二の五頁に、小母と甥姪三人とが、各菊を手にして立てる插畫ありて、その說明に、

『ミナサンニキクノハナヲアゲマス　タケヲサンニハドレヲアゲマセウ』

『ボ゜ク゜ニハコノシロイノヲクダサイ』

『オトヨサンノハドレニシマセウ』

『ワタクシニハソノキイロナノヲクダサイ』

『オハナサンハ一バン小サイカラ一バン大キイノヲアゲマセウヲ゜バ゜サ゜ン゜ハ一バン大キイカラ一バン小サイノヲトリマス』

とあり。ヲバサンがヲ・バ・サ・マと改められたること例ゝ筆法言ふまでもなし。たゞこゝにて言はでかなはぬは、ボ゜ク゜をワ・タ・クシと改めたることなり。タケヲは男なるが故にボクと言ひ、オトヨサンは女なるが故にワタクシと言へるところ、原作の用意甚だその當を得たるところのものなり。然るを、學習院は、男の子タケヲをして、矢張り女の子オトヨサンと等しく、ワタクシと呼ばしめたること、男女混淆も甚しからずや。貴族の家庭なればとて、男の子が、ボクと言はざるもの幾何ありや。寧ろ僕とでも改めば、大に改め榮えもしつらむと思はれて、手緩るさ齒痒しとも申すべきか。

同書卷三の第四課『ワタクシノウチ』と題する一篇は、殆ど改作に近きまで斧鉞を加へられたり。(片假名は原文、平假名は學習院訂正)

ウチニハ、ネエンガ一人、ニイサンガ三人、オトウトトイモウトガ一人ヅツアリマス。一バン上ノニイサンハ、イマ、ヘイタイニイツテヰマス。ネエサンハ、コノアヒダ、トナリムラヘオヨメニイキマシタ。

ワタクシハ、オカアサンノイヒツケヲヨクキイテ、イモウトノモリヲシタリ。オツカヒニイツタリシマス。オトウトハ[illegible]ガスキデ、イツモブチトアソンデヰマス。

オトウサンヤニイサンハ、マイアサハヤクカラ、タンボヘイキマス、ウチノ人ガミンナタンボヘデルトキニハ、オバアサンガオルスヰヲナサイマス。

バンゴハンノスンダアトデ、オヂイサンハ、[illegible]ロイロナオモシロイハナシヲ、キカセテクダサイマス。

[illegible]

しつゝあること明なりと雖も、『今軍隊に行つて居ます』にては何か臨時の用事にて、軍隊へ出頭せるものなりとも解し得べく、原文の意に違ふこと萬里なるのみならず、華族の子弟の、徴兵忌避を暗示するものとも解し得べくして、不快この上なし。『隣り村へお嫁に往きました』にても差支なし、たゞ『妹の守をしたりお使に往つたり』が、『他所へお片づきになりました』にて、この活動的精神に代ふるに、『妹と二人で、毎日遊びに參る』といふが如き、遊惰の悪風を以てすること、誠に、上流華族社會の、頽敗せる日常生活の一面を暴露して、餘すところなしといふべきか。世には、年端もゆかぬ少女が、家庭に在りてお守りをしたりお使ひをしたりして、勤勞に服し、依つて以て、家族共同の生活に、貢獻するものさへあるに、毎日遊び暮して、しかも衣は錦繡羅綾、食は大牢の滋味、住は金殿玉樓、生活難とは何處を吹き荒む風の音なるかさへ知らず顔なる、特權階級さへこれありといふことは、一般國民の思想を、危險に導くに甚だ有力なり。學習院は、道聞の消息を、如何に解せんとはする。

『父や兄は早く田甫へ往く』といふを、『お役所へ參ります』と訂正したる、まづ恕すべしとして、さて、一番上の兄が、徴兵で入營中なりといふ事實を基礎として考ふるに、その次の兄……田甫へ出かける兄は、廿歳以下のものたらざるべからず、廿歳以下の兄の田甫へ行かんとするを、お役所へ參らしめたる學習院は、その廿歳以下の兄弟て、如何の技倆手腕ありて、如何なる役所に奉職せしめたるものなりや。十八歳や廿歳位にては、學習院の中等科を卒業したかせぬか位のものなるべし。平民の子の秀才にしても、中學校卒業生位にては、何の役にも立たざるより推して、妹とふたりで、毎日遊んで居たりし華族のお坊ツちやんが、十八歳や廿歳にて、何の役所に、何の職を奉じ得らるべきか、男爵の花尾さんも出來たる今日、子爵自ら役所の受附、二男二十歳にして御話係り、三男十八歳にして給仕に採用せられ、さてこそ『オトウサマヤニイサマハ、マイニチハヤクカラ、オヤクショヘマイリマス』と、訂正せざるべからざりしものなるか、否か。

この類の訂正補修、各卷に渉りて、尚甚だ多しと雖も、煩を恐れて今はこれを省略すべし。而して、その訂正補修の精神、果して何處にありやを檢する時、何人と雖も、如何にして、貴族的たらしめんかと腐心せるに在ることを見出すこと、甚だ容易なるべし。華族の存在既にその意義なく、從つて華族としての特殊教育、又無用なるべき今日の時代、かゝる精神を以て現代教育に改竄を加へんとすること、正しく時代錯誤なり。それも、華族といふ特殊階級の子女のみに對する教育ならば、もと

より僕等の筆端に上すに足らざれども、事苟も平民の子女の教育に關する以上、これを默過すること能はざるなり。何故に、僕等學習院などの厄介になるを欲せざる平民の子女と、喜んで學習院の厄介にならんと欲する平民の子女と、等しく平民の子女なるにも拘らず、彼と此と、異れなる教育方針の下に、異なれる教科書に依りて、二樣に教育せられざるべからざるか。これを糺彈せざらんと欲するも、眞に得べからざるなり。

## 四　貴族教育の弊害とその反動

教科書改訂に伴ふ弊害の一は、無邪氣なる學童をして、猜疑の念を起さしむること即ち是れなり。教科書改訂の部分は、改めたる語句を印刷したる紙片を、原文の上に貼附するが故に、たゞさへ好奇心の盛なる兒童は、種々なる手段を弄して、窃に貼り紙の下の文字を讀まんと要するなり。人の秘密を知らんと欲する心、人に隱して事を爲さんとする心、凡そ此の種の惡性癖は、かゝる企てによりて、漸次に生長せしめらるゝを思はざるべからず。華族たるの德性涵養も、その結果が、かゝる惡性癖を收穫せしめられざるを得ずとあつては、正にこれ、教育上の破綻ならずや。

畢竟これ、學習院といふ特殊教育機關存在の罪なり。學習院だに無くば、即ち如何に華族の子女と雖も。亦、已むことを得ずして僕等平民の子女と共に、平民の學校に入りて、平等の教育を受けざるべからざるなり。平民の子女と華族の子女と、平等の教育を受けて、こゝに始めて兩者實力の優劣判明すべく、從つて、孰れが眞に皇室の藩屛たるに堪へ得べきかも明瞭となり、從つて、華族士族平民新平民といふが如き、差別待遇の、甚だ謂れなきこと徹底せむ。

華族の中にも、譯のわかつた人はもとより少からず。乃木大將の如き、板垣伯の如き、平素の持論、一代華族制を實行したる、その態度、最も敬服を價す。武者小路君一派の青年が、都離れし大分の片田舍に、新しい村を經營しつゝあるが如き、恐らくは、貴族的生活の無意義から目醒めて、直に人間の眞實性に觸れ、且つ味はんと欲する、熾烈なる欲求に驅られたるに、起因するものなるなからんか。大谷光瑞氏の放浪生活を樂しみつゝあるが如き、貴族主義教育の反動にして、正にこれ人としての覺醒なり。

貴族の家庭に於ける子女の生活は、[illegible]に、本願寺の如く、法主といふ活如來樣を、人爲的に製造しやうといふ、手品式教育を必要とするところに於て、一種の人形に作り上げらるべく運命づけられし少年は、茲に凡骨ならば則ち已む。天道是か非か。氣骨稜々なる光瑞氏の如きは到

底それに堪へ得られざりしなり。雜誌を讀まんとすれば、神の字が、悉く張り紙して佛といふに改められ、數回に渉れる物語り、愈々佳興に入らんとする時、耶蘇臭き筋に落ちたりとて、讀むことを禁ぜられ、新聞は見せられざるのみならず、市井の出來事は、出來得る限りこれを知らしめられず習字にもせよ、作文にもせよ、家庭の教師は、眞にその草稿や淸書に朱を加ふることを爲さず、別に紙を展べて、此處はかく〳〵、何處はしか〳〵と、まるで佛様扱ひの馬鹿々々しさ、師傅と仰ぐべき人を呼び捨てにさせらるゝさへ可なりの苦痛なるに、師傅たるべき人が不見識にも、敷居を隔てゝの挨拶言上、師道も弟道もあつたものにあらざる變態教育、これでは、英才光瑞氏ならずとするも、大抵血の通つて居る子供ならば、御免蒙つて埒外に飛び出すこと、聊か以て、無理なりとは言ふ能はざるなり。この分にて進み往かば、遂には、貴族に體操を教ふる時、その號令のかけ方なども、一工夫を要することゝなり、『右をお向き遊ばせッ』『前へお進み遊ばせ』と言ふが如きを用ゐざるを得ざるにも至らんか。恐るべく笑ふべし。

成り度くば、佛にもなるべし、神にもなるべし、況や華族の如き成金の如き、些の遠慮もなく、どし〳〵と成りて、毫も差支なし。たゞその前に、忘るべからざる一大事件あり、何ぞや、曰はく、まづ人間になつて置くといふこと即ち是れなり。萬事は、その上にて、徐に解決するを得べければなり。

# 改造論の一年

室伏高信

（一）

われ等は今ま世界とともに改造の十字路に立つてゐる。實際生活の苦痛からくる被絞取階級の痛ましい訴へ、外部からくる世界的改造の刺激、さうして傳統的制度と生活とに對する自己批評、意識、感激、合理的及び創造的欲求、かうした渦卷きのうちに立つて、興奮し、反省し、動揺してゆくことの目ざましい記錄は、最近一年間におけるわれ等の社會生活に、內在的及び外在的に浸透してきた全記錄である。然りそれは浸透である。

単なる流行、単なるテンデンシイではなくして、社會生活の根底に喰い入つてゐる强い深いペネトレーションである。われ等は現代社會生活を把握してゐる渦卷きをかくのごとくに觀察する。その渦卷きは、最初は漠然たるデモクラシーの聲として起つた。主として世界大戰の刺激によつて導かれたのである。次いでロシア革命が起つた。その革命はカデト的政治革命からボルシエヴヰキ的無產者の獨裁政治へと移つた。やがてまた獨逸にも革命が起つた。獨逸の革命は、獨逸宗徒としての日本の學者または役人社會の精神をも動搖せしめた。彼等は彼等の信仰が誤まつてゐたことを自覺したのではなくして、たゞ獨逸が革命したために彼等自らを動搖せしめたのである。この世界の大動搖の間に立つて、物價騰貴、經濟生活の動搖、こうした現實的の關係は所有階級への機會と生產機關の所有者の威力とを益々擴大したとともに、無產者をして實際生活の脅威の前に戰慄せしめた。所有階級と無所有階級との對抗關係は、勞資協調の聲に欺かるべくあまりに深い溝渠であつた。遲鈍なる勞働者もこの深い溝渠を實感せずにはゐられなかつた。この實感は、單なる、さうして漠然たるデモクラシーの聲のみによつて滿足せらるべくあまりに深い浸透であつた。さうしてこの外來的の刺激と內部的の實感とは、こゝにマルクス主義を思ふ心、組合主義を思ふ心、さうしてまた最左翼派の主張に耳を傾けるほどの心をさへももち來した。かくのごとくにして最近一年間の社會生活の動搖の渦卷は、またあらゆる改造說、現代を修正し、改造しまたは轉覆せんとする諸說の渦卷でもあつた。然り動搖の渦卷、さうして改造の渦卷である。この渦卷は右から左へと動く。

## (二)

今日の改造論の最初のものとして現はれたものは政治的デモクラシーであつた。政治的デモクラシーの聲は日本においても大して新らしい聲ではないにしても、それが一般に感激をもつて迎えられたのは世界大戰の影響である。この大戰はデモクラシーのために世界を興奮せしめた。その興奮は日本にも波動せずにはゐなかつた。その波動が目立つてきたのは最近三、四年間である。その三、四年間はデモクラシーの思想の急速に生長した三、四年間である。しかしこの間においてのデモクラシーは主として政治的デモクラシーとしてのみ生長してきた。大正八年の初頭に至るまでのデモクラシーの思想は主として政治的デモクラシーであつたといふことができる。この間の最も多く代表的なものは吉野博士の民本主義論である。吉野博士がその民本主義論を發表したのは大正五年一月の中央公論において、

であつた。『憲政の本義を說いて其有終の美を濟すの途を論ず』といふ長論文がこれである。この長論文はその當時各方面からの攻擊に遇つたとともにまた各方面から非常な注意をもつて迎へられたものである。その說くところは一、デモクラシーを民主主義と民本主義とに區別し、二、民主主義を排して民本主義を主張し、三、民本主義の政治は政黨政治でなくてはならないといふことに歸着する。即ち徹頭徹尾政治的デモクラシーである。政治的デモクラシーのうちの恐らく最右端に屬してゐるものである。この最右端の政治的デモクラシーでさへも、その當時の反動的支配のもとにおいては、政治論の左翼派に屬するものとして取扱はれた。從つてこれを發表するものは勇氣と確信とを要し、これを讀むものはある程度の感激を感じたといふことができる。その後吉野博士は『國家中心主義と個人中心主義の對立、衝突、調和』(大正五年九月中央公論)を發表し、更に大正七年一月になつて『民本主義の意義を說いて再び憲政有終の美を濟すの途を論ず』(中央公論)といふ長論文を發表した。これによつて吉野博士の民本主義なるものが個人主義のうへに立脚する政治制度の民衆化の要求――要するに選擧權擴張の要求に歸着するものであることを明らかにした。吉野博士と並んでこの時代の民本主義論の人氣役者であつた一人は大山郁夫君であつた。大山君がその民本主義を組織的に說明したのは『デモクラシーの政治哲學的意義』(大學評論大正六年八、十、十一月號)といふ一論文である。この論文において大山君はデモクラシーを二大潮流に分つことのできるものであると說いた。その一つは大山君の所謂シヴヰル、リバティ、他の一つはポリチカル、リバティである。前者はロックによつて代表せられ、後者はルソウによつて代表せられるとは大山君の說いてゐるところである。しかしその何れにしても政治的デモクラシーの範圍に止まつてゐるものであることは吉野博士と何の異るところもない。かくして日本におけるデモクラシー論者の二人の花形役者としての吉野、大山の兩氏はデモクラシーをもつて全然政治的のものとして取扱つた。この態度は獨り兩氏の態度であつたのではなくして、日本におけるデモクラシーの思想の興隆時代においての正統派によつて受入れられた總括的の態度である。この態度は少くとも大正八年の初頭に至るまでのデモクラシー正統派によつて維持された態度である。その態度は歷史的に觀察すれば第三階級主義を體現してゐるものである。フランス革命によつて代表せられる政治的自由主義がこれである。從つてそれは社會進化の約束のうへにおいて明らかに第三階級デモクラシーとして運命づけられてゐたのである。それは現代社

會組織。資本主義に根本的の改造を加へることなくして實現せられるものであるのみではなく、その歴史的の意味においては現代社會組織の辯護において、政治組織を改造せんとする要求である。否な、現代社會組織を基礎としてそれを政治組織に反影し接續せんとするものである。それゆえにこの正統派デモクラシーは官僚派軍閥派との間に惡戰することを餘儀なくされたにしても、第三階級の人々によつては容易に受入れられ、その第三階級のスポークスマンとしての政黨政治家の間にも大なる困難なくしてその影響を及ぼすことに成功したのである。從つて政治的デモクラシーはその必然的の任務としての陰密なる政治的勢力に對して民衆的反感を增大せしめたことは明白であり、それとともにまた一般民衆の政治的意識に訴へたことの效績もまた甚だ大なるものがあつたことは勿論である。それが個人的プロパガンヂストの掌中にのみ屬せしめられるに滿足せずして更に團體的プロパガンヂストを要求することにおいて、大正七年末の黎明運動なるものが組織せられたのである。この黎明運動の代表者としての黎明會なるものは組織的に一團として觀察するのにはあまりに内部の混亂してゐるものであることはいふまでもない。その内部の混亂は既に屢々世間に暴露されてゐる。その一方の指導者としての吉野博士と他の一方の指導者としての福田博士とは少くとも彼等の出發點を異にしてゐるものである。吉野博士の態度は既に説明した。これに對して福田博士の態度を見るに、『英米流のデモクラシー』に對する反感は福田博士の政治論の基礎的の出發點である。英米流のデモクラシーとは何か。『資本的侵略主義に對抗、眞正のデモクラシーを發揚』(中央公論大正八年一月號)といふ一論文を初めとして『如何に改造する乎』(黎明講演集第三輯)『資本的侵略主義を排す』(東京日日新聞大正八年一月一日)の諸論文は福田博士が『英米流のデモクラシー』に對する抑ゆべからざる反感の最高調に達したものとして博士のために紀念せらるべき論文である。かくのごとくにして黎明運動の一方の指導者としての福田博士は『英米流のデモクラシー』に對する博士獨特の强烈なる反感のうへに彼れ自らの黎明運動を組織しやうと企てた。彼れのプロパガンダは立派に成功を收めた。『英米流のデモクラシー』に對する反感、さうして英米そのものに對する反感をも煽揚することにおいて福田博士は確に立派な成功者であつた。然らば『英米流のデモクラシー』とは何か。博士に從へば、世界におけるソーシャル・デモクラシーの發見者は英國のチャーチスト運動ではなくして獨逸の社會民主黨である。また博士に從へば急激なる勢をもつて流行しつゝある英國の勞働階級デモクラシーは一

切イグノーアさるべきものである。さうして『英米流のデモクラシー』とは政治的デモクラシー、さうして直に資本的デモクラシー——資本的侵略主義——海賊主義である。博士はこうした立場から出發する。從つて黎明運動の二人の指導者としての福田博士と吉野博士との立場は、その出發點において明白に反對の立場である。一方は『英米流のデモクラシー』の代表的の反對者である。他の一方は政治的デモクラシーの日本における代表的の指導者である。かくのごとくにして大正七年末から大正八年にかけての黎明運動は二人の反對指導者によつて代表されてきた。從つてこの黎明運動なるものはこの點において單一なる組織意思として見ることは不可能である。しかしザーリズムのロシアと革命的フランスとが世界の表面において協商を結ぶことができたがごとく、こうした反對の立場もまた或る一點または數點においての一致を見ることは必ずしも不可能なことではない。『國本を學理的に闡明し……世界の大勢に逆行する頑迷思想を撲滅する』ことは黎明會の一致した綱領である。從つてそれは傳統的封建主義と組織とを打破することを第一義とするものであることは明白であり、傳統的封建主義を打破して政治的にデモクラシーを樹立することは黎明會成立の第一義であることは少しも疑の餘地がない。從つて福田博士が如何に熱心なる『英米流のデモクラシー』の排斥者であるにかゝわらず、黎明運動の中心力としての黎明會は先づ政治的デモクラシーの開拓者として出現したものである。否らずとすることは黎明會をして無組織、無統一無精神なる一個の通俗講演團たらしむることである。即ち福田博士の個人的の立場の如何にかゝわらず、黎明會をして意味ある團體たらしめようとすれば、黎明會そのものは政治的デモクラシーのスポークスマンとしての約束のもとに生れたものであるといはなくてはならない。しかもその政治的デモクラシーとは明らかにソーシャル、デモクラシーの排斥者としての狹義の政治的デモクラシーである。福田博士がソーシャル、デモクラシーの勇敢なる反對者であることは世間に著聞した事實である。吉野博士もまたこの點においては明らかに福田博士とその立場を同じくしてゐるものである。(黎明講演集第二輯八十一頁)從つてその政治的デモクラシーとは第四階級においてのデモクラシーではないことは勿論である。即ち黎明運動においてのデモクラシーなるものは第四階級の解放を中軸とするものでないことは勿論である。いふまでもなく福田博士にしても吉野博士にしても、必ずしも第三階級の立場に執着してゐると見ることはできない。彼等の政治哲學に對する純粹なる解釋と彼等の實際の立場とは必ずしも一致してはゐない。

吉野博士は第三階級の政治哲學から出發しながらもまた深く人道主義を奉じてあらゆる被壓迫者に對する深甚なる同情をもつてゐる。この點に吉野博士の政治哲學の弱點とその人格的強味とが存在する。その結果は、進んで社會主義者となることを躊躇せざるをえざるとともにまた純然たるブルジョア・デモクラシーの立場に蹈み止まることを快しとすることもできない。かくして吉野博士の政治的デモクラシーは最早や純然たるデモクラシーではなくして、ブルジョア・ラヂカルの立場である。この吉野博士の立場はまた黎明會の立場である。かくのごとくにして日本の政治的デモクラシーはブルジョア・デモクラシーから出發してブルジョア・ラヂカルの立場へときた。これが大正八年の初頭における正統派デモクラシーの立場であつたのである。日本の改造論はかようにして先づ純粹なる第三階級の政治哲學から出發してその進展の第一歩をブルジョア・ラデイカルの立場に置いた。ベンタムの『道德及び立法の法則』または『議員改革問答』の立場が恐らくこの立場であらう。

（三）

政治的デモクラシーの効果は社會的にも産業的にも發見することができる。しかし政治的デモクラシーは社會改造と接續することのできるものであるにしても、それは決して社會改造の綱領と原則とを與へるものではない。その點において政治的デモクラシーの弱點が存在する。日本における政治的デモクラシーも、その數ふべからざる弱點は、それが社會改造に對して何等の原則と綱領とを示すことのできなかつたところにある。從つてそれは第四階級に對して深甚な同情を寄せてゐるブルジョア・ラデイカルの立場にしても、第四階級に對する徹底した解放の立場となることはできなかつたものである。これに對して純眞なる第四階級の立場を代表したものは最初にはマルクス正統派の諸君である。新賣文社系の社會主義者が社會の表面に現はれてきたのは政治的デモクラシーがブルジョア・ラヂカルに進展した前後のことである。河上博士がマルクス主義の宣傳雜誌としての『社會問題研究』を創刊したのは大正八年一月である。かくしてその二、三月頃から新賣文社系統の社會主義者と河上博士の『社會問題研究』とは東西相呼應した形でマルクス主義の宣傳を開始した。その後新賣文社は二派に分裂するに至つたにしてもともにマルクス主義を奉ずるの點においては少しも異るところはない。勿論新賣文社派においては一種の反動的の空氣がどこかに漂よつてゐるように見えた。少くともさうした乖離があつた。しかしマルクス主義の信奉者としての高畠素之君一派の新賣文社派が國家社會主義を奉ずるとには少しも反感の眼をもつて見らる

べきものはない。正統マルクス派社會主義は今日においては、少くとも今日においてはみな國家社會主義である。日本において然るばかりではなく世界において然りである。この事實はたゞに現前の事實であるばかりではなくして、マルクス派社會主義の論理的必然である。國家社會主義といふ言葉が一種の反動的なる、共產黨宣言においての『慈善袋』であるとされたのは既は過去のことである。國家社會主義とは今日においては立派にマルクス派社會主義の別名となつてゐるのである。從つてマルクス派社會主義の信奉者としての堺、山川氏と高畠氏等一派との分裂は決してこの點に關する主義の根本においての分裂と見ることはできない。分裂したる後においてもともにマルクス派社會主義の信奉者であり、またその宣傳者である。たゞ兩者の間における相違は、高畠君が唯物史觀に重きを置くことなくしてマルクスの經濟學說をもつてマルクス說の眞髓となさんとするに對し、山川、堺の兩君の立場は飽くまで唯物史觀の信奉者であるの點である。卽ち高畠氏等一派の國家社會黨の諸君と堺、山川兩君等のとの相違は國家社會主義の信奉者であると否との點ではなくして唯物史觀の信奉者であるか否かの點である。この點において河上博士の『社會問題研究』の立場はまた獨特である。河上博士は唯物史觀の信奉者であり、マルクス經濟學說の信奉者でありさうしてまたソーシャル・デモクラシーの信奉者である。われ等は河上博士の『社會問題研究』の一讀者として河上博士の態度をかくのごとくに解してゐるものである。從つて日本におけるマルクス主義の最も純眞なる信奉者は堺、山川氏等の舊賣文社一派の諸君であるよりも、また高畠君等一派の國家社會黨であるよりも寧ろより多く河上博士においてこれを見る。しかし唯物史觀に重きを置くか否か、またはマルクス主義の諸要素を悉く受け容れるか否かについての分裂は必ずしも改造說としてのマルクス派社會主義として適用される場合においての分裂ではない。その歸着するところは河上派にしてにも堺、山川派にしても、高畠派にしても、みな一つである。前にも述べたとほり國家社會主義がこれである。個人的資本主義に對して國家社會主義を主張し、第三階級民主主義に對して產業的または社會的民主主義を主張する。卽ち生產機關を地理的團體としての國家に歸屬せしめることによつて餘剩價値の社會化を實現せんとするものである。勿論日本におけるマルマス派社會主義の諸君は、唯物史觀的歷史的進化の必然關係を信ずるものと否とにかゝわらず、少くとも今日までは彼等の努力をマルクス主義の原理の解說または現在の政治的または社會的制度に對する批評をなすことに集めてきた。如何にして社會を改

すべきかの點については、新費文社一派がその綱領を示さうとしたことを除いては、河上博士からも、堺、山川兩氏からも未だ聽くことをえない。唯物的歷史解釋派の諸君がこの問題に接觸しないことにはこの點において一應道理のあることであるにしても、明示的または默示的に正統マルクス派を名乘られてゐる諸君の立場はこれを國家社會主義の立場であると見なくてはなるまい。(山川君の立場には疑問があるが)

（四）

マルクス派社會主義につゞいて日本に紹介され且つ宣傳された社會改造論はギルド社會主義である。ギルド社會主義が日本に紹介されたのは今年の六七月頃に始まつてゐることと思ふ。従つてそれが紹介されてからまだ幾何にもならないしその學說が完全なる形において紹介されたものといふこともできない。一方に河上博士の『社會問題研究』があつてマルクス派社會主義を宣傳しまた近くマルクス全集の刊行さへ行はれやうとしてゐるほどに、マルクス主義の宣傳と研究とは既に盛んに行はれてゐるのに反し、ギルド社會主義の紹介と研究と宣傳とはいまだ僅にその一端を現はしてゐるにすぎないとは事實である。その研究と紹介と宣傳とは寧ろ今後に期待さるべきことである。然しその研究と宣傳と紹介との甚だ不充分であるにもかゝわらず、ギルド社會主義に對する感興と期待とは優にマルクス派社會主義に對抗するだけの力を示してゐるように思はれる。英國の勞働問題がシドニー・ウエッヴの時代から、ヂイ・デエ・エッチ・コールの時代へ、國家社會主義の時代からギルド社會主義の時代へ移りつゝあるごとく、日本の社會問題研究、宣傳、紹介の範圍においては、既にマルクス派社會主義からギルド社會主義の時代へ移りつゝあるがごとくにも見える。こゝにマルクス派社會主義とギルド社會主義とを簡單に批評することは私の欲せざるところである。たゞこゝにいひえられることはギルド社會主義が國家社會主義に慊らずして起つてきたことである。ギルド社會主義は先づ唯物的歷史解釋に反對する。この點においてマルクス派社會主義との間に根本的相違をもつてゐるものであるが、これを社會改造の積極的方法として觀察する時は更に重要なる二點において相違點をもつてゐる。その一つは賃銀制度の問題であり他の一つは産業統制權の問題である。國家社會主義のもとにおいては生産機關は國家の手に集中せられる。それは國家によつて所有さるゝのみではなく國家によつて統制せられることを要求する。その結果は勞働者は國家社會主義のもとにおいても依然たる賃銀勞働者である。賃銀制度の維持せられることは國家社會主義のもとにおいても、資本主義のもとにお

いても同一である。その異なるところは資本家によつての産業統制權が國家によつての産業統制權となり、資本家によりての餘剰價値の掠奪が國家の手によつて社會化せられることが期待されるのみである。從つて消費者としての一般社會は資本家の絞取を免れることができるにしても、賃銀勞働者はその絞取から免れることができない。少くともその保障を見出だすことが困難である。それゆへに國家社會主義のもとにおいては生産者としての第四階級を解放して彼れのために人格を回復しさうして彼れのために社會的自由を與へることにおいて一大缺點をもつてゐるものである。ギルド社會主義者は國家社會主義に對してかくのごとくに觀察する。即ちギルド社會主義の批評においては資本主義の精髓は賃銀制度である。賃銀制度にして維持せられる間は生産機關が國家によつて所有せらるゝにしても個人によつて、所有せらるゝにしても勞働者は生産者としての自由をうることは不可能であり、また勞働者は賃銀奴隷の地位から免れることはできない。この立場からして國家社會主義が産業統制權を國家の掌中に把握し生産者としての勞働者團體に獨立なる生産者としての自由を與へないものであるに對し、ギルド社會主義は産業自治を主張し且つ賃銀制度の廢止を主張する。この二つの點において兩者の間に重要な區別の存するものであるとされるのである。しかしギルド社會主義の産業自治論は決してサンヂカリズムの經濟的獨立主義ではない。即ち純然たる生産者本意或は生産者としての勞働者團體によつての絶對的自治權の要求ではない。一方に消費者本位の社會制度に反對するギルド社會主義はまた他の一面において生産者專制の社會組織に反對し、生産者としての勞働團體の産業的自由を要求するとともにまた消費者としての一般社會の自由をも要求する。ギルド社會主義の立場はこの點において二元的である。この二元的の立場から一方にサンヂカリズムの精髓としての生産者の自由を考へ、他方國家社會主義の精髓としての消費者の自由を考へる。こゝにギルド社會主義が成立するのである。かくして國家社會主義またはサンヂカリズムに對する批評としてのギルド社會主義は、英國においては、英國において歴史的に發達してきた勞働組合の自由と一般社會の全體としての幸福とも調和せんとすることにおいて最も巧妙なる社會改造説として提供せられたものである。ベルトランド・ラッセルの言葉をかりていへば、英國特有の妥協的精神の産物であるといふことができる。この英國特有の妥協的精神の産物としてのギルド社會主義は日本においても異常なる興味をもつて歡迎されつゝある。しかしギルド社會主義は必然的に勞働者團體の發達を條件とする。勞働

者團體の歷史的に發達してきた英國においては、ギルド社會主義は單なる學説として受入れられるものであるばかりではなく、直に英國の社會組織、產業組織または政治組織に當辨めることができるにしても、勞働團體、生產者としての勞働團體の發達してゐない日本の現在の產業組織において、ギルド社會主義が直に受入れられるだけの準備があるか否かは大に考慮を要する問題である。この單なる實行上の問題からのみ觀察すれば、國家社會主義は現前の社會改革案としては却つてより多く實行性をもつてゐるといへるかも知れない。何れにしてもこの點は今後に考究せらるべき問題であり私自身こゝに簡單なる斷案を下すことを欲しない。

（五）

このほかに日本に宣傳または紹介された社會改造の主義としては、中澤臨川氏によつての分產主義を初めとして修正派社會主義もあり、サンヂカリズムもあり、I・W・W・もあり無政府主義もあり、或はまた溫情主義的勞資協調論なるものも日本において發明され、或は純然たる政治的改造運動としての改造同盟の運動もある。そのうちI・W・W・、サンヂカリズム、無政府主義のごとき較左翼の主張に對しては現代に深刻なる反感をもつてゐるもの、共鳴者に少くないやうであり、また多くの急進性に富める人々の間には、これによつて彼等の急進的感激性を滿足させてゐるのを見る。特に大杉榮君等一派の無政府主義またはアナアコ・サンヂカリズムの運動は勞働者の實際運動のうちに相應に喰ひ入つてゐるやうにも思はれるが、未だそれをもつて日本の改造説として提供されたものとして見るとはできまい。分產主義並に修正派社會主義もまた今日までの程度においては單なる紹介に止まつてゐる。これに反して勞資協調論は現代の社會的不安を解決すべき一策として公然提唱せられたものである。支配階級、所有階級の諸君の改革案がこれである。その勞資協調論とは、今日まで示されてゐるところによれば、それは利益分配制度の提供でもなく、資本家勞働者の共同管理の提供でもなく、工場別的または一般的溫情主義の提唱である。澁澤男等一派の資本家によつて組織されてゐる勞資協調會は主として一般的溫情主義を供給する役目をもつて生れてきたもののやうであり、これに反して床次內相が十月二十五日政友會本部において陳述したところによれば、工場別的溫情主義を提唱してゐるもののごとくである。その何れにしても溫情主義によつて資本勞働兩階級間の必然的鬪爭關係を解決しさらんとするものであることは一つである。共產黨宣言の所謂「慈善家」の主張である。飢えたる勞働者に慈善資を提供することによつて社會問

題の根本を解決しさらんとするものである。しかしこの種の温情主義なるものは何等の學理的根據をも有せざるものであるの點に根本的の弱點をもつてゐる。彼等の唯一の根據として主張するところは日本の資本家對勞働者の關係は主從關係であるといふことである。しかし彼等は何れにかゝる歴史的根據を證據立てることができるか。資本主義が日本に輸入されたのは極めて最近のことではないか。しかもその最近に輸入された資本主義は現代日本の政治的、社會的、産業的樞軸である。その資本主義の輸入とともにこゝに賃銀工業勞働者階級を生じ、さうして今日の最も主要な社會問題が發生してゐるとは何人も承認すべき現前の事實である。即ち西洋産業組織の飜譯においてこゝに社會問題の發生を見るに至つたのであり、資本家勞働者の對立關係を生じたものである。事實が既にかくのごとくであるとすれば、日本の勞働問題が日本特有のものであるとするの根據のうへに立たんとする勞資協調論者の立場はその根柢において誤謬であり、虚僞であるといはなくてはならない。誤謬と虚僞とのうへに立つて民衆を瞞過しさらんとする態度は單にその人々の不道德を證明してゐるものであるばかりではなく、民衆の一般的道德標準を害する團體生活に最も危險なる態度である。しかもこれ等の資本家が日本の資本家對勞働者の關係は日本獨特であるとなし、穩健なる形においての勞働組合の成立をさへ阻害せんとしつゝある間に、目さめたる勞働者は日日に温情主義者の僞瞞的態度に裏切りつゝあるを見る。然り、温情主義とは社會改造論ではなくして現狀維持論であり、資本的利己心において現狀維持論であるに過ぎない。これとゝもに改造同盟の諸君の運動も單なる政治改造論であり、さうして社會改造論としての主義と綱領とを示すことのできないものである以上はそれは普通選擧同盟會としてより以上の評價をうけることはできないであらう。

# 政界當面の諸問題何處に落着すべき

前田蓮山

## 一　物價調節問題

現下の政界に於て最も重大なる問題であつて、内閣の生命にも影響しやうといふのは物價問題である。故に、先づ順序として物價問題の經過から述べやう。現政府が物價に對する態度は斯うであつた。今日の政治組織と經濟組織とは、個人の自由を原則として成り立つて居る。故に、政府は其の個人の自由を保護するに必要なる場合、及び其の自由が放逸墮落に赴く場合に於いて之に干渉しなければならぬと云ふので、仲小路氏の暴利取締令の如きは、所謂お家の寶刀として成るべく之を用ゐぬと云ふ方針であつた。併し世界の經濟狀態が大戰亂の結果として變態に陷つて居るのであるから、需給關係を圓滑ならしめむが爲めには、勢ひ變則なる人爲的方法を用ゐなければならぬ。そこで政府は先づ米の輸入關稅を撤廢し、米麥の輸出を禁止し、政府自ら外米の輸入を行つたのである。其の結果か否かは知らぬが、兎も角一時米價は下り坂に成つたけれども、同時に外國貿易の結果、生絲や砂糖が段々に騰貴し初め、それに伴れて一般物價、殊に米價が暴騰した。

丁度その頃であつたかと思ふ。山縣公が入京して原首相と會見し、物價調節に就て意見を交換した。尤も其時の會見は、單に物價調節のみならず、外交問題殊に對支問題に就て意見の交換があつたのであるが、主なる問題は、物價調節問題であつたのである。そして外交問題の方は容易に兩方の意見が一致したけれども、物價調節問題に就ては、原首相は山縣公を安心させることに就て頗る困難を感じたらしい。併し何うか斯うか山縣公は、原首相の從來爲し來つた所の政策及將來に於て成さんとする所の政策(米の鐵道無賃輸送の如き)を說明し、其の結果を俟つと云ふことになつて別れたと聞いて居る。

處が、飽くまでも細心なる山縣公は、寺内内閣時代の米騷動で神經過敏になつて居ることでもあり、内心原首相の說明では充分の安心は出來なかつたのである。そこで田健次郎男に命じ

て物價調節に關する具體案を作成せしめた。

田男が具體案を作成して居る間にも物價はドン〳〵騰つて行く。山縣公は心配で耐らない。而かも原首相は平氣の風である。そこが兩人の根本的意見が違つて居る所以であらうと思ふ。即ち山縣公は寺內內閣時代の米騷動ばかりに捉はれて居り、其の暴動の起こつた源因に就て聊か寺內內閣を買ひ被つて居たが、原首相は物價が暴騰すると云ふ丈けのとで心配する必要はない。物價が暴騰すれば之に應ずる丈けの施設をすれば宜しい。物價を下げると云ふ消極的政策よりも、物價が上つても國民は困らぬと云ふ積極的政策を行るのが良いと信じて居たのである。

原首相は東北大會に臨んで、今日の日本は未だ非常の場合には臨んで居らぬ。國家の運命を賭して戰つた歐州交戰國とは事情が違つて居ると演說したが、原首相は絕對的に物價下落策を行らぬと云ふのではない。まだ非常手段を執るべき場合ではないが、併しながら臨機應變の處置を取つて行かなければならぬと云ふ方針であつた、決して放任して居たのではない。當時、原首相は恁う考へて居たらうと思ふ。物價調節の根本策は通貨收縮若しくは輸出禁止であるが、是れは實に重大な問題である。通貨を無理に收縮すれば外國貿易に障害を生ずる。外國貿易に障害を生ずれば、生產事業が不振に陷つて忽ち失業者が續出する、現に休戰の結果として造船業及び之に關係する事業が一時打擊を被つた結果、阪神地方に於て失業者を出し、大變に心配した事實もある。又た一方國家として考へても、折角歐洲大戰の機に乘じて擴張し得たる所の外國貿易市場を、內地の物價を下げる目的の爲めに犧牲にすると云ふことは遺憾至極である。これを箇人より考ふるも、戰前に於ては職業を得ると云ふことは頗る困難なことで、學生間には就職難の叫びが高く、各私立專門學校は其の卒業生に勤め口を世話して遣ると云ふことが重要な仕事で、卒業生の職業が得らるゝや否やと云ふことは、その學校の盛衰に關すると云ふ有樣、帝國大學ですらも、卒業生の捌き口に苦心した位で、米國に行けば其日に職業が得られると云ふことを一般に羨んだものである。處が此の一兩年と云ふものは、米國三界まで職業を求めに行かずとも、何人でも、容易に職業は得られる有樣となつた。比較的收入の尠い電車鐵道の從業員、巡查、小學教員、下級判任官の如きは、寧ろ人間不足に困つて居る。此の現象は如何なる原因から發生したか。是れは全く外國貿易發展の結果である。故に外國貿易を阻害する程に通貨を縮少すると云ふことは以ての外で、輸出禁止も非常の場合でなければ行はれない。背に腹は替へられぬと云ふ

ことあるから非常の場合に立至れば通貨の極端なる收縮も輸出禁止も、無論斷行しねばならぬと云ふことは論を俟たぬ所であるけれども、今日の日本はそれ程非常の場合に迫つては居ない、無理に物價を下げやうとすれば、大多數の國民は却て困難する。是が原首相の意見であつたらうと思ふ。

そこで原首相は、物價騰貴に連れて勞銀俸給の値上げをするより外にないと云ふ結論に達したのである。その結論は、同盟罷工に干渉せぬと云ふ方針となつた。これは單に吾輩の推測である。政府は勞銀を上げさせる目的の爲めに、同盟罷工に干渉しなかつたのではない。人間の自由を尊んずる爲めに干渉しなかつたのであると辯解するであらう。それでも宜しい。何れにしても結果は物價騰貴に連れて勞銀が上がつたと云ふことになつた。吾輩は茲に、純客觀的に、物價調節問題の經過を述べつゝあるのであるが、聊か吾輩の議論を挾むならば、勞働者がストライキを行つたと云ふことは、其の本に反つたのである。行く可き道に行きついたのである。寺内内閣時代には、勞働者は(勞働者と云ふのは語弊があるかも知れぬが)暴動を起こして國家の秩序を亂したけれども、それでは迚も自分の問題を解決することは出來ない。此の場合、自分の生活問題を政府に訴へ、政府の交迭を促しても、直接に其の効果が顯はれると云ふ譯には行かぬ。問題は資本家對勞働者の間にある。唯だ政府に望む所は從來の政府が惡用した治安警察法第十七條を再び惡用して貰はぬことである。斯うして勞働者が資本家に向つて賃金値上げを要求し或程度まで其の目的を達した。

要するに現内閣は、勞働者のストライキに干渉しなかつた。寧ろ幾分勞働者に同情した。此の同情したと云ふことを以て、勞働者に向つては、諸君の味方なりと公言して居る連中が、資本家に對しては『現政府は實に怪しからぬ。自分が引受くべき筈の責任を、資本家に押し付けて仕舞つたのである』と言つて居る者もある。是れこそ實に怪しからぬ話ではないか。

そこで、一般に勞銀俸給は上がることになつたが、併しながら其の上がつた割合は物價の上がつた割合には追ひ附いて居らぬ。極大雜派に見れば、勞銀俸給の上がつたのは二倍で、物價の上がつたのは三倍である。是れでは生活困難に陷らねばならぬ筈、而か實際に夫れ程困つては居ないのは事實であらう。それは何う云ふ譯であるかと云へば、仕事が多くなつた結果である。仕事が多くなつた結果は、從來遊んで居た老人も幾らかの收入を取つて來る。妻も娘も幾らかの事をすると云ふ有樣で、主人の收入は二倍であるが、一家收入の總計は三倍にも四倍にもなつて居ると云ふ實情。是に於て眞に困るのは、所謂

智識階級なるものである。此の階級に於ては、一種の虚榮心があり又た習慣があつて、老人や妻に内職をさせると云ふことは出來ない。家族の多い家庭は、主人の收入が多少は殖えても、物價騰貴の結果收入と支出の懸隔が益々大きくなる道理である。處が此の階級は頗る少數である。此の少數者の爲めに多數者を犧牲にして、無理な物價調節策を行らねばならぬか何うかと云ふことに至つては、全國民に對する政治を司つて居る政府としては大いに考慮しなければならぬことであらう。

そこで原首相は、一部の救濟政策を考へた。夫れが卽ち公設市場、購買組合の設立となつたのである。蓋し原首相は思へらく『物價公定と云ふことは國家非常の場合でなければ出來ないことである。實は非常の場合に當つても、公定をした結果は非常に危險を感ぜざるを得ない。例へば米價を公定したとする。これか爲めに、農民が氣迷ひをして、二三日米を賣らぬとなれば何うだ。さうすれば政府は農民の持米を調べて、強制徵發に出懸けねばならぬ（無論米價高低と同時に、米穀收用令を發布せなければならぬ）すると擦つた揉んだの騷きとなつて、完全に徵發し得るまでに一週間、それに輸送時間を加へて、米が大都市に集つて來るには約二週間を要すると見なければならぬ。大都市の市民は其の二週間を何うして暮すか。二週間分の米は公定前に準備して置くとしても、強制徵收を行るやうになれば、既に人心動搖し、煽動者も其間に加はり、全國大騷ぎになつて政府は潰れる。政府の潰れるのは構はぬとしても、其の騷動中は米が大都市に入つて來ない。是は現に露國でレェンが經驗した事實である』是は實に一理ある話である。

## 一　通貨問題

併し政府は、所謂社會政策で充分とは思はなかつた。通貨は之を收縮しないとしても、現在以上に膨脹させると云ふことは宜しくないと考へた。否や其時考へたのではない。去る八月頃から考へたのである。政府部内では其頃現在よりズツト縮少すべしと云ふ議論もあつた

現政府の通貨政策は、世間では放任主義だと云つて居るけれども、苦心の跡は見へる。卽ち日銀利子の一方面を見るに、大正三年の大隈内閣時代には二錢であつたが、其頃は源因は外にも色々あつたらうけれども、米價が非常に下落して、大隈内閣が米價吊上げ策に苦心慘憺したことは何人も知つて居る通りである。其後大正五年四月（大隈内閣）一錢八厘に下げ、同年七月（大隈内閣）更に一錢六厘に下げた。其頃の經濟界は何う云ふ有樣であつたかと云ふと、歐洲戰爭の結果、非常に我國の輸出貿易が盛になつて、出超が三億七千百萬餘圓にもなり、在内在、

の正貨は大正三年末の三億一千四百萬圓から七億一千四百萬圓と上り、朝野共に正貨が殖えたと言つて有頂天になつたのである。

處が寺内内閣になつて即ち大正六年三月に一錢四厘と引下げたが同年末の日銀兌換券八億三千一百餘萬圓であつた。次に大正七年九月(寺内内閣)一錢六厘に上げた。其年末の兌換券は十一億四千四百餘萬圓で正貨も非常の激增を示した。斯う云ふ風に大正三年以後日銀の利子は二錢から二錢六厘（一時は一錢四厘)となつた。而して寺内内閣の時から、物價が非常に昂騰し、爲めに暴動まで起こつた位で、世論は一般に通貨收縮を唱へ出したのである。

次で原内閣が成立するに及んで、直ちに大正七年十一月日銀利子を一錢八厘に引上げ、大正八年一月には日銀兌換券は十億二千五百餘萬圓と下り順次收縮して同年四月には八億七千八百餘萬圓となつた。即ち、寺内内閣時代より減少すること二億六千六百萬圓である。處が、同年五月には九億二千七百萬圓と增し、漸次增加して同年十月には十二億餘萬圓となつた。それでも寺内内閣時代に比し增加すること一億圓足らずであるが、正貨の增加は更に甚だしい。そこで日銀は更は利子を上げて二錢としたが、日銀の利上げ位ではトテも通貨收縮の目的を達し得さうもない。金が殖へて困ると云ふのは奇妙な現象であるが、實は日本は金が殖えた割合に生産力は增加して居らぬ。極端に言へば衣服の價が好いからと言つて古着まで悉く賣り拂ひ、冬が來た時に紙幣のかみこを着てふるへてゐるやうな狀態である。

恰度日銀利上げの少し前に、田男の物價調節案が出來あがり小田原に山縣公を訪うて、これを呈したが、山縣公は贊成の個條もあり反對の個條もあつたと云ふ。而して一方貴族院議員中は物價調節の急務なることを唱へて、政府の放漫を非難する聲が高まり、一部の新聞記者が起つて貴族院各派に運動し、遂に例の警告を政府に發したのであるが、貴族院各派が山縣公の意見を參酌したことは無論である。憲政會などは此の形勢を見て、今にも政府が倒れるかのやうに思つて居たが、山縣公は全然此の内閣を倒さうと云ふ意思を有せず、唯だ眞に善意の督勵であつたことは事實で、また貴族院中の研究會も政界を含んで居なかつたのである。

其後、山縣公は樞密院に於ける講和條約審議の用件旁々上京し、原首相及び高橋藏相と會見し、物價調節に就て意見を交換したが、原首相は固より調節を行らねばならぬと云ふ大體論に異議のある筈がなく。高橋藏相も亦た通貨政策に關しては已に

對する世間の誤解（通貨と物價と關係ないと云ふ議論）を辯明し、十分に調節策を講ずることを誓つた。その結果が重ねての日銀利上げ、其他の政策となつた譯である。

通貨問題に對しては政府非難の聲が高いが、兌換券が十億以上になつたのは六月以降の事で、世界の大勢上、急には收縮の實は擧がるまい。收縮するとして然らば何う云ふことを行つたならば宜しいかと云ふに、論者の議論は日銀利子引上げ、郵便貯金利子引上げ、海外投資、公債募集、在外正貨準備制度の改正等に歸するやうであるが、政府は何故に郵便貯金の利子を上げないか。是れは吾輩の了解に苦しむ所である。海外投資は甚だ困難なることで一朝一夕に實行の出來るものではない。前にも述べたる如く、寺内内閣は通貨收縮の意味をも有して支那の借款に應じたのであるが、それが政治問題化して世間の非難を受けた位である。在外正貨準備制度も餘儀ないと云ふことは吾輩も政府の意見を諒とする。公債募集は出來る丈けの事は行りつゝあると政府は辯解して居るが、之も程度のもので、日銀利子も此の上の引上げは一寸困難だらう。以上は物價問題の經過である。

## 三　第四十二議會

第四十二議會に於ける大問題は、外交問題、税制改正問題、物價調節問題、普通選擧問題、勞働組合法問題、

外交問題中、講和問題に完全なものと許することは出來ない。併し西園寺侯自身も言つた通り、列國中一國として滿足をした國はないのであつて見れば、日本も餘儀ない事として默忍ながら之を承認するの外はない。加藤憲政會總裁が講和全權となつたとしても、其の結果は大同小異であつたらうと思はれる。

對支外交は實に困つた問題で、國民何人も之を憂慮せざるなく、政府自身も殆んど持て餘して居るだらうと思ふが、是れは絶對に政爭を離れて考へなければならぬ。大隈内閣の失敗が今日に祟つて居ると云ふことは、辯解の餘地はないのであるが、政友會が公然これを攻撃するのは國家の爲め宜しくない。例の二十一ケ條の如きは、要求の手段に就て失敗の點があつたと云ふことは爭はれない事であるけれども、二十一ケ條そのものは決して不當の要求では無いと思ふ。また要求の時機としても、あの時に解決して置かなければ、今日はもつと紛糾したに相違ない。併しこれが爲めに、支那や列國の感情を傷づけたと云ふことは事實であるが、支那人の感情を迎へる丈けが對支外交ではあるまい。彼等を喜ばす爲めには、朝鮮を呉れてやらなければならぬかも知れぬ。列國の感情は傷づけなくとも濟むこ

とであつたらうが、巴里から歸つた某氏の談に據ると、列國の感情を傷づけたのは、二十一ヶ條要求よりは寧ろ歐洲戰爭中に日本の軍人及び官僚の一部が、獨逸に同情するが如き態度を示したり、其上寺內伯のアウトルツク事件（是れは無論外人の誤解に相違ないが）が强く響いて居たと云ふことである。或は、然うであつたかとも想像され得る。

併し今日となつては、過去の愚痴を滯しても仕方がない。是れからを改善しなければ成らぬことであるが、現內閣が大隈內閣、寺內內閣以來の行懸りを一掃して、南北妥協と出直したのは、大體に於て吾輩の贊成する所である。寺內內閣系統の中には、現內閣が公平ぶりを示した結果、却つて北方からも恨まれ南方からも輕んぜられると云ふ結果に陷り、今や對支外交は行き詰まつて居ると言ふものもあるけれども、事實は強ち然うばかりとも言へず、排日氣勢は他の源因から生じて居ると云ふことは公平なる批評家の承認するところだらうと思ふ。要するに對支問題は、米國の講和條約批准問題が決定した上でなければ進展は出來まい。支那と雖も、立派な獨立國である以上は、日本の思ふ通りにならぬと云つて憤慨するのは無理である。

青島專管居留地問題は、內田外相が考慮すると宣言したのは輕卒であつたかも知れぬが、政府の態度が極まつたと云ふ譯ではないから、再び專管說を固持すると云ふことに考慮を決定するかも知れぬ。考慮する必要もないのに、なぜ考慮するのかと云ふ議論があるけれども、實際は考慮するのが良いと云ふ者もある。由比司令官なども、確たる明言は聞かないけれども、共同說に傾いて居るらしく、實際の利益から云へば、共同の方が良いと云ふ意見を持つて居るものも少くはない。併し日本人は實を捨てゝも名を好む性質であるから、專管說が一般國民には受けるであらう。本問題は、聊か政爭の具に供せられた氣味がないでもないが、是れが內閣の生命に關すると云ふほどの大問題ではあるまい。

加藤憲政會總裁は西伯利亞撤兵說を公表したが、是れは聊か事情を知らぬ嫌ひはないか。西伯利亞の兵を少くすれば、殘つた者こそ大迷惑で損害が增すのであるから、減兵は到底出來ることではない。全然撤兵するに於ては其の跡には不規律な支那兵が乘込むに相違ない。其結果は何うなるか、是れ米國が撤兵せんと欲して撤兵し能はざる所以である。故に、もつと地域を東方に局限しては何うかと云ふ議論があるがこれは最も穩當な說ではないかと思ふ。併し西伯利亞の事情も最近に於て大いに變化しつゝある樣子であるから輕々しく對策を開案することも出來まい。

外交問題は以上述べた通りの形勢で、且つ外交調査會がある以上、國民黨が政府に反對すべき筈がなく、後藤男や田男との關係上、新政會も政府彈劾の態度には出でまい。貴族院も是れで政府に致命傷を與へやうとは仕まいと信ずる。

物價問題は、議會第一の重大問題である。其今日までの經過は既に述べた通りであるが、要するに程度の問題で、憲政會も產業貿易は何うなつても構はぬから物價を下げる方法を實行せよと言はぬ。現に大に政府を無爲無能として責めては居るものゝ、然らば自ら具體案を所有して居るかと問へば、もう此處まで來ては如何ともすることは出來ないが、此處まで持つて來た失政の責任を政府に問はなければならぬと言つて居る。在野黨としては夫れで宜しいが、內閣を取つた時に何うするか。貴族院內には片腕切斷しても是非物價を下げよ、政府の力を以てすれば下げられぬ筈はないと主張して居る者もあるけれども、大勢は本問題で政府を彈劾するまでに行き得やうとは思はれない。

稅制改正は重大な問題であるが、まだ確定案を知らぬから玆に評することは出來ない。勞働組合法は提出すると原首相は言つて居るが、どんな程度のものか、內容如何に依りては勞働者の大示威運動が起るだらう。此の際巡査が彼等と衝突するやうな事があれば、意外の大騷ぎになつて、政府は致命傷を負ふかも知れぬ。

普通選擧問題に對しては政府政友會の態度は決定して居る。即ち主義としては普通選擧に贊成であるけれども、其の實行方法に就て研究の餘地があるから、先づ現行法を一度經驗した上で決定するを穩當とすと云ふのである。在野各派の態度は何う決定するか、未だ殆んど知ることを得ざる狀態にあるが、或は憲政會は普通選擧に纏まるかも知れぬ。多分纏まると見て置いて可からう。國民黨も或は普通選擧になるかも知れぬ。新政會も贊成の方だらう。然うなれば政友會は負けるかも知れんが、負ければ直ちに議會解散である。解散風が吹いて來ると各派には又た考へ直す者が出て來るだらう。結局憲政會は獨りで普通選擧を主張すれば滿足だらうと思はれる。現內閣での解散には在野各派縮み上つて居るが、然ればと言つて指を咬へて引き込んで居るわけにも行かず、是に於て憲政會の院外運動策が計畫されたのである。

## 四　憲政會院外運動策

憲政會總務顧問及び某々新聞記者連は、十月廿八九日頃早稻田大隈邸に會合して相談の結果、議會前に是非共內閣を倒さねばならぬ、夫れには手段を選ばないと云ふ方針を定めたと云ふ

風說がある。これが政府の耳に入つて爾來警視廳は極度の緊張を示して居る。

憲政會が貴族院の物價警告を激勵したのは事實であらうが、貴族院は其の後軟化の氣味となり、殊に研究會が容易に動きさうもないので、議會に這入つても、貴族院は到底頼むに足らぬ。寧ろ此の際大々的院外運動を起し、以て內閣に强壓を加へるに若かずと云ふのが憲政會の策だと言はれて居るが、如何にも有りさうな話である。

小數では院內に於て何事も出來ず、假りに各派を糾合し得るとしても、解散は受けたくないと云ふ憲政會としては、院外運動より外に妙策はないと云ふ結論に到着する筈である。殊に彼等はシーメンス事件で其の美味を經驗して居る。勞働者や靑年を糾合して大示威運動を行ひ、夫れが貴族院を動かす種となり得れば大成功、巡査と衝突して大紛擾を釀しても內閣の致命傷と云ふ目算かも知れぬ。併し夫れにしては今から普通選擧を叫ばなければ駄目だらう。わざ〳〵臨時大會を開いても、別に新らしことも持ち出さず、普通選擧などは全然考へても居らぬかのやうな態度では、民衆運動の氣勢も揚がるまいと思はれる。

目的が民衆運動に在るならば、夫れ相當の事をしなければならぬ。計畫は妙でも實行が伴はなければ何の役にも立たぬ。外交問題で民衆運動が起るならば、もう夙くの昔起つて居るべき筈。物價が高くて困ると愚痴を言つた位では交番燒打にもなるまいではないか。群衆を動かさんとするには愚痴では駄目だ。景氣の好い題目を押し立てて群衆を引き付けると同時に、現內閣が物價調節をやらぬのは富豪から賄賂を取つて居るからだ位の無鐵砲な事を平氣で言ふ勇氣がなければならぬ。充分の道理ある普通選擧論さへ表向きには言ひ切らない位で、院外運動で成功しやうと思つて居るなら大間違ひである。

併し加藤總裁にはそんな藝當は出來ぬ。出來ぬ所に彼れの價値があるのである。彼れが普通選擧論に對して煮へ切らないのは、吾輩の充分諒とする所である。昨年貳圓說を唱へて脫黨者まで出した憲政會。其の憲政會の總裁たる加藤子が普通選擧說を唱ふるに躊躇しつゝあるのは當然の事である。吾輩は普通選擧論者であるが、加藤氏にも同情する。願くば子が正々堂々の陣を張らんことを望む。

多數の橫暴を認め、多數說に服從するの訓練がなければ立憲國民たる資格はない。其が善いとしても、惡いとしても、兎に角立憲政治は多數政治である。議會政治である。旣に議會政治なる以上は、無理な院外運動で內閣を倒さうとするのは宜しくない。

院外運動が議會を動かし、其の結果として政府を倒し得れば結構であるが、議會前に内閣を倒さうと云ふ計畫には吾輩は與みせぬ。彼等とて眞逆倒し得やうとは信じて居まいけれども、其の計畫を目論む思想が間違つて居る。

併し今日の代議士は少數國民の代表者に過ぎぬから、此の意味に於て日本では院外運動が特に必要でもあり且つ意義もある。又た多數壓制ほど殘虐なことはない。多數黨の不合理なる行動に對しては勢ひ暴力に走る不祥事が起る。政友會たるもの大に愼まなければならぬ。

## 五　後藤男歸朝す

後藤男が歸へつた。臼井哲夫氏は男が横濱に入港する數日前から、新聞記者連に先つて船中に入る準備を整へて居たが、夫れは男の口を封ずる爲めであつた。果然男は歸來默して何事も語らぬ。サゾ舌の先きがモゾ〳〵する事であらう。前内閣系の一部は彼れを擔いで後繼内閣の首相にする積りである。併し彼れは未だ山縣公の信用を得ず、平田氏とは依然として仲が惡い。彼れは是から元老貴族院の信用を得るための活動をやる算段だ。其の活動は即ち活動、自動車を乘り廻はす活動で、舌の先きの活動ではない。否な舌の先きの活動もあるべき筈であるが、其れは公衆に對してゞはなく、先づ四疊半式の活動である。彼れが舌は先づ四疊半裏に使用されて、後に郊外に使用されるであらう。早晩政黨を作るに違ひないが其れは此の四疊半裏に成功した事である。彼れは四疊半裏に成功しなければ政黨に成功しないのである。彼れに集まる者は彼れが早晩總理大臣になり得ると云ふ信用が出來てからだ。而して其の政黨は勞働黨など云ふ種類のものではなく、政友會の別働隊とでも云ふべきものであらう。

## 六　貴族院同成會

同成會の起つた原因は、無所屬團と土曜會とが交渉團體たる資格を失つたことにあるけれども、出來上つた內容を見れば、大隈系憲政會系である。之が爲めに茶話會との合同は行き惱んで居る。結局合同は出來まいが、若し現内閣が山縣公と衝突して、權兵衛内閣の末路のやうな場合になつたら容易に合同が出來るかも知れぬ。(本原稿は甚だ急いで作つた。我ながら不完全なるを遺憾とする)

大正九年一月一日發行三倍號に擴大せられたる

# 中央公論新年號の內容

は本號小說欄に折込める三頁大の豫告に詳か也




# 自叙傳奥書

## ——その聯絡と梗概について——

室生犀生

### 六歳まで

明治二十二年の八月朔日の朝、金澤の市街はづれの家並みがだん／＼田園に近づいてゆく裏千日町に、靜かな果樹園にかこまれた家があつた。そこの奥座敷で、小間使のおはるさんが難なく美しい男の兒を生んだ。そのとき、この家のあるじは六十に近い老齢ではあつたが、出産の室をきよめるため、魔除けの一腰を床の間に供えたりして、まめまめしく若い產婦をいたはつてゐた。その肩つきや老ひてなほ力瘤のある腕などが、そのかみの武士生活をしたらしい姿を偲ばせるには充分であつた。

おはるさんは三十九であつたが、この家へきてから妻にさき立たれたあるじを、まるで自分の夫のやうにつかへ、あるじもまた、この若いおはるさんを妻のやうにこの上なく可愛がつてゐた。かういふ歳月が四年五年とつづいて行つた七年目に、こんどの男の子が生れたのである。

男の子はだんだん育つてゆくごとに、それはあまりに美しく子供らしい、たへずにこにこした顏容になつて、近隣のひとびとから「おたぼさん」などと呼ばれ、そのふくらんだ頰や、ひらつたい鼻をつままれたりして愛せられてゐた。二つ三つと育つてゆくにつれて、よく緣先きから庭の方へ這ひ歩いたりした。ことにあるじが、果樹園の手入れに庭深く綠樹の奥に姿をかくしてゐる日など、よく母親がしづかに縫物をしてゐる隙をねらつて、心地よい冷々した地べたの上を、その子は唯わけもなく嬉しさうに、ぶつぶつ片言まじりの叫びごゑをあげながら、泥

まみれになつて、はじめて踏んだ地上の珍らしさに顫(ヲノノ)き勇んでゐるやうであつた。たとへば、すぐ目の前の敷石から草叢へ草叢から立樹の覆ひかぶさつた緑、その緑の上の蒼空、さういふ順序にこの果もない地に地がつづいて行つて、まだ何事も明瞭な意識をもたない幼ない魂を、内からはじきつけるやうに刺戟するのであつた。ことにその新鮮な空氣は弱々しい幼ないもののからだぢうに沁み込んで行つて、眞水をあたへた魚のやうに見る見るうちにちからとなり、はつきりと眼をひらいて地上を戀しげに凝視めるのであつた。しかも、その手や足をばたばた羽のやうに振りながら、やたらに這ひ勇んでゆく姿は、ときどき母親の目にふれるのであつた。

「まあ、お前にはすこしも油斷ができないのね。こつちへ入つしやい。」

と言つて母親は、丈夫さうな子をよく抱きあげた。さういふとき、男の子は宙宇を泳ぐやうな手つきで、何言か呟きながらそこら中をかき掻くやうな力を示した。そのたびごとに、その手についた泥土の一點がいつの間にか乾いて、母親のやさしい肩をよごしたり、黒い髪の毛にはいつたりした。

ときには、男の子は珍らしさうに焚火の生きた燃えたやつを[illegible]としたり、玩具や鍋物を手あたり次第に引き裂かうとしたりした。自分にありあまる珍らしい生命の萌さしが、そこらぢうの障子をやぶいたり、ときには、炭壺からつかみ出したやつをがりがり食べてゐたりした。この世界にあるもの、眼にふれるものはみな新しかつた。珍らしい姿をもつて、幼年者の魂を誘ふのであつた。

老ひたあるじと若いおはるさんとは、ちやうど日の移つてゆく地べたを眺めるやうな靜かな生活のひまひまに、この男の子をさしはさんで、森深いこの家に荒い音一つ立てないで日を送つて行つた。永い冬、それとは反對に明るい夏、それがだんだんに繰りかへされて行つた。

……………………

トルストイは、その幼年の内傳にかう書いてゐる。「私はよく考へ込むと、遠いところを見つめるやうに私は私の産湯をつかつた時の記臆があるやうに思ふ。しかしそれは甚だ不明瞭ではあるが、何かしら記臆にのこつてゐるやうな氣がする。」と。

——私はいくら考へても産湯をつかつたことを覺えてゐない。四歳くらゐまでは何一つ記臆してゐない。唯何かしら不分明ながらも、母の乳房をいじくつたことが今も指さきに記臆されてゐるやうである。その感覺が果して母の乳房を握つたときから引續いて今の私のあたまに[illegible]つてゐるのか[illegible]疑問である。しかし

母乳のあまい溫かい液體の深い味ひが、いまだにいろいろな[illegible]食をした私に思ひ出されることゝ取り併せて考へると、あのまるまるした乳房を力一杯に握つたことがはつきりと指頭からすべすべと感じ出される。……

も一つはハツキリと母と入浴したときのことが、いまだに頭にのこつてゐる。學校の先生の腰掛のやうにふくれ上つた母の膝の上を、ふみちがへてはぼちやぼちやと洗はれたこと、そして母の膝が非常に歩きにくいやうで、すぐ膝の高みから低いところへ辷り込んでしまふのである。しかし其踏み心地は、何ともいへない柔軟さと溫かさにふくれ上つてゐたこと、そして母がうまく力を込めて轉ばないやうに桿取つてゐたとを考へる。しつかりと母の頸首にしがみついてとんとんやりながら、何かしらいら立たしく足踏みをした、あのゴムのやうな膝のことを考へると、慈愛といふものの眞個の姿をかんじさせる。そしてセガンチニの繪畫にあらはれた精神がすぐ傳はつてくるやうな氣がする……。

やはり疊だの障子だのの記臆がある。ことに柱につかまつてやつと立たうとした記臆がある。(しかしそれはその當時の自分になくて今私に醒された感覺かもしれない。)何かしら犬のやうな白い生きものゝ類や、青い木のやうなものもある……。何かを[illegible]として指[illegible]からいへば、どうも朝の記臆が一日のうちでも最もはつきりしてゐるらしい。ことに障子にはつと華やかに一杯に射しこんだ日光をまぶしさうに、すこしばかりの恐怖を交へて見つめたことも覺えがあるらしい。併しこれらは皆な母の肉體に關聯されたものほど透明でない。茫としたうろ覺へである。唯母の肉體だけが明瞭にうつつてくる。私の性慾の眼覺めたいちばん初めを問ふ人があれば、やはり母の肉體から敎へられたと答へる外はない。性慾がまだ生のまゝ、ほんのすこしばかりの芽をふいたころだ。あの乳房をにぎつたときや、母のかみの毛をくしやくしやにしたりしたときなどに、正しい性が育つてゆかうとしつつあつたのだ。三四歳で地上におろされた。

…………………

六歳のときよその家へやられ、十三歳でそこの家から、ある寺に養子にされた。

そして私の處女作小說「幼年時代」(本誌八月號參照)が生れた。

(私がそのやうに三度母をかへたりしたとが、どれほど心性の不純を招いたとだが判らない、どれほど幼年者としての私に常に無理な聰默を強ひたことだか、どれだけ心の內で考へたこと

を心の内で腐らしてしまはなければならなかつたか。私の人格のうちにヒン曲つところや、こじくれたところが今もあるとすれば、「幼年時代」の苦しんだ境遇が、みな年を經た不治な胃癌のやうに、しつこくダニのやうに食付いてゐるからである。年老ひた父となれ合ふた小間使ひのおはるさんを母にもつた私は卅をすぎた今も時々「母がゐたらなァ」とよく考へさせる。さういふときその母の額に七たび石を加へるか、さもなければ取り縋つてさめざめと嗚咽するばかりである。この二つの途を私はどちらへ行くかといへば、もはや私は何も彼も知りつくした年ごろだけに、後者を撰ぶより外はない。私の内の内な心がなほ執念深く本當の母を慕ふてゐるといつても、誰一人信んじてくれないかもしれない。」)

……………………

ふしぎなことには日清戰爭が明治二十九年にすつかり終了したとき、私はどういふ關係であつたか號外の印刷活字の二號の大きい文字を今だに記憶してゐることである。あのがつしりと肉つきのよい活字が、いま此の手記をしたためてゐる私の目にはつきりと共の活字の形態を印刻して來る。一つには號外以外にその大きな活字が使用されなかつた理由から、もの珍らしかつた當時八つの私を今だに忘れさせないやうにしたのであらう。

本當のことをいへば私は中學校も出なかつたのである。「中學校」といふものは、田舍に居ては大へん溌溂な、どこか保さうな氣をおこさせたのである。僧院にゐた私はさうした友人のりんとした姿を街上で見ると、すぐに道をかえるか、でなければわざと反感的に肩を怒して正面から喧嘩をいどむやうにしたものであつた。私の喧嘩はやはり一種の天才でもあつたのか、どこか敏捷で、鋭どく、手つ取り早かつた。それは殆んど狂熱的な短氣が煮え立たせたときに、いつも私をして小さい馬のやうに驅り立たせた。

私が二三の詩集を出版してから歸郷すると、むかしの友だちは私のぎこちない姿を見て、「あいつは東京で何をしてゐるのだらう。」とふしぎがつた。むかしのやうな熊のやうな容貌と、野蠻じみた角ばつた肩とはいつまでも變化なかつた。あとで私の仕事をきき傳へると、「あの男にかけるほど詩は書きいいもんかね。ふしぎなもんだなあ。」と、みんな頭をふつた。私自身でさへ不思議なほど親しまれる寂しい仕事が、むかしの友だちによく解る筈がなかつた。

十六歳のとき、いま、京都大學に居られる藤井紫影先生に「北聖會」といふ俳句會の席上で會つた。そのころ先生は四高

に居られたが、まだ先生は博士ではなかつた。沈鬱なやうで、どこか詩人らしい瞑想的な、それでゐて明るい温かい感じのする、色の白い思想の美しさに富んだ顔立ちの人であつた。いつか俳句をかいてもらつた扇子が、いつの間にか見えなくなつたが、私に題して「汝に瘦せて眼鋭どき蛙かな」とあつた。先生がよく日のくれの町をあるいてゐられるのを見ると、何かしら「偉いもんだなあ。」とおもはせた。静かに考へ深さうに歩いて居られる姿は、私をして深く感激させた。

そして間もなく私は「性に眼醒める頃」(本誌十月號)時代にたどりついた。

二十の時、私は大谷繞石先生に俳句を見てもらつてゐた。先生はそのころ中央公論の俳句の選をして居られた。

あとで四高へ教鞭をとられた。よくおたづねした。私のやうな年少者に夏はビールなどを抜いて、魚釣りの話などをせられた。外國から歸へられると、うす青いやうな地の服をきてよく學校へ行くのに會つたりした。その青い服が私を刺戟した。

そのころ村井雨村といふ温厚な、弱々しい四十近い友人がゐて、よく大谷先生に小説を見てもらつてゐた。そのうち佳いのが出來たら中央公論へ紹介してもらふのだと言つてゐたが、ついぞ出なかつた。私はどこか兄のやうなこの病弱な色の白い友をよく訪ねて、その小説を見せてもらつた。[illegible]びをもつた作品だ。よくこの友と落葉をたたく霰の音をききながら、落ちついた友の言葉をよく聽いた。

「君はまだ若いさかい、しつかり遣らなけりいかんちや。」

などと越中訛りで言つて、妹さんがお父さんに匿してはこの友の晩食につけるお酒を持つてきて、私によくすすめた。恐ろしいほど潔癖で、ハンカチは自分で洗濯つて、きちんと四つに折つて羽織のたたんだ上にのせてあつたりしてあつた。

漱石さんの朝日に出た小説などをも切り抜いてゐた。原稿は墨で美しくかいてあつて、いつも錆びた深い聲で朗讀してくれた。どういふときでも、私と一しよに散歩したりして紅茶でも喫むと、いつも自分で先き立つて拂つて、年少者の私には拂はせなかつた。どこか兄貴らしい風をしてゐた。ことに雨村氏は金澤地方ではかなり新しい草分け文學者だけに、よく若い人がたづねて來ると、いつも私の詩の載つてゐる雜誌を抜いて見せて、よくほめてくれた。もう四五年會はない。今は越中のある新聞にゐる。

## 逃亡

私がだんだん僧院の寂しい空氣をいとひはじめたのは、もう

二十ころで、いろいろな家庭の事情から一月の寒いある日、京都へ、舊友をたづねて逃げて行つた。西陣のきたない旅籠屋にあてもないおどおどした日を送つてゐた。紫影先生をたづね上田敏先生に會つたのもそのころであつた。敏先生は、當時北原兄の「ザムボア」といふ雜誌に出した私の詩をほめたりして、手づから、せんべいを菓子皿からつまみ出しておどおど震へてゐる私に與れた。その右の手にプラチナらしい指輪が光つてゐた。私はそこで非常な澤山の書物と、きもちのよい装飾とに魅せられた。ことに書箱の上にあをあをした孔雀歯朶が、あざやかな長い綠葉を翳してゐたのを、いまでも覺えてゐる……。

どれだけも持つて行かなかつた金が、すつかり無くなつても私は歸國する氣になれないで、毎日、洛北の野をあるいたり、ひとりで旅籠屋の炬燵に顔をうづめたりして、どうしてよい私であるかが判らなかつた。友だちは一人ゐたが滅多に來てくれなかつた。反抗の底の底には、きつと家から迎へに來てくれるだらうといふ卑劣な考へが潜んでゐて、それが吐息のまにまに小さい安心をあたへたが、しかも長い冬の夜の凍てた街路に、寒念佛のかんかん叩いてゆく鉦鼓の音の遠ざかつてゆくのを聞き澄したりした心持ちは、とても堪らない寂しさであつた。私はさういふ晩、めしおし裂ける街路の水をふんでゆく足音さへも、懷しいものにそつと聞耳を立てたりした。

むらさき野といへるにや
草いろ枯れはてて霜はふり
冬の日の黄なるいろ垂れたり。
われ樹木をゆびさしもすれども
なにものも親しみ映り來らず。
旅とその哀歎とのながきつかれより
わが眼はにぶくもつかれ果てたり。
いかにして親しまむと草に臥せども
わが手は冷えたち垂れゆけり。

然し間も殆んど外出しなかつた。かうした六週餘日を旅籠屋に沈靜に送つてゐた私は、しまひに明るいお寺の窓にあたる朝日のぱつとした映り工合や、靜かなやさしい父のことを考へ出して、とうだう歸國する氣になつて、間もなく金を送つてもらつて歸宅したのであつた。この生れて初めての窒息するやうな旅行は、私の心をもはや[illegible]切り放つと同時に、もう少年らしいところがすつかり無くなつてゐた。私は時どき歸宅後、[illegible]

やさしい父と諍つたりするごとに、私にやはり逃亡するより外に仕方がなかつた。何も見たくないといふ心から、私は隣國の越前の△△町の、小さな新聞社に出ることにある友人に世話をしてもらつて、再度の逃亡を或る寒い夕方の列車に乗り込んで企てた。旅館の靜かな一室に、いつも考へたとほりの放縦な、清潔な美しい生活をすること、そしてその小さい可愛らしい田舍の新聞に、あたらしい文藝欄を起すことなどを考へると、心はだんだん明く愉快な羽ばたきをした。うちにゐては、とてもさういふ職業につくことを許されないし、あの複雜な家庭のいざこざも堪らなかつた。

その△△町で降りると、同じ北國でありながらも、此處の家並は低く庇は深つかた。××新聞社につくと、社長といふのは小柄な、痘痕のある四十近い、眼の鋭い人であつた。

「一面の評論を一つかいて下さい。」

と言つた。私は評論といふものをかいたことがなかつたので困つたが、思ひついたまま自然主義文學の批評みたいなものを書いておいた。

翌日、社へ出ると

「昨日の論文はむづかしくて町の人には解らないさうです。私が讀んでも餘り文學的で面白くない。もつと判りやすいものを書いて貰はないと困ります。」

と言つて、散文の短かい「海港より」といふのは、たいへんよいと言つた。それは、途上の冬枯れの景色などをかいたもので、むしろ叙景文であつた。

私は警察から取つてきたコソ泥や、淫逸な穢きものの艶種を幾日も書きのばしながら、人間の仕事にこれ位淺猿しい仕事があらうかと考へた。一つ一つの材料に、いちいち社長が容喙してゐたばかりでなく、私が警察から聞いてきた種でも、彼れの知人であつたりする場合は載せなかつた。その上、自分とは反對黨である郡長の何某氏の根もない私行を私に口述して、その人格や思想をあしざまに書かせた。

「あなたの新聞はあまりひど過ぎますね。どなたが評論をおかきですか。」

と、郡役所へゆくごとに聞れた。そのたびに私は心で赧い顏をした。

午后になると工場から漏れてくる疲れた文撰の唄はいつも私にいろいろなことを考へさせた。一つの假名文字を長くひつぱつて妙にリズムをつけた唄は、ときには追分節のやうな哀調をひそませ、濁つた工場へ射す日ざしのなかに震へてゐた。

編輯室といつてもテエブルと椅子だけの三疊ばかりの北向き

のじめじめした室に、朝から夕方までゐる私は、宿へかへるといつもぐつたりと疲れてゐた。此處に居れば居るほど、自分の空想した生活とは遠ざかり、一生こんな詰らない嘘だらけなことを書いて暮さなければならない氣がした。ここでは、正しいものも正しくなくなつて終はなければならなかつた。

私はまた、この町の高臺にある小學校へも行つた。そこで調べ物などをしてゐる女教師のよこ顏越しに、庭園の山茶花の遅れ咲きなどを端なく眺めたりしてゐるときに、ふと自分のゐた寺のうしろの川や、庭の八ツ手などを思ひ出し、しづかな父が座つてる有様など、佛像の飾られた室とともに目にうつつてきて、やはり自分の住むところが、あの寺にあるやうな氣がした。……此の校庭をへだてた教室にはいさましい子供の歌聲が起つてゐて、古い寂び込んだやうなオルガンの鳴るのがしたりして、沈んだ華やかな、人間の心を少年期にまで引き戻すやうな親しさ懐しさを、しきりに感じ起させた。

社長は、あひかはらず、

「どうも君の評論は判らなくて困る。」

と言つて不快な顏をした。私は私でもう堪らなくなつて

「ぢや大阪あたりの新聞の切り抜きを出したらいいでせう。」

と言つておいた。そして私はとても評論など書けないと思つてゐた。

ある日の朝、私は部長のことで社長と爭つた。

「君は私のいふ通りかいてくれないから困る。あなたのやうな責任のないことをかいて貰れては困る。」

と言ひ出した。

「僕は嘘をかくのはいやです。あの人は實にいい人です。この町にとつてなければならない人だ。あなたのやうに、むやみに人を陷し入れることは僕にはできない。」

と、私は烈しい怒に震へながら言つた。

「でもあなたが此處の記者なら、萬事私の言ひ附け通りになるのが當り前でせう。」

と、故意とらしい冷かな調子で言つた。

「ぢや僕は記者は今日から止めにします。私はそんな不正なことは書きたくありません。」

と言つて私はいきなり卓から立ちあがつて帽子をとつた。「では御自由になさい。君はまだ若いからすぐ怒つてしまふが、それは……」といふのを背後に[illegible]きながして、すぐ下宿へかへつた。そして震へる手つきで、[illegible]かへ書物や本を擬り込むやうにしてゐると、社長の[illegible]

「たくはすぐあゝして怒るんですから、どうか殺らしばらく辛棒して下さい。」

と言つたが、私は實は歸國したいとも思つてゐるやさきだからと言つて、妻君の厚意を謝しながら斷つた。――妻君がかへると、小僧が狀袋をもつて來た。二週間ばかりゐたので、かねがむ囲入つてゐた。生れてはじめて自分で働いた金を私は受取ると、すぐ車で停車場へ行つた。

寺へ歸へると、きまり惡く私は室へ這入つたが、父などは、いままで何處へ行つてゐたのだと優しくなだめてくれた。住所を二週間も知らさないでゐたことを惡いことだとつくづく考へた。そして日が經つごとに、私はまたどうにもならない倦怠をかんじ出した。義母が隣からやつてきては、私のぶら〳〵遊んでゐるのを責めたりするごとに、やさしい父との間に、小さいしつこい口あらそひが起つて、わたしはそばにゐるのさへ、はらはらした不快な暗い氣がした。結局自分さへ居なければいいのだと思つて、ある晩、四五冊の本を持つてそつと寺をぬけ出した。そして或る靜かな裏町の緣深い旅館へ泊り込んだ。そのころ此市街（まち）にできたばかりの××新聞へ出ることに、すぐ友人が世話をしてくれた。何かしら自分で働かなければならない氣がしたのと、もう一つは、もう家へはかへりたくないやうな氣がしたからであつた。

××新聞は、まるで酒びたりになつてゐる三面の主筆を中心にして、毎晩のやうに飲みあるく浮浪人のより合ひであつた。いちばん若かつた私は四高や醫專の演說筆記や、談話などをきいて步いた。ある公開の演說に「隣の話」をきいたとき、それが全然數學的なもので筆記すべきものでなかつたのを新聞に出した。あとにその教授T氏からあれはまるで滅茶苦茶だと抗議を申し込まれた。それは數字や統計を一應演說者から糾すべきものであることがあとで分つた。

私はあるとき小品や散文を毎日一つづつ文藝欄に出してもらふつもりで、五つばかりを主筆の机の上に置いておいた。せめて眞面目な文藝上の作品を一つづつでも發表すればといふ氣があつたからである。ところが日が經つてから同僚が、

「あの文章を出すと君がのぼせるからのせないんだと言つてゐましたよ。」

と言つてゐた。

私はすぐにかつとして主筆に出されたいのなら返してくれるやうにと云ふと、中々返してくれなかつた。それからといふものは自然氣拙くなつて、私はあまり主筆と口をきかなかつた。主筆もなるべく默つてゐたらしかつた。それに、社員が殆んど一週

間に一度あて位ゐに開く酒の座には、一切交らなかつた。いつでも埃つぽい編輯室の片隅に、私は誰とも口をきかないで座つてゐた。それがまた同僚などから非常に生意氣に見えたらしかつた。

私の入社はすぐ家へ知れ、そして旅館も見つけられてしまつた。ある夕方、社からぐつたり疲れてかへると義母がきてゐて一しよに歸へるやうにと言つた。私はすぐ又た家へかへつた。どれだけ剛情を言つても、やはり私に弱々しい一面があつたため、泣くやうに口說かれる母にそむくことができなかつた。家へかへつてから、新聞社はまだ一ケ月も勤めないうちに、また辭めてしまつた。

家に落ちつくと、私はまた家をいとひ出した。あれだけ決心して行つた△△町の社も、こんどの新聞もみな失敗してしまつた。私はいくぢのない自分を歯痒く感じ出した。――そののち、私は今日まで新聞といふものに關係したことがなかつた。

…………………

私も間もなく市街から隔れた金石といふ海岸の町で、登記所へ春から勤め出した。その古い港はむかし錢屋五兵衛のゐたところだけ、家並みは古くしみじみした町であつた。そこの登記所の役人としての私の生活は、私の生涯を通しての樂園であつた。どうしても家庭にゐたくないといふ烈しい決心は、その町の靜かな裏二階の或る一室に座つてゐた私に、しつかりと重苦しい考へを疊み込んだ。海の音はすぐ窓の下まで騷いで來て、若い私をして毎晩のやうに胸を打つた。

毎日、私は小さな登記所へでかける途すがら、そこの小學校へ通ふらしい女教師や、市街まで通ふ女學校の生徒などに、會ふごとにかほを赧めるやうな水々しい心をもつてゐた。どの女のひとにも手紙を書きたいといふ取りとめもない放縱な思ひは、毎日のやうに胸を去來するころであつた。

よく自分の書きあつめた詩をていねいに帳面のやうに綴ぢ、拙いカツトのやうなものまで書き入んだのを幾冊も私はもつてゐた。しかも奥附まで書きそへた美しい詩集をいつも取り出しては、よく波打際などを散歩したものであつた。生涯のうちにどうかして詩集だけは一冊出しておきたいものだといふ小さい願望に燃えながら、いつも東京の土地をゆめ見てゐた。東京へさへ出れば自分の總ての才能が認められるやうに思ひ、だんだん偉くなれるだらう位ゐな淺はかな考へが、いつも輝いた街路の二た側にならぶ大きな建物を想像させ、そこを行く勇敢なやうな小さい自分をも描かせた。あらゆる一切の運命、希望、光輝、はなばなしい生活。さう[illegible]の希望のある一隅に私を

待つてゐるやうな氣もし、その一隅の小さい美しい室が私のためにもう「貸間」の札が貼られてでもゐるやうに、あざやかに目にうつつてくるのであつた。

――獨歩の運命論者や濤聲、そのころ出たトルストイの「復活」の譯本、ことに花袋氏の「田舎教師」などの主人公の生活が私を刺戟してゐた。夜おそくまで波の音をききながら、私はあせりにあせつては夜更までかかつて詩作をしたり、讀書をしたり、假名のついた英語の讀本などを勉强したりした。あたまのわるい私はその一行を諳誦するためによく波打際へ行つては讀んだものであつた。何も彼もしておかなければならないといふ目まぐるしい毎日がつづいてゐた。たとへばその町へ東京から來た人の鋭い言葉をきくと、まるで音樂にでもききほうけるやうに、その切れのよい饒舌り樣を偸みきいたりして、それだけの言葉をつかへるだけでも大きく幸福なやうな氣がするのであつた。または雜誌などの定價表のついたところに「東京日本橋區本町何丁目」などと書いてあるのを見ると、日本橋といふところが堂々とした重い大建築の山嶽のやうに思へた。さうかと思ふと何處か寂しい深川區何町……などと書いてある商品のレッテルなどを見るごとに、ことに東京といふ市街が奥深いところに考へられた。

ともあれ東京といふ相對者は毎日私を惹きつけた。――しかし間もなく私は義母がやつてくるとともに、その登記所通ひも止めなければならなかつた。貧しいやうで、孤獨を樂しめる生活は、それきり義母の自由をゆるさない叱責のために破られた。私はそこを辭職すると、すぐ町はづれの尼寺の二階を借りた。砂丘のふもとに建つてゐて、鮮緑な松林があちこちに廣茫とした海濱にちらばつてゐるのが眺められた。錢屋五兵衛の妾であつた八十の老尼が、錢屋の刑死後、刑場からほど近いところに小さい庵を結んでから、今日まで恁うして建増しにされたのである――よく大阪あたりから新聞、雜誌記者らが此の生きた史實の隱居さんを訪ねて來たりした。若い美しい二人の尼さんもゐた。(そこの生活は「海の僧院にて」として孰れ書きたいと思つてゐる。)そこで半年ばかりゐて、徵兵の試驗をうけると、すぐ上京した。

## 最初の上京

明治四十三年十月五日の午前、私ははじめて慕はしい東京の地をふんだ。新橋の停車場へは、當時美術學校の生徒だつた川邊孝次、今年も特撰になつた吉田三郎、今年文展に出した幸崎伊次郎などが同鄕である上に、みな彫刻をやつてゐた――が迎

へに來てゐた。そして ふらふらする長旅でつかれた私を晩は淺草へ引つぱつて行つて、十二階下をぐるぐる引き摺るやうにして歩かせた。

「どうだ家生、驚いたらう。東京といふところはこんな處だ。」とおしやべりの田邊は私をきめつけた。

「東京の一面にはこんなところもあるだらうと思つてゐたのだ。さう驚かない。」

と私は澄し込んでゐた。が心の中では、いまに落ちついたら美しい女等のゐるところへ行つて遊んだら面白いだらうと考へた。ここでは誰も咎めないからだ。――三人は、こんどは活動寫眞の人込みの中へも連れ込んだ。私は一晝夜すこしも睡らないふらふらする頭へ、いきなり靜かな田舍の海岸から東京のしかも華鬧の巷に入つたのだから、何が何んだか夢中のやうな氣がした。

館を出ると田邊は一錢銅貨を財布からつまみ出して、小さい穴から入れると、りりんと呼鈴が鳴つて、レモン水やイチゴ水の出る自働飲料器？の前に立つて

「どうだ一杯のまないか。かういふところにも都會情調があるんだ。うまいぜ。」

と幾杯も皆なが飲んでゐた。喫しみた（し）かも人込みの中で何といふはしたないことをするんだらうと思つたが、みんなが飲めといふので一杯やると甘かつた。ぞろぞろと歩いてゐる群衆を私はひよいと顧ても、誰一人注意して見てゐるものがなかつた。

その翌晩、田邊は

「金はどれだけ持つてゐるんだ。見せ。」

と「見せ」だけを國言葉でいつて

「十二圓あるんか、このうちでビールを買へ。果物もな。」

と言つてビールを飲みはじめた。やや醉つてくると

「君は家を默つて出て來たんやらう。どうだ。東京はいやな處やらう。歸るなら今のうちぢや、居るなら決心せい。」

ときめつけた。

「國から來たばかりぢやないか、明日から根岸の家へゆくんだ。」

「そうか。二人ゐても闘はんが、共倒れはつまらんからな。あす、連れて行つてやる。」

といつて、その翌日、根岸の赤倉氏のうちへつれて行つてくれた。

赤倉氏は私の家庭を知つてゐたので、當分ゆつくり遊びなさいと言つてくれた。俳句好きのひとは、暇になると湧く千

うに啼く虫のきこえる窓で、机に向つては會社からかへると俳句をかいてゐた。五十を越えたひとのよい赤倉氏は、ときどき、

「君は繪が上手いやうだが、繪を勉強したらうか。」

と言つたが私はどうしても繪の才能のないことを知つてゐたので、

「繪はだめなんです。」

と言つて氣がすすまなかつた。

「やつぱり文學かな。………どうだ此句はうまいかどうだや。」

と國訛りで言つてよく句作を見せたりした。床の間の柱に掛子をかけたり、支那ものらしい陶器をなど撫で廻しながら靜かな晩を送るやうな人であつた。そうかと思ふと、黒々と匂ひのよい墨をすつて習字の稽古などをしてゐた。

奥さんもまたよい人であつた。

「毎日そんなに考へ込まないで、はつきりなさいましな。さあ、これでもおあがんない。」

と快活に言つて、外へも出ないで椽側でうろうろと邪魔物になりはしないかと考へ込んでゐる私に、よく新しい果物などを剝いてくれたりした。そうかと思ふと

「その足袋をおぬぎなさい。お襦袢も。晴れたからさつぱりと洗つてあげませう。」

と言つて、片ッ端から洗濯してくれた。その四十近い健康なきりつとした美に富んだ奥さんは、私の永い暗黒時代のいろいろな面倒を見てくれた。あるときなど、沈靜な、しかもどうにもならない負債に苛まれながら、よく奥さんの助力を乞ふたものであつた。

「これだけお持ちなさい。あとは御自分でこさへるんですよ。ちやんとしてね。」

と言つて、いつも私を失望させなかつた。このごろになつて田端の私の家へやつてこられると

「あのころは、まるで夢のやうにお思ひでせうね。ほんとに苦勞なさいましたからね。」

と、私や妻をかへり見たりした。そして、私が幾日となく放縱な生活をいまはしいところで送つて、蒼褪めてたづねて行つたときの疲れた顏を考へ出すやうな目をしたりした。「まあ、まだお食事前――。」と語尾を喉につまらせたやうに言つて、すぐ奥さんは立つて臺所をガタピシャりながら、浮浪人にひとしい私を永く歸つて來なかつた弟か何かのやうに、深切に溫かいものを用意してくれるのであつた。何事も我慢に我慢をかさね通した私は、その心の奥底にはつきりと目ざめた清淨な氣になつ

て、感謝した。
そうかと思ふと
「髪を刈つていらしやい。まるで草原のやうぢやありませんか。」
と、もぢやもぢやな私の髪を見たりした。伸びすぎた髪は、手入れをしない庭の雑草のやうに亂れてゐたからである。

## 混閙の巷にて

赤倉氏から根津のじめじめした下宿に越してから、國へてがみを出して、書籍や夜のものを取りよせた。そして決して歸國しないことをも書き添えた。それから私は毎月父から送金してもらつた。

私は間もなく酒をのみはじめると、すつかり性格が荒くなつて、自分の好惡の念ひが激しい勢ひで、そとに向つて飛びつくやうになつてゐた。充分でない送金は、その三倍も四倍にもなる生活費には、何等の足しにはならなかつた。私のさもしい慾はいつも國に向つて手紙となり、ときには火事に遭つたりしたなどと書いて、せびりついた。

間もなく「或る少女の死まで」（本誌十一月）の一つの挿話となつたりしたその第一回の時間のとき、殆んど私の服付に底むら洗はれ濯がれ、すつかり落ちついた世間なれた心性の苦しさや、すぐ對手の心の奥まで掻きさぐるやうな光を射りつけるやうになつてゐた。いろいろな過激な都會生活の諸相が、澄み切つた沼のやうに寂然として頭の中におさまつてゐるばかりでなく、あくまで善いもの惡いものの區別がはつきりと判るやうな氣がしてゐた。

都から疲れてかへつた二年目の故郷の地をふんだとき、すぐ優しい幼兒のやうな初々しい感情になつて、嬉しさうに地べたを小躍りして踏んだ。しづかな寺院のなかに父はやはり端然として、爐のほとりに座つてゐた。父のかほを車から下りて見たとき涙が湧いた。淺草の混閙も生活の荒廢もここにはなかつたのだ。ここにあるものは「幼年時代」の悩ましげな、あどけない紅い唇をした私であつた。私はなつかしげに寺領の庭を調べるやうに見て歩いたり、柱や縁側の節々、または爐についた火箸摺れのした木目のささくれなどを懐かしげに切ない氣持で眺めた。こんないい處から何故私はさわがしい都會へ行つたのだらうと今さらのやうに考へたりした。

けれども[illegible]な、[illegible]しい家庭の空氣は、つかれ切つた私の心にすこしづつ、一[illegible]りくしつけ陰氣にした。けれども何ぶも[illegible]の上で[illegible]する[illegible]をかへられた私に、いつも

獸つて、さういふとき、屋根の白々しい町へ歩きに行つたりして、その空氣をそとで晴らせるやうにした。用ゐなれた酒癖はあちこちの料理店の一室や、いかがはしい待合の忍び窓のついたところなどで毎時あらはれた。それらの負債でどうにもかうにもならない隙間をねらつて、私はまた、上京した。……私はすぐに待ち伏せにされたやうに、いきなり酒癖にとらはれた。まるで氣狂ひのやうに飲み歩いては、青ざめながら夜更けの街上をあるくやうになつた。しかも淺草區内の底から底に巢くふたいかがはしい燐寸箱のやうな家のなかで、目高を洗ふやうな苦しい揉まれ方をしたり、どおんと背後から一つどやしつけられたら、もう、それきりで起き上ることのできないやうな重壓された醉を吐きながら、ふらふらと白晝の寂しい鼠か何かのやうに追ひあるいた。

私はそこで恐しい場面を見た。世界にかういふ毒々しい汚れはてた地上があるだらうかとさへ思はれた。乞食にさへ容易に得られる二十錢三十錢が、ここでは皆その肉體をふみくだく淫業のさもしい料金として、清淨なものをも挫がれへし潰された。まるで、燐寸の棒のやうに瘠せほそつた女性が、いろいろなあくどい病氣にとつつかれながらも、なほその身代金の高までこぎつけるまで稼がねばならなかつた。求めるものも此處ではみな自棄に醉つて毒々しくあしざまに罵りながら歩いた。求められるものも、できるだけ荒々しい肉感と惑溺との巷をひらいて見せた。これらの混雜された冷却した情愛のとり交される毎晩のうち、あるものは、包み紙につかひ過ぎた新聞紙のやうに蒼白な肉體を、そこの冷たい床の上に幾晩となく縦たきりで働かねばならなかつた。しかも私はかういふ騷々しい陰氣なじめじめしたた町を歩かなければ、いつも物足りない侘びしい氣がした。毎時もうしろから、せられるやうな酒氣を吐きながら、そこらにうろついてゐる職工やゴロツキと一しよに揉まれながら、いつもその巷をあるいたのであつた。

仕事と言つても私には短かい幾つかの詩をかくほかに、別に何もじなかつた。ただ、遊ぶこと、飲むことが仕事であつた。

唯一人、友の群をはなれてかういふ惡どい生活をしたのち、一年ばかりすると、きつと郷里にまひもどつた。菊の添え竹に追つても追つても止まる秋の蜻蛉のやうに、いつも郷里の寺院へさして歸つて行つた。そのなつかしい道づれは背負ひきれない負債だけで、すぐ父をいちめ義母をして涙をながさせた。とても東京へ出してはやりきれないと言つて家に禁足しておいても私はいつもするりと寺をぬけ出て行つた。そこでも、ここでも私のことが町の人の口の端にひつかかつた。「いつたい何になる

んでせうね。毎日ああして遊んで歩いて……」などと言はれた。

さすがの父も眉をしかめた。すまない、すまないと思ひながら自分でどうすることもできない力に動かされた。

## 父の死の前後

大正四年の春から父はすつかり開眼したままで、視力を失ひかけた。父はそれでも、手さぐりでお燈明をともしてあるいた。それは餘處目にもはらはらするほど危ない手つきであつた。また、本堂にも登つて誦經をしてゐた。もはや明らかに生涯の最終期に近づいたことを豫期させるやうな、力のないゆるみをもつた體つきや、白茶けた光のないにぶい皮膚などが、人の善い枯れたやうな微笑みとともに、しづかに、私の心にはつきりと映つた。決してもう永くは居られない人だと思はせた。ことに秋晴れのした冷かで何處か暖かみの懐まれる椽側に父を座らせ、ひさし振りでお茶を立てたりすると、ほくほくと子供のやうに喜ばれた。私は胸のせまるのを我慢しながら、さうした靜かな日の庭にかさこそ音させる落葉に、ときどきはつと氣をとられながら、のぞまれるままに幾碗もかへて立てるのであつた。父は、はねの高まつた手つきでゆつくり服みながら、その見えない眼をまたゝかせた。さういふとき、知らず知らず私も盲目の眞似をして目を閉ぢてみたりした。まつくらな世界はさぞ不自由だらうと考へた。または、わざと父の見えない目とすれすれに手をかざして見たりしても、父はほんとに見えないために平氣でゐた。私はさうした日、さういふ場合、どれだけ眞個の涙をかんじたかわからない。

間もなく父は床についた。と同時に私はその寺院の後繼ぎを斷つた。それは、とうてい寺院の教育をうけてゐない私のできる仕事でもなく、また、その安逸な生活に身を委ねることも不快であつたからである。後住は越前から移住してきて父は隱居をした。そして私は父の生きた遺言によつて、少なからぬ金額を受けることになつた。たとへ義母がそのうちの七八百圓を受取つてゐても、私は默つてゐた。海山に比すべき恩にたいして其位ゐは何んでもない。

私はその金額を毎月送つてもらうやうにもして、再た上京した。その朝、父は隱居所に床をしいて、いつも座つたり臥たりしながら、老衰者にありがちな窓冊な眸を送つてゐた。いつも兩手を膝の上に組んで置いて、見えない目をぱちぱちやりながらゐた。

「また東京へ行くのか。こんど[illegible]きて、お前にあへない

かもしれん。もう、しばらく居たらどうか。」

などと言はれた。しかし私はたとへ半年が一ト月でも東京を留守にするといふことが、自分の仕事を遅らしめるやうな氣がした。みな東京で仕事をしてゐることを考へると、一刻でも離れて居ればそれだけ、忘られてゆくやうな不安を感じた。それに、やつと少しづつ認められて行つた自分の地位を今ここ二三年に叩きあげなければならないといふ焦燥した心持ちになつてゐた。

「すぐにでも歸れるんですから、こんどは是非やらして下さい。今がいちばん肝心なときですから。」

と言つて、老ひ衰へた餘命のない父をまで振り棄ててゆかうとする自分を憎んだ。しかし私の生涯はこれからだ。いまぐずぐずして居られないと考へた。

「ぢや行きなさい。しつかり勉強した方がよい。」と言つて

「わしのことは心配せんでいいからお前はお前の仕事をみつちりやつたらよい。」

と言つてくれた。

私はお別れのしるしにその日は湯が立たなかつたので、もう一ぺんだけと思つて、いつものやうに父をおんぶして錢湯へつれて行つた。小柄な父のからだは輕かつた。私はやせた體軀をていねいに洗つてあげると、ほくほく喜んで居られた。これが私が父のからだに觸れた最後であつた。

私はまた上京した。その寺と永久に別れるやうな心でしみじみ高い樅の樹や、繪馬堂をながめた。

私は郊外の百姓家の離れに住居をうつすと、もう一刻も遊んでゐられない氣で、讀んで讀み通した。できるだけ勉強をした。私を最も惹きつけたのはトルストイ、ドストエフスキイであつた。そのなかには、まだ自分の内にあつて猶は知ることのできない自分を知ることができた。すくなくとも胸をわななかせるやうな高い鼓動が、すぐそれらの書物から自分の胸につたはつた。私の酒はすこしづつ減ぜられ殆んど夜間それを用ゐなくとも睡眠できるほど全癒して行つた。

大正六年九月二十日、ある二三の友人と座談してゐる晩方、私はいつも豫期に顫へてゐた父の危篤の電報をとうたう受けとつた。かへると三日目に父は亡くなつた。殆んど意識といふもののない父は、それでも私のかへつたことを誰かが聲高に告げると、何やら口のうちに呟やきながら、からだをもがくやうにせられた。

「東京からも歸つて來ましたよ。ほら、ここに居りますよ。」

と、これもやはり急いでやつて來た姉が、父の手を私の手に

ふれさせた。

「む、む、む、……む、む。」

と何か口でつぶやきながら、骨立つた手がひいやりと握られた。

私はその蒼白な死の瞬間にある父の顔を凝然と眺めた。それは一つの彫刻のやうに削り取られた頰の暗みや、嶮い鼻などが非常な靜かさでじつと枕の上で昏睡の永い時をきざむやうに、ときどき、くちびるがひりひり顫へた。

私は姉をかへり見た。いまでは卅を超えた彼女は、ゆつくりと白くまるまると肥つてゐて、眉と目の間に、むかしのやうな懷かしげなほくろが胡麻粒のやうに、愛嬌げに小さくのこつてゐた。

「こんどは駄目らしいね。姉さんはいつ來たんです。」

といふと、彼女はすぐ膝をすりよせて、ひくい聲で囁くやうにして、(私はそのとき今もむかしも姉の小聲で秘やかにささやくのに變りないことを感じた。)

「昨日來たの。今夜あぶないかもしれないね。――お前にも四五年會はないでゐましたね。」

「いつもお金ばかりせびつて濟みませんでした。つい苦しいもんだから……。」

と私はきまり惡く赤くなつていふと、姉はおさへるやうにして

「もつとね、出來ればよかつたんですが餘處にゐるとさうはいかない時があるんですよ。ごめんなさいね。」

と持前のしんみりといふ。白い額にいつとなく皺がよれこんで、よく働いた手は節高くなつて見えた。然して

「このごろは都合がいいらしいのね、ちつとも手紙がこないから……。」

とすこし皮肉に微笑した。

「いやどうも濟みません。書かうと思ひながらつい御無沙汰してしまふんです。」

「おたがひ達者でゐればいいんだからね。」

と彼女はおちついていふ。苦しい時は矢のやうに手紙を出しておいて、このごろになつて出さなくなつた手紙を自分ながらおかしく感じた。

「姉さん。お孝さんといふ子がゐたね。ほらお寺へよく來た子で……」

といふと姉は考へるやうにして

「あお孝さんはね。もう子供が五つにもなるのがゐるんですよ。お役人のとこへお嫁入りしたの。」

「そう・……。」

　と私は小ちゃい顔を思ひ出した。ぱつと咲いたやうな賑やかな顔立ちを少しづつ描き出した。

「お前とは仲よしだつたね。」

　と姉も若いころを考へるやうにした。

　二十三日の朝、父は水のやうに靜かに目を落した。呼吸が喉にからまつたのが終りであつた。私だちはみな手を合せた。夜が明けた。

　葬式の日は雨であつた。二人の父をもつた私は再度白無垢の裝束で野邊のお供をした。

　——父は越中の國の寶集寺といふ漁村に生れ、六歳で僧侶になつた。生れながらの美しい容貌は、この寺にきてからもよく若いときはつつましい浮名をも立たせた。

「ほんとにお美しい方でございましたよ。紫のおげさなどをおかけになつて、本堂へおあがりになりますとね。」

と七十で農學士のむすこさんを持つてゐる傘(からかさ)屋のおばあさんは私を見ると、いつも、さう言ひ言ひした。

　旬日ならずして私は姉や義母に別れた。私の「幼年時代」のほんとの母のことをあちこちで搜すと、みなもう亡くなられたらうと言つて、あまり知るものがなかつた。せめて自分の生れた家でも見やうと、れいの果樹園にかこまれた町へ行つた。そこには、むかしながらの重い嚴大な門構えがあつて、その臺石に二寸ばかりの時無草の青いのに雑つて、苔が又た一面に石のおもてをつつんでゐた格子の方に七つばかりの女の子が、ぼんやり此方を向いて佇つてゐた。それは父の弟さんの娘だ。——庭の方を見ると、秋晩い柿の未實りがあかあかと斑らに葉の落ちた枝のさきに採みついて、あるかないかの風のまにまに眠さうに揺れてゐた。それを見てゐると、曇つた空からでも來るのかしんとした水のやうな靜かさが胸をおちつかせて來た。私はじつと耳の奥の方で、母の膝にねむりながら聞いたかカチカチいふ時計の音を思ひ出した。そのセコンドを一つ二つ三つと算へながら眠つたことも思ひ出した。

　あの父がゐなかつたら私はどうなつてゐるか分らないのだ。私はもう父が見ることができなかつた。

　お寺にも別れた。もう後住の若い僧侶があちこちの重い壁を拔いて、風通しのよい明るい室ばかりにしたのを眺めながら、よごれた黒い帽子をとつて、本堂に向つて禮拜した。そして車をいそがした。……間もなく私は上京した。

……………………

　私はとうとう自叙傳小説をかき終へた。比較的長篇であるこれらの小説を發表し得たのはみな瀧田氏の激勵と好意とである。いつも詩壇の一隅に無名でゐた私にとつて花やかすぎる此舞臺に値しないことを恥ぢる前に私の肩をもつて突き出すやうにして貰つた瀧田氏に感謝します。——本篇は主として小説のたてとよこの聯絡をとるために奥書として發表することにしました。瀧川さんからのお話もあつたからです。

# 銀座街頭のトルストイ

## ——人はどれだけの商品を要するか——

井箆節三

（一）

それは昨年の九月十日、私には三十三回目の誕生日であつた。例年ならば家庭で祝盃を擧げるのであつたが、私は其年の六月に目的もない旅行に出て以來、いまだに孤獨な旅人であつた。木曾の郷里から京都までは、妻子を携帶したのであるが、間もなく彼等を其處に殘し、朝鮮、滿洲、北京、上海を經て長崎へ出やうといふ、それも漫然たる豫定の下に、馬關から關門海峽を航海して、七月一日に京城に着いた。

京城では松霽洞だとか、黄錬[illegible]とか、其外何々洞、何々洞といふ、土饅頭を並べたやうな朝鮮人街の、頽廢した部落生活を見歩くのが、私には甚だ快いものであつたが、それにも私は二日か三日で飽きた。私は毎日ホテルで朝食を終へると、種々樣々なタバコをポケットに押込んで、朝鮮銀行の正面のレストランの二階へ上つて、ボンヤリ路上を眺めて居た。

毎日打續く好晴に、ポプラの葉はうなだれて、青白い塵埃をひらめかし、不器用な朝鮮烏——鵲が、キシキシと亡國的な聲を放つて飛び交す。葬式の奏樂かと想つたのは、朝鮮芝居の樂隊であつた。私は丁度一週間、此の喫烟者の天國（スモーカスパラダイス）で、倦怠（アンニュイ）を樂しんで居たのであるが、私は又もや此の倦怠にも飽きた。さればとて、これから鴨緑江を渡つて、その向ふへ行かうといふ興味も醒め果てたので、十日目に再び關門海峽を渡り、下ノ關で山陽ホテルに泊つた。

私がホテルの玄關に立つたとき、一名の老外國人が、私よりも數歩早く、ホテルの二階へ上つて行つた。その頭髮の格好、兩肩の輪廓、大きな耳朶、それから右の眉毛の一端が顴骨を越えて垂れた具合、どうしても寫眞で見馴れたトルストイである。

「おや」と私は思つたが、其のうちに番頭が私を一室に案内した。私は給仕に向つて、若しや此のホテルにトルストイが泊つて居るのではないかと思つたが、何の躊躇なく[illegible]る

とを。トルストイは一九一〇年の十一月十日に、ヤスヤナポリヤナから家出して、アスタポオウオといふ寒驛で、赤く塗つた百姓の小屋で死んだ。さうして其時遺言して、「お前達が世話をしなければならない人間は、世間に無數に居るではないか、何故私一人のために深切を盡すのか」といつたのだ。

（二）

翌日私は佐賀へ行つて、近頃アメリカの留學から歸つて、そこの郊外に新居を構へた、友人夫妻を訪問した。七月の十五、十六の兩日には、長崎名物の精靈流しがあるから、さうして札幌生れの新妻にも見せたいから、一緒に長崎へ行かうではないか、と友人は勸めたが、私はああいふものは生來嫌ひです、殊に近頃は頭を惡くして居ますからと斷つて、一週間を友人の許で送つた。

或日の夕方、私が佐賀の停車場から友人の宅へトボトボ歸つて來る途中で、私は一人の老婆に行會つた。此の老婆には私は曾て一度出會つたことがある。さうして今度再び出會つた時には、私が何時死ぬかを豫言する約束であつた。私は今その老婆に再び行會つたのである。

「お婆さん、とう／＼逢つてしまつたね。」

「とう／＼逢ひましたね。」

……

老婆は斯う言つて始めて腰を伸ばして私を視た。――それまでは私を視なかつたのに、私に行會つたことは意識して居たのであらう。――如何にも氣味の惡い容貌である。

「では私は一體何時死ぬといふのだね。」

「三日が間にね。」

「三日が間？　今日、明日、明後日かね。」

「昨日と今日と明日さね。」

勿論それは惡夢であつた。私は友人夫妻と同じ蚊帳の中に橫はつて居た。

「奥さん、奥さん、早く、明りを點して頂戴。」

「おお、恐い。どう遊ばして。」

私はランプを點じて貰つてからも、尚ほ注意深く室内の隅々を見回しながら、惡夢の次第を物語つた。

「大分頭を惡くしてますね。」

全く私は頭を惡くして居た。一週間後、私は祭りの果てた後の長崎を訪問した。そこでは最初に北岸の稲澤公園を訪問した。公園といつても、實は遊廓の廢趾である。日露戰爭以來ロシヤの外人が來なくなつて、今でも多少の花魁は居るとのことであるが、或る宏壯な女郎屋の玄關では、それが雞の塒になつて、今しも一羽の牝雞は、式臺の上で出產の歡聲を擧げて居た。

それから私は甃の多い長崎の市街を散歩して、「指紋」の主人公が殺人の嫌疑を受けた阿片窟は此邊かと想像せられる十人町を通り、西洋人の洋食店で晝食するために、南山手町の方へ歩いて行つた。すると如何だらう、西洋人街の或る坂道にさしかゝると、私の前を十間許りの所に、山陽ホテルで瞥見したと同じ老人が、やはり背中を私に見せて歩いて居る。私はスタスタと駈出したが、此時老人は右手の横町へ外れた。その横町は二丁許りで漸く次の横町へ出るのであつたが、もう此の老人の姿は見えなかつた。私は暫く兩側の立派な洋館を疑ひ深く眺めて居たが、ふと我に返つて、帽子を脱いで頭を敲いた。

**晝食を終へて踵を返すと、**東濱町の活動寫眞館では、世界を巡業する猛獸使ひが掛かつて居て、惡どいペンキ塗の看板が、炎天にギラギラと輝いて居る。私は其の强い刺戟で頭がグラグラして、かう熱くてはいけない、よし、それでは何處か涼しいところへ行かうと思つたのであらう、直ぐに停車場へ歸つて輕井澤までの切符を買つた。

（三）

妻子を殘した京都を素通りにして、輕井澤へ着くと、私は特に萬平に泊つた。此のホテルには外國人は百名以上も居たが、日本人では私の外には、アメリカ歸りの女洋畫師永川若葉孃が一人居た。私は暫く孤獨を嘗んだが、しかし、もう八月の末になると、ネルとセルとを重ねなければならない。それで私も八月一杯で其處を切揚げ、九月の初めに東京へ來て、丸の内の知人の事務所の一室に起臥し、朝飯は東京驛の精養軒、晩餐は村井の地下室で認めることとした。——かういふ場合に私は三十三度目の誕生日を迎へたのである。

尤も私は誕生日を祝ふことに、格別の意味を發見しなかつたが、唯だ一年に一回だけ、此の機會を利用して、氣に入つた食事がしたかつたのである。私は一年に少くとも二回以上食事をするが、一回でも私の理想に適つたものはない。私の氣に入つた食卓と食物と飲物と、さうして成るべくは私の氣に入つた建物又は食堂で、氣に入つた給仕人を持つ。そんなことは一回でも有りはしない。

私は少し早目に事務所を出掛けて、とにかく日本橋の通りに出た。あの村井のゴタゴタ混雜した食堂は勿論いやだが、さればとて田舍者の私は、實際東京の何處かに私の注文するやうな食堂があるのかを知らない。いや、そんなものは絕對に無いに相違ない。何故なれば、私は食室でも食器でも、食物でも飲物でも、すべて私自身が註文したものであつて欲しい。無論私自身の氣に入つたものであれば、私自身が造つたものでなくても。

一向差閊ないのであるが、不幸にして私自身の造らないものには私自身の氣に入るものが少い。

ウイリアム・モオルリスの格言に、「君等の家屋には無用なもの又は不美なものを一物も置くな」（「生活美論」）とあるが、私のやうな貧乏者には、それは無理な注文である。私の家に必用なものと美的なものとばかり置かうとすれば、どんなに大金が私に必要であらう。私は先づ建築美術から一應研究して、理想的な家屋を建築し、之に相應した庭園を設け、家財什器に至るまで悉く自身で意匠しなければならない。

今日商品は世界に溢れて居るが、あの中に眞に私の氣に入つたものが果してどれだけあるだらうか。あれ以外に眞に私の氣に入つたものを生産する餘地は無いのだらうか。モオルリスは言つて居る、「今日の美術は悉く死んで居る、近代文明の營利主義のために、悉く殺されて居る」（「民衆藝術論」）と。實際今日の商人は、吾々に商品を供給（ファニッシ）するのではなく押付（ポウシ）けるのである。

「今日の人間は大抵商人の暗示に掛かつて居る。一體人間は心に思ふことは實行に現はすものである。私が歩くといふことを考へると、留るといふことを考へるまでには、必ず歩き出すものである。」（ウオルタア・デイル・スコット「廣告心理學」）。ところが道路を歩いても、電車に乗つても、「之を飲め」とか「之に限る」とかいふ廣告ばかりである。たへとは廣告しないにしても、今日では商品自身が寧ろ廣告である。私が需要しない（形式の）ものを、商人は「さあお買ひなさい」と提供する。或は番頭の告白に曰く、お客に二足の靴――十二圓のと十五圓のと――を示して、お客が彼此と見較べて居るとき、十五圓のを取上げて、「それではこちらに？」と言ひながら、布巾で拭ひ始めると、大抵のお客は陥落しますよ。しかし私に言はせると、敢て番頭の僞瞞を待つまでもない、今日の商品自身が吾々の眞の要求を滿足させないことは、遂に五十歩百歩である。吾々が容易に商人の暗示を受入れるのは、吾々の要求を切實ならしめるやうな、吾々の選擇を嚴密ならしめるやうな、商品が皆無だからである。吾々は唯だ單により多く氣に入らないものから、より少く氣に入らないものを選ぶだけのことで、眞に氣に入つたものと氣に入らないものとを選ばうとしても、其樣な商品は殆ど絶無である。

（四）

私は鴻の巣へとも思つたが、以前に食傷新道に在つた頃の鴻の巣を思ひ出すと、それが頻りに懐かしくて、今度の建物が厭になつた。

「ああ、たとへば樂燒の食器でも善いから、せめて一年に一度

だけは、少くとも自身の意匠の加はつた食事がして見たい。食器も亦た生涯の伴侶ではないか。」

モオルリスが言つて居る、「私は何も器械を全廢せよといふのではない、今日手工で生產するものを器械で生產するもよからう、また今日器械で生產するものを手工で生產するもよからう、要するに人間は器械の奴隷にならないで、器械の主人にならなくてはならない。」(「美術と其の生產者」)。ところが今日では大抵の品物を器械がコテコテ製造して、さあ、之を使へ、著ろ、食へ、飲めと命令する。さうして生產者と販賣者とは、唯だ此の壓制者の助手たるに過ぎない。

器械の壓制から免がれて、奴隷の代りに主人になるには、人間は一體どうしたら善いのだ。さしづめ問題は晩餐だが、まづ食堂には上等のホテル、又は割烹店の一室を選擇して我慢しやう。多分電燈の笠からして氣に入るまいが、それでも貴族や富豪の邸宅の鼻持のならない低級な愚劣な趣味ほどの反感は呼起さないであらう。それから食器はどうするか。其家で所有する一切の什器を持出させて、其中からより少く氣に入らないものを選拔するか。しかし私は成金ではなかつた。成金ならば一層始末がよからう。彼等には唯だ贅澤なものでさへあれば、實に何でも善いのだから。ところがモオルリスは言つて居る「美術とは必ずしも繪畫彫刻を謂ふのではない、また決して奇玩珍寶を謂ふのではない、美術は有用でさうして美的でなくてはならない、眞の美術は吾々の日常生活に必要缺くべからざる器皿――皿とか匙とかいふものにある。私は今一度繰返して言ふが、美術の最大仇敵は贅澤である、美術は贅澤の氛圍氣内には生存することが出來ない。」(「生活美論」)

それでは一體どうしたら善いのだ。「どんなに下等なものでも美術といふからには、その製作に從事する勞働者が愉快で趣味でなくてはならない。しかるに此の愉快と趣味とを實現するには、職人が自由の精神を以て勞働に從事することが必要である。しかるに今日の社會では、職人が此事を自覺して、自己及び隣人のために、氣に入つた品物を生產しやうとしても、生產組織が之を許さない。また一般公衆が此種の職人から此種の品物を供給させやうとしても、それは出來ないことである。」(「民衆藝術論」)

「紳士職人」即ち美術家が、たとへば貴族と富者との奴僕でないにしても、また彼等が吾々貧民に施與するやうな製作は、出來損ひの美術ではないにしても、出來近代人たる吾々は、個性の自覺が強烈であるから、他人の個性だけでは滿足することが出來ない。森村男爵の陶器工場などでは、一年でなく二年で一

に一日位ひ、吾々のために工場を閉鎖して、吾々の無器用な、しかし氣儘な、さうして眞面目な藝術慾と勞働慾と創造慾とを滿足させてはくれないかな。

（五）

一體私は胃腑が空虚になると、益々神經が昂奮して、彼處の食堂が氣に入らぬとか、彼家の女中はいやだとか、極端に好惡の感情が過敏になつて、自分では何を食べて善いのか分らなくなり、結局自分の家に歸つて、有り合せのもので食事するか、或は友人の許へ訪ねて行つて、友人の好むものを注文して貰ふ。つまり百歩に代ふるに五十歩を以てして、それで漸く滿足するのである。

其日も日本橋通りの横町々々を、縱横に彷徨する間に、私は充分ヒステリカルになつた。結局大森の友人を訪問しやうと、京橋を渡つて銀座に出で、それから新橋にさしかゝると、おや橋の向うからあの老人が來る。その鋭い眼光と、その小鼻の太い鼻とを見ると、私にはどうしてもトルストイである。

「御免なさい、もしやあなたは伯爵トルストイではないでせうか。」

「さうして一體君は誰か。」老人は暫く私の表情を讀んだ後で反問した。

「さうでしたら、私はあなたを最も崇拜する日本人の一人ですよ。さうして唯今私があなたの爲に何か役に立つならば、どんなにか幸福でせう。」

「君はさう考へてくれるか。有難う。しかし君はこれからどうしやうとするのだ。」

「今日は私の誕生日ですから、何處かで愉快な晩餐をしやうと存じます。」

「おお、今日は私の誕生日でもある。私は日本へ來て最初に知合になつた友人と、さうして私自身とのために、双方の誕生日を祝福することを悦ぶ。君は私を何處へでも案内するであらう」

さうだ、トルストイはロシア暦の八月二十八日、即ち九月十日の生れであつた。それに私は馬關と長崎とでの再度の幻想が錯覺でなかつたことを發見して、急に元氣づいて雀躍しながら勢よく踵をもと來た方へ向した。しかし數歩歩くとトルストイは、或る大きな陶器店の前で立停つた。

「何かお氣に入つた品物が見當りましたか。どうでせう、こんなに澤山な陶器がありますが、その中であなたのお氣に入るものが一つでもあるでせうか。」

「いや」、聖人は長髯と共に首を振つた。「私は唯だこんなに澤山な陶器を一度に見るのが珍らしいのだ。」

「ところが私にはこんなに澤山な商品を見るのが寧ろ苦痛です。勿論陶器とは限りません、すべての商品がさうなのです。」

「それは凡べての商品が、資本主義的營利主義の產物で、それが生產せられるためには、無數の賃銀奴隷が血と涙と汗とを灑いだ、――すべての商品は近代的、社會的罪惡の結晶だからと言ふのか。」

「必ずしもさういふ理由からではありません。つまり趣味の上からです。產めよ、殖えよ、蔓れよ。今日有らゆる商品は器械の呪文から生れるのです。器械が創造を獨占して、人間が創造慾を發揮することを許さないのです。そら、此店にはこんなに澤山な繪ハガキを飾つて居るでせう。此中に一枚でも吾々の愛好すべきものがあるでせうか。私自身としては、一度でも繪ハガキを使つたことがありません。拙いですけれど、私は官製のに自分のペンで認めますよ。東洋で畫よりも書を一層貴ぶのは書は拙くとも誰にでも創造することが出來るからではないでせうか。ウイリアム・モオルリスやアナトオル・フランスの理想社會では、人間は餘りペンを用ひない、早取印刷や蓄音印刷を利用するといひますが、此點に於てあなたは彼等に一致しますか。私がミシキン公爵を好む一つの理由は、彼が秀でた能筆であつたことです。おお、私は大變なおしやべりですね。」

## （六）

しかし老人は何故か沈默を守つて居るので、私は尙も饒舌を續けた。

「尤も戰爭以來政府は段々とハガキの紙質を惡くしつゝあります。近頃では殆ど薄いボオル紙のやうなものを供給します。さうして會々何事か特別な事件の有る場合に限つて、恐ろしく贅澤な紙質を選ぶのです。勿論政府の記念ハガキに醜い藝術でないものは一枚でもありませんが、元來藝術を日用以外特別の場合に限るのが今日の迷妄です。唯だ吾々が政府に感謝するのは政府がハガキの供給を獨占しないで、私製ハガキを許すことです。實際、すべての商品でなくとも、少くとも吾々の日用する品物だけは、吾々自身の私製を許されたいのです。それには之等の品物を製造するための工場と、それから其の製造に必要な知識を供給するための學校とを、吾々に開放しなければなりません。あなたは社會改革の根本要件として、各人は自分のため他人を働かせないこと、自分のためには自分で働くこと、自分の怠惰と贅澤とのために他人を奴隷にしてはならないことを主張しますね。しかし私自身としては、怠惰も贅澤も好きないのです。寧ろ自身に必要な品物を他人に生產させるのは苦痛です。どうして吾々が器械と奴隷との生產した品物で滿足します

か。唯だ今日の社會では、一切の品物の生産を私以外の誰かゞ壟斷して居ります。住む家も、着る服も、みな誰かゞ押付けるのです。「私」といへば結局私の肉體だけですが、それすら食ふ物まで誰かが押つけるものですから、即ち私なるものは結局無いも同じことです。現に私は今日私の誕生日を祝ふために、せめて一年に一回だけ、私の氣に入つた食事をしやうと思ふのですが、此の目的のために私を滿足させるためには、一片のパンを得ることすら困難です。私が苦心すればするほど、その困難は益々大きくなります。イザヤ書(第五十五章)に、何故糧にもならぬものゝために金を出すや、飽くこと得ざるもののために身を勞するやとありますが、それでは私はどうしたら善いのでせう。日本にも工場は澤山ありますが、私自身の必用なものだけを私自身が生産するために、私自身が勞働することを許すやうな、工場が一つでもあるでせうか。犬猫は金錢を支拂ふことなしに、食卓から落ちる食物の屑片を、あのやうに滿足して食ひますが、人間の多數は終日勞働した結果を支拂つても、遂にあのやうな滿足を買ふことは出來ないのです。若し神の國は飲食にあらずといふならば、それではあなたが生活のためには各自額に汗して勞働せよと、勞働を讃美するのは如何いふ意味です。」

## (七)

「神の國は飲食にあらず。確に神の國は飲食ではない。神の國は勞働である、さうして科學と藝術とである。飲食のために必要なのは、勞働の一小部分に過ぎない。勞働の殘餘の部分は科學と藝術とのためである。しかし幸福を勞働以外に求めるのと科學を良心以外に求めるのと、藝術を日用以外に求めるのとは、人間の――近代人の三大迷妄である。人間が一日八時間眠り、他の八時間を肉體的勞働に費すとしても、更に他の八時間がある。私は自分の經驗によつて、一日五時間を精神的勞働に役しても、莫大な仕事が出來ることを知つた。君は此の東京の市街を見る。此の巨大な都會が果してどれだけ藝術であるか、人間が自然――地球を一箇の藝術として完成するためには、人間は少くとも今日の如く非藝術的に自然を隅々まで破壞することを已めなくてはならない。人間が唯だ此の事をさへ悟つたならば、彼等は一日三時間を衣食のために費すことすら惜むであらう。私自身の定義に從へば、科學とは人間の理性的活動、藝術とは理性的活動の表現である。科學と藝術とは人間のために飲食と衣食との如く、否、それ以上に必要である。それだからソロンや孔子の學説は科學である。モオゼや基督の教訓は科學である。ダヰデの詩篇や教會の禮拜は藝術である、昆蟲の分類、銀河の

分析、水精の歴史畫、交響樂の作曲、そんな有つても無くても善いものは、科學でもなく藝術でもない。科學とは感情を理性に移すこと、藝術とは理性を感情に移すことだ。即ち科學と藝術とは人間の貪慾を淨化して、獸性を解脱するためのものだ。衣食のための勞働は即ち獸性のためであるが、これすら人間は成るべくだけ、科學的且つ藝術的ならしめなければならない。しからば科學と藝術とは、專門の科學者と藝術家とによつて、獨占せらるべきものではない。科學と藝術とは人民に奉仕すべきものであるのに、科學者と藝術家とは――即ち知識階級（インテリゲンチア）は、彼等が特別に選ばれた者であるかの如く迷想し、人民をして彼等に奉仕させる。彼等は此の口實の下に、無數の人民の勞働を踏台にして、無意味な怠惰に耽るのだ。彼等は民衆が彼等のために勞働し、彼等の横著を許すことによつて、天文學や航海術や、汽車や汽船や、鐵橋や隧道や、電氣や蒸氣や、寫眞術や書音器や、望遠鏡や顯微鏡や、コロロホルムや炭酸や、――おお、彼等は如何に無數の自巳辯護の材料を持つて居るか――其他種々様々なものが發明せられたといふ。この進歩は實に驚くべきものである。しかし此の進歩は人民を幸福にしたか。殊に惡いことには正直に勞働する部分の人民には。すべて此等の進歩は寧ろ有害である。彼等は歩くことなしに鐵道を利用することを得る代りに、鐵道の持主の奴隷となつた。器械が彼等の手工を奪つた結果、彼等は安物のキヤラコを買ふことが出來る代りに生涯器械の奴隷から免かれることが出來ない。種々様々な交通機關と通信機關とは、營利主義（カムマアシアリズム）と軍國主義（ミリタリズム）との存在しない社會に、果してどれだけ必要であるか。正直に勞働する人民は、極めて稀に電信を利用する。さうして彼等の不意に乘じて、奸商は電信で買占をする。人民が電信に感謝すべき理由と電信を咒咀すべき理由とは孰れが多いか。大砲や水雷は如何であるか。科學者は原形質の發見や分光器的分析のためには、熱心に從事するが、斧の使ひ方やパン粉の捏ね方には、殆ど全く冷淡である。原始の人間は種々の家畜を造つた。近代の科學は一匹の野獸でも馴育したか。植物學も非常に發達した。しかしエチプトやヘブライの時代から、人民の營養のために加へられた植物は、單だチャガタラ薯だけではないか。さうして其のチャガタラ薯でさへ、科學が發明したものではない。醫術が進歩して醫療器械が複雜になるために、人民は益々治療の手段から遠かるではないか。科學は小學教師の恩惠をすら次第に貧民から奪はうとするではないか。地球儀だとか細珍丹だとかを陳列した學校が貧民に必要であるか。音樂者は其の偉大な思想を表現するためには白いネキタイをした特別の人間を二百人も集めた

ければならない。美術はアトリエやモデルが無くては、一本の大根も畫くことが出來ない。彼等は繪畫や音樂を、人民には可否を判斷することさへ出來ないものにして、人民には畫くことも歌ふことも出來なくした。畫家に安價な繪を畫けといひ、音樂家に手風琴をひいて子守唄を歌へといへば、彼等は彼等を侮辱したといふ。――知識階級は人民が彼等に衣食させる代りに、人民に精神的食糧を供給すると約束しながら、彼等は此の約束を破毀してしまつた。」

（八）

「しかし其の窮約の原因は……」

「資本制度に在る、資本階級が惡いといふのだらう。けれども二人の人間の間に何か惡い事が有る場合には、惡事の原因は双方に在る。ロシアの跨にモスクワは蒔きもせず刈りもせずして富裕であるといふが、實際田舍は有らゆる富の源であるのに貧乏である。穀物でも材料でも牛馬でも悉く田舍で出來る。ところが田舍の生產は都會の非耕作者のために吸集せられる。田舍の貧民は勞働の馬鹿々々しいことを發見して、勞働を捨てゝ贅澤の仲間に加はるゝために、田舍から都會へ飛出して來る、彼等の幾パセントだけは成功して、資本階級や知識階級に「向上」する。しかし多數は一層貧民になる。それでも贅澤は斷念しない。始終[illegible]の刺戟のために[illegible]廣告、新聞、雜誌、さういふものが發達して、田舍に取殘された人民にも、しきりに贅澤が鼓吹せられる。古來奴隷制度には腕力の奴隷と土地の奴隷と金錢の奴隷との三種があるが、今日では此の三種が竝び行はれて居る。此の奴隷制度から解放せられるためには、贅澤を放棄することが第一であるのに、富者も貧者も贅澤をやめない。」

日本なぞでも、近頃では田舍に贅澤が普及しますよ。私なぞでも東京に居ると一度も受取ることのない三越の買物案內を、田舍に居ると頻繁に受取ります。私が其のカタログを見て驚くと、質朴な隣人は怪しみます。實際都會ではあのやうな高價な品物を買ふ人間は、そんなに多勢あるのではないといふことを田舍の人々に理會させることは困難ですよ。しかし私は貧民や職工が贅澤するのを、そんなに惡事とは考へません。寧ろ私には歡迎すべきことです。資本家は勞働時間を短縮したり、勞働賃銀を增加すると、勞働者が怠惰で贅澤になると申しますが、さうして怠惰と贅澤とは、勿論惡いことですから、私もそれを憎みますが、しかし彼等は贅澤することによつて、私達と同一の水準に到達します。どうせ奴隷制度から免かれることが出來ないならば、知識階級は寧ろ勞働階級に「階沒」することこそ幸福

です。知識階級は陷沒によつて、勞働階級は贅澤によつて、双方から同一の水準に到達し、そこで握手するのも愉快でせう。」

「けれども贅澤といふものは、決して人間を貶しませない。贅澤は自己を他人から區別させる手段である、贅澤の目的は自己だけを尊く見せるにある。あの馬車や自動車を見給へ。それが贅澤に構造せらるれば、せらるるほど、內側を成るべく狹くして、一人しか乘ることが出來ないやうにする。――恰も個人主義の象徵であるかのやうに。――君はどう思ふ、日本のやうな暖國にも、このやうに夥しい毛皮が實際必要だと思ふか。」

「勿論私は一度もそんなに考へたことはありません。」或る大きな毛皮店の前へ來たときに、私はかう答へた。「しかしメレジコフスキイは想像しました。あなたは多分革製の枕を好むでせうと。」

「その想像は誤つてゐる。君はしかし此の日本の履物を何と思ふか。」

「それはゲタです。植物性であるだけに、動物性の靴よりも、多少あなたの理想に近いでせう。唯だ勞働のためにいふならば、寧ろ革靴に劣るでせう。また藝術の立場から言へは、私は寧ろあの軒下に積重ねた、まだ加工しない原料とそして髮と鬚とを聯想しますよ。」

「勞働のためにも藝術のためにも、最も善いのは跣足である。唯だ今日では都會でも田舍でも、道路は神聖な跣足に適當しない。」

（九）

「あなたは此の華奢な織物を憎みますか、さて、此の日本では一番美麗な街衢の背後には、ゲイシヤ卽ち寶バが巢を食つて居るのです。御免なさい、尾籠な言葉を使ひましたが、しかしあなたの言葉を信用して、「働らくことなしに生きることを敎へられた」婦人といへば、貴婦人と誤解せられるかも知れませんからね。その貴婦人ではなくて而も上流社會の言葉に堪能な婦人が卽ち之等の織物の顧客です。ですからあのやうにも婀娜なのです。勿論正當な勞働とは緣遠いものです。」

「さうか。しかし今日では大抵の織物が正直な勞働とは緣遠いではないか。」

「さうです。日本でも近頃では勞働問題や物價問題が喧しいのですが、そら御覽なさい、あの商店のガラスが破損して居るのは、つい先月全國に米騷動が起つたとき、群衆が投石した結果です。それにも拘はらず、勞働のために適當な品物を安價に生產するといふことは、未だ誰も考へないやうです。帽子から下駄に至るまで、すべてが非勞働的です。元來日本の服裝に示顯

時代の貴族や封建時代の大名の衣裳から發達したものです。ところが今日では其上にコオトだとかヴエルだとかいふものを附加えて、剣來の非勞働的を以て上塗して居るのです。無論之が爲に服裝の美は少しも增さない、唯だ寄せられるばかりですが。」

此時二人は銀座の北側を歩き盡したので、電車線路を横切つて南側に移り、またもや新橋の方向へ歩いた。

「しかし贅澤といふ意味には、個性を發揮するといふ意味もあるのではないでせうか。」

「飛んでもない。餘りに艶美な花は寧ろ不美である。花でも白いのが第一、紫が第二、赤が第三とせられて居る。個性は平等と撞著するものではない。自己の個性を尊ぶ者は、隣人の個性をも尊ばなければならない。贅澤は明かに此の精神と相反する。すべての個性は絶對だから、眞に自他の個性を尊重する人間は、どうして自他の間に高下の區別を設けることが出來るか。しかるに富者は同一の食卓で他人と食事を共にすることを恥ぢるではないか。彼等は其の爲に生ずる孤獨と寂寞とを免かれるために、艶夫な妻妾と贅澤な料理とを必要とするのだ。彼等が飢渇を免かれるためには、之等のものは全然無用である。」

「しかし食物でも衣服でも、美的でなくてはならないとは、先刻あなたのお說でした」

一その意味にか・である

のは、成るべく簡素なのが即ち美的である。」

（一〇）

「一體人間にはどれだけの商品が實際必要でせうか。人間にはどれだけの土地が必要かといふ質問に對しては、あなたは地主のパホムに答へさせましたね。パホムといふ水呑百姓が少しばかりの土地を買入れたのを端緒に、だん〳〵地主根性を增長させて、遂にはアシユカル民族の部落へ行つて、酋長に賄賂を贈つて、一日に歩いただけの土地を買ふ。餘り慾張つて歩く間に太陽は西の山に入つてしまつた。パホムは狼狽して出發した地點に駈著くと、同時に一命を落してしまつた。下男が屍骸を埋めて見ると、人間一人に必要な土地は、精々長さ六呎でした。商品に就いても同じことですか。」

「それは無論同じことだ。土地でも商品でも、馬鹿なイワンが王國に於ける如く、私有でも共有でもないならば、人間は誰でも必要なものだけは生產し、その以上は生產しない。それは空氣や日光を、誰でも必要なだけは必ず攝取し、その以上を攝取しないと同じことだ。此點に於てプルウドンはマアルクスよりも正しいのだ。君は多分私が分業を極力批難することを知る。誰でも人間は一樣に、食事の時刻によつて一日を四分する。即

ち朝と午前と午後と夜とである。さうして朝は全身的活動、午前は手工的活動、午後は精神的活動、夜は社交的活動、これが能力を發揮する最善の割當で、これでこそ人間は肉體的にも精神的にも、本當の幸福を享受するのだ。しかるに或人は精神的活動だけを、或人は社會的活動だけを引受け、全身的活動と手工的活動とは他人に押付けやうとする。此の不自然な分業から、勞働も怠惰も不健全になる。人間は一樣に四種の活動を兼ねなければならない。此の法則から外れる例外の場合は、單に自己が隣人のために犧牲となる場合だけだ。昔は勞働者と怠惰者との分業を辯護するために神學があつたが、今日では經濟學といふ僞科學が之に代つた。商人や地主や銀行家や工場主の罪惡は、此の僞科學によつて巧妙に辯護せられる。――共同の目的のためには分業が必要である。統合のためには分化が必要である。――コント以來此の誤想が社會科學の根柢を成して居る。彼等は之を實證科學と自稱するが、實證主義はヘエゲルの哲學――一切の實在は眞理だといふ、即ち現在社會の誤謬を是認したものである。それゆゑ彼等は今日の分業が、その背後に存在する暴力の結果であるに拘はらず、分業の淵源であるところの暴力を取除かうとはしない。彼等は病氣の結果として人體に寄生する有害な黴菌にも分業の美名を奉げるであらう。若し分業が自然であるならば、その分業を維持するために、何故暴力が必要か。經濟學者は金錢を交換の媒介、價格の標準と定義するが、苟も暴力の存在するところに、公平な交換、正當な價格は成立しない。寧ろ金錢は掠奪の媒介、壓制の標準として役立つのだ。一體共同の目的とは何であるか。紳士が十ルウブルづゝ出金して宴會を張るにも、自分の意思と相反した紳士は不平である。もし少數の人間は多數のために犧牲になるのが當然だといふならば、何故一人の汝自身は、進んで十億の同胞のために犧牲とならないか。」

（二）

「私が無抵抗主義を叫ぶのは、暴力は畢竟獸性だからである。人性から獸性を除外したのが神性である。神性は即ち理性であつて、科學は人間の理性を發揮する所以である。さうして吾々の純粹な理性は、獸性の解脫を要求する。理性の極致は獸的生命の放棄にある。釋迦でも基督でも解脫と捨身とを眞慈眞愛としたのである。自己が正義であるならば、どうして暴力に訴へる必要があるか。隣人を說得することが出來ないならば、自己の正義に缺くるところがあるからだ。そのために生命を失ふとも、それに當然の天罰である。自己の正義に缺くるところなくば、隣人を說得するだけの自信が充分であるならば、[illegible]隣人

すべき餘地もないではないか。」
「しかし私は其點に就いては、まだ多少の疑惑を持ちます。世界には親む力と爭ふ力と、この二つが相働く。マアルクスは現在の階級鬪爭で、階級鬪爭は終ると申しますが、私は其の眞理を疑ふのです。尤も私の鬪爭は永久的性質のものですが。しかしあなたの無抵抗主義とは牴觸せずして成立します。あなたは土地と資本とを社會の共有にすることを批難する。此點に於ても私は寧ろプルウドンと一致しませう。しかし、あなたが勞働階級の團結組織に反對する理由が不明です。勞働階級が團結を組織することは、必ずしも無抵抗主義の教理と背馳するものではないでせう。念のために申しますが、私は無抵抗主義には贊成しますよ。たとへば帝國主義の人々が、如何ほど私が彼等を說得しやうとして、私の全力を盡しても、頑として應じないのみならず、遂には暴力に訴へて私に帝國主義を信ぜよと言へば、私は帝國主義を信じますよ。それは私は彼等を完全に說得することの出來ないのは、畢竟私自身の思想に多少帝國主義の殘滓があるからですから、私は帝國主義を値するのです。勿論私は人間の本性を、それほど頑冥兇悪なものとは信じません。私が團結の勢力によつて、鬪爭するを已こを得ずとするのは相手が頑冥兇悪だと信ずるからではない。寧ろ其の反對です。

相手が飽くまで頑冥ならば、相手[illegible]は寧ろ其の反對だと信じますから、鬪爭も隨分有効だと考へます。何事でも優勝劣敗の法則には支配せられるでせう。此の法則を活用するには、どうしても團結が必要です。勿論その背後には正義の優越が必要ですが。私はやはりクロポオトキンの如く、生存競爭と相互扶助との双方を認めやうと思ひます。釋迦でも基督でも、またあなたでも、歷史の上では或る意味に於て或は眞の意味に於て。ナポレオン以上の鬪士です。」
「團體生活に就いては、もし動物社會に比較を求めるならば、蜜蜂の生活を選ばなければならない。即ち各人は生命をも投出して、隣人と相愛することによつて、人類共通の目的に奉仕しなければならない。しかし人類共通の目的とは、少數の人間の怠惰のために、多數が奴隷になることではない。各人が相互に尊敬することだ。財に富まずして神に富むことだ。眞正の科學によつて各人の神性を發揮すること、それから眞正の藝術によつて人間、世界を美化することだ。」

（二二）

「しかし君は多分空腹であらう。」
「不思議に私は空腹でないのです。何時しか空腹の絕頂を通過しました。」

「それでこそ君は今神聖である。胃中の一切が消化せられて、完全に肉體に吸收せられた。飢えたる者は福である。飢えたる者は食慾だといふが、飢えたる者は寡慾である。如何なる疏食にも滿足する。さうして天地に感謝することを知る。自分が空腹である前に、美食を用意せられた者は禍である。」

「しかし私は餘りおしやべりをして、少し咽が渇きました。」

「それでは玆にレストランがある。私達は一緒に食事をしやう。」

私達はカフエ・シムパシへ入つた。「君は何を注文するか。」

「私は先刻も申しました通り、自身では判斷が出來ません。私は唯だ通譯だけするでせう。」

「それでは私達はまづ冷水を注文しやう。しかし私は其前に私の手を洗はなければならない。」

私は老人が便所に行つたのを機會に、ポケツトから一本の卷莨を取出した。さうしてそれをふかしながら、カフエの中を見廻した。番台の前には數名の靑年が立つて、女給仕と戲れながら、酒精の立飮をやつて居た。彼等は何處かで夕食を終つたに相違ない。傍の食卓には料理が並べられたが、彼等は彼早食慾を滿したのであらう。ナイフをもホオクをも顧みやうとはしない。言ひ合せたやうに贅澤な而も不快な服裝と、それに相當した容貌との持主である。――しかし老人はどうしたか。私は二本目の莨に火を點けた。

「もし〱姐さん、一寸只今の老人を見て頂戴。」

此の言葉を放つと同時に、私は二本の指の間から、莨をパタリと取落した。かの遊蕩兒と女給仕とは、一齊に驚きの眼を以て私を注視して居つた。私はそのまぶしさで幻想から目醒めてふと目前の卓上を見ると、そこには一箇のガラス盃に、一杯の冷水が盛つてあつた。

## 箱根物語　親不知子不知

村松梢風

私達は鞍懸山の頂上に立つた。

頂上の眺めは、見たところ二三百坪ばかりで、そこには牛の腹のやうな円味をもつた小丘が幾つも盛り上つてゐて、羊の毛のやうに長い柔かな草が[illegible]一面に生へ、

ゐる。清らかな秋の陽ざしと、すこしひえびえするくらゐの山風が、草の[illegible]を美しく光らせては其の上に緩やかな小波を起こさせてゐる。

かぎりなく壯大な、あるひは神秘な、あるひはのどかな、さまざまの景色が私達の前後左右へ一時に開展した。脚下には廣の湖があつた。なんといふ青さだらう。私は嘗てまだこんなに青い水を見たことはない。眞靑な鏡のやうな湖が、眞に千古の秘密といふ言葉を思はせるやうな靜けさを湛へて、山と山との間を細長く北へ向つて延びてゐる。宿は直ぐ眼の下に見えた。大きな草葺きの屋根が、此處から見ると玩具の家を並べたやうに、湖の縁へごちやごちやかたまり合つてゐる。――私は驚く可く大きな富士を見た。それは湖の西にあたつて、空の中の可成り大きな領域に擴がつて、其の誇りげな偉大な姿をあらゆる物の上に耀やかしてゐた。私達が今越して來たところの山が其の前景をなしてゐた。其處には箱根竹が密生してゐた。緑そのもののやうな軟かな山の斜面が、其の中に幾つもの縞をつつむで、畫面の下部にひろびろと展がつてゐる。すこし左の端へ片寄つて兩者の間に介在してゐるのが愛鷹であつた。見るから其の山の險しさを想はせられるやうな眞黑い色が、強く私の眼を刺戟した。

私に眼界を[illegible]

南には相模灘が見えた。天城の連峯が蜒々と其の間を走つてゐて、伊豆半島の片側だけを私に見せて呉れた。三島や沼津邊の町が淡い霞の底から微かに光つてゐた。大島は裾の方にだけ一刷毛の白い雲を掛けて、鯨のやうな巨軀をフウハリ空に浮かべてゐた。それからずつと手前に見える初島といふ小さな島には荒い濤が打ち寄せて、紺碧の海と陸との境目に眞白い輪郭を作つてゐた。

絶大な自然の力が、私を歡喜の頂點へ導いた。私は子供のやうにきやつきやつと聲をあげて其處ら中とんで歩いた。しまひにそれでも足りなくなると私は草の上に仰向きにぶつ倒れて、駄々つ兒のやうに身悶へをした。と、私の體は自然に動き出して轉てぐるぐる廻轉し始めた。青い空や近くの山の形が幾度びとなく私の眼に寫つては消えた。そして轉がるだけ轉がつてしまふと、一ばん最後に私の體は丘の下の平らな處へ行つて靜かに停つた。――其處でも矢張り同じやうに柔かな彈力を有つた敷物が私を待つてゐた。眩しく明るい太陽が私の體を温めて呉れた。

K君は、大きな寫眞機を載せた三脚器を方々へ擔ぎ廻して、黑い布を冠つては覗き込んでゐる。それがいかにも忙しさうに

見える。これほどの景色を眼の前に控へながら一枚でも餘計カメラに納めて行かないのは損だといつた風である。時々シヤツターの音が澄んだ空氣の中に聞こえた。

仁右衛門が遣つて來た。それは私達の荷物を背負はせて山案内に伴れて來たおやぢだ。彼は私の側へ來て、淺黄の腿引をはいた足を長々と投げ出して坐つた。私が莨を出して遣ると、彼はうまさうにそれを喫んだ。

彼は昔雲介をした男であつたから、いろんな面白い話を澤山識つてゐた。彼はそれを私に聞かせて呉れた。豊臣秀吉が小田原を攻めに來た時、箱根權現が北條方へ加勢に現はれて双子山の上から石を落して豊臣勢を喰い止めたといふ事だの、秀吉が其處から引き返して、此の鞍懸を越えて峯づたひに小田原の眞上へ出る路を新たに切り開へて進んだといふ事だの、其の路は太閤道と言はれて未だに微かな痕跡をとどめてゐるとか、此の鞍懸山の名稱は其の時秀吉が馬の鞍を木に懸けて憩んだところから命けられたものだ——といふやうな話を彼は方々指差して示しながら聞かせた。お玉といふ女が、湖を泳いで關所破りをしやうとして生捕りにされた話だの、長州征伐に出陣の際、若年の家茂將軍が錦の陣羽織を着て手綱を提げて、徒歩で箱根山を越す[illegible]たといふ話なども聞かせた。それは、自身が雲介をしてゐた頃の話をもした。雲介といふものは總て馬並に對遇されてゐたもので、だから帶は尻の端へ尾のやうに長く結び垂らしてゐた。大名の駕籠を昇ぎ乍ら、先棒で屁をひつても息杖を突いた位で小便をしてもお咎めは受けなかつた。動物だから仕方がないといふわけである——と、そんな話をした後で、

「然し其の時分は氣樂で宜うがしたよ。俺等あ刺身が無けれあ飯を食はなかつたもんでさあ」

かう言つて彼は皺枯れ聲で笑ひながら一寸感慨に耽るやうな眼つきをした。訊いて見ると彼は七十歳だと言つた。それでもまだ勞働で鍛えたがつしりした骨格を備へてゐた。眼がぎよろ付いてゐるので一寸見ると恐ろしいやうだが、然し決して惡い感じを與へる顔ではない。一生涯の中の或時期を放浪と懶惰に費したことのある人間が必ず持つてゐる一種の表情が、彼の顔にもどこかに殘つてゐた。

「旦那樣。親不知子不知を御覧なさいましたか」

仁右衛門はふと思ひ出したやうにかう言つて私の顔を見た。

「いや知らない。何だい其の親不知子不知といふのは?」

すると仁右衛門は此處から丁度眞西の方を指差しながら

「そら、向ふの山の根に電信柱が見えますだ。あの邊が昔の八里の路でございます。越後に親不知子不知といふ所がありますだ。

に手に掛けて殺したといふ因縁噺がありますだよ」

「ふーむ。それは面白さうな話だな。ついでに其の話も聞かして貰ひ度いもんだね」

から言つて私は體を起した。其處へK君が、無精らしく兩方の手を洋服のかくしへ突つ込んだ儘莨を啣えて、靴の先で草の上をずるずる滑るやうにして下りて來た。

「そんな處で何をしてゐるんだい」と、彼は莞爾々々笑ひながら言つた。

「とつつあんの昔噺を聞いてゐたんです。是れから親不知子不知といふ不思議な因縁噺が始まらうといふところです」

「へえー。それぢやあ俺も聽き手の人數に加へて貰はふ」

K君はかう言つて私達の側へ竝なりにどつかり趺坐をかへた。

「とつつあん。お客様が一人殖えたから直ぐに始めてお呉れ」

私がかう催促するやうに言ふと、

「あははは——」

と、仁右衛門は空の方を振り仰いで笑つた。

＊ ＊ ＊

泉屋久右衛門は、宗林寺の門を出ると其の前の通りを眞直ぐに西の方へ歩いた。其處は、片側だけが往來より五六尺も地面が高くなつてゐる。どちらを見ても寺ばかりである。五六段ぐらゐの石段があつて、其の上にさびた門が建てられてゐる。白い筋の入つた練塀の外に、三界萬靈等といふ文字を刻みつけた石塔が立つてゐる。いつもは淋しい通りだが、今日は彼岸だけに相應に人通りがある。子供や娘が立派に齋飾つた寺詣りにも會つた。ところどころにある花屋の店には、何となく淋しい氣持を引き出させる秋草の花が美しく咲いてゐた。

久右衛門の胸には、娘のお花の墓標と向き合つてゐた時の心持がまだ其の儘殘つてゐた。悲しいとか、寂しいとか、あるひは果敢無いとか、さういふ言葉では現はせない——譬へば冷たい無常の壁にぴつたりと向き合つてゐるとでもいふやうな氣持であつた。青く澄んでゐる空でも、路傍に低く舞つてゐる蝶々でも往來で擦れ合ふ人の姿でも——彼の眼に見える總ての物が陰影のやうに其の灰色の壁に寫つてゐた。

彼の足どりは何となくとぼとぼして元氣が無かつた。背中がすこし前へ屈んでゐた。お花が死んでから一と月ばかりの間に

彼は今迄の十年分も一度に歳をとつたやうに見える。頭が目立つて白くなつて來て、痛々しいやうな深い皺が顏に刻まれてゐる。

ふと、久右衛門は伜の事を思ひ出した。それは久太郎といふ彼にとつてはかけがへのない一人息子であつたが、若氣の至りで放蕩に身を持ち崩したのを憤つて勘當して家を逐ひ出してしまつたのであつた。それ以來彼は伜の顏を見たことがなかつた。勘當したのが久太郎の廿の歳でそれからもう足掛け八年になるのだが、かうして久右衛門の胸に上つて來る伜の幻は大概廿位な面ざしをしてゐる。時にはもつとずつと昔の、久太郎の幼い時分の事を思ひ出すこともあつた。勘當した當座は絕えず久太郎の事が氣に懸つてゐたが、年月を經るに從つて自然に思ひ出すことも尠くなつて、娘に養子を迎へて自身の跡を續がせることに極めてしまふともうすつぱり諦めたつもりでゐたのであつたが、そのお花にも先立たれたのですつかり世を果敢無むやうな氣持になつて居りながら、近頃は又頻りに久太郎の事が思ひ出されて來るのである。

今から三年ばかり前のことであつた。或人が江戸で偶然久太郎に邂逅たと言つて態々[illegible]へ知らせて來て呉れたことがあつた。[illegible]かと言つたら「祖父が生きてゐるうちは大阪へは歸らない」と久太郎が笑つて答へたといふやうな話を彼はおもひ出した。其のときは憎いことを吐かぬ奴だとばかり思つて腹が立つたが、現在になつて考へ直して見る心持は以前とは餘程變つてゐた。

彼は自身の若かつた頃からのことをも考へさせられた。古着屋の年期奉公から叩き出して、兎に角天滿でも相應に知られた呉服店の主になる迄の、いろんな出來事が取り留めもなく聯想された。その、どんな苦しい中をも我慢一つで押し切つて來た強情な自身の血が、矢張り久太郎の體にも流れてゐるのだといふやうな氣持がした。

「江戸で何をしてゐるだらう？ どうせ碌な事はしてゐないだらうが……」苦勞といふものを知らずに育つたきやしやな體をした伜の面影を彼は眼に浮かべた。

久右衛門は、五年前に此の世をば去つた妻の事なども思ひ出してゐた。今端の際迄彼女の心を惱ませてゐたのは居處さへ知れぬ伜の身の上であつた。「自分が死んだ後にはどうか久太郎の勘當を許して遣つて貰ひ度い」と、彼女は夫に言ひ置いて死んで行つたのであつた。久右衛門は其の場だけ「諾！ 諾！」と氣休めを言つて置いたが、不孝者の伜を呼び戻さうなどといふ[illegible]

といふ話はないから久太郎の勘當を許して連れ

と言つて親類などでも勸めた者もあつたが彼は承かなかつた。

「あんな極道を家に入れたら此の泉屋の店は三年とは持ちませぬ。わしは血統よりも此の家が大事で御座る。縱ひ他人から附養子を貰はねばならなくなつても、久太郎の勘當は許しませぬ」

久右衛門はから言つて强情張つたのであつた。彼はさう言つた當時の心持を振り返つて見た。一本統に血統よりも家が大事だらう……一生苦勞してこしらへた身代を自分は他人に與れて遣ることが出來るだらうか……」

親と子の間に流れてゐる血の執着を彼は感じた。人生の行路の終りの方をたつた獨りでトボトボ歩いてゐる自身の姿が彼の眼に見えた。

「さうだ、いつそ思ひ切つて江戸へ行つて、久太郎を呼び戻して來よう……？」

彼は何年振りかでから考へた。すると眼の前が急に明るくなつたやうに感じた。立派な大人になつてゐる悴と初めて會ふ時のことだの、其の悴に案内をさせて江戸見物をして步くことなどを久右衛門は空想しながら步いた。

○

てゐた手紙を疊の上に展げてもう一遍讀み返して見た。天地を紅く染めた卷紙へ拙い字で走り書きに書かれてある手紙の面を傍らの眞黒く煤びた埃だらけの行燈の明りで心許なく照らし。

「一筆しめし上げ〻〻。さてとや至急ぬしにお目もじの上にて御さうだんいたさねばならぬ事有之候間ぜひ〻〻今夜のうちに御越し下さるべく、もつとも宵のうちすこし差しつかえ有之、四つ過ぎに御越し下さるべく、御まち申上げ〻〻いさいの事はお目もじの上にて、まづはあら〻〻かしこ――里より戀しき主さんへ」

「莫迦にしてやがる」と久太郎は口のうちで呟いた。然し心では惡い氣持はしてゐなかつた。暫らく振りで花里に會へるのだと思ふと、心が自ら浮き〻〻して來た。彼は番茶をかけて飯を搔き込んでしまふと、箸と茶碗をぞんざいに拋り出した儲片つけやうともしないでぼんやり花里の事を考へてゐた。

「至急相談し度いつて、一體どんな事が出來たんだらう」かう考へて見ても一向見當がつかなくなつた。それよりも花里のだの其の部屋の有樣などが五月蠅いくらゐ眼に浮かんだ。「宵に差しつかえがあるといふのは良い客が來てゐるからだ」と思ふと一寸癪に障つた。

上野の鐘が六つを打つてからまだ間はなかつた。今から四つまでの時間をかうしてぺんぺんと待つてゐることを考へると彼はじれつたくなつた。壺川太物を背負つて近在の村々を商ひに歩き廻るので體は可成り草臥れてゐるが、それ迄落ちついて寢てゐる氣には無論なれなかつた、彼は欠伸を續け樣に發した。

ぢきに彼は我慢がし切れなくなつた。「兎に角出掛けて見た上で素見しでもして時間を潰すことにしやう」かう決心すると、彼は大急ぎで葛籠の中から一張羅の唐棧の着物に羽織を出してそれと着替えて、最前草鞋を脱いたばかりの足へ雪駄を履へて、門口の戸を閉めて外へ出た。隣りの家の前で「今晩は」と聲を掛けて、

「今夜は殊に依ると歸らないかも知れませんから、どうかお賴み申します」と言ふと、

「はいはい行つておいでなさい。また仲へお出掛けかね、お樂みだね」

と、左官の甚吉といふ呑んだくれの亭主を持つてゐる隣りの上さんが内から愛想よく應へた。久太郎は雪駄がチャラ／＼鳴るのを氣にして態と溝板の下ばかり踏んで歩いた。

それから二た時ばかり經つた時分には、久太郎は花里の部屋で女と差し向ひで酒を飲んでゐた。久太郎はまだ幾らも飲まなかつたが、花里は宵から飲み續けてゐるので眼をちらちらさせてゐた。色が白くて、眼元に險があつてすこしつんとしたところのある此の女は、酒に醉つてゐる時が一番美しく見えた。一人がさうしてゐる處へ下新が無遠慮に入つて來て何か道具を持ち出して行つたり、朋輩女郎が忙がしさうに廊下を通りながら一寸障子の間から隙き見をして

「おや珍らしい、くの字さんさますね。後で遊びにまゐりいすに」なぞと聲をかけて行つたりする。久太郎はきちんと坐つて何處となく大樣な態度で女に酌をさせてゐた。かういふ場所へ來ると彼は自身の體が直ぐ樣周圍の空氣に同化していくやうに感じる。現在の果敢無い境涯から脫して、昔大金を貰つて遊んでゐた當時の氣分が腹の底から甦つて來る。

「[illegible]なあ小菊さんだな。みんな其邊に忙がしさうぢやあねえか」

廊下をばたばた驅けて行く足音を眼で送りながら久太郎が言つた。

「それ程でもありんせんのさ。この月はいつよりも不景氣でありんすよ」

「それでも手めへなざあ[illegible]でゆうべ廻りで、好い[illegible]でゐられるから仕合せた[illegible]」

「一寸さ・わっち[illegible]ました[illegible]」

へすから酒で氣を紛らしてゐるんさます」
「どうか知れたものぢやあねえ。――時に今日の手紙の用といふなあ何んだ」
「あの事？　それは後で緩くり話しませうから、それよりもう少しお呑みなんし」かう言つて花里はくさくさするといふ風に簪の足で頭を掻きながら片方の手を長く伸ばして、久太郎の前に置いてある盃へ波々ついだ。
「何んだかそいつを聞かねえうちは氣懸りで酒がうまくねへ。そんなにじらさずと話して見ねえな」久太郎は盃に手も觸れずに言つた。
「ほほほほほ。ぬしは大層氣短かになりんしたこと。――實は、わちきは困つた事がおざりいすよ」と、花里は急に聲を潜めて相手の側へ顔を差し寄せながら「それ、ぬしも知つておいでの山印が急にわちきを身請けしやうと言ふんざます。店の方との込み入つたわけもあり、今迄はぬしが氣を惡くしいすかと思つて默つて居りましたが、ぬしが商賣を始めなんした時の元手もあれは皆山印の懐から出た金でありんす。それや是れやの義理もあり、斷るにも斷れなくて、わちきや途方に暮れて居りますのさ」
　花里は困つたやうな表情をして相手の顔を見た。久太郎は見る見る間た

鎖した。前に奉公してゐた樓をしくじつてしまつて明日からの糊口にも窮しかけたやうな場合に、女の助力を藉りて裏店を借りたり呉服物を仕入れたりして今の商賣を始めたのであつたがその金が悉く山印といふ客の懐から筒抜けに自分の手へ渡つて來たのかと思ふと彼は忌ま忌ましいやうな屈辱を感じた。現在かうして女と飲んでゐる酒までが、間接に言へば山印の御馳走になつてゐるやうなものだ――かう考へ出すと、今迄好い氣になつて納まつてゐたことが馬鹿々々しいやうな、われながら淺ましいやうな氣持もしてくる。それともう一つ、かう打ち明けて話し出した女の心持も彼には疑問であつた。身請けの相談を持ち掛けられて困つてゐるといふのは表面のことで、内心自分に愛想を盡かして手際よく切れやうと考へてゐたのかも知れない――と思ふと矢鱈にむしやくしやしてくる。
「それあじつに目出度い事だ。ちつとも困る事なぞありやあしねえ。二つ返事で山印に見請けして貰つて、猫でも飼つて、御新さんと言はれて見るがいいわさ」と、久太郎は厭味たつぷりの言ひ方をした。
「厭だよ此の人は、わちきやあ妬かれるやうな、そんな浮氣な沙汰ぢやあおさんせんに」と花里はてんで問題にしないで「そ

れに近頃は漸々ぬしの事を感付いてゐるらしく毎晩五月蠅く遣つて來てわちきを責めるんざます。ほんにそれが厭でく\なりんせんから、わちきやお酒を呑んで管を卷いて遣るんざます。ちつとはぬしもわちきの身にもなつて考へて見てくんなまし」

「だから、手めへの身になつて考へて遣るから、山印に身請けをして貰つて氣樂な身になるが良いと言つてるぢやあねえか」

「ぬしは本氣で言ふんざますかへ。あんな厭しやに身請をされやうものなら、もう二度とぬしにも會へなくなるんざます。わちきやそれくらゐならいつそ死んでしまふ方が増しだと思つて居りますのに、そんなにわちきをいぢめなんしては無理ざます」

と、花里は急に聲を曇らせて、懐から紙を出して顔をおさへながらしくしく泣き出した。久太郎の心は直ぐに和らげられた。

「花里は矢つ張り自分のものだ」かう思ふと、急に女に對して優しい同情のある氣持が湧き出して來た。三年越し許かり結び付けられて來た自分と花里との永い關係も振り返つて見られた。其の間のさま〲な女の心盡しが胸に蘇いた。

「今のは冗談だ。そんな事ぐらゐで直ぐに泣く奴があるものか——しただ、そいつあ困つた譯だなあ」久太郎は今更らしく腕組みをして考へ込んだ。

「わちきや近頃弱虫になつて、直ぐに悲しくなつてなりんせん」花里はかう言つてまだ泪の光つてゐる艶な眼で笑つた。

花里を他人の手に奪られてしまふことを考へると、それは久太郎にとつても堪へられない事であつた。他郷に放浪してゐる孤獨な彼の脳に、血の熱さを感じさせるものはたつた一人の花里に過ぎなかつた。花里に會へなくなつてしまつた後の、朽ちた枯木のやうな味氣ない生活が想像された。

「金が欲しい」彼は唯何となくさう思つた。女の情けに甘んじて生活してゐた今迄の意氣地の無い滿足が酷たらしく踏み躙られてしまつた。大阪に居る時分に無茶に遣ひ捨てた金が今になつて惜しくなる。自分が花里を身請けして、そして二人水入らずで裏店住ひをして見ることを考へた。「あの時分のやうなら百兩や二百兩の金は何でもないのだが——」と彼は當もなく思ひに耽つた。

「大阪へ行つて親父を欺して金をこしらへて來やうか……」

ふとかう考へた。天滿の我家の有様が眼に浮かんだ。八年間別れてゐる兩親や、妹のお花の顔なども見えた。何時も奥納戸に置かれてある掛け金の入つてゐる手文庫が見えた。其の中から小判の封金を幾つも盗み出して懐へ入れることを考へた。其の金を持つて江戸へ出て來たことを空想すると、彼にもう

それより他に自分の執る可き手段は無いやうな氣がして來た。

「お里。心配するな。俺が良い事を考へたから——」と、久太郎は俄かに元氣を盛り返して言つた。

「おや。それはどういふ事でありんすえ」花里は駭いたやうに顔を上げてつり込まれたやうに嫣然笑つた。

「俺が大阪へ行つて金をこしらへて來て手めへを身請けして遣らうといふのだ」

「だつてぬしは勘當の身ではありんせんか。大阪へ行かしやんしたところで、そのやうな大金の出來さうな當がありんすかえ」

花里は心許無ささうな顔をした。

「大丈夫だ。江戸ぢやあしがねえ男の中の屑だが、これでも大阪へ行きやあ天滿でも人に知られた泉屋の一粒種だ。たとひ勘當されてゐやうが、百や二百の金ならどうにかならうわさ」

久太郎はかう言つて氣焔を吐いた。すると自分ながらも以前の泉屋の若旦那に返つたやうな氣持がして胸がせいせいした。まつたく百兩や二百兩の金は屁でもないやうな氣になつた。

「さうなればわちきやどんなに嬉しいだらう。ではほんにさうしてくんなますかえ」

「誰が嘘をつくものか。あすにも直ぐに旅立をして、遲くも年内には金を持つて還つて來るから、それ迄山印の方は何とかうまく言譯して通にして置くれいし」

「あい、それは承知でありんす。……したが。もしえ、大阪へ行かしやんすは宜いけれど、故郷ほど良い處は無いと申しいすから、あちらにおいでなんして、わちきの事なぞ忘れてしまつては困りんすよ。勘當がゆりて、彼地でおかみさんを貰つて辛抱する氣になぞならしやんすとわちき一人が馬鹿を見るわけ、其の時こそわちきや死んでも恨みを晴らしいすから、そのつもりでおいでなんしえ」

「莫迦な事を——そんな氣なら、何もこんなに眼の色を變へて騒ぎやあしねえ。つまらぬ取越苦勞は止しにして、來年の正月は水入らずで雜煮でも祝はふから、それを樂みに安心して俺の歸りを待つてるがいい」

と、久太郎は自信のある言ひ方をした。

○

久右衛門は、三島の宿ですこし早い晝飯を食つた。勘定をして其處を出ても、陽向きの樣子ではまだ正午前のやうであつた。腹ができた上に足ごしらへがしつかりしたので急に歩行が輕くなつて來た。彼は合羽の上から荷物を振り分けに肩へ掛けて若者のやうに元氣の良い足どりで歩き出した。一本筋の町が長く長く續いてゐた。

關所場の前には竹で造つた山駕籠が幾つも置いてあつた。そして往來の端へ蓆を敷いて、人足が大勢車座になつて博奕を打つてゐた。

「おい旅の人、駕籠をやるべえか」

懷手をしながら突つ立つて博奕を見てゐた一人の人足が久右衛門を見かけてから聲を掛けた。

「箱根の宿迄駕籠はなんぼだす」久右衛門は其の男の方を向いて足を停めた。

「駕籠は七百五十文だよ。年寄の足ぢやあ登りやあ無理だんべい。乘んなさらねえか」

「七百五十文？　偉う高うおますなあ。半値位に負けなはれや」

「駄目だよ、此の通り相場が極つてるだから、」と人足は傍らの定書の高札を指差して見せて「酒手だけ負けとくべえに、悪い事あ言はねえだから乘つて行かつしやれ」

久右衛門はどうしやうかと一寸考へて見たが、七百五十文はどうしても高過ぎるやうな氣がした。途中で戻り駕籠を拾へば僅かな錢で行かれる。それにどんな山道だつてたつた四里だから今から日一杯に登るつもりなら譯なものだ」から考へると、「關所場で[illegible]の言ひ取りになつて[illegible]駄な錢を遣ふのは惜し[illegible]

「負からぬなら、止めに致しまへう」から言つて久右衛門はさつさと歩き出した。

「厭ならお止しだ。ヘツ、足ぁ弱さうだが氣は達者なおやじさんだ」と、人足がうしろから憎まれ口を浴せた。

それきり何處でも駕籠はすすめられなかつた。

宿を出はづれた處に梯子をかけたやうな坂が付いてゐた。其の邊の山には大きな松の樹が立つてゐた。久右衛門は其の坂をそろそろ登つた。

坂の盡きた處には、必ず其の次ぎの坂が新規に始まつてゐた久右衛門には、其の坂の一つ一つがだんだん險しくそして長くなつてくるやうに感じられた。彼は尠し歩いては直ぐに憩はなければならなかつた。路傍の石などに腰を掛けて休んでゐる彼の前をこんな道はなんでもなささうに歩いて行く若い旅人だの、駕籠の中からさも愉しさうに山の景色を眺めて行く人などが澤山通つた。さうした駕籠は澤山通つたけれども、空駕籠を舁いで行く者はなかつた。

「三島の關所場から思ひ切つて乘つて來た方が宜かつたかも知れない――」彼はそろそろそんな氣がし出した。

いろんな事を考へたおかげで彼は歩いた。大阪の宿の事を考へた[illegible]

行くとは[illegible]
に思ひ返した。しかし其の話を聞くと誰でもが、
「それは良いところへ氣が付きやはつた。是非さうなうてはならぬ筈ぢや。亡くなつたお家はんも嬢はんも喜ばつしやるだろ。それに久太郎はんかて追い〱分別の付く齢やさかい。今度は乾度嫁う締まりやはつて、人一倍親孝行して呉れまつせ」
と言つて喜んで呉れた。
久太郎の居處が判明してゐないので鬱し氣になるが、然しそれもいざとなればお上の手をかりて探すばかりの事だらうと思つて久右衛門は自身の心を安んじさせた。「突然に遣つて行つたら悴の奴どんなに驚くだらう……」彼はそんな場面を空想した。
然しそれも永くは續かなかつた。劇しい息切れと足の痛みが彼の心からあらゆるものを奪つてしまつた。心臓がやかましく鳴り出した。脚の筋が妙に痺れて、時々膝がガツクリとした。道中で水が變つたために脚氣を踏み出して、三河の宿で三日ばかり逗留した時のことを彼は思ひ出した。
長いまつ登な坂を這ふやうにしてやつとのことで登り詰めると、すこし平になつた道の兩側に二三十戸の人家が並んでゐた。
「やれやれもう着いたのか」彼は全く地獄からでも這ひよつた一ばん取つ付きの家の前で足をとめて、
「一寸うかがひまんが、此處が箱根だすか」と訊くと、山姥のやうに髪を亂した女が半部の中から顔を差し出して、
「箱根はまだ先きでやすに。此處は中山といふ處だがな」と言つた。
「箱根の宿迄はまだなんぼ程おますか」
「一里廿八町あるだよ。三島から此處迄が丁度二里でやすからのう」
久右衛門はがつかりしてしまつた。仕方がないから足を曳き擦りながら行くと茶店らしい家があつたから、彼は蹣跚めくやうな恰好をして其處へ這入り込んだ。圍爐裏に粗朶がくべてあつて、其の傍らで彼と同じ位の年頃のおやぢが竹細工をしてゐる。
「一寸休ませて貰ひまんが」久右衛門は笠の紐を解きながら言つた。
「さあさあ掛けさつしやれ」
から言つておやぢは圍爐裏の端に散らばつてゐる竹切れなどを片づけて呉れた。久右衛門は上り框へ腰を卸して暫時息をついてゐた。

「箱根の宿迄なんぼ程おますか」

彼はもう一遍念のために訊いて見た。すると矢張り一里廿八町あると言つた。彼はもう此のうへとても歩けさうもないやうな氣がした。

「此處には旅籠がおまつしやらうか」

「宿屋は御座りましねえだよ。此の邊は獵と百姓ばかりでやすからのう」

さう言つて見れば此の家もどうやら茶店ではないやうであつた。それでもおやぢは親切に熱い湯を汲んで呉れたりした。脚は相變らずズキズキ疼んでゐるが、胸の動悸だけはやうやう納まつて來た。彼はすこしの鳥目を板の間へ並べて置いて其處を出た。

其の邊から次第に山の模樣が變つて來た。それ迄往來の兩側にぽつさり冠さつてゐた樹木が上へ登る程乏しくなつて來て、四邊の山々も裸山が多くなつて來た。其の代りに展望は廣々して、幾つもの谷が重なり合つて下の方に見えたり、自分が登つて來た三島の邊りから向うの海までが見えたりした。左手の方には日蔭になつた富士が手の屆くかと思はれる位まぢかに根もとから聳えてゐた。

しかしさうした景色は少しも久右衛門の心を慰めて呉れるものにはならなかつた。彼の心は苦痛のために破れさうになつてゐた。追ひ追ひ迫つて來るらしい日暮れの色が、酷たらしく鞭のやうに背後から彼を脅してゐた。

脚の疼みよりも寒さの方が一層つらく感じて來た。額から油汗がジリジリ滲み出してゐながら、體は瘧でも襲ふやうに寒さのためにガタガタ慄へてゐた。時々向うの谷から眞白い霧が襲來して、彼の前途を唯茫漠とした灰色の海と化した。山風が強く吹いて來て、路傍の小笹をザワザワと喧ましく鳴らした。

「今頃山を歩いてゐるのは自分だけかも知れない」かう思ふと久右衛門は絶え入りさうに氣細くなつた。全く、登る者は登り、降る者は降つてしまつたかのやうで彼はちつとも人に遇はなかつた。

大きく蜒つた坂を登り切ると、急にひろびろした平な處へ出た。と、向うから二三人づれで聲高に何か話しながら遣つて來る旅人に出遇つた。

「もし、峠迄はまだ餘程おますかいな」久右衛門は道端へしやがみ込んで、先刻からキリキリ差し込んでゐる下腹を兩手で捉り押えながら苦しさうな聲で訊づて見た。

「なに、峠！　此處あもう峠だぜ」

かう言つて客人は足をとめて久右衛門の樣子を見おろしなが

ら、

「どうやら苦しさうな樣子だが、病氣でも起きなすつたのかい」いづれも長い脇差を一本差して、見るからに辭頑らしい足ごしらいをしてゐる。

「はい……いえ、きつい事はおませんわいな。おほきに有難う樣ぞ――」と久右衛門は態と苦痛を耐えて言つた。

「さうかい……兎に角なんだぜ、其處からちよいと坂を下れあ宿だから、そろそろと氣をつけて行きなせえよ」

と言ひ捨てて、旅人達は足ばやに山を下つて行つた。

「峠へ來たのか――」かう思ふと、久右衛門は何とも言へない安心した氣持になつた。

彼は徐かに身を起こして歩かうとしたが、どういふものかすこしも足の自由が利かなくなつてゐた。それでも漸う竹杖に縋つて、やがて虫の這ふやうな調子で體を運び出した。

と、眞正面から吹き付けてきた風が、彼の體を縮み上がらせてしまつた。そして輕くなつたところを、笠と諸共に後へ吹き飛ばした。漸う起き上つた時には、彼の體は前よりも一層力が拔けてしまつてゐた。

峠の平な處を半分ばかり歩いた時には、久右衛門はもうどうすることも出來なくなつてゐた。寒氣も、脚の痛みも、腹部の差し込みも、總ての物が一つになつて、[illegible]が彼の體を包むでしまつた。

向うの山の根が牛の寢たやうなゆつたりした恰好をして道端迄這ひ出してゐた。黃色い長い草が一面に地を覆うてゐた。久右衛門の眼には、北の丘の陰か非常に居心の良い處でもあるかのやうに映つた。彼はもう他の事は少しも考へられなくなつてゐたので、躓けたり這つたりしながら丘の方へ近付いて行つた。

○

久太郎は杉並木の道をとつとと驅けるやうに歩いた。もう下り坂へ掛つてゐるので足が獨りで前へ出た。兩側の杉の梢が上の方で互ひに喰ひ合つて空を隱してしまつてゐるので、夜とも晝ともつかぬ暗ほつたい、そしてじめじめした土臭い空氣が何處にも逃げ場が無いやうに陰氣に漂つてゐる。そんな具合で時刻もはつきり判らぬが、湯本が丁度八つ半だつたからあれから可成り急いで來たつもりでももう彼是暮れ六つ近い頃かも知れない。今夜箱根へ泊るつもりなら別に急ぐには及ばぬのだが、彼はどうでも三島迄下らうと思つてゐた。

「夜道だつて月はあるし、下り一方だからわけはない」彼はさう極めてゐた。

最後の坂を一つ驅け下りると、ぱッと眼界が明るくなつた。其處には、彼の足元から廣々とした湖が展がつてゐた。

薄い紫色の夕暮れが靜かに湖水の上へ降りてゐた。湖の向うの山々が、光澤を失つた空へ墨繪のやうな輪廓だけを寫してゐる。直ぐ眼近に箱根權現の森が見えた。大きな樹が水際からもくるく重なり合つてゐる其の森は魔の巣のやうに眞黑かつた。

久太郎は湖の縁へ思はず足をとめた。八年前に此處を通つた時のことを彼は考へた。

「月日の經つのは速いものだ――」何となくさういふ感慨が胸に迫つて來る。江戸へ行つてから八年間の碌でもない生活を振り返らせられた。「八年前も現在も俺はちつとも變らない。女に迷つて遙々大阪迄親を欺しに行くのだ――」かう思ふと自ら恥ぢるやうな、また親に對して濟まないやうな感じが起きてくる。

彼は、暗い湖の中へ吸ひ込まれでもしまひさうな重くるしい氣分になつた。

「小父さん、おめへお關所を越えるぢやあねえだか？」

かう言はれて後を振り向いて見ると、薪を背負つた十二三位の小伜が不審さうな顏をして自分を眺めてゐた。

「さうだ。是から關所を越えて向うへ行くんだ――」

「それぢやあ忙がねえと駄目だに。お關所の門は六つを打つと閉まるだらう」

久太郎は吃驚して、

「そいつあ大變だ。小僧さん、有難うよ。」

かう言ひ捨てて、彼は湖水に沿つた平な道をとつとと驅け出した。

久太郎はやつとのことで關所の門限に間に合つた。彼が門内へ驅け込むのと殆んど同時に、中から足輕が門の扉をギイと閉めた。裃を附けた役人達は、一日の勤務から解放されてホづやれ／＼と言はぬばかりの顏付で座を起ち掛けてゐた。

「お願ひ申上げます。お通しが願ひ度う御座りまする」

久太郎は地べたへ膝を突いて頭を下げながらかう言つて、江戸を發つ時家主から貰つて來た關所手形を紙入から取り出して足輕の手に渡した。一人の役人は折角起ちかけてゐた腰を再び元の座へ据えて、久太郎が出した手形を手に取つて形式的に眼を通した。

「大阪へ何用あつて罷り通すのぢや」

「父親が大病につきまして、其の見舞ひに參りますので御座ります」

「[illegible]、通れ――」

役人はだしぬけに途方もない聲をだしてから言つて、直ぐに座を起つて奥へ這入つてしまつた。足輕は一旦閉めた向う側の門を僅かばかり開けて突き出すやうに久太郎を外へ送り出した。

着くだけの客は着いてしまつたのであらう。宿はもう夜になつたやうに靜まつてゐた。寺のやうな大きな草葺き屋根の家ばかり兩側に續いてゐる。左の山の方から狭霧が宿の上を横切つて煙のやうに流れてゐる。樋を流れる水の音が冷たく聞える。

久太郎は宿の端れの一ぜん飯屋へ這入つて手早く腹をこしらへて出た。人家の絶えた處から峠へ登る坂が始まつてゐた。木立が茂つてゐるので其の邊は足元さへ見えぬ程に暗かつたが、軈て峠と思ふあたりへ辿り着いた時分には、山の彼方には月が顔を出してゐると見えて、霧の掛つた空をぼかして宵の明るさが漂うてゐた。

久太郎は峠の平な道をすたすた歩いて行つた。

と、妙な聲が彼の耳に這入つた。彼は足をとめて邊りを見廻した。

「うー、うーん」と微かに人間の呻く聲が何處かでしてゐる。

久太郎の眼はふと往來から二三間左へそれた處の丘の根方の黒い物に注がれた。彼は直樣叢の中へ踏ん込んで其の黒い物の側へ寄つて行つた。そしてよく／＼見ると旅人らしい男が笠を冠つた儘叢の中へ突つ臥して呻いてゐるのだつた。

「可哀さうに病氣だと見える」彼は旅人の背中へ手をかけて、

「おい、どうした。確りしねえか」

二三遍かう言つて聲を掛けると、旅人は苦しさうな息の下から

「はい……有難う御座ります。きつい差し込みがまゐりまして……」と應へた。

「さうか、そいつあ氣の毒だな……しかし、こんな山の上ぢやあ手當のしやうもなし、困つた事になつたなあ」

彼は半ば獨り言のやうにかう言つて考へた。旅人は再び苦しさうに呻き出した。

「仕方がねえ。通り掛つたのが災難だ。箱根の宿迄背負つて行つてやらう」彼はかう決心した。

「おい、心配しなさんな。俺あ三島へ下る者だが、おめへを箱根の宿迄送り屆けて遣らうから」

「は……はい。有難う御座ります……」

久太郎は直ぐに自分の肩へ掛けてゐた荷物を取つて下へ置いて旅人の體の下へ手を廻して抱き起さうとした。腹のあたりへ手を掛けてぐツと力を入れた時、蛇の腹のやうに膨らんでゐる

らしい胴巻の金が、着物の上からでもブツーリとした重味を手に感じさせた。彼は探るやうな手つきをして其の上から押さえて見たが、何だか悪い事でもしたやうな感じに打たれて思はず旅人の軀から手を放した。他人の秘密に觸れた時に感じるやうな輕い心の動揺が殘つてゐた。

「確かに二百兩位はある――」今の金の重味を心で量りながら彼はかう思つた。

「もし此れだけの金が自分の物になれば大阪迄行く必要はないのだ……花里の前ではああ易々引き受けて來たやうなものの、大阪へ行つたところで親父が頑張つてゐるからにはなかなか容易に金が手に入る譯はない。愚圖愚圖してゐる間に花里が身請けされてしまふやうな事があると何の甲斐もなくなるぢやないか……此の金があれば直ぐに江戸へ引つ返して、花里と一緒に樂しい世帶をつくることが出來るのだ……」ほんの一瞬間に、彼の胸裡にこんな考へがむらむら旋つて映つた。然し直ぐ後から「何だ莫迦々々しい。こんな事を考へたつてはじまらないぢやないか――」と自身の愚を嘲笑ふやうな氣持になつて、彼は再び旅人の體へ手を掛けて起こしにかかつた。

ブツーリした小判の重味が、彼の手先きから傳つて這入つて心うし[illegible]

ら、ぐつたりと彼の手に體を委せてゐる――。意識を失つてゐるかと思はれる位に無抵抗な状態に落ちてゐる旅人の背中のあたりを見詰めてゐると、久太郎の頭にある殘忍な考へが自づと浮かんで來た。

「たつた一と突き背後から突くだけのことだ――人も通らぬこんな山の上で、何をしやうと發覺るものか――」

彼は又もや旅人の體から手を離した。荒涼とした山頂の景色が彼の眼に寫つた。あたりの枯草が風のためにザワザワと鳴つてゐた。それが彼の耳には、自身の悪事を唆かす悪魔の囁きのやうにも聞えた。江戸で自分の歸りを首を長くして待つてゐる花里の顔が見えた。彼は頭に異樣な熱を感じた。

道中差しの脇差の柄を確かりと握つて見た。すると、刀といふものが有つてゐる殺氣が自づと體へ移つて來るやうに感じた。人を殺すといふことがそれ程大した事ではないやうな氣もして來た。彼は思ひ切つて鞘を拂つた。そして白刃の光に[illegible]やかされでもしたやうに無我無中で旅人の背中へ突き立てた。

「あツ！」といふ叫び聲が、旅人の聲かそれとも自身の發した聲か解らぬやうに聞えた程彼の心は顛倒してゐたが、[illegible]の刀を抜く時のブツーリとした[illegible]は彼に人を[illegible]たといふ[illegible]

[illegible]

ちついた冷靜な氣持になつた。

彼は動かなくなつてしまつた旅人の懐から胴卷を取らうとして懐へ手を突つ込んだ、すると、大きな革財布が手に觸れたのでいきなりそれを掴み出した。紐が頸へ掛つて邪魔してゐるのを刀のさきでぷつりと切つた。

「幾何(いくら)ばかり入つてゐるだらう――」彼は全く盜賊の常習者と同じやうな氣持になつて、財布の端を持つてぶら下げながら片方の手を中へぐツと突つ込んで見た。小粒の金がザクザク手先きに當つた。――其の瞬間に、妙な感じが彼の頭に觸れた。それは、かうして財布の中へ手を突つ込んで見た總ての感じが、彼の心の隅の何處かに殘つてゐる記憶の一つと合致したやうな氣持であつた。彼は不思議な氣がして財布を顔の側へ持つて來て見た。古い印傳の皮で、裏には形の附いた古滿度が使つてある。

「何だか見たやうな財布だ」彼はそう思つて暫らくの間他の事を忘れて眺めてゐた。

と、或記憶が、はつきりと彼の頭に浮かんで來た。それは自身が大阪に居た時分のこと、よく掛取りなどに出掛ける時父の手から受け取つては首に掛けて歩いた覺えのある、其の革財布と寸分違はないといふことに氣が付いたのである。

彼はギヨツとして、自分の足許に倒れてゐる旅人の死骸に眼を遣つた。何とも言へない情な[illegible]布を其處へ抛り出して、死骸を仰向けに抱き起こして其の顔を覗き込んで見た。

彼は彈かれたやうに後へ倒れた。

*　*　*　*　*　*

「いくら極道な悴だつて現在の親を自分の手に掛けて殺したのでやすから平氣では居られませんだ。悴の奴も其の場で腹を切つて死んだんださうでやすが、因縁といふものでがせうねえ」と仁右衛門は自身の物語りに結末を附けて感慨めいた云へ方をした。

何時の間にか谷へ雲が出てゐた。湖水の向うの岸から聳えてゐる駒ケ岳の頂には、其の雲の一團(ひとかたまり)が大きく掛つてゐた。午後には必ず吹き始める山風が私達の周圍の草の葉をサラサラ鳴らしながら西の方へ靡かせてゐた。私は急に寒さを感じて身ぶるひをした。

「親子の者の供養のために建てたものださうでやすが、其の跡へちやんと石塔が建つてますだよ。其處の邊を親不知子不知と言ひましてね、箱根でも古蹟の一つになつてますだ。そんなに遠くもねえから歸りに御案内致しませう」かう仁右衛門が言つ

た。

私達は間もなく峠道についた。頂上から一丁ばかり下つた處に熱海へ出る路が通つてゐる。其の路の脇に「海拔一千米突」と書いた木標が立つてゐた。私達は元來た路を下り始めた。

急な坂を一つ下りた處に、「野馬が池」といふ可成り大きな池がある。周圍は青々とした草原で、如何にも野馬でも來て水を飲みさうな池だ。其の向うの山の中腹に私達の行く手の路が見えてゐる。

「此處らから親不知子不知の方へ出る近道は無いのかなあ」

と私は後を振り返つて、寫眞機を背負はせられて少し遅れながら隨いて來る仁右衛門に向つて言つた。

「駄目でがす。矢つ張り一旦宿へ出て、本街道を登つて行くより他に道は無えでがすに。此の箱根の山ばかりは道の無え處へ道入り込んだ日にやあ往生でやすからのう」

かう言つて仁右衛門は側へ近付いて來て、箱根の山中の險阻さを歩きながら私達に説明して聞かせた。往昔關所のあつた時分に、關所が通れなくて山の中へそれた關所破りをしやうと企てた者も隨分あつたが、さういふ人達の殆んど全部が山中で白骨になつてしまつたものだと彼は言つた。おまけに其の時分の箱根山には狐が澤山ゐたものだとも彼は言つた。更に道にれて湖水の中へ逃げ込んだ話だの、何とかいふ名前の腕節の強い獵師が、宿の中央を流れてゐる小川の中で眞夜中に狼と格闘して到頭仕留めてしまつた話なども、自分が子供の時分の出來事だと言つて彼は話した。

私達は、細い箱根竹の密生してゐる間を通つたり、暗い杉林の中を抜けたりして歩いた。そして卅分ばかりかかつて宿の中程の往來へ出た。熱海や湯ケ原へ行く里程を記した横文字の道案内が立つておた。

其處から見ると、往來が兩方へ向つてなだらかな坂になつてゐて、昔の面影を其の儘傳へてるやうな陰鬱な、廢頽した茅葺屋根の家が淋しく並んでゐる。私達は峠の方へ歩いて行つた。

峠へ登る坂には石が敷いてあつた。其の石と石との間には青い苔が生してゐた。幾抱えもありさうな大きな杉の木が簇々道の兩側に立つてゐて、其の上の方で妙な鳥が鳴いてゐた。

峠では一本の樹木も見られなかつた。小笹と草が山全體を覆ふてゐた。路傍の小高い處に國境の木標が立つてゐた。其處から見ると、蘆ノ湖が再び私達の脚下のものになつてゐた。

「此處でがすよ」と、仁右衛門は往來から二三間左へ道入つた處の叢の中に立つてゐる古い石塔を指差して言つた。

私達は深い草を踏んで其の側へ行つた。石塔は[illegible]

さの物で笠石の裁つた可成り立派な造りだが、正面の中央へ「南無阿彌陀佛」と大きく彫つてあるのが讀めるばかりで、其の他の文字は悉く磨滅してしまつて判らない。芒の穗が見渡す限り一面に風に靡いてゐる。さまざまの色をした秋草の花が美しく咲き亂れてゐる。

左右から這ひ出して來てただらかに紆りながら擴がつてゐる山の裾に挾まれて二三丁ばかりの間平地が續いてゐる。それは恰も海洋に起きた大濤と大濤との間の窪みのやうな感じである。其の眞中を廣い街道が通つてゐる。

「此處のことを澗と言ひますだよ。箱根八里の中でも一等の難所でがさあ。何しろ北風を眞正面に受けるでやすからなあ。吹雪の日なぞにやあよくやられたもんでがすよ。」と仁右衛門が言つた。

昔の旅の難澁さが眼に見えるやうに私は感じた。

「寒くなつて來た。そろそろ歸らうぢやないか」とK君は肩をすぼめながら言つた。

私は桔梗や女郎花の花を手折つて來て、墓の前に二つ並べて立ててある竹の花立の中へ差した。

（大正八年十月箱根舊本陣の一隅に坐して此の稿を草す）

# 未決囚

山中峯太郎

獄を出て、わたくしの右手は、今、ペン軸を再び握つてゐる。

「自分」は、不斷に變改せられつゝある。代謝の作用が刹那ごとに、しづかに施されつゝある。ペン軸を握つてゐる自分は、元より常住のすがたではない。しかし、自分に執し、同時に、自分を反映してゐる「事實」は、その時に既に在つた不滅の象として貽つてゐる。

その實在——その自分を、「今」の上から、あらためて觀なほしたい。やがて代謝變改の跡を、成し得るかぎり鮮やかに眺めたい。

殆ど一ケ年に亘つて「未決囚」としての自分が、既に在つた。こゝに、舊い屍骸が、横に倒れてゐる。これは私自分の前身であるのに相違ない。同時に、全くの他人であるのにも相違ない。さきに、わたくしは、獄のなかにゐた自分の内外事を、後の日の自分のために、書いてをいた。それを書いてゐるうちに、幾度も思ひついてゐた。それは、

「この獄の以前に、猶ほ一つの、別の獄があつた。そこに、未決囚としての、自分の舊い屍骸が、横になつてゐる。もし機會があるならば、これをも合はせて書いてをかう。今の自分からその時の自分を觀つゝ。」

中央公論の、瀧田樗陰氏から、十一月號の《獄を出て》に書き漏らした事があるならば、それを書くやうにとの、御希望であつた。しかし、わたくし自身は、書くならば「未決囚であつた時の自分の内外」を書きたく思つてゐますから、それを載せていたゞきたい旨の、御返事を申上げた。お約束が直ぐに結ばれた。追懐、さらに追懐――。

舊い屍骸が、決して屍骸ではゐなかつた。むく〱と跳ね起きて、わたくしの胸をめがけて、兩手を高く擧げて、驀然と躍りかゝつてくる。生きてゐる。

「おゝ、おまへは、生きてゐたか」

から言はうとしてゐる際に、忽ちたちに、同じりでまことに強く雙方から、がつしりと、抱擁した。一つになつてしまつた。

わたくしは、瞼を、たらした。眼のまへに、今さきまで、倒れてゐた屍骸は、今、その痕をも、止めずに、そこに、何も無い。虚無。

「何處に、往つたらう」

何も無い。

檢事のまへで、わたくしは、泣いた。

「罪を悔悟して、檢事廷で號泣した」

公判の、論告のうちに、檢事が、斯う言はれた。さう。わたくしは、號泣した。聲をあげて。それは、ほんとうの事であつた。

罪を、悔悟してゐたらうか。

檢事と、私とが、只だ一つの卓を隔てゝ、胸と胸とがすぐ近く對ひあつてゐた。そこに行つた者には、唯だ二人だけであつた。個人的な情緒が、少くとも私には容易に醸されてゐた。すが〱しい快感さへも、そこに伴なつてゐた。悪ろしさなどは、その場に、すこしも含まれてゐなかつた。そのうちに、二日か

三日か、經過した。毎日、晝のうちも、夜に入つても、檢事のまへに、しきりに喚びだされた。自分の犯罪を、わたくしはまだ告白してゐなかつた。黒い大きな塊を、深く、嚥みこむでゐた。それは、濃い泥水の底に、鐵丸が沈むでゐるやうにすこしも、溶けなかつた。

『勝敗は兵家の常とも言ふではないか。君も敗れて斯うなかつた以上は、潔く、潔白に言つてはどうです』

『全國に檢事が千人もゐるし、引致されて來る者も幾萬とゐる。そのうちに私と君とが斯うしてゐるといふのも、何かの因緣なんだらう。私は決して重い刑を科しはしない。言つてしまひなさい。あまり長びいてゐると、憎しみが、かゝる。憎しみが』

檢事の、これらの言が、わたくしの表面を、たゞ意味なしに、掠めてゆくのにすぎなかつた。そこに、檢事その人の、人格――個性が、どこにも無かつた。「檢事」その職務の表面と、その直ぐ前に腰を掛けて、內に黒い塊を深く藏してゐる私の表面とが互ひに表面ばかりで、應對してゐた。互ひに纏れてゐたけれども、渴きはてゝゐた。それでも、わたくしの內部には、黒い塊を藏してゐながらに、いつのまにか、檢事その人に對して、主觀的な、親和な情趣が、みづから且つ自然に造られてゐた。檢事にして檢事ならぬ人が、そこに、確かに在つた。私の內部に映つてゐた。然しその人の內容を、わたくしは、具象的に意識し得なかつた。それは、「人」であつた。誰れでも人類が共有するところの。

苦るしくも、深く嚥みこむでゐた黒い塊を、吐きだすべき時が、遂に來た。「檢事」の訊問は、わたくしの犯罪の內容に、奥ふかい刺突を、俄かに差し入れた。その人の、滿面を引き緊めた險はしい表情と、叱責してかゝる烈しい氣勢とを、見るよりもさきに、

「潔く現はれて、清くなれ。清淨に。さあ、清淨に」

裏に、一刹那に、忽然として湧き起こる、明きらかな衝動に、わたくしは擊たれた。至純な、咄嗟な、自分のものではない、しかし裏に閃めいた、强大な力に、わたくしは、忽ち烈しく擊たれた。今まで、檢事その人の前に、おもてだけでは眞に確からしく、內實は常に苦るしい努力と共に、喘ぎつゝ纔かに立つてゐた、壁のやうな自分の表面が、一瞬のうちに跡かたもなく空しく倒れた。同時に、わたくしは盲目的に、卓のうへに、兩腕を、抛げだした。顔を俯せて、一時に湧いてくる、嗚咽の聲を、とゞめることが、できなかつた。大きな白いタオルを、帶に挾むで、腰のあたりに提げてゐた。それを、片手に、探りとつて、その中に、顔を埋めた。胸から上が、纖かく强く微かに

顫へた。切々と、息を短かく刻むやうに吐いては、一時に長い息を引いた。

「潔く現はしてしまへ。潔く」

猶ほも沸きたつ衝動の渦の、中心の力として、「潔く」とのこゝろが、わたくしに、最も強く迫つてゐた。その大きな掌の裡に、わたくしを、裏がはから新しく攫むでゐた。それに迫られ攫まれた私は、なに一言をも、検事のまへに、言ひだし得なかつた。それよりさきに、先づ飽くまで十分に泣いた。泣かされた。

確かに、確かに、それは、唯だ純な、自分を悔いてやまぬ涙ばかりであつた。自身の犯してゐる顛事そのものを、恨みつくしても、猶ほ盡きない、殆ど限りなく深い底から底からと、強く湧きあふれてくる恨みが、そのまゝ涙になつて、わたくしの顔を、タオルの中から、離させなかつた。

「もう、眞に、とりかへしのつかない、凶い悪い一大事」

涙のうちに、この意識が、初めて浮いてきた。その一大事を、他ならぬ自身が自分で、既に全く犯しをはつてゐる當面の悔いと恨みとが、わたくしを、刻みに刻むで、止まなかつた。

「誰れも、始めは泣くのです。私も貰ひ泣きをしました」

わたくしの涙が、すこし治まりかけたときに、検事が、かう言はれた。しかし、この言も、泣いてゐる私の表面を、たゞ掠めていつたのにすぎなかつた。

わたくしは、それまでに、法律書の一枚をも、かつて披げたことがなかつた。たゞ自身の既往を、一瞬のうちに顧みて、苟しくも法律に觸れてゐるらしく、自分で思はれる自身の一切の行事の、記憶に浮いてくるかぎりを舉げて潔く、涙の下から、縷々と述べはじめた。其の陳述の事々を、今から思ひ出してみると、法律の上からしては、すこしも取るに足りない、人の日常の茶飯事にすぎないやうな類のものゝ方が、却つて多かつた。

私の述べつゞける一々を、鋭利な緻密な表情をしつゞけて、緘かに聴き取つてゐられた検事は、其の蒼白さを益々引き緊めて、一方には猶ほ其の裡に、いかにも困惑した傷ましい感情を別に新しく蔵してゐられるやうに見えてゐた。

『まだ私は悪るい事が有ります』

述べてゆく一つの事ごとに、私が斯う言ひはじめると、検事の敏感な眸が、その度びごとに、暗愁な気色を帯びて、わたくしの顔を、憫けなさゝうに、不憫さうに、視つめてゐた。そこに、傍らの扉が、わたくしに、全く意外に、外から開かれた。

和やかに見える、然し、嚴さと、烈しさと、鋭さとなことを、充ち〳〵させてゐる、然も極めて中背な、中年の紳士が、

上履を穿いて、柔かく、ゆつたりと入つてきた。

『識つてゐますか。この方を』

検事から、わたくしが、かう訊ねられた。泣いてゐた私は、ただ從順な、單一な氣もちのまゝで、

『いゝえ』

とだけ答へた。

『小原検事です』

新聞の社會部の記事のうへで「小原検事」の四つの活字の組合はせを、私は記憶してゐた。慄れた人に紹介せられた氣もちになつて、わたくしは椅子を離れた。其の人に一揖した。小原氏の深みのある瞳が、何か知りがたい含蓄の有る會釋をかへした。

直ぐ側に火鉢があつた。タバコの「三笠」を取りだして、その扁たい紙箱の中の、紅い包み紙の裡から、小原氏が一本を撮みとつて、私の瞳を視つゞけつゝ、徐かに喫煙しはじめた。その「三笠」の一本が、その時の私に、いかにも欲しかつた。老練な一漁夫が、千尋の波の底から、辛うじて擧げてきた網をひろげて、かなりに手應へのあつた獲物を、今や漸くの思ひで、まさしく手に入れ得た悦びに耽つてゐるやうな、さうした滿悦な氣配が「三笠」の煙を喫みつゝ私を眺めてゐられた小原氏の猊の上に、［illegible］のやうにたゝつてゐるの［illegible］わたくしに［illegible］た

然し、「悉く」告白しきつてしまふべき、衷の強迫に衝かれて、それを滿足せしめる必然の努力の爲に、私は、すでに亢奮してゐた。有らゆる惡事を、告白しつくす自分の現在の心事と態度とが、直ちに自己の大きな滿足そのものになつてゐた。そこに小原氏の態度の内容などを、感じつゞけてゐる、餘裕はすこしも無つた。自分に復へつて、私は、またも、

『また私は惡るい事があります』

を、更に幾度か繰りかへした。それと同時に、猫が鼠を捕つてきて、主人の膝の前に近づきつゝ、其の口に啣へてゐる獲物を主人から『おゝよく捕つてきた』と讃めそよされてゐる、猫の心に符たやうな卑い阿諛的な感じを、検事の兩氏が揃つて並んでゐられる前に、わたくしは獨りで懷いてゐた。その猫のごとき私は、むしろ乘り氣になつて、ますく勢ひよく、さきくの惡事を、陳述しつゞけて行つた。またそこに、亢ぶつてゐる神經、沒思慮な輕卒などが、互ひに絡みあつて、躍り亂れてゐる私の唇から、「聽取書」が、検事の右手にある毛筆によつて、すんくと速抄して、幾枚も調製せられてゐた。

聽取書の、最後に、検事が、殊に手迅く、自署された。わたくしは、首をのばして、其の自署せられた四字を、讀みとらう

とした。その人の姓名を、わたくしは、當然に、ほんとうに知りたかつた。檢事の、雙つの濃い眉が、痛さうに動いて、眉間に、深い長い縦皺が、幾つも激しく流れた。「岩松玄十」の四字を、わたくしは熱心に讀みとつて、凝視した。岩松氏が、前に言はれた『私と君とが、斯うしてゐるといふのも、何かの因縁なんだらう』その「因縁」を、私は始めて省みた。また、「玄十」との二字の意味を、考へつくことができなかつた。それに就いて、岩松氏の父上なる方が、何とはなく、儒教——漢籍に深い、素養のある、鶴のやうに白い、老いた、嚴格な方であるらしい氣もちがされた。

その夜に、わたくしに對して、犯罪の一つが、起訴せられた。敢て「盡く」した告白のうちの、大多數の犯罪が、檢事の起訴そのものには、何の用もなさなかつた。その告白、卓のうへに胸を俯せて、大きなタオルの中に面を埋めて、たゞ自身を悔い且つ恨む涙のうちから、私は、先づ第一に、果たして何を陳述したか。——親たちのこと、義弟のこと、子供たちのことなどが、涙と共に、私の脣を衝いて最初に湧いて出た。

自分の屬する二つの家のなかに、久しく蟠まつてゐる、縺れがたい桎梏の輪が、幾重にも重苦るしく、私一人を取り圍むでゐた。その中心になつてゐる私の、肩のうへに、頭のうへに、絡み纏ひついてゐる哀しく苦るしい繋累の總べてを、わたくしは擧げて盡く餘儀なく、負擔してゐた。それらの、もろ〳〵の葛藤を、わたくしは、檢事の前に、涙に咽びつゝ、迸りに述べつゞけた。それらの事々が、そのとほりに、聽取書のうへに、載せられていつた。

述べつゞけた其れらは、すべてが眞實な事ばかりであつた。故意に作爲した虛構は、毫しも無かつた。然しながら、自分を幾重にも圍繞してゐる、煩らはしい苦るしい、もろ〳〵の繋累を、縷々と述べつゞけてゐた私の、言の外には、それらの繋累から受ける自分の負擔が、犯罪の起因になつてゐる旨を、檢事その人の前に、涙をあはせて、切に潛かに愬へてゐたのであつた。

支那の、第三次の革命的擾亂が、始まる前であつた。その國の人なるW氏、わたくしに最も親密なW氏が、曾てから久しく企圖してゐた革命に關聯のある極めて秘密な、一事があつた。私は、殆ど身を挺して、其の企謀に與かつてゐた。事の內容の極く機密に屬する一切を、W氏は私に盡く解放しきつてゐた。企謀の樞機に自由に觸れることをも、また深く容してゐた。事はW氏その人にとつて、最も重要な企てゞあつた。二人が斯くて密かに謀つてゐた其の一つの策略は、其の國の資料を先づ蒐集しやうとして、關係のある各方面に交渉するとゝに、最初の

うちは稀に行惱むでばかりゐたけれども、私が其の奇界に關與し始めてから、概ね一年の後に、遂に一つの端緒を、二人は漸く攫み得た。そこに、W氏から受領すべき總額のうちから、先づ四千圓を受取つて、同時に、私が屬してゐた新聞社からも、支那に特派せられて、一つにはW氏と親しく協力して、企謀してきた爾來の奇界を成就するために、一つには新聞社の特派員としての通信資料を採るために、私は、上海に往つた。――やがて袁總統の死と前後して、東京に歸つてきた私は、上海で遣ひ剩した金額と、新聞社から渡された手當金との全部を擧げて、其の額を「株」によつて殖やすことに、潔く熱中しきつてゐた。

「株」の時價は極めて鋭敏に昇降しつゞけた。その激しい動搖が齎らす、神經的な尖つた刺戟を、私は、ひたすらに悅んでゐた。それが損をしてゐても儲けてゐても、「株」の賣買から離れることが、遂に不可能でゐた。その私の生活の中心は、家の外に、遠く逸し去つてゐた。一新聞記者として有るまじき程度の贅奢な、腐爛した一つの域のなかに、いつのまにか、深く浸かつてゐた。前に陸軍の中尉として給せれてゐた俸給の額に、十數倍するほどの遊蕩費を、自由に遣ひ歩いてゐた。自分の屬する二つの家のうちに蟠まつてゐる桎梏、その諸々の繫累に對しては、それらが存在するまゝに、自分の外に殆ど拋棄してゐた。更に何の顧みをも、そこに描いてゐなかつた。

晝は、新聞記者として、眼前を常に流動してゆく時局の、眩ろしい變化のうちに、弄ばれてゐるやうな自身の奔放な現在を、私は、まことに快いものに肯定してゐた。夕と夜は、隨所のカフェの椅子のうへに、こゝろあたりの料理屋の階上に、劇場の棧敷に、待合の奥に――など、太陽が沈みはじめると、新聞社の門から、その夕ごとの氣分を趁ふて、私のこゝろも身も四方に流轉し廻つてゐた。夜ふけて、自動車に運ばれて、市の郊外の借家に還つてくると、家の一隅の室の火鉢のそばに坐つて、晨かけて、雜誌の方々に送る原稿を、タバコの煙のなかに、書きつゞけてゐた。その生活の意識に、朝が無かつた。二つの家の親たちの老いも病ひも無かつた。義弟の將來も無かつた。子供たちの健康も無かつた。妻の嘆きも哀しみも無かつた。その私が、自分の犯罪の有らゆる一切を、清い衝動に迫られて、「潔く」告白しやうとして、また最も眞面目に、先づ最初に陳述し始めた當面の第一事は、自分の範圍の外に昨日まで殆ど拋棄してゐた、親たち、義弟、子供たちなどに就いての、近い過去や現在の事情などを、涙のしたに續々と述べたのであつた。その涙の下に、それらの事情が犯罪の起因になつてゐる旨を、陰に愬へたのであつた。

――最初に、強烈な清い衝動を受けて迸りでた涙は、まことに悔恨の至情を露はした、我れならぬ純な涙であつた。陳述した事の一々も、總べてみな眞實事であつた。それと同時に、その眞實事を容易に利用して、虛僞な自身の窮狀を、言のそとに陰に愬へてゐる奸詐な自分が、根柢に大きく横たはつてゐた。邪惡な自分が、清潔な第一の衝動を、既に痛切に裏ぎつてゐた。裏ぎられつゝも、涙は長く流れた。大きなタオルは、したゝかに濕れた。しかし、裏に新しく動いたものが、すでに動いて必然に表に出るのと共に、すぐに其の裏に、邪惡な奸詐な從前の自分が、瞬くひまに、知らぬまに、一面に擴がり充ちてゐた。

わたくしは、謂はゆる罪を、たしかに、深く、全く、悔悟してゐた。――と思ふ。同時に、その悔悟した瞬時の後に、また別の罪を既に犯したゐた。更にその後は悔悟しつゝ同時に罪を犯してゐた。私としては、そのどちらも、決して、うそではなかつた。

「妻は、どうするだらう。妻のこゝろは――？」

自分の犯罪を、悉く告白してしまつた。それにつけて私は直ぐ後に、この一つの觀念に、烈しく囚はれた。「妻に――？」

――妻の父と、母と、私と、妻と、子供と、六人が同居して一

ゐた。一月二十五日に、母が、亡くなられた。その十四日後の法事を、すこしでも營まうとしてゐた二月七日の朝に、父が腦溢血に冒された。卒かに倒れられると共に、其のまゝ半身不隨になつてしまはれて、大學病院のなかに　たゞ仰むいて言ひ得ずに、或ひは潸然と泣かれた。或ひは嗒々と笑はれた。そのまゝ一月あまりすぎた。三月二十八日の朝はやくに、わたくしが俄かに二人の刑事に引致せられた。妻と、二人の子供とが家に殘された。わたくしは、自分の犯罪を暴露した。その後が、いかに成り行くのか、それは、わたくしにさへ、すこしも分からなかつた。妻なる人の、内に潛むでゐる烈しい氣象を、私は、更に、深く憂ひ惧れた。

『お願ひがあるのですが、お聽きとゞけ下さいませんでせうか』

警視廳で、わたくしは、有松警部に、から言つた。家の階下の室の、戶棚のなかに、自動拳銃を、私は入れておいた。それは七發の彈丸を塡めて、支那で携へてゐたのを持つてかへつてきたまゝになつてゐた。長崎の警察署で、下附された、拳銃の構造機構を、妻に說明したときに、その自動式の精巧な機械裝置を教へつゝ、わたくしは、その鋭敏な作用を惚れ誇つて、妻の「その前に、いろ／＼說明した。その操縦法を、妻に、くはしく

く幾く數へられてゐるのだつた。その人が、若しも小さな安全栓を、爪さきで、Sの刻印からFの其れへ移し動かして、引き金に、食指をあてるならば、すでに裝塡されてゐる七發の彈丸を直ぐに――、ちようど其の月か、前の月かに刊行せられた「婦人公論」のうちに、夫が檢擧せられた爲に、その妻なる人が、幾人かの子供を殺しつくして、それと共に自殺し果てたとの、おそるべき記事が、かなり詳らかに載せられてゐた。わたくしは、それを私かに深く記憶してゐた。今、彈をこめて引き金を、ひくばかりにしてある拳銃が、戸棚の襖を開けば、すぐ其處に横になつてゐる。その彈丸が七つも塡まつてゐる。迸りでやうとしてゐる鋭い殺戮的な潜力が、誰れを的にして、そこに藏されてゐるのか。亡母の眞新らしい位牌を佛壇のなかに、半死の父を病院の奥に、犯罪と刑と未決のまゝの夫を獄中に、幼い兩兒ばかりを左右に、それらの中心に獨り坐つてゐるのが、妻その人であつた。その人のすぐそばに、無意識に横になつてゐる拳銃の存在を、わたくしは、ひたすらに畏れた。

『どなたか、お使ひを私の家まで願へませんでせうか。下の部屋の戸棚の中に、右の方をあけますと、拳銃と、彈の箱とが入つてゐるのです。彈もこめてありますし、妻のために萬一の危險でもありますと』

わたしは、重ねて斯う言つた。有松氏は、この願を、すぐに容してくださつた。風邪に冒されてゐるらしい、白木綿の手帛を頸に卷いて、いつも懐手をして、有松氏の直ぐ後に、一人の刑事が、薄く笑ひながら佇んでゐられた。この人が、わたくしの家から拳銃と彈丸とを取つてくるために、すぐに往つてくださることになつた。

『ありがたうございます』

と、その人を見あげつゝ、わたくしは感謝して言つた。その人は、まだ笑ひながら、默つて頷いて、懐手をしたまゝ、扉を腕で開けて、ゆつくりと出てゆかれた。警部も、刑事たちも、わたしが未だ頑強に、自分の犯罪の殼を堅く閉めてばかりゐた時には、まことに無情な冷たい一面のみを、むやみに見せつけるやうにして、私の胸さきに、壓しつけ壓しつけして、猶ほ、いかにも憎惡すべき執拗な粘着性が、そこに力づよく現はれてはびこつてゐた。然し、わたくしが既に檢事のまへに、犯罪のすべてを陳べをはつて、警視廳に復た還つてきた時には、誰れも皆が、一樣に、親切な愛すべき人だちとして、わたくしに全く新しい好感をもたせた。更に其の人達と互ひに協調してゐる異樣な境遇上の親しみを、わたくしは期せずして與へられた。さきには、「牛頭馬頭」の四字を、わたくしは幾度か思ひだした。後

には、「馬頭觀世音」と刻むである石碑が、田舍の路のかどに、しばしば立つてゐたのを、おもひだしてゐた。

有松氏と、わたくしとが、しばらく話しあつた。自分の罪惡を強いて掩ふて、有松氏を三日のあひだ著るしく欺いてゐたことを、わたくしは、つゝしむで詫びてゐた。そこに、頸卷をしてゐた刑事が、拳銃と彈丸の箱とを、懷のなかに重さうに入れて、私のそばに歸つてこられた。大きな安心が、わたくしを厚く蔽ふた。

『すぐにお渡しいたしましたか』

と、わたくしか訊ねてみた。

「えゝ、すぐ』

その人は、いつも獨りで笑ひながら、また話す對手の顏を、かつて少しも見ることもなしに、たゞ自分ばかりが一人でゐるやうな風に始終默りがちで、すべての應對にも言の數ない、やさしい氣もちを湛へてゐる人であつた。氣分が餘も靜してゐながら安心してゐるやうな人であつた。その人が、今、わたし自身の家に往つて、わたくしの妻なる彼女と會話もし、子どもたちをも目にしてきて、直ぐまた私のそばに還つてきた――そこに私は羨ましさに堪え得ぬ甚い渇きを覺えた。その家のなかの現在の消息が、わたくしの胸に、全く分らないのであつた。自分が引致せられてから、僅かに三日後のことではあつたけれども、その三日の間に當然に大きな激變が、家のなかに何等かの渦を卷いてゐるのに違ひなかつた。

「どうしてゐましたか」

この一つの質問を、私はしたかつた。その要求はわたくしの殆ど全部を、つよく動かして、すでに口を開かせやうと內から迫りきつてゐた。しかし、そのまゝ默つてゐた。たとひ其れに對する答を、その人から如何に多く聞き得たとしても、それが今の自分に、何にならう――餘儀ない諦らめが、わたくしの胸に、苦い蔭を置いた。わたくしは、頂垂れて默つてゐた。

家から警視廳へ、わたくしを引致してきた刑事の二人のうちの背の高い方の人が、扉を強く開いて室に入つてきた。その人と、頸卷の人とが、かはるがはる拳銃を遣りとりして、わたくしの說明を聞きつゝ、漸く、六發だけの彈丸を、それを一列に組みあはせて挿むでゐる小さな鐵の板と共に、拳銃の身から拔きとつた。最後にまだ殘つてゐる一發だけが、すぐに射撃される位置をとつて、拳銃の中心部にとまつてゐた。それを更に拔きとることが、背の高い方の人に、何としてもできなかつた。これも煩はしい役分を、眺めてゐた私は、右手を差しだして、

『わたくしが致しませう』

と、聲をかけた。

『いゝや、君には觸はらせない』

有松氏が、すぐに制服的に斯う言はれた。その親切な杞憂をかしくおもつて、わたくしは、小いさな聲をだして、この時に始めて笑つた。三日あまりのあひだ、さま〴〵の感情に、引き緊められてばかりゐた兩頰の肉が、久しく絶えてゐた笑に綻つて、笑つてしまつた後にも、かすかに痙攣しつゞけてゐた。

『なに、おれも軍隊にゐたのだが、ピストルぐらゐ』

背の高い人は、反抗的に鋭い聲で言いつゝ、猶ほ拳銃を様々に翻へして、逆さにしてみたり、或ひは筒のなかを透かして見たりしてゐた。

『ちよつと、この雷管は、どうなるんです』

頸卷の人の、しづかな聲がした。その人が、彈丸を一列に組みあはせて挿むでゐる鐵の小さな板を、毒蟲でも掴つてゐるやうに、提れを含むだ手つきをして、わたくしの前に、持つてきた。その鐵の板から、彈丸を一個づゝ脫しとるために、爪のさきが、彈丸の底に篏めてある小さな雷管を、衝くやうになるのを、頸卷の人が、よほど危く提れてゐるのだつた。その人は亢奮して瞳と頰とが充血してゐた。それを受けとつて、彈丸のすべてを私は鐵の板から脫しとつた。頸卷の人に渡すと、その人は、小さな嘆をしつゝ、わたくしの顏を此の時に始めて見て、やさしく笑つた。わたくしも微笑した。『鯱はつたピストルだ。君も、このくらゐな事件で、まさか妙な氣もおこすまい』

と、背の高い人が、すでに持てあましてしまつたらしく、拳銃を、わたくしの方に、無造作に差しださうとした。すると、忽ち、

『いゝや、いかん。人は、ふいと何時にも、どんな無分別をやるかわからん――』

有松氏の、神經性の勝つた蒼白い圓い顏が、始終いら〳〵と動いてゐる濃い瞳を、猶ほ急に強く輝かして、わたくしの顏を直ぐ横から、烈しく視つめた。その氣勢に、背の高い人は、忽ち遮ぎられた。また反抗的に、

『それぢや――』

と、言ひつゝ、その人は、拳銃の筒さきを、下にむけて、引きがねを、幾度か引いた。拳銃は默つてゐた。有松氏が、更に眉を狹く顰めて、背の高い人の手の裡に默つてゐる拳銃を、凝視しながら、

『どうも、君は、實に危險物を持つてゐる――』

斯う言つてゐるときに、すでに熟れきつてゐる背の高い人の左手の指さきが、たま〳〵安全栓を試み動かしてゐるのを、わ

たくしは見た。「危い――」と、わたくしが思ひつくや否や、拳銃が不意に發憤して一喝した。空氣が、千斷れた。室のなかの總べてが揺れた。有松氏の足もとに、鐵の大きな火鉢が燃えたつ炭火と共に有つた。椅子によつてゐた氏の黑い長靴が、一氣に飛ぶやうにして、火鉢の上を跨ぎ越してしまつた。扉の方に奔つた。

『や』

と、背の高い人の發作的の聲が、聞こえた。

一發を過まつて射擊せられた殘りの彈丸と共に、その拳銃はそのまゝ有松氏の手もとに、今もなほ預かつていただいてある。

同じ新聞社に勤めてゐた、薄井秀一氏が、わたくしの上を心配して、警視廳に、たづねて下さつた。夕に夜に遊蕩しつづけてゐて、貯蓄といふことを、わたくしは、すこしも識らずにゐた。懷中してゐた革の紙幣入れのなかに、幾らの額が入つてゐるのかも、さがしてみなければ、分からなかつた。「中央公論」の其の年の春季增刊號に、大窪逸人といふ變名で、わたくしは、「黑髮」といふ、かなり長いものを書ゐた。それの原稿料のうちの幾らかゞ、紙幣入れのなかに、まだ殘つて幾枚か挾まつてゐた。わたくしは、其れを盡く拔きだして、薄井氏に渡した。妻に與へてもらひたいことを氏に委託した。同時に、

「この他に、一文も無い。總一文も」

わたくしは、かう思ひつゝ、空になつた紙幣入れを、懷中に收めた。この時に、「妻」といふ意識が、結婚して後に始めて自分の裏に、刻みつけられたやうなのを覺えた。

『よし、奥さんに之れを渡さう。切符はどうした』

と、薄井氏の繊い白い眸が、わたくしの顏を、まともに瞰ろしてゐた。

『大竹に、やつてをいた』

『誰れかゞ行くね』

『さうだらう』

帝國劇場の、その月の切符を二枚、わたくしは、薄井氏から貰つてゐた。原稿料の剩餘も、劇場へ往く時と、劇場のなかとその歸りみちとの、食事を何處かでするために、紙幣入れのなかに殘されてゐたのだつた。「株」の魔手は、すでに私を振蕩しつくしてゐた。わたくしが、おもに遊蕩してゐた待合の「大竹」の、門の内の白い敷石を、わたくしは已に二月ばかり見ずにゐた。「株」を賣り買ひした紅や綠の字の證券の殼ばかりか、幾葉も、家の机のなか、紙屑の籠の底に、いたづらに死んでゐた。そこに生きてゐる餘力が、すこしも無くてゐた。わづかな借金が、「大竹」の大福帳のうへに載せられてゐたのを、わたく

しは、其の帳場で戯れながら投げてみたりしてゐた。二月の後の、ある日の昼まへであつた。燗熱した酔の醒めてしまつたあとに、泡の消えた炭酸水を飲むやうな気もちを抱きながら、「大竹」の帳場を、不意に訪ねて往つた。懐にしてゐた紙幣入れを、皆のまへで振つてみせた。薄井氏から貰つてゐた帝国劇場の切符と、幾枚かの紙幣とが、膝のうへに、散らばつた。それを、女中がしらの、おひろさんに渡して、わたくしは、新聞社に歩いて帰つてきた。

「あの紙幣が、今、あつたら――」

わたくしは、警視庁のなかで、薄井氏に、妻への紙幣を頼み渡すときに、たま〳〵斯う思ひついた。新しい苦笑を覚えた。同じ十円だけの價をもつてゐる紙幣が、時所の差別と共に、その價を著しく實際に高低する、當面の平凡事から、わたくしは、痛いほど強く冷笑された。

――今、この原稿を、こゝまで書いてゐるところに、妻が、茶をいれてきた。煮たばかりの熱い白餡を盛つた皿を、襷がけのまゝで持つてきた。

『あの時分に、僕がひどく遊んでゐたのを、すこしも気がつかなかつたのか』

餡を匙ですくひながら、たま〳〵訊ねてみた。

『えゝ、新しいお札が、とき〳〵入つてゐるので、妙だとおもつてゐたんですの。でも、疑ふことはいけないと思つて、疑はずにゐました。どうして？』

然り、わたくしが悪るかつた。

〰〰〰

千九百十七年、四月、一日。午後、五時ごろ。一台の囚人自動車が、警視庁の横から、日比谷公園の前をすぎて、外務省の隣の、緩るい勾配を、麹町の方へ登つて往つた。

その自動車の隅に、わたくしは腰をおろしてゐた。鐵の手錠を嵌められてゐた。その手錠を貫いて、隣りにゐる人の手錠に、更に其隣りの方に、同乗して居る十数人の手錠から手錠へ、一條の強い麻縄が、横に長く繋がりつゞいてゐた。いつのまにか、わたくしは囚人になつてゐた。車中の誰れもの手錠を貫通してゐる麻縄の端を、わたくしの前に坐つてゐる一人の巡査が、極く握つてゐた。その白い手袋と黒い縄の端とを、わたくしは、しばらく眺めてゐた。鐵窓の隙から洩れてくる薄あかりが、人々の顔を、暗く暗黒く映しだしてゐた。誰れも黙つてゐた。いろ〳〵の瞬が動いてゐた。

囚人自動車が、停まつた。そこが、監獄であつた。いろ〳〵

の雑多な手つゞきの後に、夜おそくなつて、わたくしは、監房のなかに拘り入れられた。石のやうに硬い畳が、わたくしを愕かせた。坐つたときであつた。その刹那に、

「萬事休す」

たゞ此の一つの絶望のみが、その刹那の私自身であつた。その他に、何も無かつた。さう意識したときの、直ぐあとに、その時まで耐え忍むでゐた内外の疲憊が、一時に、わたくしを襲ひはじめた。わたくしは、そこに坐つたまゝ、うつら〱と昏く睡つた。不意に何ものかに撲たれて、眼をさました。と思つてゐるうちに、また直ぐに睡りに牽かれて往つた。睡つては直ぐにまた何ものかに衝き起こされて覚めた。覚めては睡り、睡りかけては覚めた。それが頻繁につゞいた。遂に我れ知らず睡りつゝ魘されてゐた。覚めたときに、昏のうちに、濁つた声が残つてゐた。猶ほ遂には睡つてゐるのか覚めてゐるのかゞ、自意識のうへに、全く昏く渾沌として不分明になつてしまつた。わたくしの全部が、内も外も朦朧として、どこかに沈むで行つた。

「何かゞ居るな。誰れだ、こんなに、おれを悩ますのは」

これだけの疑ひが、残つて居た。その後のことを、わたくしは知らない。

獄のなかの第一夜を、その後、いかにして眠りに就いて、その夜を明かしたかを、わたくしは、今、すこしも記憶してゐない。印象の最も深かるべき其の夜のことを、不思議にも全く忘れはてゝゐる。印象し得ないまでに、全く悩み乱れてゐた故えかとも思はれる。おそらく然うであらう。従つて、その大きな悩みが、何処へ往つてしましたかさへも、やはり同じく、すこしも記憶されてゐない。意識の外から外へ、どれだけの夥しいものが、殊に其の一夜のうちに、流動して往つたことだつたらう。現在斯うして原稿を書いてゐるうちにも、意識の圏外に、自分のほかの自分の何かゞ、默つて動いて、次ぎから次ぎに移つて往きつゝある無数のすがたを感じる。遠くに、近くに、また自分の直ぐ胸さきにも、自分のほかの自分が、幾つも分派的に生きて動いてゐる。一つの太陽系統に属する星の群が、更に一團となつて天界を運行してゆくやうに、わたくし自分の多くの群も、一つの環界を造つて、時と共に、ずん〱と現象界と無象界の中を過ぎて往く。その群のうちの現象の一人が、今、これを書いてゐる。

わたくしの、貴父も、貴兄も、貴姉も、大衆にゐる。更に、

大阪に、電報を打つた。質兄が、すぐに來てくれた。

豫審が、毎日、つゞいた。晝は、裁判所に私が運ばれてゐた。夜は、監獄に戻つてゐた。そのために、何を音信することも、誰れと面會することもできなかつた。たゞ辨當、布團、書物、仁丹などが、おひ〱に妻の名と兄の名によつて差入れられてきた。それだけが、獄の内と外とをつないでゐた。〻の、殊に家の消息が、わたくしには、すこしも分からずにゐた。

獄の面會所で最初に會つた妻の顔を、わたくしは、忘れることができない。おそらく生涯のあひだ、あの一つの顔を忘れないであらう。面會所で、わたくしの顔の直ぐまへに、鐵の網が張られてゐた。その直ぐ外側を、木の板が、私が立つてゐるところと、その外の狹い通路との、隔壁になつて、わたくしの視線を、近く遮つてゐた。やがて、木の板が、すー―と上に開かれた。鐵の網を透して、妻が、そこに立つてゐた。

妻なる人の二つの瞳が、劈かれたごとくに、大きくなつてゐた。鋭さに充ちてゐた。その二つの巨大な瞳が、哀しみに凝つて、爛々と、燃えてゐた。また冷たく硬く凍りきつてゐた。見るからに兩頰の肉が、すつかり枯れおちてしまつて、巨きな瞳ばかりが、蒼白い蠟いろをした死肉のうへに凝然と生きてゐた。わたくしは共れを見た瞬時に息をつめた。妻の變はつた化石したやうな貌を、悄き、作み、悲しみ、惜れた……

視まもつた。

二人とも、默つて、たゞ視つめあつてゐた。

二人の間に、看守部長が、立會つてゐられた。その人から、

『何か話が有るんでせう』

と、聲をかけられて、

『兄さんは。』

わたくしが始めて唇を動かして訊ねた。兄の顔を見たかつた。兄との面會を、わたくしは數日のあひだ常に強く期待してゐた。

『お歸りになりました』

『何處に』

『大阪に、一昨日』

二人とも再び默つた。兄が大阪に歸つたといふ、わたくしに全く意想外な事が起きてゐた。大きな不安が墜ちてきた。

『話は共れだけなのですか』

看守部長が、斯う言はれた。同時に、木の板が、する〱と落ちかゝつてきた。

『賴む』

わたくしが、我れしらず唯だ聲をかけた。

木の枝が、ぱたりと響をたてゝ落ちてしまつた。

『よろしうございます。お大事にあそばしてください』

遂に堰を除かれて、迸り出るやうな聲が、枚を隔てゝ、聞こえてゐた。

面會所から監房に、看守の人に、つれられて還つてきた私は間もなく、再び面會所に、つれられて往つた。囚人の有るところには、必ず鐵の錠が在つた。錠の無いところには、必ず看守人が戒護してゐた。

面會にきてくださつた人は、辯護士の櫻井長藏氏であつた。妻の父と前から昵懇であつた同氏の姓名を、わたくしは家のなかの話のうちに、前から聞き識つてゐた。その人の前に、單純な容態を、わたくしは感じた。初對面の挨拶を直ぐに終はると、櫻井氏は、一枚の罫紙を、わたくしの前に示して、『さあ保釋願です。拇印を捺しなさい。あなたの御義父さんが亡くなられたので、豫審判事に保釋を頼のむでみませう。それで、あなたの兄さんも、この電報を受けとられると、すぐに大阪に歸られたので』

罫紙の下に、電報用紙を添へて、櫻井氏の指さきが、そこに何の意味も無い白紙を押へてゐるやうに、殆ど無關心に二枚の紙を讀むでゐた。泉のごとくに湧いてくる悲しい哀傷を、わたくしは、獨りで靜かに制しつゝ、保釋願の文面と、電報文とを眺めた。その日は、四月九日であつた。六日に、義父は既にすでに亡くなつてゐられた、わたくしは其れを知らなかつた。その日は、豫審廷で、自分の犯罪を、しらべられてゐた。

「三日のあいだ、知らなかつた。三日遅れた。獄中で、訃音を、三日おくれて聞く――。濟まない、自分は濟まない。これをどうする」

自分の顏の皮膚を、日の光に其のまゝ觸れさしてゐることがすでに不所した大きな謀叛を犯してゐるやうな氣もちに、強く迫られた。あらゆる一切を否定したかつた。

「罪――」

わたくしは慄へた。泣き得ない涙を覺えた。保釋願に、默つて拇印を捺した。電報用紙を、櫻井氏の手に返へしつゝ、

『保釋はどうでせう。許されるでせうか』

殆ど發作的に、わたくしは訊ねた。初對面の櫻井氏に犇と縋りつきたい弱い自分の願ひを、別に存在する偽らない確かな自分心が、内から強いて抑へとめてゐた。

『さあ、分からんですな。豫審判事が保釋を許可するといふのは、ちよつとむづかしいかも知れない』

と、言ひつゝ、櫻井氏が僅かに笑はれた。さうすると、わたく

しも笑つた。たしかに笑つた。

櫻井氏と別かれて、深い編笠を冠ぶつて、――未決囚は監房を出るときに必ず編笠を深く冠ぶる――わたくしは、自分の監房に、つれられて還つてきた。

編笠を脫いで、扉の外の柱の木釘にかけた。帶を解き、襟を開いて、「搜檢」を受けた。監房の中に入ると、後で、扉が重い響と共に閉ぢられた。同時に、錠の掛金を締める硬いガチリといふ鐵の響が、わたくしを嘲けりつゝ憐れむでゐるらしく、わたくしに聞こえた。

疊のうへに崩れるやうに私は座つた。

前の年の十一月二十九日に、大阪で私の實母が亡くなつた。その死にぎはに、わたくしは遂に會ふことができなかつた。三十日の夜に、大阪驛に着いた。家の奧の疊の上に、薄い白毛布を敷いて、そのうへに橫になつてゐられた老母の、小さな屍骸を見ると、わたくしは其處にそのまゝ膝を折つて、泣きふした。母の靈魂が、そこから脫れて往つたのかと想はれる、無心に開いたまゝの小さな洞穴のやうな黑い口――、その屍骸と、その前に座つて、自分を忘れて泣きに泣いた自分を、わたくしは、面會所から還つてきて監房の中に、座ると共に直ぐに憶ひだした。寢棺のなかに屍骸が纖く仰臥してゐた。それを二階から運びおろさうとするときに、棺の端を持つてゐた一人が、屍骸の脚の方を、急に高く持ちあげた。屍骸の瞼が、その時に靜かに開いた。瞼のなかに、それは眞に、まことに麗はしい瞳が、想ひがけなくも隱れてゐた。すこしの濁りも無い純な、至つて深い悅びを湛へてゐる、透明な柔かな瞳を、その傍に宛かも立つてゐた私が瞰た。屍骸の頭の方が更に持ちあげられて、棺が直ぐに平衡に保たれた。屍骸は眼を元のやうに瞑ぢた。その稀有な美しい瞳を、ゆくりなくも視たときの驚異を、わたくしは續いて憶ひだした。その瞳は、實母のではなかつた。妻の母のであつた。

「あゝ養父が、また亡くなられた」

――實母の死、義母の死、養父の死、義父は半死のまゝに。五月に滿たぬうちに、わたくしの親たちは、草が風に靡くやうに、死の手に齊しく誘はれて往つた。猶ほ自分は、獄の裡に囚へられてゐながら、それでも、わたくしは、自分も死ぬといふことを、まだ少しも知らずにゐた。眞に露しも識らずにゐたのだつた、降るやうな死の警策の下に、悄然としてゐた――。

その未決囚としてゐた時に、妻からの手紙のうちの一節が、彼女の實父の病狀を報らして、

「やはり何も意識されずに只だ笑つてのみ居らるゝが淚のたね

にて候」

と、書いてきた。わたくしは、惻然として、この一節を、しばらく視てゐた。やがて、

「櫻井長藏様、御逝去あそばし〻御由、御通知これあり、お氣の毒に存じあげ候」

と、書いてきた。わたくしは、愕然として、この一節を、しばらく視てゐた。

然し、さうしてゐる自分も死ぬことを、尚ほまだ識らずにゐた、私は、今年の二月ごろ、赭い獄衣を着て、極寒の底に埋められて顫へてゐた前後に、漸く、自分も死ぬといふことに、始めて氣がついた。さうだ。わたくしは死ぬのだ。わたくしに、若しも「自覺」といふことが有るとするならば、それは唯だ、「自分は早晩死ぬ」といふ事、一つだけが「自覺」なのであらう。

『おまへは、二年半の獄中生活に、何をあたへられてきたか』

斯う訊ねてくださる人々に、

『たゞ一つだけ確かにあります。自分は死ぬものだといふ事だけを、わたくしは教はってきました』

と、直ぐに答へやう。答辭はこの他に無い。わたくしは此の一事を教へられたゞけで、二年半の獄の生活の報酬としては、それが既に餘り大きな尊い授かりものであったことを思ふ。今もあらためて新しい感謝につゝまれて、之れを書いてゐる。私には實に、その一つの授かりもので、澤山に充ち足ってゐる。

それにしても人々は、自分が死ぬことを、常識としても既に知ってゐられるであらう。この私といふ一人は、我が事ながら傷ましくも、四人の親たちの死に、つゞけて遭ひ、自分は自身の罪惡の爲に獄のうちに囚へられて、猶ほその他の殆ど算へ得ぬほどの手數を經て、始めて「自分は死ぬものだ」といふ一事に、辛うじて漸く氣がついたのであった。いかに頑愚な、執拗な、聾者のごとき、盲者のごとき、雜物であらう。謹みて、頭のさがるのを覺える。

わたくしが囚へられてから、五六日を過ぎた後の、夕がたであった。

力をこめて硬いものを、つゞけさまに撲つ、どゝゝゝといふ大きな、亂れた響が、わたくしの入ってゐた監房の直ぐ前の廊下に、けたゝましく湧きあがった。その全く不意な響に烈しく撲たれて、愕きと疑惑と不安とに、一時に襲はれつゝ、わたくしは直ぐに、廊のこゑに耳を寄せた。そこに、かけてある門がと

『観察口』から、すぐ外の廊下を、左に右に響をたづねて眺めまわした。

巨きな鐵錠によつて、封鎖せられてゐる監房の扉を、その内側から、大きな男が、おそらく雙方の腕に有るかぎりの力をあげて、連りに迅く打ちつゞけてゐる響であつた。樫か松かの角材を、縦横に幾つも組みあはせた、厚さが三四寸もあらうかと思はれるほどの、重い厳めしい扉が、いよ〳〵撓み曲げられてしまふのかと思はれるまでに、それを内側から打ちつゞけてゐる響が、わたくしを、更に新しく愕かした。何も無い洞の中のやうな長い廊下の空氣が、たゞむやみに、狂怒に、搖かされてばかりゐた。わたくしは「狂人が居るな」と、直ぐに想つた。

曠野から捕獲されて來たばかりの巨大なゴリラか何かのやうに暴れ狂ふて止まない、獰猛な黒い顔の男が、扉の裏に無慘に動き廻つてゐる態を、わたくしは復た直ぐに想像した。

『役人どの――。役人どの――。役人どの――』

たしかに泣いてゐる切ない聲が、扉の外の何ものかに縋りつきたさうに、叫びはじめた。ほの暗い赤い電燈のあかりが、廊下の床板の古い色を、薄く靜かに照かしてゐた。殘つてゐる不安と、新しい好奇心とが、私を動かしてゐた。

『お前は、また始めたな、もう夜分ぢやないか。何だと言ふん

だ』

看守らしい人の聲が、扉を打つてゐる響に交ちつて、嚴そかに聞こえてきた。同時に、騒がしい響が熄むだ。切ない聲が、扉の中から續いた。

『あれほど頼むだのに、頼むだのに、あれほど、ね、どうか電報を、もう一つだけなんですから、打たしてやつてください。お願ひいたしますから、ね、お願ひいたします。役人どの、あなたに頼みます――』

詫びるやうな、賺かすやうな、また切なく哀願するやうな其の聲が、私の好奇心を更に新しく躍らせた。廊下の兩側に長く列んでゐる數十の監房の中に、一人づゝ入つてゐる誰れも皆が聽く耳を一樣にすましてゐるのに、相違なかつた。

『一日に幾本、電報を打てばいゝんだ。打つべき必要があると上の人が認められたらば、勿論のこと許可になるんだ。お前は其の必要が無いんぢやないか。それに係の者も、皆退けてしまつた今ごろになつて、臨時に打たねばならんほどの電報がないんだらう。それだから、明日また電報願でも出してもらふ手續をすることにして、今夜は、もう直ぐに、就眠の時間だから、おとなしく寢ろ』

『いゝや。いゝや。その必要があるんですから。あるんですよ、

役人どの――』

『無いと認められたから、許されんのだ』

『有るといへば、有るんですよ。無理を言つてばかりゐなさるねえ。あゝ無理だねえ。無理だねえ。手續をしてやつてくださいな。お願ひなんですから、ね、ね、頼みますからと言へば頼みますから。どうかねえ――』

『わからぬ男だな。いかんと言へば、いかんのだ』

『そこがそれ、お願ひなわけぢやありませんか。ね、ね、さうぢやありませんか』

二つの聲が、交(か)はるがはる續いて、廊下に響いてゐた。

扉のなかの聲が、強みを帶びてきた。それに應じて、看守の穏(おだ)やかに諭してゐた聲も、やがて相手を制止するやうになりはじめた。然し「電報願」の手續をしてもらひたい扉の中からの願望は、すこしも怯(ひ)るむ氣配(けはひ)を見せなかつた。『ね、ね、』を、言(こと)のあひだに介(はさ)むのが、ますます多く重(かさ)なつてきた。それを看守の聲が、俄かに荒々(あら)しく叱咜した。

『默れ』

その看守の聲は、私の囁(ささや)きをも、不意に激しく撲(う)つた。私は眼を瞠(みは)つて、慄いて息を詰めてゐた。扉はそこに、それより以上に私を更に大きく脅かしたのは、扉の中の男より、看守の強烈な叱咜に、却(かへ)つて激發せられて、其れに刃向ひ反抗する不敵な氣勢を、扉を打つ響に漲(みな)ぎらして、復(ま)たもどゝゝゝといふ恰(あた)かも戦場の陣太鼓でも打つやうな響を、再び起(た)てはじめたことであつた。

それと同時に、

『默らん、默らん。あんたでは分(わ)からん。部長さんに願ふ。來てください。部長さん。部長さん。願ひます、願ひます、お願ひがあります。部長さん、願ひます――』

喉(こ)の奥を、急に傷つけられたやうな、かすれた聲を、強(し)いて絞りあげて、男は『願ひます』と『部長さん』とを切りに叫びつゞけた。それにつれて、ますます力づよく、扉を撲(う)ちに撲ちつゞけた。それに應じて、更に起こるべき看守の猛(たけ)ましい一喝が、然し何も聞こえなかつた。暫くは、扉の中に、喚(わめ)きたてゝゐる騒々(さう)しい聲(こゑ)のたかい聲と、亂打せられる扉の大きな低濁な響とが、獨りで勝手に跳梁してゐた。必然に現れて譴責すべき獄の中に、斯かる不敵な擾亂の演じられてゐることが、私に全く意外な出來ごとに違ひなかつた。その成行(なりゆき)を、今(いま)からさきに眼前に觀てゆく好奇心ばかりが、私を包みきつてゐた。そこに今までの怖さ、不安などが、すつかり消えてしまつて、當面の興味ばかりが、新しく湧きたつてゐた。

二三人の靴音が、それにつゞいてきた。

男は忽ち默つた、湖の上に、油を流したやうな靜寂な瞬間がそこに有つた。やがて、重い口調の、時々、叱るやうな濁つた聲が、暫く低く續いてゐた。男が諭されてゐるのに違ひなかつた。その聲が歇むだ。

『それぢや、明日願ひますよ。明日は、きつと、ね、ね』

嘻々と躍りあがるやうな男の聲が、はつきりと強く聞こえた。悦び、はしやいでゐる聲であつた。願が叶へられた大きな満悦を湛へて、亢奮しつゝ根柢から安心してゐる一人の男の微笑してゐる面貌を、わたくしは、漫然と想ひ描いてゐた。二三人の靴音が、また前のやうに大跨に小跨に亂れて聞こえて、遠ざかつて行つた。

宏大な獄の建物のなかに、自分一人だけが、囚へられてゐるかと想はれるほどに、すべてが靜かに侘びしい、夕から夜へ過渡する一時間たらずのあひだが、わたくしを、いつも苦るしがらせた。扉を撲つ男の擬いだ夜は、音と聲ばかりの劇を觀たやうな氣になつて、其の人の風貌なり年齢なり性格なりを、想像しつゝ夕から夜への時を移してゐた。わづかな興味もそこにあつた。

その人が擬ぐのは、わたくしが其の聲と響とを、はじめて聞いた夕ばかりではなかつた。二三日のうちに、必ず一度は、扉を割り撲くばかりの激しい響と共に、「切なく連呼する、『お願ひがあります。役人どの』と叫びはじめる聲が、廊下を擬がすのであつた。軒燈の光が、赤みを帶びて、すこし明かるくなりはじめると、わたくしは「今夜もまた聞こえるかな」と、その聲と響との單一な劇の場面を、夕ごとに期待するやうになつてゐた。その人の『お願ひ』は、電報の發信願を差出してもらひたいといふのに、常に定まつてゐた。その度びごとに、諭されたり、叱咤されたり、慰さめられたりしてゐた。廊下を巡廻してゐる看守との應對ばかりでは、その音響劇が芝居にならなかつた。その上の看守部長の聲か、看守長の聲かゞ、いつも場面に現はれて、その人の監房の扉の前まで出てきて、重要な役割をつとめてゐた。わたくしは其の主人公なる人の所作を、遂に或る時は憎むだ。また其の不敵な執着の強さに愕いた。かすかな同情も感じてゐた。

ある日の朝であつた。看守長に、「臨時發信」の許可を願ふために、わたくしは、その係りの看守長たちが居られる室のまへに、自分の順番の來るのを待ちつゝ、編笠を冠ぶつて佇むでゐた。わたくしの前に、看守長と已に會つて、何かを願つてゐる人の聲が、わたくしの耳を、忽ち惹きつけた。それは、扉を撲つて叫ぶ人の聲であつた。言の調もまた其れに違ひなかつた。編笠

の中から、透かして、珍異なものを認め得たやうに、その人を眺めた私の眼に、大きな體格の男の、横を向いてゐる高い立姿が、まづ映つた。その高い姿は、堂々として魁偉な、しかも、ゆつたりと其處に一場の重厚な品位を具へて立つてゐた。

その人が、電報用紙を幾枚も重ねて握つてゐた。その右腕を高くあげて、頭のすぐ上に振りかざした。餘儀なくも縮み着いてゐる幾重の深い事情について、看守長その人の同情と理解とに、懇ろに縋みすがりつゝ、延いては自身の現在を辿りに嗟いてゐるらしい聲が、その人の訛の強い唇から、熱心に吐きだされてゐた。その情願の內容を聞き知ることは、距離を隔てゝ立たされてゐた私に、すこしもできなかつた。しかし、その口調に條理が良く整つて、怜悧さうな閃めきを音の抑揚のうへに露はしてゐるのが直ぐに聞こえた。聲を撲つて叫び聲をたてる所作の狂燥なのにくらべて、現に眼の前に見る人の品位ある重厚な態度と、聰明さうな口調とが、其の人に對する私の前からの臆想を、潔く一時に崩してしまつた。編笠のなかで私の耳も目も暫く惚いてゐた。

暫くして、その人が、電報用紙を、懐中に深く入れた。看守長の前を離れると、其もとに置いてある編笠を、ゆつくりと取りあげた。わたくしの方に緩かな足で歩いてきた。五十歳前後の人であつた。闊い額の毛黒い顔に、威力のある濃い眉と、濃い太い肥重な鼻と、殊に豐かな切れの長い眸が優しい威光を含むで、大きく柔かく微笑して、わたくしを靜かに眺めた。そこに特質な温い包容性が現はれてゐた。自づから具へられてゐる儀度、雅致などゝもいふべき類のものが、確かに溢れてゐ、すくなくとも少將級か、中將級か、それも價は從來を豐かに越てゐる有爲の將軍に、こゝろをきなく面接してゐるのと、全く同じ氣もちが、わたくしのうちに催してきた。

その人は、編笠を悠然と冠ぶつた。わたくしの傍を、潤い兩肩を靜かに自然に揺つて、通りすぎて行つた。それに代はつて、看守長の前に、わたくしが出て行つた。「臨時發信」の願が、すぐに許されて、わたくしは、自分の監房に、つれられて還つて來た。

月曜日と、木曜日とが、入浴日になつてゐた。二尺四方も有らうかと思はれる極めて小さな浴槽が八つ、浴室の一方に横に一列に並んでゐた。その浴槽の一個づゝが、厚い高い壁に劃られて、長屋のやうに互ひに隣りあひながら獨立してゐた。八人の囚人が、各自に單獨に、其浴槽の中に入るのだつた。看守は、監房から浴室まで、一人を護送してくると、その代りに、又も前から入浴してゐる一人を、浴室から監房まで、前に護送し

て還るのだつた。かうした方法のもとに、一人の入浴時間は、自分と共に八人が、監房と浴室との間を、護送されて往復するだけの時間に相當してゐた。それは概ね五六分間ぐらゐの長さであつた。浴槽ごとに、出入口の木の扉に、鐵の小さな掛け金が外がはに附いてゐた。

　わたくしが入浴してゐた。兩腕を囘轉させて、切々と洗つてゐた。天井は硝子で張られてゐた。蒼い空のいろを、裸體のまゝで仰ぐことが、獄の中の驚異的な悦びであつた。蒼空と裸との交渉に「自由」そのものが反映してゐた。

『あがり』

　浴室を戒護してゐる看守が、器械的に斯う呼びつゝ、わたくしの入つてゐる浴槽の外の、掛金をはづして、扉を外に強く開いた。わたくしは外に出た。そこに護送せられて浴室に入つてきた一人の男が、編笠を脱いで、傍らの釘にかけてゐた。扉を撲つて叫ぶ人であつた。

　その人が、徐かに着物を脱ぎはじめた。ひろい筒袖の、厚いネルの暖かさうな着物をきて、白縮緬の帶を、無造作に卷きつけてゐた。見るからに寛濶なすがたをしてゐた。わたくしは着物をきながら、その人の總べてを、見るともなしに、氣をつけて眺めてゐた。純白な絹か何かの薄い肌着を、その人が脱いでしまつたときに、わたくしは思はず瞳を瞠つて息をつめた。幅のひろい巖のやうな胸から兩腕にかけて、一面の濃い紅、濃い綠、などの毒々しい刺物が、天井からの白い明かるい光に射られて、燦たる精彩を一時に顯はした。妖艶な強迫的な畫面が、綺い肌のうへに漲つてゐた。

『いつ見ても立派だなあ』

　看守が、おだてあげるやうに、斯う聲をかけた。すると、その人は、看守の顏を、ちらりと瞥て、

『えへゝ、またそんな事を言つて人を。えへゝゝゝ、冗談ばかり』

と、眞白な齒並が良く一列に揃つてゐる口を、隔たくあいて、さも嬉しさうに笑つた。扉を撲つて、『ね、ね、役人どの』と叫んでゐるのと同じ程度の低劣な知能が、そこに流れてゐた。今、看守からたとひ冗談の一言にでも讃めそやされたことが、すでに其れだけで、いかにも内に包みきれない大きな悦びに撲たれたらしく、その人は、さながらに嬰兒のごとくに、ころ〳〵と喜んで顏を崩して、軀を低めて、浴槽のなかに急いで、いそ〳〵と入つて行つた。その時に、背なかの豐かな肉のうへに、實物大の女の瘦せた繊長い顏が、正面を向いて、何か憤つてゐるらしい表情をしてゐるのが、看守の締める木の扉の影に、忽ち見えて直ぐに消えた。看守長に面會してゐた時の、その人の

風貌と言語と、浴室で見た際の其れとが、同一人のものとしては、少からず矛盾して、わたくしの感觸のうへに、そのまゝ去りがたく強く殘つてゐた。

　わたくしが囚へられて、二三日すぎた後の夜であつた。ある看守――こゝに假りにA氏としてをかう――が、わたくしの監房の前にきて、しばらく佇むでゐた。それが誰れであるのかを監房の中からは、始め少しも知り得なかつた私は、囚へられてゐる自分の現在のすがたを、他から眺められてゐることに、強制せられる壓迫を内に感じて、そこに浮動する當面の壓力の下に、凝然と自分を引き緊めて其の苦るしさを忍んでゐた。

『ちよつと』

　扉のそとで、かすかな聲がした。わたくしは項垂れてゐた顏をあげて、始めて扉の方を向いた。

『ちよつと、こゝまで』

　聲が、再び直ぐに續いた。わたくしは扉の下に近づいて往つた。聲は、視察口の小窓から響いてきた。

『あなたは、陸軍の中尉だつたでせう。さうでせう』

『はあ』

『實は、わたしはAといふのですが、知つてゐますか、わたしの兄が、實家であなたのお世話になつて、今は下谷で人形店を出してゐるんです』

　A軍曹を、わたくしは鮮やかに記憶してゐた。何か言ふと、『しゆんほうします』と、特有の抑揚をつけて癖のやうに言ふ人であつた。「遵奉します」との意味なのであつた。わたくしと親しい仲の人であつた。

『あなたの事を、兄が非常に殘念がつてゐましてね。法律を知らないで、やられたことに違ひない。幸ひお前が監獄に勤めてゐるから、もし出來ることなら何かと氣をつけてあげろ。もし其の爲に首を馘られたら、おれがよくしてやるつて、兄が昨夜も言つてゐました。時々、こゝに來ますから、何か有つたならば、言つて下さい。他の看守や何かゞ居るときは、だめですけれども――』――A氏は、それから私と仲よしになつてくださつた。

　扉を撲つて叫ぶ人の刺靑を、浴室で、愕いて視てきた日から、二三日經た後であつた。わたくしの監房の前に、立寄つてくださつたA氏に、

『あの扉をたゝいて電報類を、やかましく言ふ人は、どういふ身分の人なのですか』

と、その人のことを、わたくしは此の時に始めて、A氏にたづねてみた。

『あれですか。監獄ちうで非常に有名な男です。大きな詐欺師の子分なので、全く無教育な、しかたのない奴です。電報だつて、宛名を本字で書くこともできないくらゐなのです。

その電報の用件が、それは實に滑稽ですよ。今夜はどちらに枕をむけて寝てゐるか、なんて電報を打つのです。いつもそんな電報ばかりで、手がつけられない。看守長も持てあましてゐるんです。電報の宛名は、あの男の情婦なのです。青山あたりに住むでゐて、毎日のやうに面會に來てゐます。それでゐて夜になると、あの男は電報が打ちたくなるんですね。女から返電も來ます。晝は面會に來てもらつて、夜は電報を往復しないと、承知ができないんでせう。

犯罪も、さうなんです。その女の爲に、ある男を刺したとか言ふんです。その男と、女を奪りあつた結果、とう〳〵あの男があいてを刺したのですね。もう其の田舎の裁判所で判決を受けたのですが、控訴をして、この監獄に來てゐるのです。女もきつといつしよに東京に來たのでせう。あの様子では、どうせ大審院まで上告してゆくに極まつてゐます。女と離れて既決監に行けないでせう。でも大審院まで行つたつて、やはり刑を受けなければなりますまいが、さうなつた時に、あの男は、どうするか、ちよつと見ものですな』

A氏から見れただけの事を、わたくしは[illegible]た。

ある夜は、その人が、大聲をあげて、廊下を巡廻してゐる看守を、呼びとめてゐた。

『今、渡してもらうた電報が、これですけれども、こゝのところが、さつぱり分らないんですから、役人どの、ちよつと讀むでみてやつてください』

強く悩んで焦燥してゐる聲が、獄の中の廊下に、今更に異様に響いてゐた。暫くして、

『さあ、おれにも分らんな』

對手と沒交渉に冷たく離れてゐる、突き放すやうな、おちついた聲が聞こえた。

『さうでせう。わからんをなごぢやな。こんな事を書きをつてからに』

獨言のやうな聲が、扉の中から自由に響いてきた。また暫くして、

『はつはつゝゝゝゝ』

劈くやうな長い笑聲が微かに聞こえた。

一週間ばかり、その人の聲も、扉を撲つ響も、すこしも聞こえない日が續いた。

『あの人は、まだ居ますか』

A氏に、わたくしが訊ねてみた。

『居ますよ。看守長が怒つてしまつたので、監房の中で、兩腕に戒具を穿められてゐます。監獄なんか何だといふ風ですから、そんな目に會ふのが、あたりまへですよ。兩手がまるで自由にならないでせう。それでお椀に頭をさげてゐました。犬のやうに口ばかりをお椀につけて、飯をもく〱食つてゐましたつけ。弱つてます。いゝ氣味ぢやありませんか』

わたくしは共れを聞いて黯然となつた。夕から夜にうつるあいだに、窓のすぐ外に立つてゐる杉の樹が、さら〱と風に動くと、革の戒具を兩腕に穿められて、監房の中に兀然と座つてゐる大きな男の姿が、おのづから私の胸に映つてゐた。その後に十日ばかり過ぎた。A氏が扉の前に來てくださつた。と思つてゐると直ぐに、

『今日は、實際、大變なことがありましたよ。聞きましたか、面會所で』

氏の呼吸が、かすかに躍むでゐた。

『いゝえ 何が有りました』

『すこしも早く知らしてあげやうと思つてゐたのですけれども、暇が無いものですから。――あの男に、今日も女が台に來ました。何か話をしてゐましたが、いきなり剃刀を出したのです。女がです。すぐに髮を切つてしまひました。立合の部長が止める暇もなにも無かつたさうですが、あんまり男が嫉妬するせいからでせう。女が髮を切ると、男が大聲で笑つて、それから、不意に、わい〱と泣きだして、始末におへなかつたのです。女は平氣で、髮の切つたのをぶらさげて男に見せると、さつさと歸つてゆきましたよ。だつて、髮を切つたからつて、何にもなりませんからねえ。ばか〱しい事をしたもんです。今も行つて見ましたが、あの男が顔に似合はず、しく〱泣いてばかりゐました。ずゐぶん滑稽ぢやありませんか。いくら聲をかけても、默つてゐましたよ』

それから、更に半月ばかり過ぎた。扉を撲つ響も叫ぶ聲も、すこしも聞こえなかつた。A氏が復た來られた。忽ち聲を低めて、

『聞きましたか。たう〱死にましたよ。これです、これです』

斯う言つて、A氏が自分の頸に、右手をあてゝ見せた。低い聲が鋭さを帶びてゐた。

『すこしの間にやつたのだつたさうです。看守が一度廻つて行つて、これから廊下を一廻りして來たときには、もう縊りさがつてゐたさうです。默つてゐてくださいよ。死といふ事もつく

書物さへ差入を許さないくらゐ警戒してゐるんですから。默つてゐて下さいよ。可哀さうですね』

A氏の沈痛な聲を、わたくしは聞いた。

それから、四五日また過ぎた。

A氏と其の次ぎに會つたときに、氏は殆ど一時間のあいだをわたくしと話してゆかれた。そのうちに、今も私に記憶されてゐる一節は、

『あの男の情婦は、をかしな女ですね。男が死んでから、屍骸を受け取つて行つたのに、まだ面會にやつて來るさうですよ。正門を入つて、受附まで來て歸つてゆくさうです。別に氣のちがつたところも無いのださうですが、をかしいですね。まだ男が生きてゐた時には、切下げ髮で、面會人控所の椅子に腰をかけて、膝のうへに頬杖をついて下を向いてゐましたつけ。ぶつ／＼何か言つて、へつ、へつ、へつ、と獨りで笑つてゐました』

と、言ふのであつた。

扉を撲つ響と叫喚の聲とが、今も、わたくしの耳の底に、はつきりと生きてゐる。キリストを復活させ給ふた大靈の慈父は、獄中に縊死した此の人をも、何處かで、何れの日にか、必ず——神が實在し給ふよりも確かに必ず此の人を復活せしめ給ふであらう。それとも、かうして未だ生きて之れを書いてゐる私よりもさきに、書かれてゐる此の人のなか[illegible]すでに[illegible]はれてしまつてゐるかも知れない。未決囚としての自分を憶ひ起こすごとに、わたくしは、この人に對する回想から離れることができない。遂に、こゝに書いてしまつた。

「——公判の日の朝に、および其の前の兩三日の間に、私を捉ふてゐた不安は、まことに自分の心の髓を、浸蝕しつくすほどの深く大いなる不安、さながらに屍骸の冷たさに觸れてゐるやうな心寒い不安であつた」

と、その時の「感想錄」のなかに、わたくしは書いてゐる。その畏るべき公判の日になつた。六月一日の朝であつた。

裁判所の、拘置所の一室に、わたくしは、獨り、鎧のなかに監禁せられてゐた。左も、右も、後も、白い壁が、直ぐ傍に、私を一人冷たく取り圍むでゐた。長い六尺腰掛の、硬い板のうへに、私は憐ましく身を窄めるやうにして、腰をおろしてゐた。絽の羽織を着てゐた。結婚のときに、養父から贈られた、仙臺平の裾の重い袴を穿いてゐた。天井の色を私は全く記憶してゐない。おそらく俛首れてばかりゐたのであらう。刻々に移り往く「時」の流れてゐる無象の遷移を、裏に、はつきりと意識し

てゐた。公判廷は、午前九時に、開かれる、といふのであつた。

一つの圓い木製の櫃が、蓋をしたまゝ、六尺腰掛の隣に、低く靜かに置かれてゐた。それは便器であつた。家の中には飯櫃になつてゐる其れが、現在の裁判所では、便器に變はつてゐた。わたくしは、幾度も腰掛を離れて、立ち上がつた。更に、うつむいて、櫃の蓋を、奇異な感じにつゝまれながら、兩手で漸く脫しとつた。すこしも催してゐない小用を、そこに屢々、わづかに足してゐた。その度びごとに、袴の長い裾を、上に翻へして捲きあげるだけのことが、亢奮しつゝ恐怖しつゝ、また慣れきつてゐる其の時の私に、決して小さくない努力であつた。「靜かに、靜かに」と滑かに念じつゝ、その心は、すでに最初から亂れ擾いでゐた。袴の裾を翻へす指端が、顫へてゐたやうにも思はれる。時は流れて、看守たちの控所の柱時計が、靜かにゆつくりと「九時」を報らせたときに、わたくしは、滿面に、血の烈しく上つてくるのを感じた。同時に、またく立ちあがつた。いそぎに急いで、櫃の蓋を脫しとつた。わづかに數滴の用を、慌てゝ足してしまふと、それが不意に袴の裾にかゝつた。そこに溜つて黑くなつてゐる滴の痕を凝視しつゝ、わたくしは、櫃のそばに、しばらく其のまゝ佇立つてゐた。心臟の動悸が、[illegible]わたくし自身を、[illegible]した。[illegible]にすでに上氣したまゝでゐた。

りゝゝゝゝといふ鋭い昂い響の、呼鈴が、長く鳴つた。

——忽ち斷れた。

『は、は、承知いたしました。は、わかりました。直ぐに送ります。は、は、直ぐに、控訴院の二號法廷に。え、二名だけ』

頰の邊に、いつも唾を溜めてゐるらしい、濁つた低音が、電話を受けてゐた。看守部長が、命ぜられるまゝに、拘置場のなかの未決囚を、豫審廷に、或ひは地方裁判所または控訴院などの法廷に、送致すべき電話を、受けてゐる際であつた。さうした電話が設備せられてあるのを、わたくしは始めて知つた。恐ろしさが、猶ほ一時に大きく近く迫つてきた。その後に、幾度も、呼鈴が、りゝゝゝゝと同じ響で鳴るごとに、わたくしは受動的に必ず立ちあがつて、便器の櫃の蓋を、脫しとつた。淺い盥の僅かな水のなかに、鰭や尾を、水のそとに現はして、わづかに鰓を開閉してゐる半死の魚が、俎の上に、今にも移し[illegible]せられやうとしてゐる、その魚のすがたが、わたくし自身に似てゐた。

……法廷の入口まで、いよく導かれて入つて行つた時に、わたくしは、多くの傍聽人の並んでゐる[illegible]を、編笠の中から見るや否や、自分の顏に[illegible]

ほどの、強い羞耻に摶たれた「法廷」といふところを見るのは、その時が、わたくしに最初であつた。羞耻に厚く塞ざゝれつゝ謂はゆる「法廷」の、狹さ、きたなさ、亂雜さなどが、わたくしを驚かせもし、不快がらせもした。豫想してゐた神聖なものにくらべて、法廷の中の外觀は、すべてが汚穢に充ち滿ちてゐるやうに見なされた。

傍聽人の席よりも、一段と高く設けられてゐる大きな箱臺の上に私は登つた。そこに編笠を脱いで三尺椅子に腰をおろした。今や全く「曝らしもの」になつてゐる自分の憂とましく忌むべき醜態を、明きらかに其處に觀た。觀なければならなかつた。涙が降ちてきた。慘めな自分の現在を、嗟きつくして餘りある幾度も流した痛悔の涙が、また新しく頬を濡らした。法律の上の罪を犯さないでゐた時の自分と、すでに其の罪が發覺せられて其の爲に然く囚へられてゐる現在の自分と、その二つの姿の全く相異なる對照が、まことに深刻に、わたくしの胸を新しく刺した。その刺衝に誘はれて、我れと痛ましい感傷的な涙が、更に流れ出た。

判事、検事、書記、辯護士、などが現はれて、各自の席に着かれた、その人々の、衣冠を着けた古典的な裝ひが、わたくしに、「日本」を思はせた。判事の胸に刺繡してある濃紫の文のいろが、「仁——なさけ」を、囚人としての私に想はせた。そこに慕はしいこゝろが動いた。瞳を轉じて檢事の其れを仰いで觀た。濃紅色の文が、犯すべからざる至嚴の威力を、勁く烈しく示現してゐた。微かな畏懼が、わたくしの内に動いた。わたくしの瞳は、雛が親鳥を求めるやうに、辯護士たちの胸を更に視た。その刺繡の色は「白」であつた。その白色が、さながらに「無力——弱者」の象徵であるやうに、意味なしに只だ然く想はれた。わたくしは自分の唯一の味方の弱勢を眼にした心細さに襲はれつゝ、再び仰いで、書記の胸の刺繡を眺めた。「青」が其處にあつた。それがまた、その人の職分に、盡く良く適應してゐるやうに思はれた。

「最後に——自分は」

俎上の一片の腐肉であつた。みづから作つた犧牲であつた。わたくしは更に新しい涙を覺えた。

わたくしの辯護を擔任してくださつた、安達元之助氏が、私の直ぐ傍の細い通路を歩いて、辯護士席に入つて來られた。黑い衣の裾から、赭革の編上靴が、はつきりと露出してゐるのをわたくしは全く偶然に瞰た。そこから一道の滑稽味が、迸り出て、わたくしを輕く衝いた。わたくしの涙が歇みかけた。辯護士たちが、各自の冠を並べて雜然と腰をおろしてゐられるのが

さながらに「鳥羽繪」を想はせた。
訊問が始まつた。わたくしの感覺から、一切の餘裕が拂拭せられた。成し得るかぎり忠實な陳述をすることにのみ熱中して止まない努力が、甞に檢事廷に於ける其れと、全く同じ性質のものであつた。

「忠實に、眞率に告白して」

と、自分の殆ど全部をあげて心がけてゐた。それと同時に、裁判長の氣配――殊に瞳のいろを、その一瞬時の微動なりとも苟しくも見のがすことなしに、その氣色に常に追隨して、その人――裁判長の胸の裡に良く適應し得るごとき自分を、その人の前に表現しやうとして、わたくしは、態度にも、言語にも、到らぬくまなく、努めつくしてゐた。欺瞞性と眞實性とが、一つになつてゐた。變色蜥蜴の彩りが、そこに有つた。

身分、職業、位階などが、審らかに訊問せられて後に、

「これから審理を――」

裁判長が斯う言はれた刹那に、わたくしの内に既に遍ねく潜在してゐた畏懼が、忽然と動いて私を戰慄させた。爼上の魚が、今、自身の軀の直上に振り翳された長い刄を、身動きもし得ずに、仰いだ刹那のこゝろが、その時の私であつた。

一審理に移るべきでありますが、辯護士から記錄を未だ見てゐないとの理由で、延期の申請がありました。で二十五日に、開廷します」

裁判長の言が終はると、わたくしは誰れにともなく恭しく一揖した。

法廷の出入口から、廣い廊下に出やうとするときに、わたくしと同年ぐらゐの、新聞記者らしい洋服の人が、怜悧さうな緣い眸を動かして、編笠の中の私の顔を、好奇心に充ち滿ちて眺めてゐた。更に嗤ふやうな、またお互ひに刺戟の多い同じ時代の氣分を共にしてゐるのだといふ一味の協調を示すかのやうな、瞳の冷い智しい色と唇の皮肉らしい微笑とを、わたくしの眞正面に立つて見せてゐた。それに對して、わたくしは直ぐに烈しい反感を覺えた。左の肩を聳えさして、傲然とした氣勢を漲らしつゝ、その人を瞰おろすやうな侮蔑的な姿を、努めて明白に表はした。その人の眸が、わたくしの力を入れてゐる左肩の邊を一瞥した。わたくしは更に、兩肩を聳えさして、あだかも編笠を冠ぶつて然く囚へられてゐる特殊な境遇の姿が、他の模倣し得ない矜りでもあるかのやうに、猶ほ昂然として緊張して廊下に出た。

そこに、妻が佇むで、わたくしを見つめてゐた。親しい見覺えのある紫紺いろの、絽縮緬の羽織につゝまれて、何かの小さ

な長方形の風呂敷包を、胸のあたりに抱きながら、多くの人々と離れて、立像のやうに、彼女が獨りで悄然と佇むでゐた。編笠の中で、わたくしが大きく頷いた。然し、これは妻にすこしも分からなかつたらしく、たゞ世にも惨忍なものを見てゐるといひたげな二つの瞳が、冷靜と同情とを一つにして、わたくしを深く更に深く視まもつてゐた。

「おまへの夫は、これほどの事變には屈して負けない。斷乎、決して負けてはゐない此の私を御信」

一塲の退場が、わたくしを煽動した。妻の前を、今は退場を拵へさしたまゝで、強いて活き〳〵とした[illegible]を、更に示して歩いて行つた。そこに立てゐる妻のこゝろの深い哀しみを、引きたて勵まして、鼓舞してやりたい欲求と努力とが、その私の歩行の蔭に隙なく潜むでゐた。

第二回の公判に「審理」と「論告」とがあつた。

檢事が、懲役三年半の刑を求めてゐた。

——この求刑は、世間的には重いと或者は思ふだらう。しかし、獄内に於て斷然として頭角を現はし、良き[illegible]して一日も早く假出獄の恩典に浴し、[illegible]を受けたのと[illegible]

結果を見ることを希望する」

わたくしは檢事の話を深き感じてゐた。それは論告を聞いてゐるうちに、その言の語々が、既に[illegible]、わたくしは[illegible]さにつゝまれて、わたくしの[illegible]、わづかに[illegible]と否定との二種の感情に、我たがひに[illegible]つた。わたくしを共に二つの相反對する感情に導いてゐたのであつた。從[illegible]に、時に[illegible]、又これに[illegible]。[illegible]しつゝ起立してなつた時檢事に對して、[illegible]多い[illegible]に對いておこなふには、[illegible]、[illegible]つゝ、[illegible]た[illegible]、一[illegible]へた[illegible]、檢事の[illegible]、[illegible]

檢事こ、[illegible]、[illegible]一つに[illegible]。それまで[illegible]

[illegible]に[illegible]檢事の[illegible]、[illegible]。[illegible]に[illegible]、[illegible]、私の[illegible]文十[illegible]、[illegible]であつたことを見たと[illegible]。ここで[illegible]否定の[illegible]。肯定[illegible]、つかれて[illegible]、[illegible]に[illegible]二三年一は、わたくしの身には[illegible]に對すぎた。それで、[illegible]事に[illegible]、わたくしには[illegible]、[illegible]の[illegible]に、[illegible]されてゐたことの[illegible]に見えてゐた。

論告が終はると、検事が、再び私を瞰つゝ、席に着かれた。然し、二人が視線を合はして同じ環に繋がれてゐた時は、もう疾くに過ぎてゐた。わたくしは大きな肯定の中に、獨りで和らいで安らかに息をしてゐた。

検事にも、わたくしにも、兩方に指かずに、二人の間の宙に懸垂されてゐたやうな「三年半」は、その後更に、「二年」の判決に變はつて、わたくしの肉身は、その判決にもとづいて、確かに獄中に、概ね一年半の實刑を、受けてきた。それは最も確かな事實である。たゞ然し、検事の手から最初に抛げられた「三年半」が、その検事の掌の裡に創生せられたものと、わたくしは思ひ得ずにゐる。検事は其れを、おそらく意識されないであらうけれども、誰れかゞ、検事の手に、「三年半」を、渡したものがある。「四年」でもなく、「三年」でもなく、また「五年」でもなく、「三年半」を、検事に特に渡して、わたくしに事づけた誰れかゞ居る。その第一原因の罪を犯したのは、元より本より私であるけれども。

第三回の公判に、「辯論」があつた。

三たび東京に來てくださつた兄の愛によつて、わたくしの辯護を承諾してくださつた江木衷氏が、着席してゐる私の直ぐ後に起立して、しづかに辯護をすゝめられた。その時の私は、判事、検事などの直ぐ眼の下に、据えられてある黒い長椅子に着いてゐた。江木氏は、わたくしが検事廷で述べてゐた、二つの家のなかの繋累に就いて、それを更に情實的に深く割りだして、犯罪の起因が、まさしく其處に在ることを、第一に辯護された。その私の陳述は、然し虚僞の上に盛られた眞實なのにすぎなかつた。

その辯護の聲を、頭の直ぐ後に聽きつゝ、わたくしは復た激しく他動的に泣いた。初めのうちは、兩手を互ひに握りしめて、涙が床板のうへに落ちるまゝにしてゐた。眼鏡から滴が幾つも垂れはじめた。江木氏の辯護が進むのにつれて、涙は眼鏡の縁を傳はつて床のうへに、ますます繁く降ちて行つた。頭が下に下にと、壓しつけられるやうに強く少しづゝ下がつて行つた。力をこめて十指を深く喰ひあはして握りしめてゐた兩方の掌を離した。兩脚の膝の下を、袴の上から堅く握んだ。頂が逆さになつた。椅子の前に胸を全く下げきつてしまつた。眼の周圍が濡れに濡れて、其の後の涙を斷えず誘ふた。氣がついてみると渇いた床板のうへに涙が落ちて浸みてゐた。その爲に黒ずんだ濕めつたいろの畸形な小さな形が、そこに無心に作られて

ゐた。わたくしは其に眼を留めた。その涙の痕を、すこしでも大きくして、裁判長に其をみとめてもらひたい欲求が湧いてきた。涙は猶ほ續いてゐた。欲求は不可抗性を帶びて、私を包むでしまつた。涙の痕の黝ずむでゐる輪廓の外の周りに向けて、眼鏡の縁から垂れる滴を、わたくしは故意に巧みに落としはじめた。歪形な黝い面積が横に膨れはじめた。そこに大きな扁平な痕が、濃く鮮やかに、床板のうへに殘された。

辯論のあひだに、小さな休憩が挾まれた。午であつた。法廷から拘置所まで、わたくしは還つてきた。差入れられた辨當は多量の白い柔いサンドウイチであつた。わたくしは其れを食ひつくした。一椀の白湯を、更に美味に飲みほした。

休憩時間がすぎて、法廷に再び入つて行つた時に、わたくしは、涙の痕の殘つてゐる前と同じところに腰をおろしたい望を獨りで深く匿してゐた。床の上に大きな扁たい歪形な輪廓を、わたくしは眼の底に、ありありと記憶してゐた。大きな涙の痕が、まことに自分のであることを、裁判長に必ず深く認知してもらひたい欲求が、尙ほ續いて私の中心を動かしてゐた。然し、わたくしを護送してきた看守は、午前と全く別の方の椅子のうへに、わたくしを元より無心に着けてしまつた。

「懲役二年」の判決が下された。

兄に親しくすゝめられて、わたくしは、控訴を敢て申立てた。それから控訴の公判が開かれるまで、八ケ月すぎた。その間を、わたくしは「感想錄」を書きつゞけてゐた。未決囚として、一つの年を獄の中に越した。二月の下旬に控訴の審理が濟むだ。檢事——(大平氏)から「附帶控訴」といふのが提起された。二年の懲役は輕きにすぎるために、更に三年半の其れを求められたのであつた。裁判長から保釋が許された。

『また案内狀がきた。ずゐぶんと執つこいものだ。實に根氣のいゝものだ』と、わたくしが言ふと、『ほんとうね。でも何だか私は嫌ひなのですもの』と、妻が言つてゐた。七年あまりに亙つて、月ごとの案内狀を退けてばかりゐた妻は、その案内狀の發信人たるミリケン先生から、七年後になつて遂に案内せられて、信仰に入つた。わたくしの保釋が許されて、未決の獄から放たれた夜に、ミリケン先生が、獄の門の内に、五時間あまり、わたくしを待つてゐてくださつた。その繊い手を握つたときに、わたくしは、母を憶つた。

ミリケン先生と、手を握りつゝ、十一ケ月あまり——殆ど一年のあひだ生きてゐた獄の黑い門を後にして、星あかりの下の

砂利を足袋はだしのまゝ踏むで出た私は、勾配の緩るやかな坂を降りつゝ、珊々たる星を幾度も仰いだ。大きな呼吸をした。夜氣が親しさうに私を包むだ。從弟の藤居淺次郎氏が、新しい草履を携へて、そこに迎へに來てくださつた。

　自動車から降りた三人が、家の前に近づいた時に、妻が門の前に現はれた。先頭に歩いてゐられたミリケン先生に縋りつくやうにして、

『まあ先生、ほんとに長くお待ちくださいまして』

　斯う言ひつゝ、わたくしの存在すらも識らぬやうに、そのまゝミリケン先生を導いて、先に玄關の中に入つてしまつた。皆が家のなかに入つた、妻の信仰を、ミリケン先生と共に誘掖してくださつた田村十志子樣の肩の後から、幼い二人が、始めて私を見るやうな顏をして、わたくしの傍に前後して近づいてきた。

　妻の父上が仰臥してゐられた。その傍に行つて、

『いかゞですか』

と、うつむいて訊ねる私の顏を、朦然とした瞳が、しばらく視つめつゞけてゐられた後に、白い髭の中から、

『こい、こい、こい、こい』

喉の奥で斯う呼びつゝ、その昏い瞳から、涙が止め度なく流れ出るのであつた。遂に其の半身不隨の軀を跳いて、片手を逆りに擧げて招くやうに縱に振つてゐられた。

『わかりました。わかりました』

と、答へつゝ、その涙を硬い頬骨のうへから、手巾で拭ひとつて、只だ頷いて見せてあげるより他に、わたくしは何の方法も思ひつけなかつた。淺次郎氏の兄上の鐵造氏が、

『よく覺えてゐられるのですな』

と、まじめな貌をして獨りで言つてゐられた。

　皆が二階に登つてゆかれた。わたくしと妻とが、下に殘つた。

『これにお着換へなさいな』

　妻が斯う言ひつゝ、新しい着物を、戸棚の中から出してきた。一年振りの家の中で彼女の私に對する最初の言であつた。

『どうして』

と、私が、また初めて言つた。

『ミリケン先生や皆さまに、みつともないぢやありませんか』

『さうだね』

『早く着換へて、それから二階で皆さまと御飯なのですよ』

　二階の八疊の一室に、やがて、誰れもが祈りをさゝげた。最後に、妻の唇から、祈りの言が、つゝましく現はれてきたときに、わたくしは、そこに新しい妻を見るやうな氣がした。二人

の幼兒も、その小さな頭を皆と同じやうに垂れてゐた。たゞ感謝──、感謝のみが、わたくしを包むで、その室に充ちてゐた。

「第一に詫びなければならぬ。誰れよりも第一に」

と、曾てから思ひこんでゐた妻その人に、わたくしは、今になつても未だ一度も詫びてゐない。詫びやうとしても、既に其れを許さないほどの餘りに近い距離に何時のまにか彼女が居るのであつた。

親友の一人が訪ねてきてくれて、しばらくの話の後に、

『奥さんのはうが、君よりも苦勞をなすつたと、僕は思ふぜ。その實際を僕が見聞してゐるからかもしれないけれども』

と、しみ〴〵とした口調で言つた。

『戀だの惚れたの何のと言ふけれども、ほんとうに愈々といふ時に、自分に代はつてくれるのは、やはり、妻だよ。どうしても、さうだよ』

と、わたくしが言つた。

保釋の期間が、十日で終はつた。

十一日目の夜に、わたくしは、また獄中で寢てゐた。その十一日目は、既に「懲役二年」の第一日なのであつた

「未決囚」としての自分が、消えて無くなつてゐた。

舊い屍骸と、別かれやう。

あてどもなく書いてきた、此の一場の叙述の上に、醜穢なる、一人の屍骸よ、おまへは暫らく、數萬の人々の觀せものになれ。

畢はりにのぞみ、御音信を賜はりました方々の御友情を感謝しまつり、この一文をお讀みくださる大方諸兄姉の御健祚を、希念いたしつゝ。

──一九一九・一一・一七夜──

──東京市外・西大久保・九四──

# 時論

## 社會改造の第一楷段としての普通選擧

法學博士　吉野作造

今度の議會で論ぜらるべき重要問題の一つは普通選擧案に相違ない。去年は不幸にして實際問題とならなかつた。而かも時勢は急轉直下して今日は最早や該案の議題に上るは既定の事實たるのみならず、人多くは其通過すら疑はない。予も亦七分の望みを之に繫けて切に其成立を祈るものである。

唯、いよ／＼普通選擧となつた場合の利害得失如何の問題になると、世間に尙一種の悲觀論者がある。尤も大多數の人には餘りに其利を見て殆んど其弊に眼を掩はんとする傾あり、之も全然正しい見解ではないが、然し普通選擧になつても政治上殊な進歩はない、多大の望を之に繫けるのは誤りであると云ふ風な見方にも我々に多少の異議がないではない。而して此種の悲觀論が往々社會的制度の外的改造を先決の急務とする立場を取る人々より發せらるるのは我々の些か奇とする所である。

どう考へても普通選擧になれば今日よりも遙かによりよき社會を持ち來たすべきは疑を容れない。今日の不徹底な且つ弊害の多い立憲政治でも更に參政權の認められなかつた昔に比べて遙かに勝つたものであることは云ふを俟たない。之と同じ意味に於て選擧權の擴張は兎にも角にも一つの大いなる進歩であるといへる。が又普通選擧になつたからとてそれで我々の自由なり幸福なりが完全に保護され又伸張さるるも限らない事は事實の上に明白である。已に普通選擧を採用して長い經驗を積んで居る西洋の例が明白に此事を語つて居る。そこで西洋でも之丈けでは足りないと云ふので、或はもつと普通選擧の趣意を徹底することによつて、或は普通選擧と相並んで他にいろ／＼な方法を案出することによつて從來の普通選擧主義の與へ得なかつたものを與へんとしていろ／＼工夫して居る。普通選擧の趣意を徹底する爲めと稱していろ／＼な工夫が案出されて居ると云

ふ事は曾て一通り本誌二月號の論文にも述べた事がある、其外之と相並んで施行すべきものとしては彼のレフエレンダムとかイニシアチーブとかの方法もある。併しながら最近此等の方法にも滿足が出來ず更に普通選擧制が何故に十分人類の自由と幸福とを保護伸張するに足らざるやの根本原因を研究して、之によつて一擧に適當なる解決案を見出さんとするものを生ずるに至つた。此風潮は最近勞働問題の勃興につれて益々甚だしくならんとしつゝある。

或人は云ふ、普通選擧が如何に徹底しても、それが結局に於て夫自身完全なものでない事は、そが僅かに政治上に於ける形式的自由を眼中に置くのみであるからである。人類が實質的に完全なる自由を得るまでは決して問題は根本的に解決しないと。斯くして人間の自由を實質的に確立せんとするものは遂に普通選擧に諦めをつけて他の方面に活動の舞臺を轉じた。斯くして生れたのが社會問題乃至勞働問題である。して見れば勞働問題や社會問題は畢竟普通選擧問題の解決し得ざるものを解決せんとして起つたものに他ならない。而して此兩者は本來相容れざるものではないのに一方は他方の爲すなきを罵倒して自家の運動に勿體をつけ、爲めに久しく反目の關係に立つたのは甚だ遺憾な事であつた。政治家は云ふ、勞働問題の期する目的も實は我々の力で出來ると。勞働者は云ふ、普通選擧などゝ云ふ政治問題に拘つて居つては何時迄經つても彼岸に達せられないと。斯くして勞働運動家殊に社會主義者の一派などは政治運動を否認することによつて自家の目的を遂し得べしとさへ考ふるに至つた。けれども此二者の論爭は風邪を引いて居つたまゝで冷水浴をやつても軀はよくならない。先づ軀の目前の缺陷たる風邪を直すことが必要だからと云つて冷水浴の無用を說くが如きものである。普通選擧の如きは實に勞働問題の解決を俟つて大いに其效用を發揮すべきものなのである。

勞働問題解決の急務を叫ぶものゝ中、其過激なるは政治否認の革命主義者となるが、それ程一本調子でないものは政治運動にも亦相當の價値を認める所からして此と彼との對立協力を說く折衷論者となつた。其最も著しきものは之までの國會の外に之と對立する生産組合會議(ギルドコングレス)を以てし、而して此双方より若干委員を出して作る所の聯合理事會に最高の權力を與へやうとする彼のギルド社會主義の一派の說である。之は畢竟政治と經濟の關係に關するイリユージヨンより生れたものに他ならないが、又一面に於て其兩者の步調の現代の社會に於て尙未だ適確に吻合せざるの事實を語るものである。

此等の事に關する更に詳細なる論評は之を他日に讓るとし

て兎に角我々の玆に見逃してならない事は現代の社會批評家の着眼は普通選擧の實行と云ふ段梯を通り越して更に遙かに其先きの社會改造を目標として居ることである。他の言葉を以ていへば我々は普通選擧を實行した所が、其先きにまだ〳〵問題があると云ふ事である。其先きの問題を眼中に置く所から普通選擧を實行したとて大した利益も無いと云ふやうな考も起るのであるが、併し普通選擧にならなければ結局の目的の達成は亦甚だ困難である。何れにしてもさう云ふ先きの問題を考へて見ると我國が今度やつと普通選擧の實行に入らうか入るまいかと爭ふのは餘りに時勢に後れたるの感なきを得ない。普通選擧を實行して玆に久しきを經た西洋ですら議會の議論と民間の要求とは頗る懸け離れて居る。國民の極めて少なる一部の利害を代表するに過ぎざる我國の議會が我々國民の眼より觀て丸で別世界の感あるは怪むに足りないが、せめて折角問題となつた普通選擧案丈けは是非共無事に通して貰ひたい。さうでも無ければ「一般民衆は遂に議會を目して我々と何等の關係なき無用の長物とするの感を深うして改めないであらう。

# 普通選擧の實施に關する輿論の一端

十一月發行の『公論』といふ雜誌に「普通選擧の實施の時期方法及び利害」に關して諸名家より徵せる意見が載つて居る。答へた者は朝野各方面の識者三十六名を數へて居るが、其中不得要領な答辯を與へた四五を除き、他の殆ど全部は大體に於て所謂普通選擧即時施行論者と云つて可い。

細かく分けて云へば先づ施行の時期に就ては尙早論を唱ふる者は僅かに二三名、何うでも可いといふ態度に出づるが一名で、他は成るべく早く若くは即時施行せよと主張するのである。此點は諸家の說幸にして予の持論と一致して居る。(拙著「普通選擧論」三八頁以下參照)普通選擧を否とするの說が最早跡を絕つたのは注意すべき現象である。

方法の中で一定の生業を有する丁年以上の男女に等しく選擧權を與へよといふ說の多いのは著るしく我々の眼に着く。之に反對の論も無いではない。又有夫の婦を除くと云ふ說もあつたが、然し大多數は其論據に多少の異同はあれ婦人に參政權を拒むの理由無しとするの說の多數なるは注意すべき現象と云はなけ

ればならない。婦人にも參政權を與へよといふ位だから、依然として制限選擧の舊制を維持せんとする說の跡を絶てるは言ふまでもなく、戸主に限るとか年齡を高くするとか教育の制限を設かうとかいふ說すら、之を唱ふる者僅か一二に過ぎないといふ有樣であつた。

利害の點に就ては多少の缺點はあつても今日よりは遙かに優しだと觀るのが多數の見解である。併し孰れかと云へば予の所謂普通選擧の教育的效果（拙著五二頁以下參照）を充分に了解せざる如く思はるるのは聊か遺憾とする所である。

要するに以上諸家の意見を觀ても、今日普通選擧に對する國民の輿論の一端は窺はれる。所謂輿論は常に正しいと限らないとしても、從來「如何に正しい道理があつても國民の要求が無いから」と云つて拒否の態度を執つて居つた連中は定めし此時勢の變遷に驚いて居る事であらう。

諸家の意見の中一つ異彩を放つて居るのは田中萃一郎博士の說である。博士は無條件の選擧權擴張に反對し、義務の負擔と交換的に選擧權を與ふべしと云つて居る。之が爲めに所得税法を改正し、免税點を三百圓に低下し千分の十の所得税を拂ふ事にすれば、現行選擧法の規定する三圓の税額に達する、そして此申告に對して一切審査しないと云ふ事にすれば、畢り三百圓の所得がありますと云つて三圓を納めさへすれば誰でも選擧權をやる、選擧權が欲しければ三圓を出せばよい、出さない者に選擧權をやる必要は無い、さうすれば別に選擧權を擴張しなくとも事は濟むと云ふのである。斯の方法は一七九五年佛蘭西の物好きな政治家が立案した事がある。それでも佛蘭西の方は免税點以上の所得ある事の明白な者は選擧權を欲しくなくとも税金を取られると云ふ不都合な結果を見る事に就ては可なり細心の注意を拂つて居た。予は田中博士の如き尊敬する學者より斯の如き說を聞く事を甚だ意外とする者である。

## 唯物史觀の解釋

人類の意識が社會の制度を造るのではない。社會の制度が人類の意識を左右するのである、人類の歷史は畢竟社會的諸制度の變遷の歷史であると云ふのが唯物史觀の要旨である。古い歷史學が人類の物質生活並に之を關聯する外的諸制度を餘りに等閑に附したのに反對して、是等のものの人心に及ぼす影響の偉大なるを說いたのは、確かに唯物史觀論の一大功績と云はなければならない。之に由つて制度の力の實に大なる事を我々は教へられた。從つて制度の改革と云ふ事は非常に重大な問題である

る事を我々は悟つた。今日社會改造と云ふ標語が非常に強く叫ばれるのも畢竟唯物史觀論の賜物に外ならない。

けれども我々は唯物史觀の學術的價値を承認しつゝ更に彼等に向つて次の如き質問を發せざるを得ない。曰く、人類の意識は制度のみに由つて動くと觀るのか、又は主として制度に由つて動くと觀るのかと。人類が世界に寄與する所謂精神的力作の全體を文化と云ふ。そこで問題は又次のやうな形で質し得る。制度のみが文化を造るのか、又は制度も文化の開發に協力するのかと。前說を採れば唯物史觀論は遂に純然たる唯物主義に到達せざるを得ない。茲に進化の法則はある。從つて將來の社會に對する豫想はある。けれども本來の希望に對する憧憬はない。又制度其物が絕對的價値を有するものなるが故に、制度の改革乃至社會の改造、之れが我々の目的の凡てである。何の爲めに改造するか、改造其事の爲めに改造するのである。改造の後によりよき文化の花が咲くのは、我々の希望すると否とに拘はらないのである。此立場を取る改造論者は自ら改造の目的を達する爲めに其手段を擇ばざるに至るは亦怪しむに足らない。

社會改造論者の他の一部の人は往々唯物史觀は哲學的唯物論とは違ふと云ふ。若しさうなら、その所謂唯物史觀は制度を以て唯一の文化源泉とするものであつてはならない。換言すれば制度も亦文化の開展に協力すと云ふ立場を取るものでなければならない。此立場を取るものも亦細かに分ければ二樣の說に分れ得ると思ふ。一つは文化を造るものは制度の外に亦內的なものがあると考へるのと、も一つは制度は全然文化を造らない、文化を造るものは他の所謂內的なもののみである、唯內的なものの文化創造の活動を制度が妨げたり助けたりすることがある其意味に於て制度も亦文化の開展に協力すと觀ると考ふる說である。斯う云ふ見方に成つて來ると唯物史觀は餘程密接に理想主義の立場と深い交涉を持つ事になる。而して純粹なる理想主義の立場から云へば唯物史觀に對しては右の二樣の考方の內第二說を採るを常とすべきは言ふを俟たない。而して此立場からすれば社會改造の運動に於て最も大事なのは文化創造の內的活力を自由ならしむる事である。此爲めに改造を必要とするので、單に改造の爲めの改造ではない。改造は或るより高い他の目的の一手段に外ならない。從て如何にして改造を實行するやの方法手段も亦此より高き目的の見地から是非され指導さるべきは論を待たない。

最近我國の論壇に於て社會改造に關する諸家の說に此二の潮流の存する事は段々明かにならんとしつゝある。之れ實に我國

の思想界の健全なる發達の上に寔に慶ぶべき現象と云はざるを得ない。何故なれば斯う云ふ事が段々明かにならんとしつゝあると云ふ事夫れ自身が改造論の單調を破る所以である。若し改造論が所謂純然たる唯物的の立場に立つて居る以上、改造其事が目的であり又唯一の大事業であるが故に、其間に手段方法を擇ぶと云ふ考の起る餘地はない。改造運動其事のみから觀れば手段方法は何うでも可い。之を論ずるのは極めて小さい問題である。けれども理想主義の立場からすれば、手段方法を論ずると云ふ一見小さい問題の裡に非常に大きい問題が伏在すると見る。丁度勝たう勝たうを唯一の目的とするものから觀れば、條約も一片の紙屑に過ぎないが、世界に正義公道を行はんとする所の理想家から觀れば同じ戰爭をするに國際法を守ると守らざるとが重大の問題であると同様である。予輩はいろ／＼の問題に就て常に此第二の立場を執つて居るものなるが故に、最近我國の社會改造論の二大潮流の分立が鮮明を加へんとしつゝあるのを見て非常に興味深く感ずるものである。

マルクス自身の唱へた唯物史觀論は其孰れに屬するやは暫く別問題として今日マルクスを解する者が或は甲の立場なりと釋き、或は乙の立場なりと釋くのは一見甚だ奇なるが如くにして實は社會改造を說く思想的根柢が既にマルクス當時の如く單調でないと云ふ事を語るものではあるまいか。

## 對外政論の諸派

どの問題についてもいろ／＼違つた意見の成立を免れないが、對外的問題ほど同じ事柄について違つた意見の紛雜を極むるものはない。例へば青島の專管居留地問題にしても、山東に於ける我國の地位殊に日支交渉當時豫期したやうな我國の地位が段々削られて居る今日、せめて之れ丈けは確實に握らなければならない、と云ふ考が相當に強く主張せらるゝが、他の一方に於ては之をも全然拋擲して、斯る具體的利權の設定を全然斷念することが、支那に對して日本の取るべき正當な、又安全な方策であると之れ亦熱心に主張するものがある。西伯利問題にしても此上は增兵するの外はあるまいと見るものもあれば、絕對的必要の範圍に止めて寧ろ今日は減兵に決する方がいゝと考ふる人もある、更に溯つて過去の問題について云ふならば、國際聯盟の如きはどうせ大國の利己的目的に利用せらるゝに過ぎないだらうから、結局更に重きをなさない事になるだらうと、さう云ふ豫想の下に其對策を極めても差支がないと論ずる人もあれば、之が之からの世ゝが腕力の支配から段々道理の支配に

移る端緒である。之によつて世界の大勢が道義の實現に向ひつゝあることを證明することが出來ると云ふ風に論ずる人もある。更に細目に立ち入つて調べて見ると、同じものに關する觀方並びに其議論の立て方は、いはゞ千差萬別であると云つていゝ。從つて其何れの見解に依るべきかについては我々國民の大いに惑ふ所である。政府の實際政策は勿論其何れかによつて居るのであらう。民間の考は殊に今日の我國に於て實際政治の上にそれ程重きをなさないとしても、外交が段々國民的になつて居る今日に於て、對外問題に對する日本の國論がどうなつて居るかと云ふ事は、世界が此點に就て日本をどう見て居るかと云ふ事と共に決して實際問題の解決の上に無關係ではない。況んや我國に於ても、最近政府の實際方針には、多い少いの差はあれ、兎に角段々民間の議論の影響を受けつゝあるに於ておや。政府の對外方針が常に動搖して止まざるは或意味に於ては民間の對外的輿論が歸する所なきの結果であるともいへる。

何故同じ事柄に對する觀方並びに考方がさう多岐に分れるのか。之に關する予輩の考は社會國家の問題の取扱方に關す根本思想の差別に基くものであると考へる。斯う云ふ着眼點から觀ると細目についていろ〳〵細かい區別はあるにしても我々は大體に於てもろ〳〵の政論を二つの派に大別することが出來ると思ふ。假りに一方を理想派と名け、他方を現實派と云つて置かう。理想派の立場は社會國家の生活、殊に國と國との關係の如きも結局に於ては理想によつて支配さるべきものである。若し或時期に於て理想の勢力の甚だ微弱な場合があるとすればそは長い時期に於ける一時の變態に過ぎない。從つて我々は國家の長い生命の上から見て內外の問題に關する根本方針を此理想主義の下に基けなければならないと主張する。之に反して現實派の立場から云へば國際關係には、理想などゝ稱するものゝ支配があるのではない。理想の支配ありと思ふのは異想である。異想の基礎に政策を建つる程危險な事はない。現に我々は國家對時の形勢の上に互に猛烈な競爭をして居るではないか。競爭はすべての進歩の母である。此競爭に勝つ爲めに我々はあらゆる方法を盡さねばならぬと主張する。斯う云ふ二つの根本的の立場の相違が同じ物を觀るについても丸で違つた見解を造らしむるのである。例へば國際聯盟の成立に對しても理想派は之れ即ち現實を征服して理想が勝利を占めた第一着步であるとよろこぶ。國際聯盟と云ふやうな制度は從來に曾て其例を見なかつた全く新らしい企てゞあることは云ふを俟たない。何等の理想的指導なくしてあれ丈けのものが實現しようとは到底考へられない。けれども現實派の立場からいへば、ウイルソンがどんなに

理想を振り翳しても肝腎な所は皆骨抜にされたではないか。海洋の自由は如何、人種差別撤廢の蹉跌は如何、之れ皆理想に對する現實の壓迫を語るものではないか。然らば國際聯盟が出來ても、それが今後如何に適用せらるゝかは深く問はずして已に明かである。之を頼んで將來の平和を夢想するならば之れ大いなる誤りであると說く。此二派の考方の相違は、現在の物の見方ばかりでなく、將來の方針についても矢張り同じやうな相違を來すのは當然である。即ち國際聯盟についても理想派は國際聯盟の發達完成に對する誠實なる努力を慫慂するに反し現實主義者は寧ろ之を自家の利己的目的の爲めに利用すべきものと見る、從つて此種の人々の立場からいへば一體ウイルソンなどのやうに正義公道を擔ぎ出すのは餘りに白々しい。僞善と歎ぜざるを得ない。斯くして右の如き二つの違つた立場が根柢となつて我國の對外的政論にも更に紛々として歸する所がないのである。

理想派にも細く分ければ又自ら二つの種類になる。予は假りに之に名づけて一方を科學的理想派といひ他方を冥想的理想派と云つておかう、後者は社會國家の問題に關する或理想を藝術的に描き之を實際に實現し得べく又其儘之を實現すべきものと見るのである。之は純然たるユートピアンといつていゝ。餘り國際政局の實情に通じない、宗教家などの言論に往々之を見ることがある。否宗教家ばかりではない。我國の今日に於ても我々は時々飛んでもない人から斯う云ふ考で行けば世界の統一が出來るの宇宙の道德的秩序が確定するのと說かれて面喰ふ事もある。併しこう云ふ考へ方は理想派に屬する政論中の最も幼稚なもので、今日實際に重きをなす政論は寧ろ之を科學的理想派に求むべきである。即ち今日の國際關係を科學的方法に基いて研究し、其研究の結果理想の支配を信じ、又理想の將來に於ける實現乃至發展を信ずる立場である。從つて丸で實際をかけ離れた空論ではない。理想派の政論といへば何時でも空論と考ふるのは誤りである。少くとも酷評の譏を免れない。

之と同じやうな細別は現實派の政論についてもいへる。矢張り科學的と冥想的と二つの流れがあることを拒む事が出來ない。殊に此對立は對外問題の對策を論ずる場合に最も鮮かである。一體現實派の立場から國際問題を觀れば其間に一定不變の方針はあり得ない從て自ら臨機應變主義にならざるを得ない。若しそこに一定不變の方針ありとせば、そはあらゆる機會を利己的目的に利用すると云ふ事に外ならない。只此利己的目的を遂するについて、一方には當の問題を十分科學的に研究して其上に最も合目的な方針を定むる流派と又かゝる科學的研究を

自分の希望するやうな結果を無理矢理に發生せしめんと焦せる流儀とある。前の場合と同じく予は之にも科學的現實派と冥想的現實派との名稱を與へて置かう。同じく臨機應變主義で利己的目的の達成に突進したのでも、獨逸の最近の對外政策などは科學的なるに於て最も見事な特色を有つて居る。彼は對手國の形勢はどうなつて居るか。此等を歴史的、心理的に精密に研究して事實の確實なる認識の上に確乎たる對策を建てた。されば隨分我儘な傍若無人な對外政策ではあつた。其割に彼は常に美事な成蹟を擧げて居つた。中にも十九世紀の末から廿世紀の始に亘る對土政策の如きは最大の傑作と云つてい丶。之と比較すると我國最近の對支政策などは餘りに冥想的分子に富むの嫌なきを得るか。玆にくど／＼しく證據を擧げるまでもない、爲す所皆豫期に反して實際形勢の發展が期待と逆行すると云ふ事が已に科學的研究を缺いたと云ふ明白な證據でないか。歴史的研究を怠つたは無論の事、心理的研究は全然之を缺いて、此方の希望通りに彼も亦動くものと觀て即ち對手方を全然自分の道具とした嫌はなかつたか。此方針がいよ／＼行詰ると當方の希望通りに動くやうなものを强いて立て丶之を無理矢理に支那の實際的支配者たらしめんとした嫌はなかつたか。相手方の意嚮如何に拘らず一旦の決意を猛然として押し通さうと云ふ勇氣には敬服するけれども、[illegible]ない。相手方も亦我々と同じやうな人間であると云ふ考を除外して行く所に冥想的現實派の特色がある。

西洋に於ける對外政論の發達の概要を觀るに、最も古きは冥想的理想派の說が盛であつた。十八世紀末から十九世紀の初めにかけての外交論は餘程此調子が著しかつた。次いで來る者は現實派の政論であるが、併し冥想的現實派は殆んど實際問題に上らずして影を潜め、獨逸を好個の代表者として盛んに天下に橫行したのは、要するに科學的現實派の政論であつた。而してそれも結局行き詰つて最後にあらはれたのは、殊に戰後の今日に於て最も大いなる勢力を振ひつ丶あり、又振はんことを期待されて居るのは、科學的理想つの政論である。人によつては斯の觀方に異議を有つものもあらう。それ丈け我國に現實主義者の多い事は予輩の慨嘆の念を抱きつ丶之を認むる所である。而して彼等は理想的政論の立脚地を指して冥想といひ、理想的政論の世界的大勢に順應せんとする立場を指して盲從といひ、甚しきは亡國的と罵る。而して彼等は頻りに對外問題に對する自主的態度を高調力說するけれども、彼等は世界の大勢は或意味に於て實に我々が自主的に造る所であることを知らざるのみならず、世界の大勢と相涉らざる特殊の方面を固執することが即

ち自主的だと心得て居る。故に其議論は頗る現實に適切なるが如くにして極めて低調であり、遂に我國の立場をして全然世界より孤立せしめ、國際交通に於けるひねくれ者たらしめずんば已まさらんとする。

世界が漸次科學的理想派の政論を以て正論とする秋に際し、世界に類の無い異想的現實主義を以て根柢とする所謂官僚軍閥的外交論の橫行を見るのは時代錯誤も亦甚しいではないか。せめて我々は同じく現實主義の立場を取るにしても科學的態度の所まで行きたい。例へば支那の問題にしても、西伯利の問題にしても、事實を矯めた氣休めの誤報に安んずる所なく、實際の形勢がどうなつてゐるか、我々の過去に於て播いた種がどう云ふ花を咲いて居るかを有りの儘に見ることにもつと熱心になるべきである。科學的態度を取つて事實を忠實に觀るとか、やがて我々を正しい立場に導くであらう。

## 加藤總裁の演說を讀みて

先月十二日憲政會臨時大會に於ける加藤總裁の演說は、例によつて堂々數萬言、各種の問題について相當に充實した立派な立言であつた。殊に我々の氏に多とする所は各種の問題について政敵を攻擊する計りでなく、自家の積極的言議を可なり明白に發表する點である。所謂雲煙縹渺の間に意味有りげな、而かも曖昧な議論に隠るゝの陋態を踏襲せざる點である。併しながら予輩の總裁の演說を讀んで感服した點が單にそれ丈けに止るとを言明せねばならないのは予輩の大いに遺憾とする所である。

物價調節に關する政府の施設を難じ更に國民生活の保護の爲に氏の獻策する所にどれ丈けの眞理ありや又通貨政策に關する氏の提案のどれ丈けの價値ありやは專門外の事とて予輩に判斷は出來ない。が、例へば西伯利出兵論の如きに到ると我々は明白に氏の着眼の餘りに淺薄皮相なるを憾まずにはゐられない。氏が堂々と減兵の必要を唱ふる點については少くとも其結論に贊同の意を表するけれども、氏の執る所の減兵論の根據即ち西伯利に於ける反過激派主義者の間接援助の主義に至つては我々は全然之に贊同する事は出來ない。眞に反過激派主義者を援助すべくんば所謂間接援助を以てして果してよく其効を全うする事が出來るだらうか。此等の點については予輩に別個の意見があるけれども、それは姑く他日に讓して置かう。要するに總裁の西伯利出兵問題に關する議論の不徹底は或程度に於て、總裁が尙未だ當今の時勢を誤り一般論に見て居らるゝ事を語るものである

る。而して總裁が如に講和外交の失敗を認し、物價問題と思想問題との交渉を論ずるに至つて、如何に最近世界の内面的潮流の理解を缺いて居るかゞ分る。講和外交は云ふ迄もなく成功とはいへぬ。けれども何故に之を失敗と認ずべきやは、講和會議の前後を通じて世界を動かした思想の誤解に基いて說かなければならない。總裁は決して斯る立場より大局を觀なかつた。歐米各國は歐洲の天地最早後顧の憂無きを見て其勝翼を東洋に伸ばし來るであらう、其結果極東問題の解決は帝國の意思のみに依ては決せられなくなると云ふやうな立場から戰後外交の難局を說くが如きは偶々以て總裁の舊式外交の臭味を脫し切らざる事を明かにする者である。新日本の外交家の見識は、歐羅巴が來ようが米國が來ようが、ビクともしないと云ふ所に政策の根據を据ゑなければならない。若し夫れ物價騰貴に基く生活の不安と危險思想の蔓延とを關聯せしむるに至つては甚しく最近の所謂思想界の動搖を餘りに淺薄に見たるの譏を免れない。危險思想の蔓延が生活の不安に乘じて更に盛んになつた事は云ふを俟たない。けれども、生活の不安の結果として初めて起つたのでない事は云ふ迄もない。生活不安の緩和は幾分思想界の動搖を緩和するの功なきにあらざるべしとするも、之丈で全然之を根絕するとは出來ない。何故なれば之は今度の戰爭に伴つて起つた丸で

[illegible]

　更に進んで總裁が今度の議會の問題ともなるべく豫期さるゝ所の普通選擧並びに陪審制度について何等言及する所なかつたのは、一般世人と共に我々の最も物足らず考ふる所である。

　併し此等の總ての問題にも勝つて我々の大遺憾とする所は、氏が支那問題に關する言議に於て、頻に政府の措置を非として日支親善の根本策を論ずるに拘らず、此の論據が全然吾人の痛切に排斥して止まざる官僚軍閥の見識を出でざることである。氏は日支親善の實績の擧らざるに對し支那人の頑迷事理を解せざること、支那中央政府の威令行はれざる事又我國の外交が機宜を誤つた事を數へて居る。政府の對支外交の失敗については五ケ條の非難を擧げて居らるゝが、我々の見地から云へば丸で問題の要點に中つてない。而して氏は徒に此等の末節に拘泥し、而かも對支政策の根本としては官僚軍閥と共に利權の擁護に執着して居る。我々は利權の空名に拘泥する事が、支那の誤解を招き、支那に於て實際上の利權を失ひつゝある所以だと考へる。氏は膠州灣に於ける專管居留地を拋棄し、滿蒙及び山東に於ける既得の利權を維持することを得ずんば、東洋に於ける帝國の地位は動搖すると云ふ。我々は之を以て一種の幻影と考へる。けれども姑く氏の立場を正しとせんか、吾人は須らく日支親善

の宿望を拋棄すべきである。何故なれば此等の利權を形式的に維持するとせざるとが日支親善の可能不能を決する要點であるからである。如何に支那人が事理を解するやうになつても此點が極まらねば親善の實は擧らない。如何に支那中央政府の命令が行はるゝやうになつても此點が決まらねば民間の排日的動搖は止まない。氏の擧げたる五ケ條の外交的失態の如きは此根本の點から觀ればほんの末の末たるものに過ぎない。日支親善を說くならば利權論を捨つべきである。利權論を固執するならば日支親善を說くべきでない。此全然相容れざる二項を併せ說くは偶々以て氏の支那問題に關する理解の缺如を曝露するものではあるまいか。滿蒙問題といひ、青島問題といひ、總じて憲政會の支那問題に對する態度には、吾人に多大の異議あることを序ながら言明して置く。



# 思潮

# 勞働運動の現狀を論ず

中澤臨川

講和條約が締結されて、不滿足ながらも國際聯盟さへ成り立つた今日、世間は平和來の聲に醉はふともしない。世界の隅々からは日々の樣に勞働不安を告げる事件が聞かされ、動亂の性質を帶びたストライキが萬遍なく各文明國を脅かしてゐる。殊に戰爭に携はつた歐洲の國々は財政難やら、戰時中に於ける商工業の壞體やら、歸還兵士の職業難やら、物價騰貴やら、食料不足やらで、手の附けやうのない有樣である。饑寒の差し迫つた今日、東部及中部歐洲がこの冬の饑をどう過ごすかゞ問題である。滿五個年間に亙つた、大戰爭の恐ろしい影響の爲めに、歐洲各國の社會組織は根柢から振蕩されて、自然に格好な革命の素地が作られた觀がある。

今之を英國に就て見るに、戰時中から喧ましかつた炭坑國有案は、坑夫組合、鐵道從業員組合、運輸勞働者組合の所謂三角同盟の强請によつて、休戰後間もなく勃發し、總人員百貳十五萬の示威運動となつた。そこで政府、資本家及び勞働者の委員より成る調査會が作られ、數ケ月間揉めに揉めた結果は、終に先頃の大規模な同盟罷業となつて現はれたことは、猶ほ世人の記憶に新らしいところである。幸ひにしてこの罷業は直きに收まつたのではあるが、併しその困難な解決はより込み入つた形に於て一時延期されたまでのことである。

米國に於ては、今年に入つて有名な鋼鐵職工のストライキがあつた。それも一時收まつた形になつてゐるが、之と關聯した小騷動は猶ほ絕えず各地に起つて居り、いつ再發するやも圖られない模樣である。先頃より開かれた產業會議に於ては、勞働團から提出した團體交涉權の問題で資本家との間に確執があり、その交涉が纏まらずに物別れとなつたので、極めて險惡な雲行が全米の天地を蔽しつゝある。その結果は勞働組合聯合會、鐵道從業員組合、及農業者組合の三角同盟が成らうとし、ゴンパース氏は來る十二月十三日を以て右三角同盟會議を開く旨の

聲明書を發表したとある。一方には最近に於て勃發した紐育船渠勞働者のストライキが依然として繼續してゐて、之に關係ある職業の多くの勞働者まで休業の已むなき有樣に在るといふのに、更に十一月一日を以て炭坑夫五十萬のストライキの命令が發せられ、大統領ウイルソンの鎭撫的提議も一向功果なく、その爲め米國民は石炭供給の不足に苦みはしまいかといふ憂慮に襲はれてゐる。そのほか小規模の勞資紛爭は至るところに起つてゐる有樣である。ちやうど私がこの文章を書きつゝある日の一外電は、これ等の勞働不安を報道した終りに、『ここ數日間に於て米國には何等かの歷史的事件あるやも知れず』との詞を附け加へてゐる。

露西亞の現狀は今更述べるまでもない。獨逸では一時有力であつたスパルタカス團や獨立社會民主黨がその後は勢を潛めてゐるが、之とていつかに形勢の變化を見るか分つたことでない。佛蘭西は割合に安靜のやうではあるが、政界の雲行は次第に險惡に變つてゐる。それに有勢なC.G.T(全勞働組合)が目下は便宜の爲めに聲を潛めてゐるので持つてゐるものゝ、それが一たん經濟的又は政治的に活動し出した曉には、そこに由々敷出來事が醸されるであらうと思はれる。以太利とて同じこと、目下は急進勞働者の對策から、フユーメ事件に關しての[illegible]爭やらで、決して他國に比して穩かであるとはいはれない。

是等の卒直なる眼前の事實は何を我等に知らすかといふに、休戰に次ぐ一ケ年の勞働界は歷史あつて以來最多事の歲であつたといふ事、今や文明各國の社會組織は殆んど底知れぬ不安と動搖との上に立つてゐて、いついかなる變化が之を訪ふかわからないといふ事である。急進主義者も保守主義者も、樂天論者も悲觀論者も、この確實平明な事實だけは認めなければならない。五ケ年間の世界大戰といふ大海潮は、果せるかな、無爲を欲する怯懦者の強いて眼を瞑つて信じようとした如く、左樣に奇蹟的に何等の痕跡をも殘さずに引くことを爲さなんだ。あらゆる建物は崩され、あらゆる根はこがれた。この荒廢の中に立つては、政治家も信念を失ひ、資本家も居處に迷ひ、勞働者も思はぬ不安に驅られた。我等はベルサイユの立役者たるウイルソンやロイド・ジョージやクレマンソオの得意げな顏を見る代りに、彼等の困じ果てた當惑顏を見せつけられてゐる。「生產增加」と「勤儉」とは今日どの國に於ても戰後經營の唯一策として叫ばれてゐるのに拘らず、「何の爲めの？」或は「誰の爲めの？」生產增加かといふことが、第一今の社會の問題である。國家の爲めとか社會の爲めとかいふ古い信念は既う今日の[illegible]

みて冒險的投資の興業を失くした、醒めた勞働者に再び古いモ
ツトオに騙されて徒らに資本家や官僚の頤使に甘んじようとは
しない。剰さへ過渡期の常として一種絶望的の氣分が各階級の
間に漲り、資本家も勞働者も濫費の悪習に染まりつゝある。『共
倒れさ』といふ萬事を投げ出した危險な氣分さへが人心の奥に
養はれてゐる。であるから、生産増加の叫びも勤儉の叫びも
徒らに政治家の空な宣言に終るだけである。

然らばかやうな社會的不安――もつと具體的に言へば勞働不安――はどこから生れたかといふことを、我等は尋ねなければならない。すると世間の理論家や學者は、それは分りきつた事だ、今更それを研究するまでのことはない、マルクスの學説がかうで、社會民主黨の綱領がかゝらで、勞働運動の歴史はかく〳〵であるから、今日の勞働不安は別に新しいことでも何でもないと、かう一笑に附するに違ひない。併しわたくしの考へるには、それは外面的の觀察で、範疇に囚はれた議論である。學者は活世相の奥に潜む心理を知らない。なる程今まで いろ〳〵の先覺者が社會主義を説き、高遠な理想を我等に教へてくれたことは事實である。現下のやうな勞働不安が豫言され警告されたことも事實である。それ等の眞理が直接大きな影響を實[illegible]世界を征服しない。一の孤獨な理想が力を發揮するには、民衆の無意識的勃發に頼らなければならない。民衆はパン粉で、理想は醱酵素である。たま〳〵その酸素がパン粉に結び付いて適當の溫度に熱せられた場合にのみ酵素は有効である。我等がパンを造るには酵素のみを搜してはならない。酵素を搜す前にパン粉を得なければならない。

世の中の學者や理論家はオーウエン、フーリエ、マルクス、ラザラリなどいふ酵素から今の勞働運動が胚胎したと考へてゐるらしい。酵素がふくらんでパンが出來たと思つてゐるらしい。然るに事實は民衆といふパン粉が熱せられて、それに理想といふ酵素が結び附いた迄の事である。是非必要があればパン粉はそれ自らで酵素を造る場合もある。であるから酵素の存在といふことよりは、パン粉が適當に熱せられたかどうかといふこと、卽ち民衆の自覺がどこまで進んだかといふことが一番肝心である。

戰前の勞働運動を觀るに、酵素は用意されてゐたのであるが、パン粉がまだ充分の溫度に煮られなんだ。理論を先にした社會運動は行はれてゐたが、それが民衆を醱酵させるまでの機運に立到らなんだ。パン粉の熱せられないうちに酵素は腐り

かけた。戰前の社會運動に墮落の兆候の見えたのはそれである。然るに今回の世界大戰は民衆の精神に激動を與へて、彼等の自覺を促進した。血税のいかに貴いかといふこと、それに較べると金錢上の租税などは比較にならないといふこと、民衆の力でなければ大事はなし遂げられないといふこと、政治者流や資本家の權勢が案外虛弱なものであるといふことが、戰爭の結果として一般民衆の心に深く浸み渡つた。戰前に於ける民衆の大部分は猶ほ現社會の制度の不可抗なものであることを信じてゐたのであるが、それがこの五年間に殆んど根柢から覆された觀がある。依然として外見だけは堂々たる大帝國の組織も、あらゆる生產機關の獨占者である如く見ゆる資本國も、その實は基礎薄弱で、見掛倒しの紙の城砦に過ぎないことが觀破された。ロマノフとハプスブルグとホーヘンゾルレンの諸帝國が一夜に崩壞した史實を目擊した民衆は、ロスチヤイルドやクルツプの王國が倒れやうと、もう少しも不思議とは感じない。戰爭は文字通り眞に新しい國民を生んだのである。

かやうな新國民は既う資本家や資本主義的政府の奴隷として甘んずるものでない。民衆の大部分は今日でもまだ社會主義の何物であるかを知つてはゐない。學理的の社會主義は猶ほ少數理想家の夢である。それにも拘らず社會の空氣は一變した。パンは醱酵し初めた。社會主義はもう自覺的少數者の空想でなくて、新氣運に釀された大多數民衆の無意識的運動である。勞働運動は最早賃銀增加や時間短縮の要求から超越しようとしてゐる。我等は產業の爲めに存在するのでなくて、產業が我等の爲めに存在するのであるといふ思想が、勞働者の人生觀を一變さした。之は實に大きな變化である。社會主義は初めて書齋から街頭へ出た。

書齋から街頭へ出た社會主義は、その必然の結果として改訂を要すべきである。先づ第一にはそのユートピア的の衣を脱がねばならぬ。それは初期社會主義のやうに天國を夢みたり、物質的黃金世界を約束したりしてはならぬ。それは未來を安造りの型にはめてはならぬ。それはまた餘りに強く階級鬪爭や革命を力說してはならぬ。なぜなら社會主義が當分實現されない理想として說かれる場合には、その理想に力附ける爲めに革命を說き鬪爭を奬勵することは必要であり、且つ甚だ無難でもあるが、それが實行期に這入つた場合には、おのづから之に伴ふ責任をも考慮せねばならぬ。鬪爭を必要とする前に鬪爭を避くのはいゝ。鬪爭が始まつてからは、なるべく平和の道を說くべきである。戰前の社會主義の階級鬪爭を力說するのであつた

如く、今後の社會主義は社會的責務を力說する必要がある。今日の先覺者の任務は煽動でなくて善導である。

社會的責務の說得は道德上の問題である。新しい人道主義と新しい宗教とがこゝに生れなければならない。今日の人心を幾つかに分つ障壁は物質主義である。で、第一に我等は唯物思想を打破するの必然を感ずる。社會的唯物觀に必要な破壞の爲めに人類を共同させるに、今迄役立つた。併しもう其任務は過ぎた。破壞の始まりつゝある今日は反對に精神的の人生哲學が鼓吹されなければならない。我等は彼の功績を感謝しつゝマルクスを葬らねばならない。

併しまた一方から見るに、自覺した民衆は世間の所謂識者が危んでゐるほどに無責任でも暴的でもない。それは同盟罷工などによくあることであるが、彼等の目的が上から强制的に壓迫される場合にその絕望の生む殘忍性が彼等を驅つて暴徒的ならしめることはある。併しわたくしの經驗から言へば、普通の場合に、勞働者の間に行はれてゐる責任觀念は案外强く、所謂上流社會などよりも優れてゐるかに見える。先頃英國で行はれた鐵道從業員の罷工に於て、その首領の一人が次の如く宣言してゐるのは甚だ心丈夫である。曰く『職工組合の活動は今日の如く旺盛であつたことはない。權力と共に責任が隨伴する……我等は祖國に對する責任を銘記することに努めたし』と

會的闘爭の未來に對し、わたくしはかうした一面からは樂觀的である。

併しまた他の一面から考へるに、露西亞革命の如き悲慘な事實が現に我等の眼前に横はつてゐる。佛蘭西革命に際しても暴民（サンクロット）の出現がどれだけ無益な血を流したかわからない。これ等の原因は一に人心の奧に潛む獸的殘忍性の發露に歸することが能きる。然らばそれに對する豫防はどうすればよいかといふに、先づ無理な壓迫を避け、人心の自然な發現を許して正當な勢をば堰くことをせずに次第に之を善導するといふ方針を採らねばならぬ。わが國に於ける勞働組合の承認、普通選擧の施行の如きはかうした意味からして目下の急務である。

實行期に近づいた今後の社會主義に於て今一つの緊要事は民主的及自治的精神の普及と之が運用に關する訓練である。今迄の代議政治には豫想された程の功果がなかつた。併しそれは民主々義そのものゝ罪ではなくて、之の施行が跛足的であつた爲めである。多數決といふ機械的採決法にも批難はあるが、之とてそれ以上よい民意表現法の發見されない限り、成るべくその弊を矯めて行くといふ外に途がない。で、勞働者が一方には民主々義に從ひ次第に政治的に權力を獲得するとゝもに、他方には之

も漸次に産業機關に干與するといふ方策を採つて進めば、社會の改造は最も平穩に行はれることゝ思ふ。それからもう一つ考へなければならないことは、今日の政治なり産業なりの機關は非常に複雜であるので、之を掌握した場合の充分な用意が必要である。それには、代議政治に親炙すること、勞働組合の組織に於て自治的經驗を踏んで行くことが善い方法であらう。何れにしても民衆が議會と勞働組合とを利用して次第に多數を得て行利の位置を占め、同時に民主自治の訓練を重ねて行けば、社會は突飛な變化なしに、暴力の用ゐられる機會なしに、圓滿に改まることが能きる。在來の理想的社會主義を信奉して革命の福音に馴れた人達は、わたくしの所説をもどかしく思ふだらうが、併し玆に强制的『直接行動』の奏効を考へて看るがよい。そこには一時的に産業の停止が行はれるに違ひない。訓練なくして急に權力をえた勞働者は複雜な政治と産業との機關をどう働かしてよいか分らないので、少なからぬ不秩序が出現するに相違ない。すると暴動が起り、暴動は人の殘忍性に爆發の機會を與へ、社會はいよ／＼收拾することの能きない動亂の衢と化するのが落ちであらう。民主的訓練と自治的思想との行渡つてゐなかつた露西亞の革命が之に對して生きた實例を示してゐる。

革命的方法によるときは所期の社會改造が早く行はれ、民主々義的改善法によるときはそれが非常に後れるやうに思ふのは誤である。要は機運の問題である。機運にして熟しないならば、その革命は無謀な暴擧として反動の爲めに壓倒されるだらうし、機が熟して居れば平和な措置の間にも改造はずん／＼と行はれる。されば時の遲速は機運の來否の問題である。勞働運動にとつては宣傳、敎化、その他の方法によりその機運を促進せしめることが一番に大切である。

わたくしの言ふことは理想の否定ではない、また革命の否定でもない。理想はいよ／＼高いほどよく、暴力の伴はない革命ならば申分がない。併し社會の事情はさう我等の考へ通りに行かないによつて、步一步理想に近づく爲めの手段として最善の實行方法を奬めることは最も賢い處置であらうと思はれる。

## ウイルソンと亞米利加

ウイルソンに就ではいろ／＼の批難攻擊を聞くが、とにかく彼は「偉大」の名に値ひする人物であつて、その行政は歷史の上に獨特の印象を殘してゐる。リンコルンによつて聲明せられ、[illegible]

曠漠たる處女地、無限の富源、その中に住む新進氣鋭の國民——それが亞米利加である。そこは凡ての混沌たる生氣の若々しい芽を吹く場所で、あらゆる新しい試みの自由に行はれる場所である。そこには重い天井がなくて、たゞ温かい床がある。そこにはまだ平衡がない。そこでは善と惡と、自利と利他と理想主義と資本主義上が油のやうに融け合つてゐる。そこには終りがなくて始めだけがある。

Brain of the New World! What a task is thine!
To formulate the Modern.........
........Land tolerating all—accepting all......

（新世界の頭！お脳髄の仕事は何だ！
それは「近代」を造ることだ........
........凡てに寛大で、凡てを受容れる邦土....）

---

Have the elder races halted?
Do they droop and end their lesson, wearied over
there beyond the seas?
We take up the task eternal, and the burden,
and the lesson.
Pioneers! O Pioneers!

Walt Whitman.

海の彼方で疲れきつた彼等は打萎れてその日課を廢したのか？
然らば我等がその久遠の仕事を、その荷を、その日課をとる。
先驅者よ、オ、先驅者よ！——ホイツトマン）

デモクラシイの理想は實にかやうな新先驅者の雄叫びである。それは政治の形式でもなければ、講壇哲學でもない。それは撓めることも能き、延ばすことも能き、自由な形に鍛え上げることの能きるところの、うぶで生々した彈性のある液體である。眞のデモクラシイはそれ自らが一の固定した目的でなくして、一の潑剌たる精神である。それは平和の聲でもあり、同時に烈しい戰好きの聲でもある。何よりもそれは新しい民衆の聲である（"A word of the Modern—a word of en-masse." Whitman)。

然るに亞米利加に於けるこの理想は、近代に於ける資本主義と拜金宗との爲めに、暫く宙に迷つた形がある。一時ボス政治に毒せられたかの邦は、若くして夙くその貴い理想を失墜する危險に瀕してゐた。幸ひにもその毒の深い割合に彼等の生命には猶ほ青春の血が沸き回つてゐた。その時今回の世界戰爭が起つて、大統領ウイルソンの指導宜しきをえた爲めに、この國民

は救はれたのである。

開戰當時の亞米利加は大きなディレンマの淵に臨んでゐた。墮落しかけたモンロオ主義を口實に戰を避くべきか、それとも『世界をデモクラシイの爲めに安全に造るべきか』といふことが、この國民の解決せねばならない道德的岐路であつた。一たんその道を誤つたが最後、彼女の貴い理想は永久にマンモンの神の前にその膝を屈せねばならなんだ。この時ウイルソンは立つてデモクラシイの爲めの戰を宣言した。『自國の人民に自由を與へるのみならず、凡ての世界、凡ての未來に希望を與へる爲めである』とリンコルンの言つた『獨立宣言』の主旨は初めて具體的の第一歩を踏んだ、今までは混沌の境を出でなんだ亞米利加的デモクラシイの理想は漸く明白な形を人道の銃の上に映出した。加之ならず、この重大な危期に際して試練を經たお蔭でその邦の未來は救はれたのである。

即ち、この戰爭に於て歐洲が亞米利加により救はれた如く、亞米利加は歐洲戰爭によつて救はれたのであると謂へる。で、戰に臨んだ亞米利加國民は理想家ウイルソンによつて代表されるに適はしいほど理想的の國民であつた。彼等は一朝にして生れ變つたかの觀があつた。若々しい力のデモクラシイが人道の[illegible]かつた。それが一九一七年の春に於て、殆んど絶望と道德的混迷の極とに瀕してゐた聯合國にどれだけ刺戟的の力を與へたかといふことは想像以上である。

ウイルソンを理想家と笑ふ者は、この戰に際しての亞米利加國民の理想を笑ふ者である。それほど彼等は小供らしく理想的であつた。全體の傾向としてはこの國民の參戰の動機には決して狹しいところがなかつた。次のウイルソンの宣言は彼等の偽らざる告白であつた。

**世界はデモクラシイの爲めに安全に造られねばならぬ。その平和は實驗を經た政治的自由の基礎の上に樹てられねばならぬ。我等には少しも利己的の目的はない。………我等は人類の正義の友人のひとりに過ぎない。………**

**我等は我等の心に平常最も愛惜しつゝある物の爲めに戰はねばならぬ——即ちデモクラシイの爲めに、權勢に服從しつゝ人々がその政府に對して發言を持ちうる爲めに、凡ての國民に平和と安全とを招致し終ひには世界一體をして自由ならしむる目的を以て自由民の協調を造り正義の普遍的支配をなす爲めに。**

ウイルソンと彼の亞米利加とが、深い考慮の後に戰を宣したときには、實際かやうな倫理的動機が彼等を支配してゐたので[illegible]

久の誇りであり光榮であると謂はねばならぬ。

それから續いて講和會議の終局に到るまで、この國民とウイルソンとの態度は立派であつた。國際聯盟の效蹟について茲に述べるまでもない。また敵國獨逸に對して餘りに苛酷な條件を課したといふ批難に關しては、その罪はウイルソンにあるわけではない（なぜなら、亞米利加自身は少しも利益を貪つてゐるのでないから）。何れにせよこれ等の事の詳しい批評は私のがらでないが、唯だ私を感動せしめた一事を擧げるならば、それは秘密外交の打破であつて、その效蹟は一にウイルソンに歸すべきである。例の有名な十四箇條の第一條には、『今後は國際間にいかなる種類の私的約束もあつてはならぬ。外交は常に公明を以て輿論の間に行はれねばならぬ』とある。不幸にして彼のこの理想はベルサイユ會議に際し多少裏切られた形はあつたにしても、彼の精神は充分の尊敬を以て買はれなければならない。

凡そ外交の專門化、官僚化ほど國民を愚にしたものはない。奸曲なマキアベリズム、小供だましの儀禮、虛僞、無責任――かうした卑怯な動作の間に立派な國と國との間の重大な交渉が行はれ、或場合には一國民の運命までがかやうな公許の僞善者の手に托されるとは馬鹿々々しくもたわけた話である。わたくし大國の外交家を無視したかといふこと、かの有名な維納會議がその赤裸々な內容は隨分人を愚にしたものであり、タレーランにしてがメッテルニッヒにしてが狐鼠にも劣る醜しい動物であつたことを知つて、その以後は所謂外交家に敬意を拂ふ氣になれなんでゐる。今回の世界戰爭にしてが、遠因は別にあるにしてもその手近い原因は歐洲官僚政治家の無能、無定見、惡意、秘密外交の失策といふことに多くの責を歸すべきである。外交は國家の公器中でも重大な公器である。それを國民の輿論に聽從せずして秘密裡に行ふといふほど不道理なことはない。この幾千年來の無意義な而も罪惡的の慣例が、ウイルソンによつて一部破られたといふことは、唯だそれだけでも不朽の光榮を以て彼を讃するに充分であると思ふ。

# 自由・文化叢書

早大教授 杉森孝次郎 原著

熊崎武良溫譯

## 道德的帝國の原理

◆四六判總クロース脊金總模樣函入全紙アートを用ゐ典雅無比◆定價金貳圓五拾錢郵税拾貳錢◆

日本人の著した最初の世界的著述？それは本書である。これまでとても外國で好評を博した書物はある。しかし其等の書物の一切は要するに日本に對する好奇心を滿足せしむる程度を超えなかつた我哲學界の偉器杉森氏のこの著述に至つて初めてその「內容に於て」世界的名著となつたのである。英國に於て版を重ね、今や佛譯成らんとして、まさに世界學界に喧傳せられつゝある此の名著が、篤學研究の人、熊崎氏に依り自國語に移されてこゝに上梓した。現下の改造的諸問題の根本に横はる「人格及國家」に對する驚異すべき獨創的解釋が卽ち偉大なる本著述の內容である。

◆◆◆◆

革新的時運は竟にこの叢書を生めり目覺めたる人の爲に哲學、文藝、科學、政治及社會の各分野に於ける最新の世界的名著は相次いで刊行せらるべし

◆◆◆◆

ロープシン著

青野季吉譯

## 蒼ざめたる馬

◆四六判總クロース脊金總模樣、箱入、用紙優良、裝幀頗美麗◆定價金壹圓五拾錢送料拾貳錢◆

「ロシア人及其生活を現したる點に於て實に近代ロシア文學中第一位の書である」とメレジコフスキーが激賞した名作である。作者はケレンスキー內閣の內相であつた。サヴエチニコフの變名である此の作は題材を作者の自叙傳的な暗殺事件に取つてゐる。最新傾向の代表的小說である。

發行所 東京市麴町區三番町廿八 冬夏社

振替東京四五四四六番

電話番町三六二二番

# ▽中央公論新年號豫告△

大正九年一月一日發行

## 社會改造の世界的大主潮に對する理解と順應とを高調し

**頑迷なる保守主義と燥狂なる波**

■ 國家生活の一新……法學博士 吉野作造

■ 煩悶の時代……理學博士 丘淺次郎

■ 新眞モダーニスト……中澤臨川

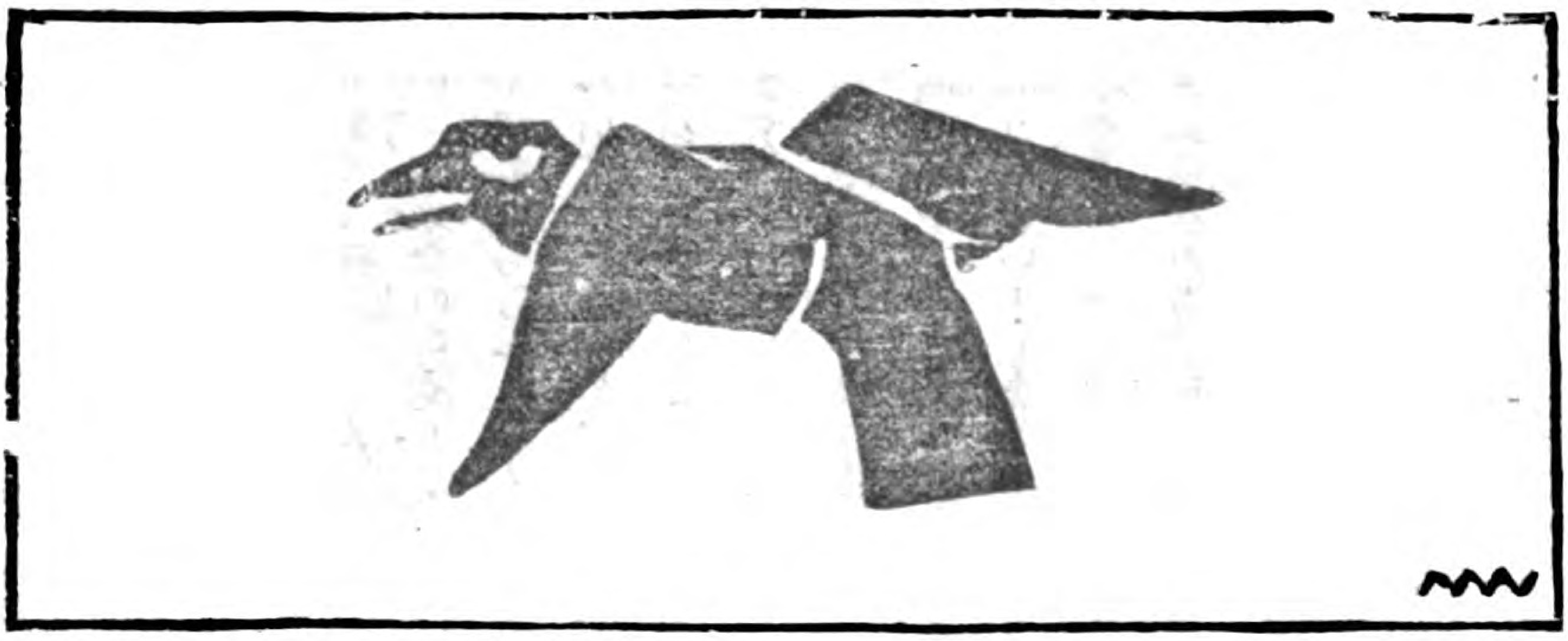
■ 結婚改造論……法學博士 森本厚吉

■ 改造と人間性……大山郁夫

■ 國際勞働會議の歸趨と我國勞働問題の將來……法學博士 堀江歸一

■ デモクラシーの制度を論ず……室伏高信

■ 體育と能率增進問題……醫學博士 永井潜



# 實子の放逐

岩野泡鳴

## 一

『あんた、ちよツと來て下さい！』妻のお兼はけたたましくはしご段をあがつて來た。そして机のそばへ腰をおろし、瀬戸の火鉢に兩手をかけて、『幸田が失敬ぢやアありませんか、やうやう歸りかけたかと思ふと、また玄關の土間からくびを延ばして子供と顏を見合つたり！　さうして春子のはうがそのそばでよち〱してちよツと倒れたら、それを馬鹿にしてみんなであざ笑つたり！』

『…………』まさか、あざ笑つたのでもあるまいと吾助は思つたので、俄かにまたいつものやうないきどほりを發したのはその爲めではなかつた。が、こちらでいやになつて、また向ふにも不都合なことがあつて、一たび追ひ出した女を二人の子供の實母だからとして、本人の願ひをも容れてやり、また子供の方の心をも察してやつて、寛大にも斯うして、時々とまりに來させてゐるのである。今回もきのふの朝から來て一泊し、けふも子供が日曜だからと云つてこの晝過ぎまでゐたら、もう、十分に滿足ではないか？　それにも拘らず、歸りがけになつてなほ別れを惜しんで、手を取り合はないまでに芝居じみた顏の見合ひをしてゐるのかと思ふと、こちらも意地になつて憎々しくなつた。机の前を立ちあがるが早

いか、はしご段を妾よりさきに下りて行つて、『まだ歸らないでぐづ〲してゐるのか？』

『今歸りかけてるぢやアありませんか？』

『ぢやア、直ぐ出て行け！』吾助は幸田の婆々アじみた横ツつらを一つ喰らはせてやりたくもあつたが、それだけはさし控へて、その餘勢を言葉や目つきにばかり出した。あの氣違ひじみたヒステリづらでやがては自分のところへこちらが歸つて來ると力んでゐたと云ふことを人づてに聽いたことさへ、實は、癪にさわつてるのだ。きのふはきのふで、かの女が來たのを隣りの若い細君とその妹とが燒きもきしてどんな人だらうと窓から頻りにのぞいてゐたさうだ。來るたんびにこちらがもと〲通り可愛がつてやるのかと人から思はれるのも馬鹿々々しかつた。『直ぐ出て行け！』

『出て行きますが、ね』と、幸田はおど〲しながらも、例の如く、またくどさうにこちらの寛大につけ込み、今の若い妻を馬鹿にしてゐるやうすが見えないではなかつた。『わたしは子供のことさへ頼んで置けばいいんですから。また來ますよ。』

『いや、もう、貴さまのやうなやつア二度と來るにやア及ばない！』

『そりやア無理です、わ！』俄かにかの女はこちらへ突ツかかつて來るやうな態度になつた。

『うるさい！　また小理窟を云ふか？』一つ大きく叱り付けて默らせて置いて、吾助は少し言葉を和らげて因果を含めるやうに告げた。子供を三人ともかの女にまかせてあつた時はこちらが一度も會ひに行かなかつた。姉の方が會ひたいと云ひながら病氣で死んでも、葬式にさへ行つてやらなかつた。かの女はそれを父の無情と云ひふらしてゐるが、こちらには寧ろ別な理由があつた。一つにはかの女のつらを見たくなかつた爲めだが、今一つの理由は憎み合つてる父と母との間に立つて、殘つてる子供の心を兩方へ迷はせたくなかつたのだ。ところが、去年、かの女が自分のおろかな計らひでこちらのやつてある生活のたつきなる家庭を人に取られてしまつたので、今やこちらが子供を引き取つた以上は、今度はかの女がさう度々こちらへ來ないのが本當だらう。『貴さまが來る爲めに、子供の心はその度毎にぐらつくし、その上、家庭にいらない闖者が居つて迷惑だ』と。

『あなたは自分勝手に迷惑してゐるんですから、ね』と、幸田はなほへらず口を叩いた。
『何を云ふ、この婆々ア！』妻もはたで激昂してゐたのだらう、不斷には出したこともないひどいこと葉を吐いた。それにまた附け加へて、『一旦離婚された者が圖々しくやつて來るなんか、ほかの家にはないことですよ！』
『…………』幸田はそれにぎツくりしたと見え、たださへきよと／＼したその目を擧げて恨めしさうに暫らくお兼を見つめてゐたが、『さうですか？　ぢやア、歸りますから、ね』と、ぷり／＼怒つて直ぐ玄關の敷居をまたぎかけたが、そこでもまた『若い人から見りやア婆々アになるのも當り前です、さんざん苦勞をさせられたあげくですから、ね』と云ふ棄てぜりふをほざいた。
　そのあとをあツけに取られて、二人のままツ子がまだきちんと坐わつて膝ツこぶしを出してる前で、お兼は如何にも憎々しさうに、なほ渠らの實母の面白くない態度に對する不平を云つた。
『人のうちへ來てゐて掃除一つ手つだはないで、生意氣にも子供に足こしをさすらせたりばかりして！　さうして自分はただ鼻くそばかりほじくつて、それを手で圓めてあたりかまはず投げちらすのですもの！　わたし、きのふから御はんをろく／＼たべられませんでした、わ——あれを思ひ出すと、むなくそが惡くなつて。』
『おれはそんなことにやア氣が付かなかつたが』と、吾助も氣が荒立つてゐたが、それを押し靜めつつ、それとなく妻の言葉のつよい響きを子供に和らげて聽かせるやうにした。そしてかの女が第二の母として子供に對してその實母のことを——正直にだが——さうつけ／＼くさすのは、かの女自身の爲めにもあまりいいことではないと考へた。が、吾助自身としては、また、子供の實母に對して今の妻の立ち場を辯護して置かなければならなかつたので、『おれも』と、わざとにもお兼に贊成して見せて、『あいつの婆々アじみたとげ／＼しいつらを見るたんびに、自分ながら、今更らよくもあんな者と一緒になつてゐたものだと思ふんだ。』
『そりやア、よかつたのでしようから、ね。』
『…………』馬鹿と、こちらはかの女のはしたなさを叱り付けてやりたかつた。が、今さうすれば、聽いてる子供

をしてます〳〵いゝ氣になつて若い母に對する惡感をつゞけしめることになるだらうと思へたので、喉まで出たののしりを私かにぐツと呑んでしまつた。兄の方は、もう、敎へられないでも、ひとり手に男の兒としておぼえることをいつのまにかおぼえた。その證據を繼母に發見されて、父からあたまを惡くするツてひどく戒しめられたこともある。そして父としては次ぎの兒も今や――少しそれとしては早過ぎるが――同じことを誰れからかをそはつてゐはしないかと云ふ疑ひを持つてるのである。さう云ふものらの前で、如何に考へがない女としても、はしたないことや嫉妬じみたことを云ふべきではなかつた。

兄の雄作は小學校を出る少し前に自分から進んで父のもとへ來て中學へ通ひたいと云ひ出した。それが二度目に故初のゆかりとなつて、幸田が子供二名をつれて來た。こちらはどうせ引き取るなら、自分の思ひ通り、弟をもやがて引き取つてこちらで敎育し、弟の政直の方は一人前になるのを待つて幸田の養子にすることにした。そして改めて愛撫の言葉を云つて聽かせたり、庭に育てた草ばなのいろ〳〵を見せたりして、その時は一と先づ歸した。すると、市中にばかり育つて、まだ植物や畑の知識などは少しもなかつた政直は、俄かに父のやうな庭つくりの眞似をしようとして、母が買つて置いた洗ひ大根を一本、狹い庭の隅に植ゑたが、白く奇麗な根を上に出して、葉ツぱの方を土に埋めたと云ふ。

それほどまだ無邪氣であつたから、弟の方は引き取られると、父を何となく避けながらも、お義母のつれツ兒とは直ぐ親しんだ。初雄と云つて、これも男の兒で、やツと小學校へ行き初めた頃であつたが、もう、戸籍上でも同じやうにこちらの子になつてゐた。雄作には、その疑ひ深い實母から云ひ含められて、初雄の爲め若しくは新らしくできる兒の爲めに廢嫡されなどしないやうにと云ふ警戒心が初めからあつたやうだ。が、政直にはそんなことも分らないので、初雄を一番いい遊び友達にしたばかりでなく、うへの兒がこツそり畫どころの物を盗んだり、そとから菓子を買つて來て皆に知れないやうに別室の縁どこの中で喰つたりするを發見すると、したの二人で心を合はせてそれを素ツ破ぬいた。そして兄の壓迫にいつも二人は小さい力を合はせて對抗してゐた。

が、お義母の立ち聽いたところでは、兄と政直とが或時一緒に湯に這入つてゐると、雄作に弟を威しつけるやうにして

きたは口說くやうにして、

『なぜあんな者に味かたして、にイさんに同情しないの』などと云つてゐた。あんな者とは初雄のことで、『兄弟でも何でもないのだ。あかの他人だよ。然し、わたしは政ちやんのにイさんぢやアないか？ にイさんがえらくなれば弟も助けられてえらくなるにきまつてる。そのわけを知らないで、どうしてにイさんの味かたをしないのよ！ 自烈たい、ね、ちやんと返事をおし！』

『…………』政直はその時なか／＼口を出さなかつたさうだ。そして最後に云ひぬけの爲めであつたかも知れないが、『あとで考へてから返事するから』と答へたさうだ。

『政ちやんの方は子供の返事としてなか／＼おほできでしたが、わたし』と、お兼はそのあとで憤慨してこちらに語つた、『雄作がわざ／＼無邪氣なものにわる知慧をつけて、早く返事をしないと悲觀しちやうよ、自烈たいなんて足ぶみまでして威し付けたのを聽いた時には、その本人をあはれにもなつて、ぞッとしましたわ。如何に幸田がそのかげに附いてるからッて、何だッてあんなにけち臭い子でしよう、ね？』

『ふん！』困つたものだとはこちらも思つたが、こんな時、感情の激してゐる妻を慰める言葉をへたに云へば却つてまたかの女をつけあがらしめるだらうし、さうかと云つて、また、へたに子供をもッとおほ目に見て置かせるやうに戒めたッて、まだ斯う云ふことに經驗のない女には分る筈がなかつた。子供がこッそり臺どころの砂糖や茶簞笥の中の菓子を盜むほどのことは、自分らも子供の時にして來たことで、どこでもあり勝ちなことだと云つて聽かせても、

『いや、雄作のは特別に意地が惡い仕かたですから』と答へて、聽かないのであつた。尤も、雄作はお兼のなか／＼ちよッと落した位では毀われさうでもない舶來の鏡を、かの女の留守に、うち毀わしてとぼけてゐたこともあつた。だから、かの女に直接には何とも云はなかつたが、吾助はうへの子供ふたりを二階の書齋へ呼んで來させ、お兼をもひがみ根性を起させない爲め立ち合はせて置いて、また父としての訓戒を發した。

『一體、お前達が此家へ來てゐる以上は、今のおッ母さんを本當のおッ母さんと同樣に思はなければならん。さうして

其結果としてあの初雄をも兄弟のひとりにしてやらなければいけない。』たとへば、貰はれて來た子でも貰はれた以上はそこの子になつたのだ。血すぢがどうの、斯うのとか、幸田がそとからむかし流に勝手なことを云つてるのは、父として少しも頓着してゐない。若し父が死ぬとして、その時みんなの財產になる物があるとしたら、どの子供にも同じやうに分けてやれと云ふ遺言をして置くつもりで――そのうちで、雄作は總領だからこの田口家を繼ぐし、政直は約束があつて幸田家のあとになるし、初雄や春子はまた別々に獨立するだらう。それに、今の母は母で、矢ツ張り、生活ができるやうにしてやらないぢやア父の責任は濟まない。然し、ただお前達のもとの母は今ぢやア田口家に關係がないから、もう、この家で世話をしてやるには及ばない。いや、一生生活ができる爲めにあのお前達も知つてる家をやつてあつたのだが、甲斐性なしの爲めにあの商賣を自分でつづけて行くことができず、それに元來が馬鹿なくせにづるいところから、なまはんじやくな猾知慧を出して却つて人に取られてしまつたのだ。若しあの女の老後を養つてやりたけりやアお前達が勝手にしてやるがいい。と、まア、斯う云つたわけだと云ふことを噛みしめて與へるやうに云つて聽かせた。

けれども、政直はその兄の壓迫に對してどう答へをきめたのかこちらには分らなかつたが、その後、學校へ行つても初雄を却つてよその子供と一緒になつていじめるやうになつた。そして雄作がうちでどんぶりを毀わしたり、買ひ物のつり錢を出さなかつたりすることは相變らず止まなかつた。それに對するお彼の辛抱が辛抱し切れなくなつて、とう〳〵、今玄關に於ける幸田との衝突になつたのだと思ふと、相當の家がらを以つてわざ〳〵こんな面倒な家庭へ這入つた妻の位置も思ひやられて、吾助は幸田の無常識なわが儘を批難して置く爲め、子供に向つてはただ簡單に斯う云ふ風な命令を與へた、

『どうせお前達が大きくなつたら分ることとだが、實は、幸田は一つには姦通と云ふ不都合なことがあつたので追ひ出されたのだ。それが圖々しくもやつて來るのを今日まではお前達に免じて許してあつたが、あア云ふ風に分らず屋ぢやアうちの家庭の邪魔になるから、以後は來させない。お前達もそのつもりでうちぢやアよく今のおッ母さんの云ふことをきくがいいぞ。さうでないと、またおれが追ひ出してしまうから。』

『へい』と、雄作は膝の上に堅くるしく兩手を置いてゐながら、素直に答へた。渠はその力相當にこちらを理解してゐることはゐるのであつた。『うちのおやぢは馬鹿だ』などと、生意氣にも學校では云つてるらしいのがよそから聽えて來るが、多少はこちらの大膽勇猛でなければ主張できない社會的、國家的運動のことを父の書いた物で讀んでるかして、『僕も、少しおとうさんのとは違つてるかも知れないけれど、大抵おとうさんのと同じ主義で哲學的宗敎家になるつもりです』ともお兼には話したさうだ。

それに比べると、政直の方はそのまた弟の初雄が大隈さんになると云つてるのに對して『おれは東郷大將になるんでい、畜生』と、芝育ち特有の惡たれ口調で、却つて時代後れのことを云ふほど幼稚だ。そしてこちらの見たところでは、また、うつわが小さく、人が惡かつた。第一、學校へ行つても、新聞などに出される田口〇〇の子だと云ふことを一番に耻ぢてゐるのである。それには、無論、その實母のヒステリ的な惡い仕込みがあつた。

『お前たちのお父アんは馬鹿で、薄情で』と云ふやうな、かの女自身にばかり都合のいいことを幸田はいつも子供に云つて聽かせてゐたらしい。それがまた何のゆかりもない初對面の他人にもであつた。だから、死んだあね娘は、一度たとへ父が馬鹿であつたとしても、そんなことをあかの他人にまで云ふには及ばない。まして馬鹿どころではない、えらい人らしいからと忠告して、母とおほ衝突をしたさうだ。

それでも幸田はそのうつけた無常識が直らなかつた。そしてこちらがお兼と結婚したのが世間の評判になつた時など否助の雅號を入れて、『〇〇と兼子と現代式だ、ね』のはやり唄を歌ひ囃りしてるのを聽きに、これは政直の何げなくお兼に語つたところだが、わざ〳〵政直をつれて芝公園まで行つたと云ふから。

## 二

吾助の考へでは、幸田があア云ふ風に歸つても、あの圖々しさだから、また何とか尙をくつてやつて來るかも知れない。そんなことがあつたら、今度は子供の見せしめにも一つこツぴどく投ぐり付けて、懲りごりさせてやるつもりであつた。

が、こちらの出かたがいつになくこたへたと見え、それツ切り音沙汰がなかつた。その奉公さきをも換へると云つてたのだから、換へた筈であるが、それをも通知して來ないのであつた。

『幸田から何とか云つて來はしないか』と聽いて見ても、雄作の答へでは、

『別に——何も。』

『多分、そとで會つてるのでしようよ』と、はたからお篠は、突きとめてでもゐるかのやうに、思ひ切つて口を出した。

『………』まさかと、吾助は思つてゐた。わが子を掩護すると云ふよりも、そんなことは、父の命令を守つて、少くとも當分のうちはしないだらうと見てた。

その上、雄作はその一番すゑの妹に當る腹ちがひの春子を政直のするよりも以上に可愛がつてるし、春子も亦きようだい中で他の誰れよりも先きに雄作によくなじんでゐた。

『矢ツ張り、血を分けたものは違ひます、ね。あんな小さい時からでも、どこか相通じるものがあるのでしようよ』と、お篠はかげながら嬉しがつた。かの女が尤も、若しできるものなら、うへの子ふたりをも自分の實子同樣に取り扱ひたいのであることは、こちらにもよく分つてゐた。が、これまでにいろ〳〵な感情の行き違ひや若い爲めの思ひ違ひがあつて、うまく思ひどほりには行かないのであつた。かの女は或日外出する時、親しみの意味で雄作を一緒につれて行つてやらうとした。中學生の新らしい制服ができて來た時だ、そして楽も歸りにはどこかで何かたべさせてやると云ふのを喜んだ。そしてそのあまへた勢ひが、生意氣につい、冗談となつてだらう、お篠が時々三味につれて歌ふ『おともはつらい、ね』の眞似をさせた。すると、かの女は直ぐ本氣になつて怒り出し、

『つらいなら、およしなさい。つれて行かないから！』

それでも、雄作の方はまだ一緒に行けるものと思つてゐたらしいが、お兼はあまり無[illegible]にも[illegible]取り残して獨りで出かけてしまつた。

父としては何でもなく見のがして置けることをもお兼はさうできなかつた。そしてそれには雄作が家にゐて時々私かに行ふ子供らしくない亂暴や、そとへ行つて繼母のあること、ないことをあしざまに云ひ振らす不都合やが少からず手つだつてゐたのは、よく分つてゐた。だから、吾助は妻が二階へ來た時などに、かの女に向つて、

『おれもひがみ深いまま母を持つた經驗があるので知つてるが、何と云つても子供は子供だから、親の方からわざ〳〵ひがんで行つちやア切りがないものだ。もツと心をひろく持つ方がいいだらう』と敎へてやつた。そして子供には、また、妻の留守に、

『お前達が今のおツ母さんをおツ母さんとして立ててゐないと、お前達の損でもあり、またここの家庭がいつまでも騷がしい。若しそんなことがまだ〳〵續くなら、つまり、お前達が子供として素直に從順でないのだから、いつお父アんがお前達を追ひ出すか知れないよ』と、云つて聽かせた。

それでもなほ子供のやうすが變はつたとは思へなかつた。そこへ持つて來て、お兼が聽き込んで來たところでは、雄作のことを

『田口の坊ちやんが』と云つて、近處のものらは每朝、學校の制服を來て門を出ると直ぐ、燒きいも屋へ寄つていもを買ひ、それを喰ひながら歩いて行くのを見て、笑ひ合つてるのであつた。

『かどのお菓子屋のおかみさんなどは、いも屋との商賣がたきからでもありましようが、雄作の姿を見ると直ぐ、また行くから見てゐて御覧なさいよと云つて、車屋や八百屋のかみさん達をおだててゐるのださうです。すると、また、案の定、雄作がそれを知らないものですからいも屋へ寄るのです。』

『馬鹿なやつぢやアないか？』こちらも自分までの耻辱と見て怒らないではゐられなかつた。

『あんたはそれでも御自分の子ですから、我慢もできましようが』と、かの女はまた言葉をもたれ込ませて來て、『わた

しばかりは詰りません、わ、ままッ子だから御はんもろく／＼たべさせないのだらうと云はれて』

『…………』こちらはそれを聽いて一層怒りをおぼえた。そこまで鋭敏には、今の今まで氣が付かなかつたからである。雄作が學校から歸つて來るのを妻の爲めにも待ちかねて、涙のこぼれんばかりに叱り付けた。そして胸が落ち付いてから考へて見ると、一つの不審が涌き上つて來た。さう云ふかねがどこから出たのだらうと云ふことだ。每月きまつて與へる小使ひはその月の初めに、もう、好きな雜誌やその他の物に使つてしまうやうだのに、いつまでも殘つてるのが不思議であつた。

芝育ちの小學生徒並びに卒業生には不良性を帶びたものが多いとは兼ねて聽いてたので、子供を引き取つたそも／＼からその點のないやうに注意してゐた。政直が、買へば壹圓五十錢もしさうな錫の水筒を持つて來ていつのまにか自分の机の引き出しの奥へしまつてあつたのを發見した時も、曖昧にただ友達に貰つたとばかりでなか／＼詳しいことを云はなかつたので、若し盜んだり、人から無理じいに奪つたりして持つて來た物は決してそのままに持たせないと云ふことを見せるつもりで、水筒を子供の目の前で石の上に置いて叩きつぶしてしまつたのだ。

雄作にはそとから持つて來た不審の物はなかつた。然し、この別な不審が出て見ると、釣り錢をそらとぼけて戻さなかつたり、繼母の財布から一二度僅かのはしたがねを盜んだりしたほかに、何かしてゐたことがありさうであつた。で、それとなく責めて見ると、父のかた手間に發行してゐる小雜誌〇〇主義を二三名の學校友達が買ひたいと云ふので、

『それを五錢づつで賣つてやりました』と答へた。

『それればかりではなからう――？』そんなこと以前にさか登つて考へて見ると、帝國文學がその第一卷第壹號から十ケ年ぶんばかり各年に合本になつてゐたのがなくなつたことがある。もう、どうせ入らないからと云つて、こちらは曾て雜誌や新聞を買ふ屑屋に見せた時、あまり安かつたので、お鉄は反對して、

『折角、斯うまとまつてゐるのだから、子供がまた參考にできるやうになるまでしまつて置いてもいいでしよう』と云つた。無論、一番さきに知識がつく筈の雄作の爲めにだ。が、それッ切り忘れてゐたものだ。まさか、子供がと思つた

ので、ゐなくなつた女中のせいでもあらうかとして置いたが、それも女中には無實の罪であつたのだらう。その後、當月の雜誌のおもな物を雄作が親に相談しないで勝手に古本屋の、これもよく來る者に賣り拂はうとして、價段を慾張つた爲めに失敗したことが、今度の女中の注意によつて親の方に分つたこともある。また、學校敎科書で進級の爲めに入らなくなつたのが見えないので突きとめて見ると、下の級のものに親には內證で賣り渡したのだ。けれども、そんなことはとツくに過ぎ去つてゐて、そのかねを今まで持つてゐるわけがなかつた。

『一體、どう云ふかねだらう、ね？』吾助は妻に斯う云つて、私かに相談をかけて見た。

『ほかのわけでないとすれば、もう、分つてます、わ』と、お兼は答へた。『どうせ幸田が學校へも度々行つてるのでしようから、少しづつでも小使ひを貰つてるかも知れません。』

『…………』それが本當であるとすれば、相變らず幸田が子供の可愛がりかたを間違つてると思はれた。むかしは生まれた子供を弱いからと云つてはだかにし過ぎ、寒いからツてまた衣物を着せ過ぎて、病氣にばかりさせた。それがこちらと別れてからは一層自墮落になつて、寒中など、風を引くからと云つて自分も一ケ月でも二ケ月でも湯に行かず、子供をもまた入れなかつた。だから、初めてこちらへ子供を渡した時など、子供の衣物にはしらみが一杯たかつてゐて、からだ中にはかゆいのを搔きむしつたあとだらけであつた。僅かのけち臭いはしたがねを呉れるのも却つて同じ結果で、『こツちがありがた迷惑ぢやアないか？』

『もう、わたしはどうでもかまひません、わ――どうせ、親の心子知らずですから』と、かの女はあきらめてゐた。『然し、考へて見ると、幸田は餘ツぽど馬鹿です、ね。こツちへ子供をまかせた以上は、子供が成人するまでじツと默つてゐたらいいのに、子供が全くこツちの物になつてしまひはしないかと心配して、きツと、けち臭い小使ひなんかやつてゐるのですよ。こツちぢやア何も實母を忘れてしまへなど云つてやしませんのに。』

『無論、世間の家とは違つて、離婚した女を寛大にまた出入りさせてゐた位だから。』吾助にはこれも一つの考へであつたが、今一つには、一番面倒くさくないのはどうか幸田と云ふ婆々アが早く死んで呉れることであつた。さうすれば、

如何に手にをへない子供でも止むを得ず繼母の方に親しみを持つて來るにきまつてた。ひよツとすると、雄作らも——幸田が初めのうち一時持つたらしい考へに從つて——繼母を何とかいじめぬいて追ひ出せば、また實母がこの家へ歸つて來られるかと云ふ幼稚なことを考へてるかも知れなかつた。そんなわけがないことも、一度は、うへの子ふたりにそれとなく云つて聽かせて置いたけれども。

幸田をいやな爲めに子までも嫌つてゐた吾助には、兎に角、僅かに去年から子供を大小四人までもそばに置くのが珍らしくもあり、面白くもあつた。無邪氣な子供の爲めにはわざ／＼二階の書齋から飛び下りて來て、皆の笑ひに加はつたりすることもあつた。或日の午後、また皆のおほ笑ひが聽えたので、下りて行つて見ると、初雄の逸事が一つできたのであつた。

『政ちやん、ほれるとは何のことだらう？　學校で僕と露子さんとはほれてると云つたよ』と、初雄が質問したのである。そして政直は二三度せがまれたあげく、無言のにや／＼笑ひをとめて、

『好きなこと、さ』と答へた。

『ちやア、僕は露子さんとほれてる！』それをその實母なるお敏も折と一緒になつて笑つてた。そしてそのあとになつて、かの女は、こちらだけに向つて、

『もう、政ちやんだツてあんなことが分つてるのですから、ね』と、氣味惡さうに云つた。

さうだ、次男でさへさうだから、雄作になつては生意氣なのも當り前であらう。もう、性慾の要求を以つて女と交際しようと云ふ考へもあるらしかつた。死んだ學友の家に行つて、そこの主人に信用され、學友の妹とも親しくしてゐるのが分つたので、吾助はその親として向ふの主人へも用心して呉れるやうに人を以つて云ひ傳へた。お敏も自分としては渠を見限つてゐながら、自分の所夫の子としては共同の責任があるからと云つて、渠の行動に怠らず注意してゐた。そしてかの女が一度渠の机の引き出しをこツそり調べて見た時、吾助が呼ばれて行つて見ると、幸田から雄作へ學校の方へよこした手紙を發見した。これによると、幸田は駒込の林町に奉公してゐて、雄作に時々學校の歸りをその方へき

わつてることが分つた。學校に近いから、寺田もそんなところをえらんだのだらう。

『そのたんびにわたしのありもしないことまで云つて、惡くちを云つて來るのでしようよ』と、お粂はその豫想がいよ〳〵實際の證據を得たのに今更らがツかりしたやうすであつた。

『だから、幸田が早く死んで與れりやアと云ふんだ』と、吾助も歎息した。

『にくまれツ兒、世にはばかるですから、ね、あの馬鹿呑氣なやうすぢやア、幸田はなか〳〵あなたの思ひ通りには死にませんよ。』

『さうかも知れない、さ。』こちらでも死ねばと云ふのはお粂を慰めるには最も簡單であり、そしてこちらの幸田に對する憎しみもそれに一番よく云ひ盡せるだけのことであつたのだ。若し素直にしてゐて與れさへすれば、どうせわが子の母だから、さう虐待するにも及ばないのだが――。

この密かに子が親に會つてることは、既に推察してゐたことだし、また、もう、止むを得ないことだからそれとなくうツちやつてあつたしするが、今一つ意外なことを發見した。それは、雄作が隣りの細君の妹なるお光さんに戀してゐるのだが、到底及ばないことだから私かにただそれを泣いてると云ふことを歌つた詩である。

『これですから、ね』と、妻も驚いて、暫らくは耻かしみの色を顔にまで現はした。

『…………』こちらも考へて見ると、お粂が雄作に向つて學友の妹をどう思つてゐるのかと聽いて見たら、好きでないことはないが、顔がよくないからと云つたさうだ。それもその筈で、いつのまにか、心が隣りへ移つてゐたのである。

『學校の歸りなどに雄ちやんにお辭儀されるのが耻かしい、わ』と、お光さんがお粂に云つたので、その時お粂は私かにかの女をまだ田舍くさい心が直らないのでそんな馬鹿な開らけないことを云ふのだと思ひ、寧ろ雄作のかたを持つ氣持ちになつて隣りから歸つて來て、斯うこちらに語つた。

『何も若い女と男とだからツて、互ひにお辭儀し合ふのが當り前ではございませんか？　そこへ直ぐ何だかきたない考

へを入れるのは、入れる方が趣味の野鄙なせいです、わ。』

『さう、さ』と、こちらも贊成した。男が女と交際することは、今のところ、犧牲を出し易い。が、この犧牲を成るべく少くするには、子供のうちから交際を奬勵して置かねばならぬことが分つてゐた。ところで、またお光さんに對する雄作の心持ちが分つてなかつた時のことだから、お猿は渠に向つても、

『これから、向ふのいやだと云ふことをわざ〱してやるには及びませんよ』と敎へた。

『へい』と答へながらも、それは渠に取つてその時からつらいことであつたのだらう。無論、吉助自身は自分の子供より年したの時に既に女を戀ひ慕つた經驗を持つてゐるが、別に肉まで落ちる失敗はなかつた。雄作のも恐らくそんなことで過ぎてしまうのだらうが、その親としては一應戒めて置く必要があつた。で、渠を二階に呼び寄せて、

『お前は今から女を慕ふやうな詩などを作つてるやうだが、ね』と云ひ出した。

『…………』雄作は相變らずただ形の上で恐縮してゐるばかりのやうであつた。

『それはよくない。多くの婦人と無事に交際することは、お互ひに趣味や感情を奇麗にして行つて、大きくなつてからもさう容易にお父アんのやうな間違つた最初の結婚のやうなのをしなくなるから、お父アんも贊成する。が、男が結婚するといろんな責任が生ずる。一緒に生活する費用を儲けたり、生まれた兒を養つたり、ね。』ところが、お前のやうな時代には、その責任を果せないから、無理にそんなことがあると、親に厄介をかけるばかりだ。して見ると、親が承知をするわけがない。たとへまだ子供でも、そこまでのことは今から考へてゐるがいいぞと云ふことを獨り演說にして聽かせた。そして安田のことの方は、もう、何も別に立ち入つて云はなかつた。

が、それをお猿は段の下で立ち聽きしてから隱れたと見え、こちら二人が一緒にはしご段を下りて行くと、直ぐまた坐敷から縁がはへ飛び出して來て、

『多分、わたしのことなんかいい加減にして置けと云つたのでしょう』と、こちらの思ひも寄らぬことを恨めしさうであつた。

『…………』こちらはかの女を、つい、何げなく、立ち會はせなかつたのに氣が付いた。かの女の爲めには却つて利益なことを云つたのではないか？　かの女を『いい加減にして置け』と云つたのではなかつた。『幸田にさう度々會つてると、お兼にはよく思はれないからいい加減にとめて置くがよからう』と注意したのだ。あまりの見當違ひなのに呆れて物が云へなかつた。すると、かの女はなほこちらが弱みある爲めに返事をしないとでも思つたかのやうにつけあがつて、

『わたしがゐるのがお邪魔なら、いつでも出ますから』と附け加へた。

『馬鹿！』こちらは不斷からかの女の分つたやうでまだどこかに分らないところがあるに對して有してゐた不平が一ときにこの一言となつて胸を突き出たのである。こちらはかの女を十分に愛しかばつてやりながら、子供をもよくしようと苦心してゐるのではないか？　この意味は通じないでもなかつたかして、かの女は直ぐそのはしたない態度を改めてしほらしく默つてしまつた。

## 三

お兼は相當の理解と決心とを以つて吾助の後添ひになつて來たので、渠もかの女のつれッ兒をまで自分の籍に入れてやつたほどだ。けれども、二人のあひだには子供の爲めにいろ／＼感情上の行き違ひが絶えなかつた。そしてかの女だツて、もう、里の親にあまへてをられる年でもなく、成り行きでもない筈だのに、親があまくて、

『面白くなければいつにても歸つて來てもよい』と云ふやうなことを聽かせてあつたので、かの女は時々その氣になつて、下の子供ふたりをつれて歸る、そしてこの行きさつを書いて雜誌なり新聞なりで發表するなどと云ひ出した。

『ちやア、勝手にしろ』と、渠もそんな時は云ひ切つてしまつた。すると、またかの女の方から折れて來て、それでもなほこちらへ勿體をかけるやうに、

『ちやア、あんたは自分の子の惡いことが世間へ知れ渡つてもかまはないのですか？』

『あ、少しもかまはない！』このわざとにもまじめ腐つた答へには何等の僞善もわだかまりもなかつた。子供が果して惡いなら、惡いと云はれようが云はれまいがこちらはおんなじことであるからだ。が、公平に考へて見ると、子供はかの女の思つてるほど惡いのでもなからう、そしてそのどちらからもひがみ合つてるのは事實だ。その上、わざ〳〵そんなことを世間に發表する必要があるか？　所天（をつと）を見習つて多少筆を執れるのだから、この程度の女が大した用意もなく定見もなく殆ど出たら目に下だらぬ告白的記事や小説を書いた例は他にも澤山ある。が、その結果は皆、自分らの品位の低級なのを曝露して、同時に云ふにも及ばないことをしやべつたに終はつてる。云つて見れば、井戸端會議的にその人その家の内幕を――ただ知つてるからと云ふだけで――素ツ破ぬいたに過ぎない。ましてその御本人が山出しに毛のはえた位のものと來ては！　さうだ、まるでただ間諜いぬのやうなものだ。こちらはよそ事ながらそんなものらに對して抱いた憤慨までも思ひ出しながら、『どうせ、卑劣な裏切り者を置いてあつたのがこツちの落ち度だから、ね』と、いやがらせまでを云つて見た。

『そんなことは、まア、どうでもいいのですが、ね――』

『いや』と、今度はこちらが追ひかぶさつて行つて、『そんなことでおれを威し付けようたツて駄目だぞ。』

『分つてますよ』との答へがかの女に本當らしかつたので、こちらもやツと穩やかになつて、

『お前はまだ實際によく子供を育てて見た經驗がないから』と云ふことを説明した。子供と云ふものは小まちやツくれたことを云つても、まだ殆ど何も分つてゐないこと。わがまま一方で、親ならどろ棒しても何でもちよツと叱られるだけですんでしまうと思つてること。それを成るべく叱られないやうに、こツそりと惡知慧をめぐらしてゐること。こんなことを一々批難してゐたら切りがない、それに子供はさうしつつ知慧や考へが發達して行くこと。だから、そんなことを世間に書き示めしたところで、實はどこにもあり、誰れでも知つてることとであつて、それをかど立てただけがかど立てた者の拙になつてしまうこと。だから、子供の親としては、そして繼母ならなほ更ら、もツと子供を寛大に見て――寛大になれるのが矢ツ張り子供に對する愛だから――さうして子供と共になつてその惡をも或限度まで行ふべきことと、いや、子供の惡

などは知れたものだから、それを許して行はせつつ、ひどくならない程度のところでおのづからとまるやうに、親としては先づ實例を一緒に見せてゐるべきこと。だから、あたまからがみ〳〵否定的命令を發して、それが用ゐられないと直ちに侮辱を受けたやうに思ひ取るのは、子供を自分と同等の素養ある敵若しくは對立者と見做してゐるわけであつて、それがそも〳〵よくないこと。などをだ。

『分りましたが、ね』と、かの女が當り前のゑがほを見せると、口は少し人並みより大きいけれども、色が白くて、目がぱツちりして、矢張り、さう憎むべき顔ではなかつた。そしてその飲ましてゐる乳ぶさも、他の或女のやうに、その姿を亂だすほどにはだらしなく大きいものでないことは、兼てから分つてゐた。それが素直に訴への口調になつて、『これから、然し、子供の前でわたしを叱ることだけはよして下さいよ――子供がいい氣になるばかりですから。』

『さう、さ、叱られたくないなら、お前も子供のゐるところで餘りはしたない言葉は愼むがいい。おれだツて女房に馬鹿にされてるところを子供に見られたくないから、な。』

『それはわたしも注意しますからよ。』この時、下坐敷で春子が目をさました様子であつたので、お兼は急いで二階を下りて行つた。

それから、この田口一家には割り合ひに夫婦子供のあひだの衝突がなくて過ぎるやうになつてゐた。が、吾助は心の爲めに、そして一つには親しみを加へるつもりで、妻の里へ近頃珍らしく手紙をやつた。それには斯うも書いた、『この頃では御存じの家の様子も大分に納まつてゐますから、御安心あつていいかと思ひます。この上、兼子が若し別れて歸ると云ひ出すやうなことがあつては、もう、かの女自身の勝手でしようから、そんなことのないやうに御注意願ひます』と書いたには、こちらとしては、親がいつでも歸つて來ていいと云ふやうなことをうそにも二度と云つて聽かせるなとの意味まで含めたつもりだ。が、それを子供に郵便箱へ入れさせてから思ひ返して見ると、こちらの親しみある無邪氣な氣持ちが却つて向ふへはまた意地惡い意味に取られはしないかと考へられた。

さきに幸田が政直をも引き渡しに來た時、お兼が留守であつたけれども、もう、きまつたことであるから、留守のま

までこちらが形の上の承諾を與へ、ついでに、渠をこちらの小學校へ移す手續きまで幸田にさせた。こちらの面倒を省くつもりであつたところ、お粂は默つて來て、相談の上にしなかつたのに對する不平を唱へた。そしてまたそとへ出てぶら付いてゐたところ、どこか人も通らぬ神社よこ手のあたりでいてふの芽ばえを拔き取らうとして、生憎、木の葉におほはれてゐた人間のうんこをびしやりと踏んで、絹物の裾にまでそのくさいはねを上げた。それをこちらは一つの滑稽ばなしとして――お粂の母が來た時――語り聽かせたのだが、母はさう取らないで、娘には私かにこちらの無相談のよくなかつたことをばかり云つて聽かせた。

『然し、相談するもしないもなかつたぢやアないか』と、こちらはあとで知つてお粂に告げた、實は、さうした方が形の上だけでもかの女を喜ばすことはできたのだが、こちらの多少專制的な氣ぶんが承知しなかつた。『もう、前から分り切つてたんだから?』

『さう云へばさうでしようが――』

今回の手紙に對しても、向ふの親夫婦がいろ／＼くどい相談の上でよこしたと見え、果して見當違ひの返事が來た。

『娘が左ほど我儘の爲め御困却に候へば、直ちに御返し下され度候』などと。

『一體、向ふは人を馬鹿にしてゐるのか』と云つて、吾助は妻にも向ふへ手紙をやつたことを初めて告げた。そしてかの女をも責めるやうにして、『それとも、お前がいろ／＼家のことをお前勝手に解釋して云つてやつてあるからだらう?』

『そりやア、親ですからあつたことは云つてやります、わ』と、かの女は存外平氣であつた。

『下だらない!』ちよツと言葉を切つてから、『親と云ふものに對しては、ね、お前が親になつて考へて見りやア分ることだが、さう一々家のごた／＼を報告して、心配させるものぢやアないぞ。』

『あんたこそ横合ひから、入らないことを云つてやつて――』

『…………』さうだ。無論、入らないと云はれれば入らないことであつた。かの女としてはかの女の考へも――丁度子供の氣ままに對するやうに――或程度までは許して置いていいのだから。そしてさうさ、男子は社會に向つ

ても、家庭に於いても、一般的に理解され難いところを持つてるだけ、そこを自分の奮鬪すべき誇りとすべきであつた。

春子が段々可愛くなつて行くので、かの女を中心としては田口一家が割り合ひに夫婦子供のあひだの衝突がなくて過ぎてゐた。が、そこへお兼の里かたからかの女の母が危篤だと云ふ知らせが達した。かの女がここへ來てから二年間と云ふもの、まだ一度もその國へ里歸りをせず、一度行つて來たいとも云ひ暮らしてゐたので、女中がひまを取つて手不足の時だけれども、吾助は丁度いい折りだと思つて許してやつた。行けばまたこちらがどう云ふ樣子であるかも實際に報告できるのだらうから。

「おみやげを澤山持つて來るから、ね。」と、かの女は雄作にも約束した。雄作はそれをまだ子供のいぢぎたなさから喰べ物としか思つてゐないやうすであつた。

家にはお兼の弟なる、逸際と云ふ大學生が留守居に來たけれども、全く男ツけばかりの殺風景になつた。そしてお兼の里では、かの女が行くが早いか、母の病氣は快方に向つたと云ふのに、かの女の滯在期一週間の豫定が延びて二週間にもなりさうだので、弟や子供も台どころのことに飽いてしまうし、吾助も亦段々に女ツけのない寂しみを感じて來た。銀座のカフエへ行つたり、婦人の友達を訪問するだけでは滿足できなかつた。そして早く歸るやうに云つてやつた。

お兼と春子とが女中になる者を一名つれて歸つて來ると、先づ、荷物を開らいて出されたのはその老父から貰つて來たと云ふ曹溪の香爐と菊地幽齋の官人一幅とである。その他にもちよツとしたのが二幅ばかりあつた。これはすべて父が――以前に一度上京して家のやうすを知つてるので――ここの部屋々々の床の間に釣り合ひさうなのを選んで呉れたのだと云ふ。

それから、おほ袋に入れたちまきの餅を一包みやら、向ふで出來た菓子や果物が澤山出た。子供らは皆待ちかまへてその分配を受けた。そしてそれを口に入れながら、皆で春子の向ふでやつた逸事を聽いたのだが、そのうちで一番皆を笑はせたのは猫の餌を喰つたことだ。

向ふは或派の寺で、而も格式の最も高い別格寺だから、寺以外の社會組織で云へば、公卿若しくは華族として意張つ

てるので、春子も小さい『お姫さま』として川入りの信徒らに可愛がられた。

『そのおひめさまが而も猫の御はんを召し上つたのですよ』と、お兼は笑ひながら調子に乘つた。ちよこ〳〵とどこかへゐなくなつたのを、ふと、氣が付いて探しに行つて見ると、いつのまにか廣い庫裡の方へ來てゐて、置き戸棚の横手に置いてあつた餌さ入れから猫がかつぶし入りの御はんを喰べてゐたのを、横合ひから小さな手を出してかの女も一緒に喰べてゐた。その猫を朝起きると直ぐ抱いて見たりして、一日ぢう遊び友達にしてゐたので、割り合ひにおとなしく日を暮らすことができた。そしてその猫は春子のおかげて時々叱られた。うるさくなると、かの女をひツ掻かうともしたからである。

それから、また、かの女は毎朝起きると、みんなの眞似をして母を引ツ張つて本堂へ行き、阿彌陀樣に向つて皆のお經を讀むのをおとなしく聽いた。そして自分も手を合はせて、

『なも、なも、なも』と、かたことで六字の命號を唱へた。こちらの違つた考へから云へば、あまり面白くもないことだが、お兼も向ふへ歸ればきツとさうさせられてたのだらうから、仕かたがなかつた。

『この兒は少し利口過ぎるから、いのちが短いかも知れん』と、祖母が云つたさうだ。

歸つて來ても、かの女は一番うへの兄に對して一番その親しみを忘れなかつた。先づ雄作の膝へ飛んで行つて、

『にイちやん』と抱かれ付いた。

『矢ツ張り、おぼえてるのです、ね』と、お兼はそれを見て喜んだ。雄作もそれによつて母の機嫌を改めて迎へるやうすであつた。

『春ちやん、にやアにやがゐまちたか？　なも、なもして御覧なちやい。』

『なも、なも、あん』と、かの女は拜むまねまでして見せた。然し、その母の弟を向ふにゐるうへの弟と同じ人だと思つてるやうであつた。そして暫らくの間は、はにかんで父のところへも來なかつた。

その翌日、お兼は留守中の物を一と渡り調べて見たかして、

『あんたのおかアさまのかた見の櫛からがいとわたしの眞珠とがありませんが』と云ひ出した。櫛などは形が古いけれども、昔のいい鼈甲(べつかふ)であつたし、眞珠は小さいが七つばかりあつて、他日お衆の指輪の飾りにしようと云つてた物だ。

お衆はその疑ひを直ぐ子供の身にかけたが、吾助はなほ『まさか』と思つて、これまでにゐた女中のひとりびとりを記憶に浮べて見た。たツた獨り、あやしまれたのも、かの女ではなく、雄作の仕わざとすれば、みんなさう惡いことをしさうな女もゐなかつた。そして歸る時に僅かばかり米を持つて行つたのなどは、來た當日に逃げたのであつた。兎に角、男子には必要もなく、女には好まれる物であると云ふところから疑ひを運んで見ると、あやしいのは幸田しかなかつた。櫛からがいは、かの女にまかせてあつた子供や田口家の位牌などを引き取つた時に、これをもこちらへ渡させたのだが、向ふが再び欲しくなつて、子供に命じて、お衆の留守を幸ひに、こツそり取り返させたのかも知れない。たとへ直接に盗み出したのは子供であるとして見たところで、子供がそんな物に目を呉れる筈がないので、どうしてもさうとしか思へなかつた。

こちらはお衆と共に雄作を二階へ呼び上げて糺問して見ると、何と云はれても知らないと答へるばかりであつた。そして

『この頃はちツとも幸田にも會ひません』とも云つた。

『…………』この上は拷問同樣の目に會はせて見るより仕かたがないが、そんなことは今の時代にできないので、じツと睨らみながら雄作のやうすを窺ふと、まだ私かにすることをしてゐるかして顏の色の青さも尋常ではなかつた。

『とぼけたツてちやんと分つてますから、ね』と、お衆は威し付けるやうに云つた。

『その返答ぐらゐではまだ事が濟まないから、さう思つてゐろ』と、その場はこちらも突ツ放した。今少し、正面から手厳しい制裁をも子供に與へて置かねばならなくなつたやうに思つてた。

例の帝國文學十卷——これはどうでもいい物だが——の行くゑをも、實際にどうなつたのだらうと思ひ出しながら、

吾助は獨りで二階の書棚を調べてゐると、ふと、最近に買つて見た一つの英和辭典がないのに氣が付いた。先づ、お稚に聽いて見ても、使つたおぼえがないとのことであつた。もう、直接には雄作の答へを聽くだけの信用も持つてゐられなくなつたので、自分で行つて玄關の室なる渠の机や本箱や押し入れの中を調べた。默つて持ち出すなと命じてあるのに、二階の書棚から、いつのまにか、斷わりもなくギリシヤ語の本を持つて來てあるのを押し入れに發見したが、探してる辭書はなかつた。

『こら』と、いきなり、雄作の横ツつらを投ぐり付けて、『もう、承知できないぞ。一體、お前はそれをどうしたんだ?』

『知りません。』雄作は膝をこちらへ向けて、そこへきちんとその兩手を置き、下を向いてるばかりであつた。

『もう、知らないではとほせまい。こちとらの推測が段々實際に近づいて來たんだ。』

『きツと賣り飛ばしたのですよ、眞珠などと一緒に。』『お稚もそこへ顏を出しに來た。』『わたしの物ならまだしも、お父さんの物を盜んで賣つたりするのでは、宗教家になるもあつたものではないぢやアありませんか?』

# 四

『まア、お前は默つてゐな。』斯う吾助は妻に命令して、雄作だけをつれて二階へ來た。お稚がまたその爲めにひがみをおぼえるかも知れないとは思つたが、そんなことは用捨してゐられなかつた。かの女が若しそばについてゐたら、相變らずかの女に對する反感がさきに立つて、直きに白狀するところをもその爲めにしないことがあらうとも思ひやられたからである。

机を脊なかにして坐わり、こちらの氣のせいか、雄作の眞ツさをに見える顏と少し隔てゝ相向ふと、私かに情けない氣持ちもしたが、それを押し隱して、成るべく穩やかに說いて聽かせたのは、先づ、親の物を若し盜まうとして盜むのは、嚴密に云へば、泥棒の仕初めであること。次ぎに、毎月の小使ひは子供として相應に與へてあるのだから、それ以上にかねの必要があるのは、何か特別な事情がなければならぬこと。ところが、特にさうした事情など實にはありさうがない。

まだ放蕩などおぼえてゐはしないから、若しあるとすれば、ほかでもなく、實母の爲めを思つてだらうと云ふこと。幸田は半ば氣違ひのやうな無常識の強慾家だから、若し貧乏で困りなどすると、子供に尤もらしいことを云ひ含めてこちらの物を盗ませることでもしかねないこと。然し、實際には、幸田はさう困つてない筈である、さきに姉むすめが死んだ時にもその勤め先きから年の割りに甲斐々々しかつたとして貰つた弔らひ料四十圓はそツくり、その葬式の日に郵便局へ預けてしまつて、葬式の時間に青山の茶屋で待つてた人々をすツぽかし、棺をその夜こツそりと人夫に持つて行かせて他の費用や香奠返しを儉約して埋めてしまつたと云ふこと。それからは人のめしを喰つてるのであるから、生活費も自分で出すことは少しもないこと。それにも拘らず、かの女が子供に向つてかねをせびつたとすれば、こちらの物を今から、もう、少しづつでも奪ひにかかつてるのであること。それも溜めて置いて他日子供の爲めになるのだなどと云つてるかも知れないが、それはたとへさうでないとして見たところで、寧ろただ向ふの強慾心を滿たしつつあるのであること。

およそ斯う云ふことで、今の事件に關して必要なことは、子供との問答を待つまでもなく、どし〳〵考へ出してはどし〳〵語つて行つた。どうせ、問答の形で進めようとしても、鬪々しくなつてる雄作がその一々に於いて默つてゐたり答へても瞬昧であつたりするのは分り切つてたからである。

『それに、お前としてもなほ一つ心得て置くべき重大な要點は、おれと幸田とは今では敵味かたも同様であるから、お前がどツちを選ばうとそれはお前の勝手だが、ね、一たびおれを選んでその心をなほ續けるつもりなら、幸田が如何にお前の實母だからツて、かの女の爲めにおれの物を一つでも持ち出してはならん。この理窟は分つたか、ね？』

『分りました』と、雄作はこんな返事には些かのためらひもなかつた。

『それは然し理窟を並べて見せただけだ。云はば、紙の上にたて横十文字のけいを引いて、お前の思つてゐること、行なつたことがそのどこに當るかと云ふのをお前自身で私かに考へて見るやうにさせてやつたやうなものだ。ところで』

と、こちらは一度改まつてから、『お前は今そのけいのどこにとどまつてるのか素直に白狀するがいい。』

『分りません。』雄作はちよツと首をかしげたが、また眞ツ直ぐにかしこまつた。

『…………』子供だから、さう云つたのが分らないのか、それとも子供がさう云つて胡麻化さうとしてゐるのか？　こちらの心は渠をあはれむよりも憎む方が勝つて來たので、『馬鹿！　こツちへ來い。』と怒鳴つて、渠がすり寄つて來たそのあたまを一つ喰らはせた。『これほど叮嚀に噛み分けて云つて聽かしたのが分らないことはない筈だ。さア、尋常に白狀してしまへ、櫛や辭書を賣り飛ばしたことは分つてるんだから、ただそのかねを幸田へ渡したのか？　それとも、お前の買ひ喰ひにでも使つたのか？』

『…………』こちらのこわい顏をしてゐるのを時々見上げてはゐるが、堅くなつてなか〱返事をしなかつた。

『もう、日が暮れて來たが、今夜は、もう、一かばちかだ。お前がお父アんの納得する返事をするまではここで根くらべだから、さう思へ。』こちらは斯う云つて、机の方に向き直つた。そして時計に合はせると丁度一時間半をわざと默つてゐて、どこか近處の火の見やぐらで二つ番を打つ音がしたのをも見に立たなかつた。そして書きかけの論文に筆を持つてゐたが、わが子の爲めには涙が出さうにばかりなつて、少しも筆がはか取らなかつた。とう〱こちらが根氣負けをして、半ば子供の方へふり向いて、『返答はどうだ？』その聲が自分ながら少し優しくなつてるのを知つた。すると、雄作は待つてたと云はないばかりに直ぐ、

『あの、賣りました。』

『よし。』こちらは父として寧ろ多少はかたがおろせたやうに感じて、『さう白狀すれば、それだけお前のお父アんに對する罪が輕くなつたわけだが、ね、そのかねをどうした？』

『いろんな物を買つてたべました。』

『ぢやア、確かに幸田へは持つて行かなかつたのだ、ね？』

『はい。』

『なアに、少しやアお前の實母へ持つて行つたらう？』得意しながら金を出して見

『いいえ』と、青ざめたままで答へた。

『それが本當なら』と、こちらは幸田のことは忘れてしまつて、『何もそんなことで今のおツ母さんまでおこらせるにやア及ばないのだ。たべたい時には、さう云つて買つて貰つた方がいいのだから、ね。』

『はい。』

ふたりはまだ晩の食事をしなかつたので、おりて行つて、取り殘されてた膳に向つた。不斷よりは二時間以上も後れてゐた。お粂はまた果してふて腐れたのか、隣りの坐敷で、もう、春子と共に寢てゐるやうすであつた。それにはかまはず、吾助は獨りでまた二階へ上つた。そして十二時過ぎに寢に行つて見ると、お粂は目をさましてゐて、別々なとこの中で春子をさし挾んでの話になつた。

『どうなつたのです？』お粂の言葉はわざとらしく冷淡な出であつた。

『どうツて、賣り飛ばしてみんな喰つてしまつたのだ』と、こちらは信じ切つて答へた、『幸田には少しもやらなかつたのだ。』

『そんなことがあるもんですか？』

『然し、さう白狀したから仕やうがないぢやアないか？』

『まだあなたは子供をあまく見てゐますよ。ぢやア、櫛や眞珠も、確かに？』

『さア、ね』と、こちらはばツたり行き詰つた。書物のことばかりを目あてにしてゐたので、女の物にはちやんと念を押さなかつたのである。『實は、それは特別に聽かなかつたが――』

『そんなことがありますか？』かの女は溜らなくなつたやうに首を擧げた。その顏には十分のいきどほりをあらたに見せて。

『……………』こちらはかの女を相手にしてくど〳〵應對するよりも、直接に雄作から今一度聽いて見る方が手

ツ取り早かつたので、玄關の間にまだ勉强してゐる筈の粂を呼び寄せた。いろけの出た子供を親夫婦の寢室に入れるのはどうかとも思つたが、別に異狀はないのだから、横になつたままで尋ねた。『お前の白狀したことは眞珠や櫛にも本當か？』

『はい。』

『ぢやア、どこへ賣つたのです』と、お粂は直ぐ口を出した。

『えいと、ずツと――向ふの――』と、變な手つきでゆび指しながら、『ふる――物――屋に。』

『……………』こちらはそのやうすの曖昧なのを見て、矢ツ張り、うそを云つてるのぢやアないかと云ふ見當がつき出した。『ずツと向ふとは、その手つきぢやア巣鴨監獄の横通りのやうだが――』

『はツきりとお云ひなさい、わたしはあす直ぐに云つて突きとめて來ますから！』

『ずツと向ふの――えいと、ずツと向ふの――』馬鹿の薄のろのやうな手つきをまたやり出したが、それを中途からやめて、子供は默つてしまつた。意久地なしと云はうか、却つてふてぶてしいと云はうか、こちらはそれに呆れてしまつた。

『しツかり物を云へ、しツかり！』

『……………』雄作は然しおづおづはしてゐるが、口をつぐんでしまつたままだ。

『いい加減なことを云つてるのですよ。』

『さうだらうよ。』暫らく吾助は怒りを押さへてゐてから、『お前は返答をしなければそれで濟むと思つてるやうだが、ね、それは惡いくせだ。眞珠をどこへ賣つたか、はツきり云へ！』

『どこへも賣りません。おかアさんの思ひ違ひでしよう。』

『なんだい、うそつき！』お粂はまた子供の方へ顏を擧げた。『自分が幸田へ持つて行つてやりながら、わたしがうそでも云つてゐるやうなことを！』

『そんな心配は今云ふに及ばないぢやァないか』と、こちらはかの女をなだめた。それに、また、確かに幸田へ持つて行つたのだとこちらで斷定してゐて、若しさうでなく、子供自身がそツくり自身の喰ひ物にしてしまひでもしてゐたらそこに子供に『おかアさんの思ひ違ひ』をあとまでも云はせる餘地を與へるからである。兎に角、若しこの家に惡いしうとや小じうとでもゐたら、ひよツとすると、こんなことで無實の罪を着せられ、芝居のやうにしほ〳〵として離縁になる嫁があるかも知れないと思つた。そして、特に芝居であり振れたことに近いことが自分の狹い周圍にも斯うしてあつたのを、少からず、物すごく感じて見た。それは然し瞬間のことで、直ぐ雄作に向つて、『お前は然し、今、おツ母さんの物をも賣つたと云つたぢやァないか？』

『本當は、——本當は』と、ためらつてから、『賣りません。』

『ぢやア、二階で云つたこともみんなうそか？』

『はい。』この返事はまた餘りに速かであつた。

『なんでそんなうそを云ふんか？』

『さう——云つた——方が——いい——だらうか——と思つて。』

『馬鹿！　あツちへ行け！』もう、こちらもわが子をながら相手にする愛情も勇氣もなくなつたのをおぼえた。父の言葉に恐れて斯うもあゝもと云ひまご付いたとしても、そのまご付くのには後ろ暗いところがある爲めにきまつてた。

『どうしても向ふの親をかばつてるとしか見えません、ね』と、お兼は雄作の去つたあとでひそやかに云つた。『うちの物を盗んだのは如何にも憎いけれど、幸田がさう云ひつけたものとすれば、雄作が可哀さうです、わ——あア云ふ風にうそを白狀して見たり、またそれを取り消して見たりしなければならなくなつて。』

『そりやアさう、さ。』こちらもそこは多少まだ希望がつなげるやうでもあつた。そして雄作が立ち上るまでに暫らく立ち上りかねてゐたのは、そんなことをでもお兼さへゐなければ正直に訴へる氣があつたのではないかと思はれた。『あのいつかの十五圓も、さうして見ると、矢ツ張り、落したのではないかも知れないから、ね。』

初めて雄作がこちらへ來た月はおとどしの十二月で、その末日、乃ち、おほつごもりの日に、郵便局から出したかねがまだ諸拂ひに不足であつたので、雄作を以つて——まだ幼稚だから少し無理かとは思つたが、夫婦相談の上、これも子供に最初の經驗を與へることだからとして、試みに——もう、十五圓を出しに宮仲局まで遣はした。すると、果して取られてしまつたと云つて、豫定の時間よりもずツと後れて歸つて來た。おもちや屋をそとからのぞいてゐた時に取られたのだらうと云ふのだ。物好きな試みが惡かつたとすれば、子供心にも心配してそこらあたりを空しく探しまわつてゐたと云ふそのこころ根が如何にもいじらしくあはれに思へて、寧ろ罪なことをしたのが後悔された。そしてこの報告を受けた最初におこつて見たのも子供の爲めには氣の毒になつた。が、そのあとを十分間とは後れないで幸田が訪ねて來たので、こちらどのも心は疑ひに變じたが、幸田がそらとぼけて横取りしたのだと云ふ證據はつかめなかつたので、それなりになつてしまつた。

『あの時だツて、本當に落したか取られたかしたのなら知りませんが、さうでない以上は、どうしても幸田のでき心としか思はれませんでした、わ。ひよツこり出くわしたのを幸ひに。今度のことも、子供が、而も男の子がどうして櫛なんかに氣が付きましよう——女の幸田に云はれないぢやア?』

『おれは、もう、ちやんと決心してゐる』と云つて、その夜はすましてしまつた。そしてその翌日、雄作が學校から歸つて來たのを捕らへて一つの云ひ渡しをした。『お前がうちの物を勝手に無くしたと云ふことは、どう云ふ理由でしたにせよ、不都合だから承知できない。が、他人でもないから、それはそのままに暫らく預りとして置いて、若し今度同じやうなことがあれば、その時には、もう、斷然うちを追ひ出してしまうつもりだ。これは前以つて斷わつて置くのだからお前もその覺悟でゐろ。それから、』無くした物は懲らしめの爲め辨償させなければならないが、お前の小使ひなんかではとても眞珠などの代價辨償はいつまでもできまいから、先づ、雜誌の方に對して、お前の雜誌發送の手傳ひ賃から毎月五十錢づつを當分のうち差し引くこと。かねを欲しいものとすれば、これには一番困るだらうと思はれた。

すると、果して二三日立つてから、ないと思つてた群書が思はぬところに發見された。書棚に立て並らべてある本の

後ろからである。その後ろの當りも初めに十分念を押して見た筈だが、或はそこだけ見おとしてゐたのかとも考へ直して見た。が、この頃の感情では、どうしてもさうとは思へなかつた。雄作が友達から取り返して來て、——さうだ、古本屋にでも渡したのなら、もう、とツくに無くなつてゐよう——こツそり、どうせ直接に父へは渡せまいから、隱して置いて、そのうちに分らせようとしたにきまつた。

子供が多少は思ひ返して改まつて來たしるしかと喜んだが、

『それにしても、本を友達から取り返すかねなんかほかに出る道がなからう——幸田から出なけりやア。』

『さうでしようとも！』お兼も私かに合ひ槌を打つた。『どうせ、うちの物を賣つたおかねでまた歸つて來たのです、わ。』

『然し、考へて見ると、また幸田ばかりのせいでもないか知れないぞ。たとへば、眞珠やべつかうのやうな大きなかね目の物は幸田が取らせたとして見ても、その手をおぼえて今度は辭書なんかはただ子供が自分自身の小使ひに使つてしまつて置きながら、その不始末を發見されたのに困つて、その本を貰ひもどすかねをその親から——何とかうそを云つて、それとも實を云つたツて親からして弱味があるんだから、無理に——せびり取つたと云ふこともあり得ようぢやアないか？』兎に角、家庭としては、そとからも内からも、大變なことができつつあつた。

# 五

兄の方にさう云ふよくないことが度かさなつて行くのを知つたからでもあらう、その下の政直も盜み喰ひなどすることをいいことのやうにやり出したので、時々、その父や母に叱られるやうになつた。その前には、兄の盜み喰ひなどを政直と初雄とが一緒になつて——自分らができないのをくやしまぎれにだらうが——母親に素ツ破ぬいてゐたのだが、この頃では、初雄だけが取り殘されるやうになつたと見え、政直の惡いことをも初雄が告げ初めて來た。

初雄が今になつてその實母に云ひ出したことによると、前の女中がよく子供三人を緣日へつれて行つて、森子の爲めに僅かの物でもみやげを買つて來たのは、少しも女中のふところから出たのではなかつた。その度每に子供らの持つて

るかねを少しづつ巻き上げてゐたのである。その代り、子供らに砂糖を嘗めたり、菓どころの物を勝手につまみ喰ひしたりすることを許してあつた。そして

『ねえやがおかアさんの悪くちを云ふと、にイさん達も一緒にいろんなことを云つた』さうだ。

『なぜそんならその時におかアさんに云はなかつたのです』と、お兼が叱ると、

『にイさんが云ッつけたら投ぐると云ふから』との答へであつた。この時、兄どもはまだ學校から歸つてゐなかつた。

『にイさんは女中に、今のおかアさんは欲しいだけお菓子も呉れないから、わざと御はんを澤山たべてやるんだッて。』

『馬鹿だ、ねい、お前は――そんなことを早くから聽いてゐながら!』お兼はいまいましさうに渠を睨らみ付けた。かの女が渠を、自分の腹を痛めた兒でありながら、初めからさう可愛がつてゐないことは、そしてその特別な理由も、今そばにゐて話を聽いてる吾助の分つてゐるところであつた。『もう、おかアさんやお父さんの子にしてやらないよ。――あなたの子たちも失敬ぢやアありませんか』と、その目を筋のとほつた鼻のさきまでとんがらかせてこちらを返り見た。

『たとへ親にそんなことがあつたとしても、子が女中なんかには云はないのが本當だのに、まして特別にあれだけ注意しておやつもやつて來たのを、まだ足りないなんて!もう、わたし知りませんよ。御はんだッて、勝手におなかの裂けるまでたべるがいい、わ。黄疸になりかけるくせがあるから、人がわざ〱心配して加減をさせてゐたのだに!』

『…………』あれには、然し、別にもッと悪いくせがある爲めらしかつた。が、雄作の意地ぎたなさは、學校から歸ると直ぐ、政直や初雄をかげへ呼んで責め付け、けふ、母から何と何とのおちんをいくつ貰つたかと聽き糺して置き、それからそれだけの物を自分も貰はないと承知しないことででも分つてゐた。政直の方はどうせ幸田の養子になるのでもあるから、どんなに小さい人物になつても左ほどかまはないが、ここのあと取りであつて、而も多少は見込みがあると思はれた雄作が、矢ッ張り、そんなことでは、自分としては頼朝や太閤のあとが平凡人に終はつてしまうのであつた。『さう、さ。もう、うッちやつて置くがいい。どうせ、みんな出來そくなひのやつらばかりだから。』これにしても前の女中が主人を馬鹿にして、子供を丸め込むやうだ、そんな悪い人物であつたとすれば、ここに[illegible]の台本を無くした

した罪人のうちへ、矢ッ張り、その女中を少くとも加へて見なければならないではないかとも思つた。が、それを今云ひ出すと、また、お兼がその激した感情に輪をかけて、

『あなたはまだ子供の身びいきをするのですか』と云ふにきまつてた。

『……………』こちらはかの女の今少し心が練れてゐて呉れたらと云ふことを願つてゐた。すべての子供に對するとしては、殊にいろけも付き、知識も多少はできた子供に對するとしては、かの女の言葉が餘りとげ〳〵しかつた。それが爲めに一層、血のつゞかぬ子をかの女と同時に激せしめ、面白半分のいたづらや反感などに走らしめる。その結果は、かの女としては僅かのことにでも初雄だけに當り散らすことになつてる。ところが、こちらも亦かの女に對する遠慮があつて、子供のことになると、『初雄はまだ幼稚で何も分らないのだから、ね』と云つて、雄作や政直にばかり當つてゐたのだ。が、それでは子供に不公平の感じを與へて、親としての權威も薄らぐだらうと云ふことに氣が付いてからは、初雄をも──矢ッ張り、幼稚ながら、春子の爲めに買つた繪本などを勝手に持ち出して人にやつたりするやうな、惡いと云へば惡いことをするので──時々は投ぐりつけることになつた。さきにお兼の姉が初雄に一つうへのむすめをつれて上京した時、その娘の兒が吾助の持ち前なる太いつよい聲を聽いて、

『おぢさんはおそろしい、わ』と云つた。が、初雄はそれに對して

『おとうさんは聲ばかりで、少しもおそろしくないよ』と答へたさうだ。さうと云ひ當てられたのに對してもこちらは子供の幼稚ながらの一と見識を可愛く思つたが、今ではそれを自分から裏切らねばならぬことになつた。まださう固まらぬあたまを打つのは然しよくないと思つて、尻ッぺたをだ。それにしても、初雄こそ一番迷惑で、母からも父からもぶたれるのは渠ばかりであつた。そして父が手を當てないのはお兼と春子だけになつた。

前の女中が出たのは、今となつて見れば、足の出ないうちにいい加減に切り上げたのでもあらうが、雄作と喰ひ物のことで云ひ合ひをしたのが一番近い原因であつた。その前の女中も渠がいじめて追ひ出したわけだ。ところが、今の女中も亦それと同じ理由を述べてひまを取つてしまつた。

『何の爲めにそんなことをするんだ』と、父が聽いて見ても、
『そんなことはしません』と答へるばかりであつた。が、やがてそれもすべてお養を困らせる爲めであることが分つた。

吾助の留守にお養が隣りへ春子をつれて話に行つてゐると、雄作が學校から歸つて來て、直ぐまた弟どもを責めて見たと見え、まだ制服の外套を着たまま、隣りの玄關へ來て、
『おかアさん、僕にも角砂糖とパンを下さい』と怒鳴つた。そしてあとで、母から
『なんであんな見ツともないことをするのです、あなたにだツてちやんと別に取つてあつたのに』と叱られた。それを渠は隣りのものに向つて、
『わざと困るやうにしてやつたんです、詰らないものばかり呉れるから』と云つたさうだ。
『何が詰らない?』吾助もそれを聽いて怒らないではゐられなかつた。『手まへ達にやア手まへ達相當の物をやつてあるんだに!』然し、こちらが私かに考へて見ると、お養がさきに里から持つて來た澤山のちまき――これは子供に珍らしかつたらう――は最初て少し子供らに分けてやつた切り、くさる物でないからツて、大事さうにしまつてあつた。眞珠がなくたつたのにすツかり興をさましてしまつたからでもあらうが、かの女が
『これはわたしが持つて來た物だから、そんな不埒な子供には、もう、一つだツてやりませんよ』と云つて。
『ぢやア、勝手にしろ。』吾助は自分もまた喰つて見たくなつたのをそのままにしたのであつた。が、社會に向つてもわざとらしい秘密を好ない渠としては、自分も何か喰たくなると、子供の見てゐるところでも、おほぴらに『何かうまい物はないか』と、戸棚などをのぞいた。すると、そんな時はお養もうち笑ひたがら、
『あれ、みんな御覧なさいよ。おとうさんがお菓子をどろ棒しまアす』などと云つた。それにしても、ちまきだけはかの女の所有物として勝手に手をつけなかつた。
[illegible]

「あれをお前が大事さうにしまつてあるのも子供をひがませる一つの原因にはなつてゐるかも知れないから、早くやつてしまうながいいよ』と忠告した。

『第一にあなたが喰べたいのでしよう』。お秋はなほ自分のお囲ひ物を持つてると云ふ自慢がさきに立つやうであつた。

『おれもさうだが』と、こちらはかの女の意をも汲んでかの女を喜ばせたが、さう云ふ無邪気な誇りの為めにかの女がますます子供の感情をそらせて行くのは無意義なことに思はれた　そして帰つて見ると、係子を置いて行つた為めに弟一番の留守番役である雄作は、どこかへ行つて、うちにはゐなかつた。そして孫子は家人にもいつも通り隣室の寝どこにおとなしく寝てゐるらしいが、茶の間には例雄がうたたねをしてゐて、政直ばかり起きてゐた。が、不用心なので雛ぶ前いせてある部屋ぢうに肴を焼いたにほひがぷんぷんしてゐた。それがまた、政直の何だかとぼけた顔をしてゐるのでも、たツた今のことであるのが分つた。

『お前も亦にイさんを真似て、ますます悪いことをし出した、ねえ』と云つて、お秋の前もあることだから、一つ、渠のあたまを投ぐり付けた。するとつんと少し横を向いて坐わつてたのがからだを傾けて母のはうへに左りの手を突いた。が、直ぐきちんとなつて、また黙つてゐた。弟よりも人がらがいいかと思はれてた兄はさうでもなかつたと同時に、兄より意久地なしに見えた弟がまたこんな時にも泣かなかつた――その癖、実母のことを云ふと一番さきに涙をわけもなくこぼすが。つまり、どいつもこいつも皆づぶといところがあるのだ。この性質がこちらにもあるのかも知れないか、それがまた子供の為めにあとあとから物になるのだらうかと、父としてはまだ私かにこころ頼みをかけられないでもなかつた。そして子供を憎ましくなつたそのそばから、そばから、離れたいづみのやうにまた堪へがたい情愛が湧き溢れて来るのであつた。

『こんなにへつてゐますよ』お秋はがツかりしたやうすでちまきの這入つたおほ袋を持ち出して来た。雄作も今のたのだらうが、いつのまにか三分の一は無くなつてゐた。『ああ、いやだ、いやだ、丸で餓鬼道に来てゐるやうだ！』

『…………』こちらには、然し、さう解釈すべきではなかつた。どうせ、あるところの物を平らげてしまいた

いのは子供でもおとなでも同じだから、どんな理由があつて大事がつたり、差し控へさせたりするにしても、それは然しすべてを早く提供してしまうに越したことではなかつたのだ。『ましてお前は菓子類をきらひ、子供は好きと來てゐるから。』

『それもさうです、ね』と、お兼は子供のゐないところではよく分つてゐた。

『…………』こちらもそんなことでいきなり子供を投ぐつたのを可愛さうになつてしまつた。

『どうせあんな子の上に、また幸田のやうなものがついてるのだから』と、お兼もいよ／＼あきらめを付けたかして、また暫らくは親の方から仕向ける騒ぎはなかつた。そして雄作が隣りのものに

『女中を探しても來ないのがいい氣味だ。實母もよそで女中をしてゐるあひだは、うちのにも飽くまで奈どころ仕事をさせてやるんです』と、如何にも生意氣さうなことをしやべつたのにも、かの女はさう心を激させない風であつた。どうせ、女中の候補者がありさへすれば雇ふのであるが、それをまた雄作がいじめ出すのでは、お兼ばかりか、こちらも特に一つ困ることがあつた。主人が手を出すから女中がつゞかないのだと云ふ世間の評判になつてるさうだからである。

『幸田が人に召し使はれてゐるのはあいつ自身の甲斐性なしからだ』とこちらは雄作に斯う云つた。『それをお前がかれこれ氣をもんでもお前が一人前になるまでは駄目だ。それよりも、おれに下だらない評判を受けさせないやうにしろ。』

『どうせ、わたしは幸田なんかと身ぶんも育ちも違ふのです』と、お兼は高をくつてゐた。

『…………』一つには、幸田が宗教と云へば耶蘇教しかないと思つた時代もあり、雄作がまた一番家に近いからと云つてやられた中學校に於いて少から宗[illegible]に教への感化を受けたのが、佛教の寺出されたなんお兼を趣味上馬鹿にすると云ふ氣もあるらしいのだ。それに、お兼がピヤノをへたなしろうと以上には弾けながら、自己音樂を誇つて、三味線の稽古を[illegible]てゐるのを、子供には下品なことと[illegible]、音樂は[illegible]雄作について、
[illegible]

の主義によつてよく分つたといつか云つたやうだが、英語に對して國語の長所を忘れないと云ふ高尚な氣持ちは、西洋音樂に對して日本樂なる三味線の妙味をも喜ぶのと同じことだよ』と説明した。無論、外國の長所は長所としてだ。『音樂家になつてもいい』と、雄作は云つたこともある。また『語學者になつて各國の言葉を比較研究して見たい』とも。『けども、結局は、日本の精神に從つておとうさんのよりも新らしい宗教を建てるのが目的です。』

『さうか？　決して悪いことぢやアない』と、その時、こちらも答へた。それでゐて、親の物たどをどう枠するのかは、お袋にしては云へたが、實父としては子供のうそにも意氣込んでゐる精神をあたまからうち碎くことになるから、少しも狼狽しなかつた。『兎に角、お父アさんは初め信じた耶蘇教を今ぢやアうッちやつてしまつて、佛教にも反對で、簡單に云はば、まア、神道で——人間のまことが物ごとに正直になり、熱心にもなれると云ふのだから。さうしてさう云ふところから發した國語や音樂はありがたいもので、たとへ外國人には分らないでも、日本人にはいいのだから。』

## 六

山口の家は巣鴨の宮仲、大和神社のうら手にあつた。で、吉助の電車乘り下りも大塚の終點からするのだが、そとにゐても自分のあたまの中では子供を責めないで、幸田ばかりが憎ましかつた。そして大和神社の鳥居ちかなる吹き行を渡つて來るたんびに、ここらあたりで、幸田が十五圓のかねを、『うちへ行つたら誰れかに取られたと云へばいいから、ね——どうせ本當のおッ母さんの爲め、お前たちの爲めになることだから』などと云つて、子供から横取りしたのぢやアないかと思ひ迷つた。そしてそれを父に白状する折りを失つたのが病みつきになつて、また繼母の爲めや自分自身の爲めによくないことを重ねて、獨りで苦しんでゐるのか、とも。そしてその結果の焼け氣味で幸田に云はれて憎みを加へた繼母にばかり、こッそりと、當り散らしてゐるのではない

ところが、渠をおだてるものが別にまた近く、意外なところにあることが分つて來た。隣りの細君の妹お光さんは、國にピヤノもあつて西洋音樂ができると云つてるのだが、そして上野の音樂學校へ入學の準備だと云つて私立の音樂學校

へかよひ、歸つて來ては譜にも合はない唱歌をばかりやかましく歌つてるのだ。そして今持つてるヴイオリンをたまに彈いてもその調子さへ合つてゐないので、お絃が聽きかねて調子を合はしに行つてやつたこともある。それからは恥ぢてその樂器を持たなくなつたのか、ぱツたりその音は絶えた。それでも女同士は兩方からの往き來をしてゐたのである。

が、うちのことを知りさうでもないことまで知つてゐたり、また知つてゐても少し間違つてゐたりするのを不思議だと私かに思つてるうちに、初雄の云ふ話から分つたによると、雄作とお光さんとは兩方の窓から板べい越しに每日のやうに手紙のやり取りをしてゐるのであつた。雄作の方は詩にまで戀を書いたのだから、無論、かの女を戀しい爲めだらう。が、二つも年うへのかの女が何ゆゑにそんなことをするのか氣が知れなかつた。

『兎に角、雄作の書いた手紙の見本を一つなり二つなり見せて貰つて來い』と、吾助はお絃に命令した。そしてお絃が取つて來たのを讀んで見ると、

『さうです、あなたの質問通り、母は僕らに追ひ出されても喰へるやうに三味線の如き下等な物を稽古してゐるのです』と云ふやうなことも書いてあつた。

『無論、お前が三味線を稽古する以上は專門家になる覺悟でやれとは云つてるか——』

『然し、下等な物だとか僕らに追ひ出されてもとか云ふのは、あんまり生意氣ぢやアございませんか？』

『いくら云つても、おれの精神が分らない豚兒だらうか、ね！』

『いいえ、多少は分つても、これは向ふのへたな西洋音樂かぶれの機嫌を取る爲めに、雄作が不見識にもそんな感傷的なことを——あること、ないことをつけ加へて——云つてるのでしようよ。さうして向ふふたりの所作なさに近處のうち輪ごとでも聽きたがるその惡いくせに釣り込まれてゐるのです、わ。まさか、いかなお光さんでもまだ子供の雄作を戀してゐるとは思へませんから。』

『馬鹿なやつだ、ねい。』[illegible]

[illegible]

分に熱してゐた。『きツと、向ふから水を向けて釣り出したに違ひありませんわ、こんな物をこツちへ渡したい向ふの
考へなしなところで、こツちぢやアこれですツかり讀めました、わ。雄作の馬鹿も、向ふのたくらみも。それに、向ふ
では一つの恨みがあつたやうすです』と云ふによると、三ケ月も以前にお隣り宛の無名のハガキが届いて、
『へたな唱歌などよせ、隣りの迷惑だ』とあつた。向ふ夫婦と妹とで、隣りとはこちらだらう、それに○○さんは毎夜おそくまで書き物をして起きてるからと云ふことになつた。

『さうして、これもまま母育ちの、あの顏やからだまでいじけてゐる主人が、いもとさんに向つて、かまはないから、つら當てにもツとやかましく歌つてやれと云つたさうです。こツちは、まさか、うちの主人がそんなことをと笑つてしまひましたが――』

『…………』こちらはあまり世間も知らぬ教師（東京高等工業のだ）がそれ相當のことを云つてるとしか思へなかつた。『そんなことアうツちやつて置けばいい』と云ひながらも、『それはひよツとすると、達ちやんの仕わざかも知れないぞ』と云ふことを思ひ出した。別に證據があるのではないが、以前に、達磨が庭から仕切りの板壁のふし穴をのぞいて、あの唱歌を氣にして、向ふへは聽えぬほど小さい聲でだが、からだに力を入れて、

『默れ、やかましい』と云つた。

『おい、そりやアいけない』と、こちらは注意した。『向ふはおほ屋さんの家族だから。』

『ぢやア、さうかも知れませんが』と、お綾もそのことをにが笑ひに終はつてしまつた。

が、今度は、また、うちや近處へ出入りする八百屋へ行つて、お光さんが、お綾の一生懸命に三味を稽古してゐるのは、向ふの女中の三味線に負けるのがくやしいからだとしやべつたと云ふ事件がそとから聽えて來た。これと前後してまたお光さんとその姉が、或夜、再助の留守に怒鳴り込んで來た。お綾がお隣りのきやうだいは九州生まれだと云つてたのを聽き付けて、惡くちを云はれたのだと思ひ取つてだ。九州をんなはづぼらには違ひないが。

『一體、あなたがそんなことをおツしやるよりも』と、お綾は聞き違ひと分らせたあとでさかねぢを喰はしたさうだ。『お

うちの女中さんは三味線を彈けるかも知れませんが、聽いたこともありませんのに、わたしがその女中さんの三味線に負けるのがくやしいからなんてどッから出た言葉です、八百屋へそんなことをおッしやつて？』

『そんなこと——云はない、わ』と、けろりとしてゐたとのことだ。が、吾助が公平に判斷すると、それも或は根のないことかも知れなかつた。その代り、お光さんがこちらのうち輪のことを知つてながら思ひ違つてるのも、雕作が殊更らに繼母を惡い者にしてあること、ないことを云つて聽かせる結果だらう。そしてこちらはお兼が八方に敵やわい／＼連の噂さを受けてゐるのを氣の毒になつた。然し、吾助から云へば、結局、それもかの女が世間並みを離れた男子を吾と所天としてゐるところから、うらやまれたり嫉まれたりして起るのだから、その苦しさをも寧ろ喜びとしなければならぬのであつた。

兎に角、お光さんは可哀さうにもこの事件の爲めに東京にゐられなくなつて、九州へ返されてしまつた。そしてこちらは隣家の自由をさまたげようとするハガキなど無名で出すものではないと云ふことを、直接におほ屋の息子によりもおほ屋さんへお兼を以つて念の爲めに通じさせた。

『あれには皆も困りましたから返してしまつたのですよ』との答へであつた。そして親の方と息子の方とは別々だから氣にしないやうにともあつたさうだ。こちらはそこにも繼母まま子の行きさつを思ひ出さないではゐられなかつた。が、お光さんの事件で近處の八百屋やさかな屋などをお兼が呼びつけたところから分つたによると、また、幸田が近處へ幾度も來てあがり込み、吾助や子供に關する愚痴ッぽい話をして、泣いたり笑つたりしてゐるのであつた。一緒になつたそも／＼に、吾助がかの女のおほをぢの妨害をさける爲め、かの女を人力車に乘せ、まだ年の若い勢ひでそのあと押しをして自分の父の家までつれて來たことまでも、皆が知つてゐた。

『なんて馬鹿でしよう、ね』と、お兼はまた憤慨をした。『たッた一杯や二杯の茶をありがたがつて、きッと、云はないでもいいことまでナゥおりしやべつてるのですよ！』

『[illegible]

よりも寧ろ可哀さうな氣になつた。目のきよと／＼した、きたならしいお婆アさんが時々お宅の門をのぞいてゐたと云ふやうなことを近處からお艶が聽いて來た時、それは幸田に違ひなかつた。が、近處では、知りつつさう云つてとぼけながら、かげでは面白半分にかの女を呼び込んでゐたのだらう。

『そんな不埒なさかな屋や八百屋のかみさんなら、一度呼んで來い』と、こちらはお艶に命令した。『さうして、あんなぼけた婆アさんをおだてゝるのは、色氣ちがひを大道でからかふのも同樣な無慈悲の罪に當るぞと云へ！』

『ぢやア、さう云ひます、』わざとかの女は然し子供らのゐる時にその命令を正直にだけ實行したやうであつた。これがまた、幸田に就いて意見の相違ある子供をおこらせた。二階で聽いてると、雄作が大きな聲で

『僕の實母は氣ちがひぢやアありません』と怒鳴つてゐた。

雄作』と、こちらはあとで來に向つて、『幸田はおれ達の見るところぢやア少し氣が違つてるのだ。お前にやアまだ思りもあり、さうして觀察力が足りないから、氣ちがひとは見えまいが、おれはさう見てゐるのだ。だから、ね、おれからお前に注意して置くことは、實母としてお前が幸田を思ふのは自由だが、理性上のしんしやく無しにあれの云ふことに從ふのは、おれがお前の父として反對である。然し、また、お前がお前の理性と父に對する尊敬とを棄ててもいいつもりなら、それでもかまはない。その代り、さう云ふ心持ちがお前のこれからの態度と行動とに一度でも現はれたが最後、おれは、もう、お前をこのうちに置く必要も希望もなくなるのだから、さう思つてゐな。』

『はい』と、雄作は答へるばかりであつた。

『若し今度會ふ折りがあつたら、幸田にもおれがさう云つてると傳へて置け。お前がうちを追ひ出されても急に驚いたりしないやうに。』

『はい。』

『…………』こちらは半分以上も見限つてるせいか、子供の答へに少しも手ごたへをおぼえることができなかつた。これで若し自分のお艶がこちらの妻としてその親類や世間の攻撃と戰つて得られた物でなく、そして今の生活に

も充實氣ぶんを持てなかつたとすれば、自分はどんなに寂しいものであつたらうと思はれた。

そのうちに、子供らがお爺の豫告によつて待ち受けてゐたおほ切りの雜煮もちがかの女の里から屆く時となつた。そしてまた正月が來た。吾助もお爺も餅をさう好きでないので、子供らに或度はきめて好き勝手に喰はせた。またできてゐた女中にも、さうであつた。そして七日になつたが、その日は朝から評膳もやつて來て、二階から聽いてると、下はまことに賑かやであつた。

午後になつて、吾助も思案や執筆に倦んじて茶のまへ來てゐると、そしてほかのものは坐敷や玄關のまにゐたか、丁度茶のまの緣がはと向ひ合つた板べいの向ふがはから、

『雄ちゃん、雄ちゃん』と呼んでるのに、ふと、氣が付いた。

『……………』幸田の少しおれた顚狂ごゑではないか？　それでも、突然のことで、ほかのことを思ひ出すひまもなく、ただ何か子供に用事があるのだらうとばかり思つた。『雄作、お前のおツ母さんが來て呼んでるよ。』

『はい』と云ふ返事と、『何ですツて』と云ふとがつた質問とが、殆ど同時にした。そしてお爺の方が早くやつて來て、

『幸田ですツて！　雄ちゃん、行つてはいけませんよ！』

『さうだ』と、こちらも既に思ひ返してゐた。こちらの子を人が自由に呼び出さうとするのが癪にさわつた。どこに幸田が來てゐるのか分らないで怪訝な顏つきをして突ツ立つてる雄作に向つて、『おれとしては今ぢやアお前はあいつの子ぢやアないのだ。』

『兎に角、何の用か聽くがいい、』わお爺はこれも集つて來た縫磨に向つて『あんた出て行つて御覽なさい。』

『おりやア顏を知らんが、な』と云ひながら、玄關はあわてて云はれた通りに玄關を出た。そして暫らくして歸つて來て、『きたないお婆アさんの人』がおあとをふり返り、ふり返り、逃げるやうにして向ふへ行つたが、角まで追ひかけて見ると、矢ツ張り[illegible]

『さうだア、矢ツ張り、[illegible]

こゝへも來ていろ〳〵世話になつてるのだが、その母と云ふのはこちらに對して一番かげ日なたがあるので、さきに近處のかみさん達を呼びつけた時、來ることができなかつた。さうだ、どうせ、どいつだツて平凡人中のその又た平凡人ともだから、そんなものは「相手にしない方がいい」と云つてるのだけれども、お彼は「氣の毒ですから」とか、「功德だから」とか云つて、いつも近處の離婚ばなしや仲直り事件などを持ち込まれてゐるのだ。

「…………」それほど人のことを思ふなら、今少し、形だけでもの母として子供とのあひだの感情を取り直して呉れるといいがとも思はれた。が、こちらも道理を押して行く上では、どうせあんな幸田がゐる限り、子供がよくなる見込みはなかつた。

その晩めし後、吾助は用があつて家を出たところ、神社の境內で幸田が今やツと歸つて行くのにその後ろから出會つた。大きな杉やいてふの樹のあひだであるから、電燈は所々についてゐてもうす暗かつた。聲をかける氣もないので、こちらが默つてかの女の左り手を通り越す時、かの女もそれと氣が付いたか、むかし通り投ぐられでもしないかと云ふ風にこちらを見ながら、そのからだをちよツとわざ〳〵よけてゐたやうであつた。その目はなのことはよく見えなかつたが、何か長方形のひらべツたい物の風呂敷包みを左りの手に持つて、肩のあたりまで懶しく掛けてたやうすが、そのむかし、かの女が教員用の教科書包みを持つて、はかま無しにすらりとした裾を搦り下駄の後ろまで引きつつ、小學校へ出勤してゐた姿を思ひ浮べさせた。少しねこ脊の、そして脊も低い方だが、すらりと優しく高いやうに見えた。かの女はこちらより三つも年うへだが、あの時はまだ若くツて、奇麗のやうでもあり、また英語や精神問題に就いても殊更ら話せないでもなかつた。

これが今や、午後の一時頃から五時間ばかりも、縁もゆかりもない人のうちで、一杯の茶や茶うけで、ぺちやくり下だらないおしやべりをしたり、愚痴をこぼしたりして歸つて行くのかと思ふと、かの女とこの關係で、自分の社會國家にも

有用な精神が若返る爲めに、早く切り上げたことの利口であつたのを喜ぶと共に、そこにまた切實に自分の生活する時代變遷のおそろしさをも觀じられたのである。

早い話が小學女教員の姿だけで云つて見ても、女教員がはかまなしでゐたとは今の十代二十代の男女には想像もできなからうではないか？

# 七

『…………』その二三日後、吾助が何げなくそとから歸つて來ると、妻のお濱は玄關のまで何だか探し物をしてゐた。雄作の書物や持ち物を入れさせてある押し入れのかたびらきを明け放つて、その中の物が疊の上にさんざん散らばつてた。そして常になくかの女は

『お歸りなさい』をも云はなかつた。

『どうしたんだ？』こちらはその室にあがつてから、まだ高帽をも取らないで、突ツ立つたままかの女を見おろした。挨拶のないのが癪にさわつたと同時に、ぺたりと坐わつてるかの女が默つてこちらを見上げた顏つきのあまりに緊張してゐるのが馬鹿々々しかつた。『そのつらを見ろ！』

『あなたにはまだ申し上げないでゐましたが、ね』と、かの女は初めてその膝をもこちらへ向けて、『實は、わたしの財布にちやんと別にして、しまつてありましたおさつが七圓、そツくり無くなつたのです。』

『…………』直ぐ雄作のせいだらうとはこちらも思ひ及んだのであるが、容易にさう口へは出したくなかつた。これが果して事實だと證明できたら、もう、何と云つても雄作のこの家に於ける立ち場がなくなるのだから、うかうかとかの女をして當座の感情に走らせて、事實の判斷をあやまらしめるやうなことはできなかつた。それに、いつかもあつた通り、こちらが手渡ししたかねを孫子のことにまぎれてそツくりそのままかの女たち[illegible]に置き忘れてもゐたので、こちらはその[illegible]をここでそれを[illegible]入れた[illegible] そして[illegible]にそこへ出た。そこ

て孫ちうがおほ騒ぎをしてゐるところへ歸つて來て、二度と再びこんなおろそかな不注意をするな』と云つて返し返してやつた。今度のはまたあまりに大切にし過ぎて、しまひ無くしと云ふこともないではなからうと思へた。けれども、今や自分のいきどほりを半ば私かにここに見えない雌作の方に轉じさせながら、『いつ無くなつたのだ？』

『氣が付いたのはけさのことですが』と、かの女はその類の緊張を少しゆるめたと同時に、あまへて訴へるやうな聲になつて、『ひよツとすると、きのふのことかも知れませんの。きのふは珍らしく一圓以上の必要がありませんでしたから、財布は開けても、おさつを入れた方のあひだを見ませんでしたから。』

『ふん』と、こちらは仕かたなしに口を結んで鼻で受け答へをした。けさからこのゆふがたまでもかの女自身の方を調べたり考へたりしてゐたものとすれば、かの女自身に思ひ違ひのあらう筈はなかつたのだらう。

『去年の指環や眞珠のことを思ひ合はせれば、大抵分つてゐるでしよう？』

『……………』こちらには、また、値段はあるにしてもそんなおもちやのなくなつた記憶などよりもさきに、辭書のことがあつた。合本雜誌のことがあつた。それから、なほさかのぼれば、いまだに疑問であつた拾五圓のことも何だかありありと。そしてその問題の當人は勿論、その他もゐないやうなのを不思議がつて、『子供や女中はどうした？』

『今、癪にさわるから、みんなそとへ出して、先づ念の爲めに女中の持ち物から調べて見たのです。もう、手後れかして、ここにも見えません、わ。』

『畜生！ もう、またこんな物を持ち出して來てあるぢやアないか？』こちらはからだを曲げて、——誰が引き出しお二つともはづしてあるあのあたりに、子供の落書きや、もち引きや、幸田が持つてた置き時計の解體したのや、死んだ學友のかたみ、アルコールを焚けば運轉するおもちやの機關や、父がやつた古事記や和譯法華經や、子供の勝手で大事さうに溜めてある少年雜誌や、靴したの破れたのや、誰れかに借りたらしい新刊小説やがころがつてるあひだから——こないだ父が買つて來た梵文漢譯對照の阿彌陀經を拾ひ上げた。

『おとうさんの物を何と云はれても無斷で持つて來るほど圖々しいのですから。』

『…………』さうだ、父がいけないと云ふばかりでなく、お兼もかけでさう云つてるやうすであつたが、凶々しい爲めか、それとも親の物だからと平氣でゐるのか？　若しあとの方のに相當するのなら、まだしも無邪氣だと云へよう。が、斯うしてかね目になる物を取つたり、かねその物を盗んだりしてゐたのだと分つて來ると、わが子に對してながら憎々しさがまた加はつた。お兼にも時々調べて見ろと云つて置いたのである。その押し入れへ進んで行つて、自分もいきなり手をさし延ばして奥の方の蒲團のあひだをさわつて見た、初めから少し變だと思つたら、果して古シャツにかち／＼した物が包んであるらしかつた。それを見てのお兼のまた一層の怒りを豫想したので、そのぶんまでも前以つて引き受け、

『これは何だ』と叫ぶと同時に、その包みを力一杯に引き出すと、去年來たおほ切りの餅がばら／＼と中の段から疊のうへへころがり落ちた。

『あら！』お兼は暫らく言葉を出さなかつた。それから、われに返つたやうになつて、『讀めました、讀めました。もうお餅は今でも十分にたべさせてゐるのですから、この上こツそりいぢきたなをするでもありません。』この口調は子供にでも直接に云つてるやうであつた。それから、『本人も、もう、たべ飽きたと白狀してゐる位ですから。だから、これもきツと幸田へ持つて行つてやる氣でしたのです、わ。分らないやうにこんなシャツなんかにくるみ隱して。』

『…………』いや、さうとして見ても、シャツを用ゐたのはただ隱す爲めばかりではなく、風呂敷までも盗み出すつもりがなかつたのだらう。

『あんたに申し上げなかつたことがまだございましたが、下谷の床屋がお歳暮に持つて來たこなしやぼんも、まだ誰れも使つて見ないのに、箱の上から三分の一ほどへつてゐます。雄作が珍らしがつて、そんな物まで幸田へ持つて行つてやつたとしか思はれないでしょうよ。お餅だッて、さうです、わ。』

『おとうさんが幸田に途中で出會つたさうです』と、雄作がお兼に二三日前の晩のことを語つたと云ふを思ひ合はせても、最近にきのふ、おとゝひ、かの女に盗んだ物を渡さうとすれば渡すことができたらう。が、今聞くところでは、し

やぼんのことからでも私かに氣が立つてたそのお兼の監視が嚴しい爲めに、かさ張つた物を持ち出すことはできなかつたのかも知れない。して見ると、子供とその實母とのあひだには始終悲いことのうち合はせがしてあつて、餅の豫告を——これもしてあつたと見ると——あのがつ〳〵した女のことだから待ち兼て、わざ〳〵向ふから出かけて來て、板べいのそとでこツそり受け取らうとしたのに相違ない。それが失敗して空しく立ち去つた。そして雄作もその實母の爲めにくやしく思つた。そしてそのくやしまぎれに、また、お兼の財布から七圓を持つて行つたとすれば、

『お前もこの取り引きに就いちやア餘ツぽど損をしたぞ』と、もう、燒けまぎれの洒落までが出た。

『わたし、もう、滑りません、わ、斷う内そとから、しよツちう狙はれてゐては！』

『それも然し結局はおれ獨りの引き受けだア、ね。』

『あんたの引き受けたことは、矢ツ張り、みんなわたしの責任にもなります、わ。』

『よし、來た！　もう、いよ〳〵放逐だぞ！』この思はず大きく強く出た聲は、若し突然それだけを何も知らぬ他人に聽かれると、夫婦喧嘩の爲めにお兼その者に命令したかのやうに思ひ取られさうであつた。

それから、帽子を取つて茶のまへ來たのだが、いつも早い晩めしを女中がまだ歸らないので初められなかつた、茶を飲みながら、お兼の分り切つた不平やら泣き言やらを聽き流してゐると、門が明いて、玄關みちをがや〳〵と皆が歸つて來た。門内の左りがはへ自分が田返して置いたちよツとした小松菜ばたけに、雪が消え殘つてるやうすを思ひ浮べながら雄作のあがつて來るのを待つた。

お兼は特別に澄まし切つてゐた。が、春子をその膝へ女中の春なかから受け取ると、初めておがほになつて、

『おう、ちやぶかつたらう、ね』と云つた。

『…………』こちらはかの女のそんなことも雄作らには、もう、嫉まし過ぎるのではないかと見えた。架空の都合のいいやうには愛しても貰ひたからうから。

主人兩方が割り合ひに澄ましゐるので、女中はこれでもまだ早く歸つたとして主人らの氣に入らないのかとでも思つ

たのか。

『もツとそとにゐようと思ひましたのですが、にイさん達があんまり初雄さんをいぢめるものですから。』

『いぢめやしないぢやアないか？』雄作は怒りの色まで見せた。

『いぢめたよ』と、初雄も簡單に正直さうに女中の言葉を活かした。

政直だけは何とも云はないでちやんと坐わつてた。

『もう、どんなうそも申しわけもまに合ひませんよ』とばかりで、お俊は口をつぐんでゐた。放逐の當り前なのを前以つて暗に示めしたやうに。

『……………』こちらも無論それと決心してゐるのだが、今一度父と子とだけで向ひ合つて情を盡して見たいと思つた。女中の用意した食事をすませてから、『雄作、ちよツと二階へ來い』と命令した。そして立つて行きがけに、『政直も一緒に。』

兄を出すならば、それと心を一つにしてゐる弟もここには置けないのであつた。政直がゐれば、矢ツ張り、うちのことに關する兄の代理をやるだらうし、またそれよりも困るのは、幸田のそとからつけ狙ふことがおんなじであらう。そして政直をも出す以上は、その理由をも――まだよく分らないかも知れないが――兄と一緒に聽かせて置く方がいいと思はれた。

こちらは相變らずただかしこまつてる二人の子供に向つて、言葉に威嚴を持たせて告げたのである、

『お前達の運命も、もう、今夜限りになつたやうだが、ね、どうだ、すツかり白狀して改め直しておツかさんのもとにゐたいか？　それとも、圖々しく默つて幸田の方へ行くか？　この二つに一つを考へて見なければならん。』これまでの形跡では七圓のかねも雄作が取つたものと斷定しなければならぬこと。それから、また、取つたかねを幸田に渡したに相違ないが、それならそれでよく七圓を出して母にあやまつてやるから、ちやんとさう白狀しろ。別にまた疑ひがある。そのかねを幸田も知らないで、雄作ばかりの買ひ喰ひその他に使つたのではないか？　[illegible]

さうと白狀さへすればいい。ただこれからは決して幸田の爲めに父や母の物を無斷で持ち出さないと誓はなければならぬ。すべて斯う云ふことを、たとへば、母てむくだと云ふ色をんなに男のあつたことが分りかけたので、それを白狀させた時のやうな切實な心持ちを以つて告げたのである。

けれども、子供はどのことをも聽き流してゐるやうであつた。そのうちに、下からお兼が呼ぶので行つて見ると、

『今、女中の云ふところでは、雄作がどうせかねなんか出る氣づかひはないと云つたさうです』との注意であつた。

『ぢやア、兎に角、かねの行く系を知つてるんだ、な！』

『さうして女のやうに陰險な仕かたでいろ〳〵と初雄を責めたのですと。あの子はまたいぢめられつけてるから、それを左ほどにも思はないのでしようが――』

『よし！』こちらはそのあとを聽くまでもなくくわツとなつてしまつた。人の子ながら、初雄の方が可愛くなつて、もう、何もくどくど雄作らに云ふ必要がないやうであつた。再び二階へ行くと、直ぐ、

『もう、何も云はないから、ただ斯う云ふことだけを今晩ぢう考へて、あすの朝ふたりとも學校へ行かないでいいからおれが起きたら返事しろ。今聽くのは早過ぎる。よく考へてからだが――あすから幸田の方へ行くなら白狀も何もしないでいい。然し、お父アんと一緒にゐたいなら、それでもいい。ただかねの行く系を知つてる筈だから正直に云へ。』

その夜はとこに這入つてもなか〳〵眠られなかつた。子供も憎い、幸田も憎いが、また、その憎みを自分の行爲の自然の結果として重ねしめるに至つたところのお兼その者をも憎かつた。そして翌くる朝も不愉快な氣持ちを以つて起きてから、獨りで自分の食事に向ひながら、

『返事はどうだ』と聽いて見た。すると、雄作は

『矢ツ張り、おとうさんと一緒にゐたいのです』と答へた。

『ぢやア、すツかりお前の惡かつたことを白狀して見ろ。それでないと、お前のどこまでが惡く、どこからがいいかと云ふ、お前の考へがよく分らないから。』

「別に白状することはありません。」

「馬鹿！」もう、すツかり望みが絶えてしまつた。「お父アんは、ね、さうおまいのおやアないのだ！」子供の考へとして、自分が白状すればその實母の罪になつて、幸田が他人のどろ棒として訴へられるだらうとでも思つたり、吹き込まれたりしてゐるのかとも、こちらは想像して見たが、もう、それでも子供が敵の間諜と同様にしか見えなかつた。そしてまた十五圓のことも思ひ浮べて見ると、あれも幸田がひよツくり雄作に出くわしてでき心を起したと云ふよりも、雄作が最初からそんな場合を云ひ含められてゐて、丁度いい機會だとして、こちらへは方々を探してゐたと云つたその時間で電車に乗つて幸田のもとまで行き、現金を渡してから、ひどい叱りかたを免れる爲め幸田について來て貰つたのかも知れないのであつた。そして、幸田も自分のさせたことの成り行きをそらとぼけて見届ける爲め。

直ぐお前に命じて子供ふたりの衣物や荷物を取りまとめさせた。そして綿入れの上にこの正月の爲めにできた揃ひの黒もめんの紋付きを着せ、最後の晝めしが樂らにできる前に、ちよツと晃と云ふ友人のところへ行かせることにした。いとま乞ひかた／＼これからの心得を少しでも聴いて來いと云つてだ。晃は人を多く使つたこともある商人肌で、こちらは子供を出す以上はどこかの商人に附けて小僧から仕上げさせるより外に道がなかつた。

「俺が十五圓や、七圓のはしたがねの爲めにお前達を放逐するのだと思つちやア違ふぞ」お前はことと、雄作に向つて、また幼稚た學生でありながら、今からかねを以つて實母を助けようとしてゐる考へが、おれには最も不愉快だ。そんなことで學問をしたツて駄目だから、早く商人にでもならせるつもりで小僧に行くがいいと云ふのだ。お前はいつかお父アんなたに御厄介ばかりをかけても悪いからどこかの書生にでもやつて呉れろと云つたが、書生なんかこそ人に厄介をかけるばかりで、而もそんなことをして中途半端な學問ができたツて、これからの社會にはただまご付くばかりだ。それよりやア小僧から叩き上げて早く獨立の商人になる方がどれだけ見識か分らない。さうして人間としてえらくなるにも、まごころをとほしさへする以上、商人だツて學者だツて甲乙の變はりはない。だから、そのつもりで少し小僧から[illegible]

[illegible]」

『でも』と、雄作は少し心配さうにして、『向ふのおかァさんは人のうちになるのだから、行つて相談するには及ばぬだらう。』

『なアに、こッちが十分に世話をしてやらうと云ふ子供をわざ〳〵呼び出す位だから、何とか考へがあらうよ。』この返答は子供に對してはあまり冷淡だと思はれたので、斯う云ひ直した、『それに、新聞の廣告を見て行けば、直ぐにも小僧の口はきまるものだから、ね。』

# 八

『雄ちやんも政ちやんもおとうさんに今一度あやまる氣はないのですか』と、お兼はそばから云ひ添へたが、ふたりの子供は何も返事をしなかつた。

『…………』こちらには、子供が圖々しいのか、それともこちらの云ふ意味がまだ分らないまま止むを得ず云はれる通りにするのか、どちらともいまだに判斷に迷はざるを得ないところがあつた。そして提宛てに『今回子供二名を小僧にやりますから、お別れかたがた遣はします。どうか今後の心得になるべきことがおありなら、子供の爲めに少しでも云つて聽かせて下さい』と云ふ短文を書きながらも、自分の胸の奥から、子供が父の無情を訴へるやうな聲が聽えた。

が、それを辛抱して子供二名を堤に遣はした。そして果らが歸つて來る前に、お兼は『可哀さうだから、何とか別に仕やうがありませんか、ね』と云つたけれども、こちらの決心はかの女の弱いぐらつきを押し伏せてしまつた。

『政直にも一言云つて置くが、お前はただにイさんの卷き添へを喰つたやうなわけでもあるが、ね、どうせお前は向ふのおッ母さんの方へ行きたいのだから――』

『…………』政直は父の言葉をここまで聽くと、澄ましてゐたのがにこ〳〵し出した。

『政ちやんはまだ何も分らないのだ、わ』と、お兼は笑ひながらあはれッぽい聲で云つてから、雄作に向ひ、『ねえ、雄

ちやん、あんたが小僧さんになるなら、どうせ利雄もさうさせますから、おたがひの恨みッこはない筈でしようが――あんたは今一度おとうさんにあやまつて見る氣はないのか？』

『もう、おそい！』斯うかの女をも叱り付けた。子供らに對するこちらの感情から云へば、かの女の爲めに斯う云ふはめになつて來たのだとも一方では知らせて置きたい氣がしてだ。それから、『おい、政造』と、顏をこわく見せるやうにして弟をばかり呼んだが、これは兄の方へ言葉を直接にかけたくなかつたからである。『お前は初めから小僧にもなりたかつたやうだ。然し、なつた以上は、たとへ親の爲めにだツてそこの主人の物を一厘一錢でも盗んぢやア承知しないぞ！』

『はい。』

『お前も少しやアにイさんのよくない眞似をしてゐたらしいから。』いや、盗み喰ひやあやしい水筒のことではなたらしい、どころではなかつたが、ここでは、こツそりと手ですることをも含めたのだ。そしてさう云ふことがあるのは、一方では、子供が多少でもおとなの方へ向つて來たしるしだから、父がうツちやつても、どうやら斯うやら生きて行けるだけの安心を豫想させないではなかつた。人間に性慾がなくなつたら、病人や子供に喰ひけの無くなつたも同様、世界は、もう、活氣の絶滅した死のやみではないか？

最後の從事を與へられてから、いよ／＼雄作らは出て行くことになつた。

『オヤア、書物なんかはまたあとからいつでも取りにいらツしやいよ』と云つて、お簇は小さい風呂敷包みを二つ、業のまゝの縁がはに出した。

『へたな書物なんか商人になるのに入用はない』と、吾助は叫んだ。そのくせ、前以つて『古事記』と自分の雜誌に書いた日本的人格論とは持つて行つて度々讀めと、雄作には命令してあつた。

ツい、目の前の板べいの向ふがはからは、そこに住んでるさかな屋や米屋のかみさん達の代りに、また、あのヒステリツクの[illegible]、[illegible]ア、子供はこちらと同じやうに可愛いのだらうか可愛からぬかを知らない中田さ、

[illegible]て、[illegible]と思つた。

『何と云つたツて子供はあなたとわたしの拵らへた子供ですから、ね!』

『畜生! 今更ら虫のよ過ぎる鬼子母神! こツちの物を喰ひ盡したいなら、その望み通り、先づ、このふたアりの子供から喰つてしまへ!』かの女に對するこの憎しみが自分の意識をうツとりさせたところへ、また、どこかよその方から、

『どうか矢ツ張りおそばに置いて下さい』と聽えてゐる。子供の聲であつて欲しかつたが、あいにく、さうではなく、幸田がそのむかし、こちらのかの女に對する嫌惡の焼け放蕩に困りぬいたあげく、その曲つたつのをいくへにも折つて一たびあやまり手紙をよこした時のその文句の一節であつた。

それでもなほ根本から面白くない爲めにとう〳〵かの女を棄てたが、今や子供がかの女の爲めにこちらを棄てて行くのであつた。ふと、われに、返ると、雄作は政直を従へて臺どころの方から、これも新年に新らしく買はれた下駄をはいて來て、お隷から風呂敷づつみを受けた。そして、

『ながなが御厄介になりました』と云ふ言葉を殘してから、ふたりともその兩方の肩にきちんとあげをした紋付きの後ろを見せながら、行つてしまつた。

『…………』それを、立ちながら、その場でちよツと見送つた吾助は、先づ、あんな世間的な挨拶をもいつのまにかおぼえてゐたのかと頼母しかつた。そしてさう云つた時、ちよツとこちらを見上げたその目つきは子供ながら別れを惜しむやうであつたが、こちらも目がしよぼ付いたのではツきりとは見えなかつた。政直の方は兎も角、兄は利口と云へば利口であつた。あたまも學生としては思考力に富んでゐた。學者として進めば進めたものを、俄かに小僧からの商人にするのが今更ら惜しい氣もした。

が、幸田の鬼子母神と結び付けて考へると、矢ツ張り、渠等も敵の仲間であつた。そして渠等すべてに對するこちらの憎しみを撤回するには、今の妻が餘りに高價であつた。かの女との生活は、兎に角、一大決心を以つて初められ、而もおほやけに社會と戰つてまで築き上げて來たものであるから。そしにこの氣ぶんの續く限りは、別な親の爲めにでも

こちらを棄てて行く子供らとは交換できなかつた。

『若しまた歸つて來たら許して下さいますか』と、お衆は、自分のことのやうに頼むのであつた。

「いいや、歸つて來たら、こッちの手で小僧にやるばかりだ』と答へた。そして子供に關聯して今の今まで家のまわりにつき纏つてた幽靈がすッかり退散したと云ふ氣持ちになつた。が、なほ、子供に對してはこちらの云つたことを本當に呑み込めた上の、ああ云つた決心と退去であつたかどうか、このことばかりはこちらにまだ何だかなやましい疑念となつて殘たつ。

そしてその疑念は、喜助自身としてその子供に對して無責任ではないかどうかと云ふことを呼び起した。が、自分としては考へて見るまでもなく決して無責任でも無慈悲でもなかつた。蓋し人間界の——そして人間に無關係な宇宙などはあつたとしても死と同樣の空想だから別として、云ひかへれば活きた宇宙の——ことには、無制限の自由などはない如く、慈悲にも人間の力で以ってできる範圍のと云ふ制限があらう。ところで、かかる慈悲の最も大きく具現したのは、わが國では、國家だ。外國人をでも、若し歸化して來れば、法律その他萬般の有情的規定と設備とに含まれた愛を以つて抱擁してやる。まして自然の要素と生後の教養とに於いては生え拔きであるところの國人をやだ。さう云ふ義務若しくは責任が重大になればなるほど、嚴しい刑罰が伴はなければ成り立たないものだ。

で、國家はそれ相當な慈悲の爲めに無期徒刑、今一つ進めば死刑を云ひ渡す權力がある。私のそれはここまで大きくないと同時に、それだけの權力を持たない。ヤッと國外放逐に相當する家庭放逐が關の山だらう。自分は自分の子供に對してそこまで怒りいきどほつたのである。自分の慈悲も決して徒らに感情的なだらしないものではない。恥づべきほど滑稽に終はるやうな芝居ではない。恐らく、飽くまで悲痛な愛だ。斯う考へると、子供をそばに置くも、子供を手放すも同じことで、つまり、賞罰いづれも親の同じ心の發現であつた。

「あんたはほんとに思ひ切りがいいのです、ね。」お衆もまだこちらのこゝに立つてゐた。わたしの[illegible]きたく

なりました、た[illegible]

『泣くものは泣け、さ。笑ふものは笑へ、さ。おれにやアおれの考へがある。』獨り云つて、自分に意地を張つて何か心えを感じてゐた。

# 九

その午後は長篇の力作を完成したあとのと同じ疲勞と輕快とをおぼえたので、碁でも打つて一と息拔きたかつたが、あいにく、相ひ手になるものも來なかつた。そのくせ、お兼と話をすることは、子供を聯想するので、いやであつた。早い晩めしを濟ませてから、また堤のうちへ行つて花でも引かうかと思ひ、茶のまに默つて坐わつたまま、向ふの時がすむ時刻を待つてゐた。酒も飲まないのに少し醉つたやうな、自分だけは健全な氣持ちで小楊子を使ひながらだ。

『雄ちやん達はどうしたでしよう、ね？』お兼は少しむづかつてる春子を膝の上に抱いて考へ込んでゐた。

『さア、どうしたか？』吾助は子供の方から何とか云つて來るまでそれに關することを思ひ出したくなかつた。そして初雄に『いつものを二階から持つて來い』と命じた。それは、赤うら黑うらの花札と、こちら夫婦並びに向ふ夫婦四人分のもと手に當るだけの碁石と、子供のめんこを代用した借り貸とのことである。これで以つて勝負をすることは、春子がまだ母の腹にゐた時からの習慣のやうになつてるが、一度も物を賭けたことはない。それでもやり出すと、必らず二三年は戰つて來た。隨分度々のことであるから、子供でも『いつもの』で分つてゐた。

『わたし、何だか今夜は行きたくない、わ』と、お兼は進まぬ顏つきであつた。

『…………』それにもこちらはまた面白くないことを思ひ出しかけたが、同時にまた、かの女が先刻からこちらの心に添はうとしないのを不愉快になつた。子供とのあひだのことが若し喧嘩でもあつたら、兩成敗になるところであつたのだぞと云つてやりたいほどに。そしてやがて、遊び道具の小さい包みを初雄から受け取ると、お兼のふる物を仕立て直したお召しのどてらを着たまま、今夜に限り獨りで出かけて行つた。來るなら、あとから來い』と命令するやうな、また、いやな者は誘はぬと云ふやうな、どちらにせよ、うちのものには不愉快なやうすに感じてゐた。

堤のうちは無人の爲め門を締めてあるので、いつもうら木戸を明けて這入つた。そして

『おい　ゐるか』と聲をかけた。

『ゐるよ』の返事があつたので、こちらは直ぐにこそ／＼しながら勝手の障子を明けると、狹い臺どころとのあひの障子が明いてたその向ふの茶のまの電氣のもとに、主人とさし向ひの雄作が今その膝を坐わり直したのが見えた。

……………『俄かにこわい顏をして、つか／＼とあがつて行つて、きつい聲を出した堤り合ひには、もう自分の心はあら立つてゐなかつたのだが――『まだこんなところにまご付いてゐるのか？』

『さツきのお話の殘りを聽きに來てゐました。』

……………『睨らんだところ、さう云ふにはそのおど／＼してゐる樣子が變に見えたので、『さうか』とは云つてそれなかつた。が、それも可哀さうにこちらのおもてづらにおそれた爲めかも知れないと思つた時、氣が付くと、うらの木戸の明く音がした。そしてそこにつけてある重りでまたぎいツと締まつたやうに聽えた。然し誰れも人のけがしないので、直ぐヒステリ性の幽靈も來てゐたに相違ないことが分つて、座の白けてゐるわけも讀めた。そしてその爲めいよ／＼心の内外一致の怒りが湧いて、『辞用までもつれて來たんだらうが――そんな必要がどこにある？早く歸れ！』

――ほたら――と、堤も雄作に向つて、『もう、お歸り。』また、こちらに向き直つて、『君の賴みの話を先刻し殘してあつたんや。』

『それにしても――』こちらは子供の顏が見えるあひたは心が少しも納まらないので、まだ立ちながら、堤に『君だツて、もう二度と取り合はないで置いて呉れ。僕の賴みは一度で十分だから。』

『そりや分つてるが――』

『おやア、左やうなら。』雄作はもぢ／＼させてゐた兩膝を並べ直したかと見えると、突然みよに頭を疊へ突いた。そして堤の方から、からだを起して立ちあがつた。

『……………』こちらは何も云はないで見つめてゐると、靜かに……しかし……なく、……一言を……

つた。

『君はあんなお辭儀の仕かたなら、わざ〳〵君のおやぢの送り迎へをしないでもいいぢやアないか』と、むかし、或友人に云つたことをこちらは思ひ出してゐた。その友人はその父が出て行く時、歸る時に、必らず玄關まで出て行くのだが、いつも、今雄作が見せたやうな尻あがりのお辭儀をした。そして

『それでも出て行かないとおこるから』と答へた。こちらはそんな、表面ばかりを嚴格にさせるおやぢではないが、自分の心が承知しない以上は、子供にだツてろく〳〵口をきくのがいやなのである。この心持ちをなほ堤に向つても殘しながら、にが笑ひをして膝を折る時、

『さア、またやらうか、ね』と云つた。一度手がふところの中へ行つたけれども、直ぐ中の物を出すのはさし控へた。ここへあがつた初めから、この方の興味はそげてゐたから。

『やらう』と云つた答へに、堤も何となく進まぬ様子を見せた。そして逃げ言葉のやうに、『細君はどうした？』

『うん、來るだらう。』こちらは來ても來なくツても、また花をやつてもやらなくツても、どちらでもよかつた。すると、堤からも別な話が出た、

『君、郵船株がまたあがつたよ。もツとあがるにちがひないから、かねがあると今のうちに少し買うとくと儲かるがな。』

『誰れだツてかねは欲しいが、ね。』こちらは、若しそれが十分にあらば、子供をどこかのしツかりした寄宿舍に入れて、一年に一度か二度その様子と學業の進步不進步とを見せに來させてもいいのだ。が、そんなかねが今はできても、あとまでずツとつづく見込みが立たないと、却つて子供をなまれ半じやくなものにして、學者には成れず、さうかと云つて勞働はいやだと云ふやうな、所謂高等遊民若しくはまご付きものをひとりでも社會にふやすわけになるのが面白くなかつた。

口錢取りをしてゐる堤は株の話から轉じても、子供や幸田のことに云ひ及ばぬやうにしてゐるらしく見えた。そして

これには何だか引け味を感じてゐるらしかつたが、こちらも其の方が却つて今の心持ちに結局ありがたかつた。

そのうちに、お兼が春子をねんねこ絆纏でおんぶしてやつて來た。そしてこちらの顔を見ると、直ぐ、

『あんた、今雄作に會ひましたよ。こツちは確かにさうだと思つて見たのに、向ふは見ないふりをしてすたすた行つてしまひましたわ。』

『……………………』こちらもただかの女の方を見ただけで、まだ返事をしなかつたが、堤は横を向いてにがい顔をしてゐた。

『きツと、ここへ來てゐたのでしよう。』

『さうですか知らん』と、堤のお竹さんはまだ蔭どころで洗ひ物の始末をさせながら答へた。

『……………………』お兼はこれツ切り默つて、こちらと少し離れた下座へ腰をおろしたが、少しはいやな顔をした。

こちらもお竹さんのわざわざそらとぼけた返事を不思議であつた。なぜ今來てゐましたよと素直に云はなかつたのか？それに、また默つてゐればそれまでだのに、堤その人がにがい顔をしてゐるのも知らないで、その意味を却つて裏切るやうなことを云つたのか？これは、つまり、雄作ばかりでなく、春用も來てゐたことを隱しそこねたのであるに相違なかつたらう。それならそれで、云はないでも、もう、こちらは推測と確信とをしてゐることだが、今ここでさうだとはお兼に云へなかつた。お竹さんに面と向つて恥ぢをかかせることになるからである。

やがてお竹さんも手を拭き拭き出て來たが、四人の座がいろいろに向らけて面白く行かなかつた。

『さア、わざわざ來たものなら、早く一年しようやないか』と、堤は義理らしく促した。

『さうだ、ね。』こちらも持ちの思はくに頓着なく、氣を持ち直して、自分の初手の者へに賭つ一もと云つた。が、春子をおんぶしたままお兼を返り見て、金の高めつどうだ』と聞いた。四人揃はないと、興味が乗つて來ない習慣になつてゐるので。すると、かの女は無遠慮にも答へた、

[illegible]

「…………」こちらは現夫婦に氣の毒な顏かして、暫らく笑ひにまぎらしてゐたが、常に向ふ側から云へば、たいしたことでもない理由から、この場の不興を一層不興にしたのはお兼であると、むツとしてしまつた。そしてやがて「ぢやア、歸る」と云つて、獨り先きに立つてそこを出てしまつた。

お兼にあとから追ッ付いて來て、

「いやになつてしまうぢやアありませんか」と、こちらに對してはさほどこだはりのある樣子でもなかつた。「きツと雄作が來てゐたのを云へない理由があるのです、ね。」

「そりやア、來てゐた、さ。」

「あんたも行つたのですか？」

「…………●…………」それには返事をしないで、「斧田もらしかつた。」

「さうでしようとも！そうして雄ちやんはあんたに何と云つて？」

「別に何も云はなかつた。」こツちも大して云はなかつた。これは實際だから、二度目に聽かれてまた答へるのがうるさいので、先きを越して云つてしまつたのだ。

「きツと何か向ふのふたアりである知慧をつけてるに違ひございません、ね。こりやアきツと近いうちにあの斧田からだましますよ。」

「…………」云はれて氣が付いて見ると、惜しさうなら、これはなかなかおろそかの問題ではなかつた。向ふの相談相ひ手の一方はそのむかし、機内に對する惜しみから事を大きくして、その父を二度までも裁判所へ訴へたのだ。その二度目のにはこちらが聽き付けて忠告を與へたけれども、承知しなかつた。それに、また、一方は成るべくうまく隱してゐるが、もとを洗へば藝者あがりのひねくれ者だ。そんなことは今の今まで忘れてゐたほどの親しみをこちらは持つてゐたのだけれども、向ふは商賣違ひの爲めにこちらの生活に理解が少く、お負けに子なしの子好きと來てゐて、こちらの子供の育てかたにも時々口ばしを入れたほど、親切と云へば親切な代りに、好意のでとりすとれた思ひ違ひをし

てゐるかも知れなかつた。

斯う云ふ風にして、お竹さんのお徳に對した今のそぶりを思ひ合はせて見ると、堤も亦お竹さんと一緒になつてこちらのお徳のことを通常一般のままツ子いじめと見て、怒つたり輕蔑したりしてゐるのかも知れなかつた。若しそれなら、お徳に對して餘りに氣の毒であつた。かの女が云ふことをきかぬ雄作や政直に關する怒りを押さへて、いつもその鬱忿を初雄に漏らすのを見たり聽いたりしても、世間は

『あの子もままツ子だから』と云つてるさうである。

『おかアさんの思ひ違ひでしよう。』この方が寧ろ一般には信じられ易いのだ。が、かかる言葉を――たとへその實母の惡を辯護する爲めにしろ――父の前には既に、そして堤夫婦に向つても恐らく、口に出した雄作が、こちらには、如何にも感傷的な世俗に迎合した淺薄者、卑劣漢のやうに見えて來た。が、この通りをこちらはお徳に云ふだけの勇氣も素直さもなかつた。

どこで幸田が待つてるのを推測してか――恐らくうち合はせのひまは無かつたらうから――それへ追ひ付きに行く爲め足を速めてゐたのだらうが、雄作はその途中でお徳に出會ひながら、知らない振をして行つたと。無論、特別にできたわけがあつて、それをまた云へぬ爲めでなければ、そんなことをする筈がない。そこへ持つて來て、堤のさし向ひの時の様子がますます何だか怪しく思ひ出せた。

『早く歸れ』と、雄作には怒鳴り付けたことは付けたが、それは勿論父の家へではない。幸田の方へだ。

『これは確かに自分が今でも否定しない又取り消しもしない言葉だ』と、雄作が自分は自分に云つた。

自宅へ來てからも、夫婦のあひだまでおすッかり冷さめてしまつて、お互ひに言葉がなくなつた。そしてこちらはひとりで二階へ一旦あがつたが、書齋の仕事をする氣にもなれないので、再び戻つてそとへ出て、適當なるある友を訪ねた。

其の翌日も、然し、お膳にこちらの朝めしを待つてゐて、

「いつも、斯う御はんが後れては、早くから起きてるものは溜りません、ね」と、殿も不平さうに云つた。

「…………」こちらはそれに答へをしなかつた。午前の二時までも起きつづけてゐる習慣のものが朝寢をするのは當り前のことで、かの女にはかまはず子供や女中と一緒の時に朝めしをすませてしまへと云つてあるのだが、かの女自身の勝手でこちらを待つてるのである。

「ひとりでたべたツておいしくもありませんから」と云つて。不斷からの何でもないことにさうかと立てるのは、矢ツ張り、子供の事件からのことだらうと、こちらには思へた。

「だから――」と、そこ力ある聲で、「勝手に喰へツて云つてあるぢやアないか？」

むツつりとしてだが、一緒に食事をしてしまうと、かの女は突然ちやぶ臺の向ふがはから口を出して、

「わたし、いツそのこと、雄ちやん達の代りに、倅子をつれて出ましようか？」

「出たけりやア、いつからでも出ろ！」度々聽かせられることだから、答へをするのもうるさかつた。

が、まだその場にさし向つてゐながら、小楊子を使つてると、玄關で案内を乞ふ者があつた。女中の取り次ぎによると、巡査が來たとのことだから、戸口調査の役人でもあらうかと思つて、義雄は自分で出て見た。

「○○さんとは――」と、雅號で云つて、「あなたですか？」

「はア、――さうですが――」

「さうすると、あなたの御子息さんですか、それがゐふへ、どうせ御承知の件でしようが、あなたへ說諭を願ひ出てありますが、こんなことは警察でも穩やかにすませた方がよからうと思ひますから、明朝九時にちよツと大塚の分署まで來て下さいませんか？かかりの警部が穩やかに相談したいとのことですから。」

「御苦勞でした。承知しました」と、こちらは答へて巡査を歸した。そして子供や幸田や、それの相談をかけてたのだと分つた堤夫婦に對して僅かに新らしい怒りをおぼえながら、茶のまへ戻ると、

『葬へ出たのです、ね！』お兼はいまいましさうな目つきをしてこちらへ言葉を投げた。『何かあなたがするだらうとは思ひましたが、まさか、警察へ出るとは――！』

『して見ると、堤が教へたのか知らん？』こちらは斯う云ひながらも、なほ女人の心中を直ちに傷つけるやうなそんなたくはすまいと云ふ用意があつた。が、お兼は

『きまつてます、わ、ね』と斷定して、『だから、奥さんがゆふべあんなにとぼけたのでせう？さうとは云はれた義理でもないから。――わたし、もう、あすこへは決して行きませんよ。』

『それもお前達の勝手、さ。』こちらはそれでも別にかまはなかつた。其の遊びの爲めに邪魔されたこちらの女が邪魔した向ふの女といよいよ交際を絶つに過ぎないのだから。然し、これは向ふの方からは反對にこたへるかも知れなかつた。お竹さんが藝者あがりとして、三味線の話などになると、直ぐそれを却つて自慢することもあるが、人の細君としては、強てその素人に云ひ含められて、素性を隱しかくししてゐるのは、こちらにもよく分つてた。で、かの女の可なり三味が上手なことをお兼が人に讃める時にでも、どうしてもほんばに勤めをしてゐたからと云ふことは成るべく云はせないやうに命じて置いたほどだ。が、こちらが堤夫婦をモデルに取つて、別に悪意ではなしに或作中の事件に――無論、別名に別場所で――編み入れたところが、堤も怒つたし、お竹さんも氣を悪くした。そしてこちら一家はすべて公けに向ふのことを悪く云つてるに堪へないと云ふ風に取られた。こちらは向ふの取りかたが悪いに過ぎないから、左ほど氣にもとめなかつた。そして男同士はそれなりに心は解けてゐた。が、お竹さんは女のことだからそのまま濟んでゐなかつたのかも知れないのだ。そして堤のあと押しまでして今回のことを仕あげたものとする。それでも然し、つまり、女房同士の小ぜり合ひだ。それはそれとして、男は互ひにまた別な考へを持ち合つてもかまはないのだから。』

『そんなことができますか――わたしが馬鹿にされたのは、つまり、あんたが馬鹿にされたってことになる？』

『それでもいいぢやアないか？』斯う云つたには、堤とのこれまでのつき合ひ具合で、それ [illegible]

[illegible]に云へば、今 [illegible]

でもない。ただ長いあひだ續いたつき合ひだ。お互ひに女房が邪魔なら、獨身の時を思つてればいい。子供が故障の種になるなら、子供のなかつた時に心を返してゐてもさし支へない。また子供は子供として、そして女房のゐないところで親しみを求めし合つてもかまはない。どうせ向ふは世間一般の素養しかないのだから、こちらもそれに對しては平凡になつてれば濟むことだ。こちらが何もえらがるには及ばなければ、向ふに對して怒つたり云ひわけしたりすることも不必要だらう。そしてこの考へ、この心持ちをかの女にも實行させていいと思へた。いや、かの女も既にこれと同じことを行なつてるとして、こちらは暫らく無言のあとでその實例を持ち出して、『ぢやア、なにか、お前が功德だなんていい氣になつて、近處のかみさん達の事件を引き受けてるのは馬鹿にされてるんぢやアないのか？』

『さうおツしやればさうでしようけれど――』

『…………』こちらはこれでかの女のまた云ひ出しさうな弁ツぱしらを折つてしまつたつもりになつた――堤さんと交際するなら、わたしは、もう、ここにお世話になつてゐたくありませんなどと。

そして堤に向つて兎に角一つ詰問狀を出して見ようかと思つた。友人甲斐もないではないか？君が警察署へ訴へさせたのであらうが、何の爲めにそんなことをしたのだ？理解がなさ過ぎるもほどがあらう？君は僕らに對して一般世間並みの解釋しかできてゐないのだ、僕が子供のおやぢとして、子供がおやぢを僞はつたり、胡魔化さうとしたりしてゐるの――それを知りつつ――相當の處分をしないでゐられると思ふか？これは決して子供と繼母との一般的いきさつではなにい。おやぢと子供との重大な問題であつて、この問題を等閑に附すれば、子供の人格を墮落させるも同樣なのである。君は子供がないから、從つて一般の子供の性質をも知らないから、子供の云ふことをばかり直ぐ信じたのであらうが、子供はよくうそを云ふものだ、そして人の物でなくおやぢの物ならどろ棒してもいいとも思ふことがあるものだ。然し、僕のうちの場合は、それぱかりではなく、そとから幸田がからんで來てゐるのである。どうしても來てては置けないことではないか？糺明しなければならぬことではないか？それを子供が白狀しないのだ。して見れば、懲らしめの爲めばかりにでも放逐するほかに道がない。少くとも、君が君のおやぢにしたのとは違ふから。ましてさうするのが、この場

合、子供の人格を叩き上げさせる唯一の道ではないか？僕には考へがあつてしたのだ。これを友人甲斐もなく何ゆゑに邪魔をしたかと云つてだ。

けれども考へて見ると、今これを急いで、また二度の必要があつても困るので、警察との話し合ひの結果を見てからにする方がよかつた。その晩、お竹さんが不斷は所夫からの命令で三味線を禁じられてるのに、珍らしくもそれを借りに來たので、お兼は直ぐ

『やうすを見に來たのですよ』と、感づいてこちらへ耳うちした。

『まさか』と、こちらはわざとにもかの女の心を成るべく素直にさせて置かうと云ふつもりであつた。が、お兼は女中の取り次ぎにまかせて、自分で出て行くことをせず、三味は横手のそば屋へ貸してあることを事實通りに云はせた。そしてそのままお竹さんを歸した。

その翌日になつて、吾助は云はれた通り午前九時に大塚分署へ出頭して見ると、掛りの警部が出て來て、詳しいことは却つてその親の方が承知だらうから、もう、云ふまでもないが、

『兎に角、子供はその實母をつれて來てあなたを説諭して呉れいと云ふのです。かねを取つたおぼえはないから、今一度あなたの手もとへ歸れるやうにと。』

『こツちでは、然し、子供にばかりでなく、その實母にも疑ひが十分にかかつてるのですが――。』

『然し、おや子のことではありませんか？どうです、今一度引き取つてやつては？』子供に對してはまた警察としての注意は懇々云つて聽かせたともあつたので、こちらも少し心を和らげて、

『ぢやア、さう致しましよう』と、吾助が答へたには、然し第二の方法として考へて置いた通り、自分の手から小僧にやる決心であつた。

『では、向ふへさう通知しますから』との云ひ渡しを受けてそこを出た。そして實には自分の子供の時のことが浮んだ。

『……………』自分の父は維新後還卒、乃ち、今の東京から出發して行つたものであつた。自分は父の[illegible]を拜

つて行つたりしたついでに、などの職人が其處へ通つてゐるところを見かけていふこともあるが、これに反して、その男の人が

「可哀らしい子供や、なア」と云つた。そんな父でも感傷時には人の子を可愛がる心はあるものだが、子に對する愛がそんな程度にとどまつてゐたのでは、それこそ畜生の生活と同樣だ。さうでなくとも、また、幸田の如きだらしの無さの溺愛とも同じことだらう。自分は然しさう云はれた時嬉しいやうな氣がした。あの時はまだ心も單純であつたので、辨當を持つて家を出ながら、警察署へは行かないで、いつも買ふ酒屋のそばまで行つたり、またその反對に、酒のから徳利を提げてうツかり署の方へ向つたりした。道の方向が全く違つてた。それでも、いろ／＼自分としては物を考へてたのであつたが――。

そのあとは自分の年と共に父も複雜になつた。いや、何代よりも複雜になつたと思はれるのを、今の自分の主義に於いて統一できたのである。が、自分のおやぢは官吏をやめて東京へ歸つてから氣らくな下宿屋になつてからも、なかしの官僚的末節の思想によつてだらうが、官吏と云ふものを重んじた。それも其自身としては不見識なほどであつた。或年のお煤掃除の時、縁のほこりがまだ取れてゐないと檢閲の巡査に叱られて、その場にへいつくばつてしまつたさうだ。幸田はそれを見てゐたので、あとから、

「いかに自分らの父だツて、わたしや呆れてしまひました、わ」と、こちらへ報告した。

「なアに、お父さんの官吏根性がまた抜けないだけのこと、さ。」さうだ、父は自分の官吏として意張れたことをいまだに忘れないで、自分が今度はその通りを意張られたと思つたに過ぎなかつた。即ち持ち前の小さい正直を發揮したのだ。父は官吏として一厘だツて、一物だツて、賄賂と云ふ物を――持つて來られても――取らなかつたので信用があつた。それだけは兄弟らも父を思ひ出す毎に忘れてゐないのだが、その人の孫に幸田は叔父の物を盗ませたりしてゐるのではないか。そして白ばツくれて叔父の說諭嫌ひを出した！

むか／＼するほど頭にさわつて歸宅したのであつたが、その晩方になつて、巡査が一名、此件で夜直ぐに風呂敷包

みを持たせて、叮嚀にも送つて來て呉れた。そして、

『さア、歸つて來ましたから、どうか機嫌よく入れてやつて下さい』と云つた。

『どうもお手かずをかけてすみません』と、こちらも叮嚀に禮を述べて巡査を歸してからも、吾助はわざと子供を相手にしなかつた。そしてお絹が渠等に食事を與へながら、少し執念深く渠等をなじつてるのを、默つてそのそばで聽いてゐた。

『一體、誰れが幸田と一緒に行つて警察なんかへ訴へると云つたの――幸田か？堤さんか？』

『堤さんです』と、雄作は答へた。

『なんでまた堤さんがそんなことを敎へたの。』

『知りません。』

『…………』そりやア、子供に分らないのも尤もだと、こちらは思へた。

『幸田がまたなんであんたをあの晩に堤さんへつれて行つたの？』

『…………』雄作はこれには口をつぐんでゐた。

『行き合つてもわざと挨拶一つしもしないで！』

それからそれへと兩方の言葉を聽いてるうちに、どうしても幸田と雄作とが堤と相談してから訴へたとしか見えないので、吾助はいよ〱一つ堤をなじらないでは措けない氣になつた。

『…………』そんなことをさせるとしても、その前に一度こちらへ友人同士には念を押しに來てもよかつた。さうしたら、事情をよく堤も了解できたかも知れない。若しまたできないでも、それから[illegible]へまかせるのは幸田の相違で止むを得ないが、さうもしなかつたのに！と吾助は思ひ走つた。そして[illegible]は[illegible]の考へ[illegible]から歸つて來ました』と云ふことから、子供を相に連れ出したのは小[illegible]
[illegible]

てゐた道具に書けた。そして『如才なければ、[illegible]困る』と書き添へた。『友達甲斐がない』と云ふことを二ケ所にも入れてゐた。

『ちよツと見せて下さい』と、お藤はつツけんどんにはたから云つた。

……………………こちらはむたむツとして、ただ『お前のことぢやアない』とばかり答へた。

そしてこの手紙を利雄に持つて行かせた。若し娘作なり歧直なりに行かせると、またこれ以上のわる知恵をつけられて、それだけ人が悪くなるだけだらう、が、利雄はさきに一週間ばかり根のうちへ貰ひ子に行つて、その帰された理由は、ただ、こちらの家庭を若し破壊さもした時、——実際にさう云ふ危機は子供らの為めに何度もあつたから、——お旅の子を貰つてみればかりにこちらとの交際が気まづくなつては困るからと云ふにあつただけだ。それに、彌は蜜蜂の赤ン坊のやうなもので、まだその一群のにほひに染まらぬから、どの蜂群へでも出入自由であつた。向ふのうちへ行き立てに、夜なかにだが、お竹さんの老父が来てゐたのをどろ棒だと思つたりもしてゐた。

『姉さんの云ふところをそれとなく聴いて見るに、矢ツ張り、兄さんの焼き持ちが原因らしいですよ』と、お藤にその時語つた。

『そりやア、よくあることだから、ね』と、こちらも答へた。かの女が矢ツ張りと云つたのは、その前にも利雄が——またこちらへ来ないうちに——よそへ貰はれてゐたのだが、その帰された原因はそこの主人が子供のない年うへの細君を忘れてしまつたほどに利雄を可愛がつたにあつた。その為めにその細君は主人が勤めに出て留守の時を見計らひ、活動写真へつれて行つてやるとうそを云つて、電車に乗せて、ここまで置きに来た。まだ五歳でしか無かつたが、よく分つてる子であつたから、向ふの主人を本統の親とばかり懐しがり、二三日立つと、『おかアさんはうそ付きだから、おとうさんを呼んで来て貰ひたい』と云つた。そしてその当分のあひだは、電車や活動写真と云へば、まただまされるものと心得てゐた。これがまた現へ仮りに貰はれて行つて、また同じやうな理由で返されたので、これからは、こちらも可哀さうになつて、お藤とも相談して、もう、どこへもやるなと云ふことにきまつ

たのであつた。女の子のやうに折り紙や人形を作つて素直な子であるから、學校へ行き出した當時は泣かされてばかり來た。が、こちらが其の氣を引き立てる爲めにおもちやの劍を買つてやつたら、それからきつくなつて、その學級中で一番の家來持ちになつた。

堤はいまだにこの子を好きなやうだし、政直をも芝に一緒に住んでた時は貰はうとした。そんなわけで、新來の客がよりも、いまだに子供の味かたをするのかも知れなかつた。

# 二

その夜、堤からの返事はお竹さんが持つて來たが、お袋はまた顏を出さなかつた。そして國作が政直や利雄と共に玄關へ出て、お竹さんと何かひそ〳〵しやべつてるのに聽き耳を立てて、『雄ちやんに政ちやん、どこへ行つてるのです、ね』とわめいた。それでも、なほお竹さんのひそ〳〵聲が暫らくしてゐた。

『…………』こちらはあれも隨分圖々しい女だと思ひながら、堤の手紙を讀んでゐた。が、期待したほどの手ごたへもなかつた。ただ、『決して惡意から致したことにこれ無く候へばお許しを乞ふ』とか、『子供の爲めは君の爲めに候』とか、釋迦に說法のやうなことばかりだ。

『おい、これぢやア如何におれだツて滿足できないぢやアないか』と、お袋の方へ手紙をほうり出して、こちらは初めて十分に怒つてることをかたい女に直接に示めした。

『…………』かたい女はそれを一と渡り讀んで、餘り興味のなささうに文鉢の置いた上に置いた。一人を、同じ

にー』

[illegible]

わざとこちらの氣を挫いてるのだらう。そんな手は先きにこちらに於いてもモデル問題で向ふが怒つた時にやつたことがあるのだから、許してもよかつた。『多年の交際がこの爲め斷絶するやうなことがあらば如何にも殘念』だと書いてあるその意味も、また、こちらに同樣同感であつた。

そして雄作に對しては、こちらが二三日來の諸新聞に出た小僧入用の廣告を照り合はせたのに從つて、明朝、父がまだ起きないでもいいから、弟の方を先づ京橋につれて行つて見て、それからおのれは日本橋へ行けと云ふことを命じた。

翌朝、吾助がとこを離れた時には、もう、雄作らはゐなかつた。それでも、自分は父ゆのふべの通知をおぼえてゐた爲めにいつもより少し早く起きたのである。そして湯に這入つてると、もう、堤がやつて來たかして、茶のまのあたりで

『やア』と云ふ、そのきまり惡さをまぎらすやうな聲が聽えた。多分、今しがた湯をあがつて行つたお袂に向つての挨拶だらうが、かの女は化粧に急がしい爲めか、それとも氣を惡くしてゐる爲めか、それに對しての挨拶返しがなかつたやうだ。

『……………………』こちらも默つて考へてゐると、うち湯、あさ湯にひたるいい氣持ちを、けさは、特に自分に感じたと同時に、堤がいつか相談に來たことを思ひ浮べた。石炭も段々高くなつて來たらうし、湯錢もあがつたから、向ふ夫婦の錢湯に拂ふ分をこちらの石炭代の一部に提供することにして、一緒に入れて呉れないかと。

『さうすりや、お互ひの爲めやないか――うちやどうせ君らの這入つたあとのにでもええいのやさかい？』

『うん、惡いこともなからうが、ね』と、少しこちらは返事に迷つた。こちら夫婦は優先權として必らず先きへ這入るとして置いても、這入るのは朝も晩もだ。都合によれば、三度もある。それに、子供や女中はどう云ふきめにするか？そんなことがお互ひの感情を惡くするもとになつては困るし、また、僅かの提供の爲めにこちらの家庭の自由が妨げられるのも面白くなかつた。その上、一番迷惑を豫想されるのは、堤夫婦に欲しがつてる子供が生まれないその原因であつた。

『斯うしてなつては、どツちやからも出るひまがないから』と云ふ、それとはなしの白状を堤がしたことがあつた。それをおとなは錢湯へ行つた時のやうに注意できるとしても、子供には自分らでさうする甲斐性のないことが分り切つてゐた。若し移つて目でもつぶれたら、その一生の負擔は誰れにも持つて行きどころがないのだ。こちらは自分でもむかし一度あだな女から移された經驗があるので、一しほそれは面白くない豫想であつたので、

『然し、僕はむかしからおやぢの這入つたあとへでさへ癪にさわつて這入らなかつたほどのたちだから、ね』と云つて、圓滑に斷わつた。實際に、おやぢが年甲斐もなく病氣を受けて來て困つてた時は、こちらはまだ、丁度、この最近小十年來の生活に於けると同樣少しも賤しい女などに關係したことはなかつた。だから、癩病若しくは梅毒と云ふやうな惡い病氣は、以前の如く、また今日でも、こちらには恐怖の種であつた。が、堤はそれをも或は意に含んでゐたのかも知れないのだ。それでは、然し、こちらに取つては、二重の迷惑になるではないか？自分はその病氣をしてゐた時友人のところなどで湯に這入れと云はれても、遠慮して、決して這入ることをしなかつた。その初めに、大阪で堤のところの湯に這入つたのは、そんな病氣とは夢にも知らなかつたのであるが――。お銀はまだそのおそろしさをも知らないので、あとになつて、

『氣の毒だから、向ふの云ふ通りにしてお上げなさいよ』と云つた。それが今、いきなり、茶のまへ來てらしいが、『あなたの奥さんはどうしてまたあんなとぼけかたを爲すつたのでしよう？』

『きまりが惡かつて、正直に云へなかつたのやさかい、許してやつて下さい』と、堤は餘ほど折れてるやうすだ。

『警察なんかへ訴へさせたりして？』

『そりや、然し、うちばツかツりやない、このお隣りでもさう云うたさうやさかい。』

『へい』と、お銀の調子は變はつた。『向ふの主人もあんたや、うちのと同樣にまま母育ちでひがんでるたちですが――』

『子供はお湯へも行つたのですか？』

『……………………』こう云ふと、この女が自慢してゐる彼の、こいつ加減なことを[illegible]しておかアさんと思つた。

『ゆふべ、雄ちやんがお竹に云うたところでは、さうらしいさかい。』

『へい、あなたの奥さんも餘ッぽど圖々しいですよ。人のうちへ來て、こッそり子供からそんなことを聽いたり!』

『そんなことア、もう、云ふに及ばないぞ』と、こちらはかの女にともなく、そして堤には多少の當て付けを以つて、からだを拭きながら怒鳴つた。

『うッちや、恥も何、子供がまだめしを喰うてをらん云うさかい、空腹で追ひ出されるのは可哀さうや云うて、うちでは不足になるまでも喰はして歸したのやが――。』

『それが人を馬鹿にしたわけでしよう。どんなまま母だッて、少しあなたがたも考へて見れば分るぢやアありませんか?そんな無常識なことは致しませんよ。』それから、いくらか優しくなつて、『そんなこととは知りませんから、うちぢやア、あんたのところから歸ると直ぐ、また、御はんを十分にたべさせて行かせました、わ。』

『ほたら、よう喰う、なア』と、堤の調子はわざと打ち解けて見せたやうであつた。

『…………』こちらは渠がそれにも下だらない思ひ違ひをしてゐたことに呆れたが、また、子供の野ほうづにおほ喰ひなことをいきどほらないではゐられなかつた。そしてどてらの上に帶を締めながら『やア』と氣抜けがしたやうな聲をかけた。

『あんた』と、お絹は直ぐ、味噌しるのうまさうに煮え立つてる隅の火鉢の前から、ちやぶ臺を越えてこちらを頓狂に見上げて、『子供はお隣りへも相談しに行つたのですッてよ!』

『…………』こちらはそれに返事をしないで、堤の坐わつてる前をとほつてちやぶ臺をお絹とさし向ひのところへ坐わり込み、いつも渠に失敬して食事を初める通りに椀や茶碗をあふ向けてから、けふは、わざと横がほを渠に見せたままで、『君は全體こッちのありがた迷惑なことばかりするぢやアないか?』無論、今知つた二つの新事實の一つをも云ひ含めてだ。

『惡かつた。許して呉れ。然し、別に惡意があつたわけやないから。』

『そりやア、悪意はないかも知れないが――』――さうだ、そんなことで笑つては置けないのであつた。こッちにやアさうは單純に云つてゐられないのだ、――重大な迷惑だから、ね。』

『悪かつた。許して呉れ。』

『一體、君はひねくれてるからいけないよ。お隣りの主人も君と同じやうな事情でひん曲つてるやうだが――さうして僕の子供までにそのひねくれたところを傳へたりして！君が君のおやぢを訴へた時にもその缺點があり過ぎた。君は子供の時からだから、少し事情は違ふかも知れないが、君の訴訟時代でも僕の繼母騒ぎでも、あの時にやア、もう、ひがまないでも兩方から折り合へる餘地があつた。僕としては、おやぢと一度組み合つて投げられてからは、おやぢの拙りこぶしがこッちの女房の横ツつらをそれてその脊中の子供に當つたのが損であつただけで、あとは互ひに、互ひの女房共を保護したい爲めであつたことが分つたから、同居さへしてゐなけりやアそれで濟んでしまつた。そして罪もなくおぢイさんに投ぐられた赤ン坊はその後ジフテリアで死んだが、僕の繼母までが小さくツて投ぐられたのが原因ではなかつたか知らんと泣いてゐた。』斯う云ふ説明を爲しつつ自分も曾てはあの幸田を今自分がお彼を子供に對して保護する樣におやぢとお袋とに對して保護したことがあるのを、もう、人ごとのやうに思ひ出せた。そして雌作のことに及ぼして、『僕の子供はまだ幼稚で、そこまで逸してゐないだけのことだ。それに、君は一つの大要點を逸してゐるやうだよ。今回の事件は、もう、繼母と子供とのあひだではなく、僕と子供との問題になつてるのだから、ね。』

『そりや知らなんだですかい。』

『だから』と、聲に力を入れて、『入らないおせッかいはして貰ひたくないのだが――』

『今、ゐないやないか？』壞は子供の方へ話を轉じさせようとするやうであつた。

『さう、さ』と答へて、二度目のめしをお柔から受け取りながら、もう、これ以上壞を追窮するには及ばないと考へたが、まだ少しいまいましい感情が殘つて[illegible]う[illegible]はせた。『おおかた[illegible]の手から小樽にやらなけりやアならなくなつたので、今、その口をふたりで當りにいつてる。[illegible]せ[illegible]妻に[illegible]見せて[illegible]ないから[illegible]から。』

「どうしても小僧にやる氣か」と、投げ[illegible]

一つの要點であらう。

「無論だ。」

「ほたら、仕やうがない」

「あんた、姉ちやん達は奥さんでも御はんをいただいたのですよ」と、この時、お鳥はその[illegible]にして箸を運んでた無言を破つた。

「……………」こちらは云ふだけ云つてしまつたので、また話のもと戻りをするのかも知れなかつた。三杯目をかの女に突き出して、「どうせあのがらくたした村田の生んだ子供らだから！」

「なアに、あんたの遺傳も隨分手傳つてるでしようよ」と、お鳥は入らないことまで云つた。

「……………」無論、こちらもなか／＼大食家であることは自分でも承知だが――。

「ほたら、失敬する。これから仕事に出かけなければならんさかい」と云つて、堤は歸つた。こちらはいつもの通り、「さうか」で濟ませてしまつた。これッ切り交際を絶たうと云ふやうな考へは少しもないけれども、「これからまたそんなことをして呉れちやア困る」と堤に云つた言葉を再び思ひ出すと、堤を子供あつかひにしたやうな氣がして、頗る不愉快であつた。

「あんたはなぜ交際を絶つと云はなかつたのです？」

「馬鹿！」こちらはかの女の命令的な出かたに對する自分の不快を増して、半ばかの女の爲めに子供を失ふはめとなつたから、その上にまた友人を棄てるものかと考へた。が、一言で叱り付けたのに多少の滿足をおぼえながら、「あれだけあやまつてるのだから、おれとしちやア、もう、詰問するにやア及ばないのだ。おれとしちやア」と、この言葉を繰り返した。かの女としてはさうでなくてもいいと云ふ餘地を暗に云ひ殘してだ。

「けれど、わたしは承知できません、わ――わたしは！」

『手めへのことア手めへのこッた！』斯う云ひ放つてから、然し、また云ひ添へた――ただ、ね、お前はおれの命令にそむきさへしなけりやアいいのだ。たとへば、今度堤が遊びに來たとして、面白くなけりやアお前としての挨拶も打ち解けもしないでいいが、おれが茶を出せとか、うちの主婦として挨拶しろとか云つた時にやア、その通り從はなけりやアならない。』つまり、人の妻である以上は、その自由も妻たる範圍に於いての自由であらう。妻にして獨身時代のわがままを望むのは、かの間違つた偏狹的（へんけふてき）獨斷個人主義の現代教育に養はれた學生や紳士どもが、自由とか解放とか云ふことを、日本人たることを離れても、人類や個人の名に於いて叫べると空想してゐるのと同樣だ。實際には、自分らは日本人たる人類や個人に外ならぬことを忘れてはならぬと同樣に、妻たる婦人は婦人としても妻たる條件若しくは制限から解かされることができないのだ。自由はその制限内の自由でなければならない。

この現實的精神は子供に對しても同じだから、さう云つて聽かせてはあるが、子供としても餘りに分らないことをするから、止むを得ず自分は渠を放逐するのである

『君の子が家を放逐されても矢ツ張り君の子でないか？それと同樣に日本人が日本國外に追ひやられても、相變らず日本人だ』と、きのふ、舊の友が來て反對した。が、

『それは違ふ』と、こちらは答へた。『日本人たる人類の本分を盡しても、それが誤解された爲めに放逐されたのだが、その精神に墮落的分子が這入つてゐないから、外國に在つても日本人的生活を努力しようとするだらう。が、放逐された理由が日本人たることを忘れたか、それを拒むかに在つた者は、その放逐を喜ぶと同時に、日本人的習慣若しくは生活から墮落してしまう。そしてそれがまた眞の人類若しくは個人からも墮落とならう。何となれば、その人は日本人たることからは墮落したくせに外國人たり若しくは米國人たりすることもできないのは分り切つてる事實だ。殊に、今りなつてるのは、たとへ白人系の國籍へ這入つても、有色の爲めに一生を虐待されてとほすだらう。してみると、日本人として[illegible]きてくるのである[illegible]人[illegible]として[illegible]なる[illegible]れた人物に

に最も高尚な生活の仕かたはないのである。』

こちらがさう云つたには今少し說明を加へなければその人には分らなかつたのかも知れない。刑罰としての放逐にも二種類の意味がある。一つは懲らしめの爲め、また一つは見限りの爲めだ。そして見限つても或は悟りて歸るかも知れないと云ふのが最後の希望だ。こちらのも子供を突ツ放して叩き上げさせるつもりだが、或は、このまゝ墮落してしまうかも知れない。が、そんな恐れの爲めに自分のこのいきどほりは毫も容赦しないのである。

# 二

寄堤が出て行くと入れ違ひに、近處のかみさんが獨り勝手の方へ這入つて來たので、吾輩は二階へあがつて炭火を取りよせた。

すると、一時間も經てからお親がまた昂奮してあがつて來て、

『あんた、堤の奧さんがお湯屋なんかでもうちのことをさんざんにわる口云つてるさうですよ！ゆふべも、さかな屋のおかみさんが聽いてると、うちのことをまるで知りもしない人にまでまゝツ子いぢめだなんて、あること無いことをしやべつてたさうです。』

『うツちやつて置けよ。そのかみさんだツて、寄田をあがり込ませて、馬鹿しやべりをさせた連中ぢやアないか？』

『さう云へばさうですけれど――あんまり馬鹿々々しいぢやアありませんか？わたし、一つ、抗議を申し込んで來ましようか――ゆふべに限らず、實は、ずツと前からかれこれ云つてたさうですから？』

『それよりやア、今度はこツちの番で、また警察へ說諭を願つたらどうだ？』

『冗談は置いて、さ、ね！』

『どうせ、さう云ふ凡人どもの口はふさげないよ。お前だツて、もう、お竹さんのわる口は云つてるのだから。』

『そりやア、うちわでしよう？』

『なアに、直接に堤にだツてだ。その報いと思つてりやア問題はツこはない。[illegible]あしらひた[illegible]らも、こちらに堤がお竹さんにうち込んでるところを仰像して、渠も知つてかの女にそんなことを云はせてゐるのではないかと、幾分か少からず嫉妬しないでもなかつた。

そのうちに、雄作らが歸つて來て、ふたりとも都合よく小僧の口が直ぐきまつたといふことであつた。お、お竹は[illegible]全く挫けてしまつたやうになつて、こちらへ、

『いツそのこと、やめさせて、もと〳〵通り置いてやつたらどう？』と、頼むやうに云つた。

『…………』こちらは默ツつりして返事をしなかつた。寒かつたやうに鼻のさきを赤くして[illegible]てゐる子供を見てゐた。

『あんたがたも[illegible]と、お銀は今度は雄作に向つて、小僧なんかに行かせられても、矢ツ張り、自[illegible]したいのがいい？』

『おとうさんの命令ですから』と、渠は小僧のことをわけも無ささうに答へた。

『いツそのこと、あやまつて、おとうさんに白状おしなさいよ。』

『…………』雄作は、もう、また答へなかつた。

『ようご』と、お銀は子供にむかつて噛さんばかりのやうすであつた。

『お前と子供との問題ぢやアないのだ』と、こちらはかの女を叱つた時、泣きたいにもなりかねてわざ[illegible]咳き込んだこともない鼻の方へ吸ひ込んで暫らく言葉が繼げなかつたが、そのあひだに、しんみりした感じが出て、雄作なまだ子供としてのわけも無さ[illegible]なところに却つてこちらの心たのみがあるのではないかと思つた。だから、今一度説かところで見たやうに、自分を[illegible]向ひになつて[illegible]氣になつて、渠を二階へ呼び上げた。そして、お前に今一度、たツた一言聞くが、ね、お前もそれ[illegible]と答へたばいいのだ。一體、お前は[illegible]まで[illegible]へても[illegible]き[illegible]されたが[illegible]

[illegible]

はれて取つたのではないか？』

『さうぢやアありません。』

『…………………』もう、どうしても子供の命脈はないときめたが、まだ未練があつた。『ぢやア、今一つ聽きたいが、取つたかねはお前が取つて、お前が使つたのか？』

『さうでもありません。』

『よし、もう、行け！おれとお前とは、もう、緣もゆかりもないと同様だから。』斯う云つたこちらの心持ちでは、寧ろ、子供が正直などろ棒であつて欲しかつた。憎いのは、はたのものらにおだてられて不正直になつてることであつた。雄作にはかまはず下へおりて來たが、直ぐついて來た渠にも聽かせて置くやうにして、政直に向つて、『お前はただ行つたり來たりして何のことをしてゐるのだか分るまいが、もう少し年が行けば獨り手によく分つて來るだらう。兎に角、お前だけは以前から幸田の方へ養子に行くことにきまつてて、十五才になれば籍も向ふへ移せるのだから、行く先きの主人には前以つて川口と名乘らないで、幸田政直と云つてればいいぞ。』

『はい』と答へたが、これも分つてるのか、分つてないのか、こちらには餘りたよりなかつたのである。

『…………………』そんな幼稚なもの等の愛をこちらに奪はれまいとばかりして、子供をもこちらをもとう／＼こんなことに立ち至らしめた幸田と云ふ女が一番憎かつた。

いよ／＼再び出て行かねばならなくなつた子供らをお兼にまかせて置いて、吾助はまた二階へあがつた。そしてお兼ひとりで渠等を玄關へ送り出したらしいところを見て、机の前を私かに障子ぎはへ立つて行つて腰をかがめ、障子のがらす窓へ顏を持つて行くと、そとの寒氣に冷えたがらすは子供の姿を映さないで、自分のつく息に曇つた。

—大正八年十一月二日—

宮地喜六氏新著（大判美本定價壹圓六十錢送八錢）

（忽再版）

# 煤煙の臭ひ

勞働小說の先驅

初版旬日に盡く。

勞働問題は今や世界の大問題となれり、此時に當り身を勞働階級より起して其實際を活寫せる宮地氏の創作集は眞に刻下必讀の書たり。

西宮藤朝氏著（大判クロース本定價一圓八十錢送料八錢）

# 解放の教育

本間久雄氏新著（大判美本。定價一圓五十錢送料八錢）

# 現代の婦人問題

發行所 東京市飯田町一丁目二番地

株式會社 天佑社

振替口座東京一〇一二八番
電話番町一一七八番

新刊

ベルトランド、ラッセル原著 高橋五郎氏譯

# 社會改造の原理

四六大判箱入美本定價金一圓六十錢送料八錢

英國名門の出にして犀利深刻透徹の頭腦を以て社會改造の理論的指導者として非常なる感激を以て社會の歡迎を受け、福田徳三博士が推稱して止やざるラッセルの代表作たる『社會改造の原理』を譯したるものにして國家を論じ軍國主義を排し、結婚、宗教、教育、人生問題等苟くも改造を要すべき事物を細論し、最後に吾人は生存しつゝある間に天下國家の爲し得るかを維論して卷を結ぶ、其深き含蓄と力強き暗示とは、眞に讀下の一讀すべきものたり。

發行所 東京神田區西小川町二丁目二番地 文志堂 振替口座東京四八一二五番

央公論（社）

同
同
同
同

京橋區…
京橋區丸屋町
日本橋區本石町
本鄉區本富士町

…堂館堂堂

一…代…には…前金とす…
一振替貯金　口座は東京三十四番なり
一郵券代用　は謝絕す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるゝを拒まず
一代金引替　小包の取扱は一切謝絕す
一金郵便　の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記金を加へたる規定額を前以て本社へ通知せらるべし、本社は直ちに其取扱手續をなすべし
一金一圓迄　金六錢
一金五圓迄　金十錢（但本社宛通知及送料共）
一金拾圓迄　金八錢
集金郵便の申込を受くるも現金受領證にあらざれば雜誌を發送せ

一受領證請求　は必ず返信料を要す

大正八年十一月三十日印刷納本
大正八年十二月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　菅谷嘉治
印刷人　高木西三

發行所　東京市本鄉區駒込西片町十番地
中央公論社
電話　小石川一四四四／小石川三四二〇
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

を除く）

| 冊數／國別 | 內國 | 外國 |
| --- | --- | --- |
| 六冊 | 金參圓 | 金參圓六拾錢 |
| 十二冊 | 金六圓 | 金七圓貳拾錢 |
| | 以上郵稅共 | |

▲但し新年號春秋二期臨時號は各倍冊に付各號二冊の代金を申受くべし、即ち一ケ年通計十七冊分の割合なれば一ケ年分御注文の方は內國は金八圓九拾錢外國は金拾圓貳拾錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし。

## 廣告取次所

**CHUO KORON** (*The Central Review.*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.

Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 10,20; Single copy 60 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

…の頭脳を以て社…
…し、福田德三博士が推…
…したるものにして國家を論…
…論し、最後に吾人は生存し…
…眞に貴下の一讀す…

…十二月七日（第一日曜日）◆同廿一日（第三日曜日）



信用なき店舗及び卑猥なる…告掲載は謝絶す